岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第95集

関沢口遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

関沢口遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど、縄文時代文化を中心とする数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路など交通網整備は、県民の切実な願いでもあります。

このように、保護保存と開発という相反する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題となってきております。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとって参りました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う関連遺跡として、昭和58・59年度に発掘調査した安代町関沢口遺跡の調査結果をまとめたものであります。

当遺跡は、縄文時代や平安時代そして中世から近世にかけての集落跡などで、縄文時代から現在までの長い間、生活の場であったことが判明しました。この成果は当地域の歴史解明の貴重な資料になるものと思います。

この報告書が、研究者のみならず広く一般の人々にも活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜わりました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、安代町、同町教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の御指導・御協力をお願い致します。

昭和60年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　中　村　　直

例　言

1．本報告書は岩手県二戸郡安代町大字中佐井字関沢口に所在する関沢口遺跡の調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う事前緊急発掘調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターに委託された。

3．発掘調査は昭和58年9月19日から10月30日までと昭和59年4月23日から8月11日までの2カ年にわたって行われた。室内整理作業は昭和59年11月14日から昭和60年3月31日まで行われた。

4．発掘対象調査面積は13,900㎡である。

5．調査担当者は昭和58年度が高橋与右エ門・玉川英喜、昭和59年度が三浦謙一・玉川英喜である。

6．本遺跡で検出された遺構数は以下のとおりである。

住居址―15棟　炉址―1基　住居址状遺構―1棟　ピット―25基

焼土遺構―5基　墓壙―9基　暗渠―1条　柱穴群―2

7．出土品の鑑定は次の方々に依頼した（敬称略）

石器・石製品の材質　佐藤　二郎（岩手県立大船渡農業高等学校教諭）

墓壙出土人骨　野坂洋一郎（岩手医科大学歯学部教授）

鉄　滓　鶴田　勝彦（宮城県立古川工業高等学校教諭）

火山灰　井上　克弘（岩手大学農学部助教授）　山田　一郎（東北大学農学部助教授）

8．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ．調査に至る経過……近藤　宗光

Ⅱ．調査の方法……玉川　英喜

Ⅲ．立地と環境……玉川　英喜

Ⅳ・Ⅴ．遺構・平安時代以降の遺物とその要約……玉川　英喜

縄文時代・弥生時代の遺物とその要約……三浦　謙一

9．発掘調査には日本道路公団一戸工事事務所、安代町、安代町教育委員会及び上沖連次郎氏・木村亀吉氏をはじめとする地元作業員の方々の協力をいただいた。室内整理では当センター越場ミチエはじめ臨時職員の協力を記して謝意を表する。

本 文 目 次

序
例 言
Ⅰ．調査に至る経過 …… 2
Ⅱ．調査の方法
1．野外調査 …… 3
2．室内整理と報告書 …… 4
Ⅲ．立地と環境
1．位置と地形 …… 6
2．地形分類 …… 6
3．遺跡付近の地形 …… 11
4．基本層序 …… 11
5．周辺の遺跡 …… 12
Ⅳ．遺構と遺物
1．住居址
(1)縄文時代 …… 19
(2)平安時代 …… 35
(3)中・近世 …… 48
(4)住居址状遺構 …… 55
2．ピット …… 56
3．焼土遺構 …… 68
4．墓壙 …… 70
5．暗渠・柱穴群 …… 81
6．遺構外の出土遺物
(1)土 器 …… 83
(2)石 器 …… 98
(3)石製品 …… 99
(4)土製品 …… 100
(5)陶磁器 …… 100
(6)鉄 器 …… 100
Ⅴ．要 約
1．遺 構 …… 108
2．遺 物 …… 113
Ⅵ．鑑定結果
1．人骨鑑定書 …… 119
2．鉄滓鑑定書 …… 149

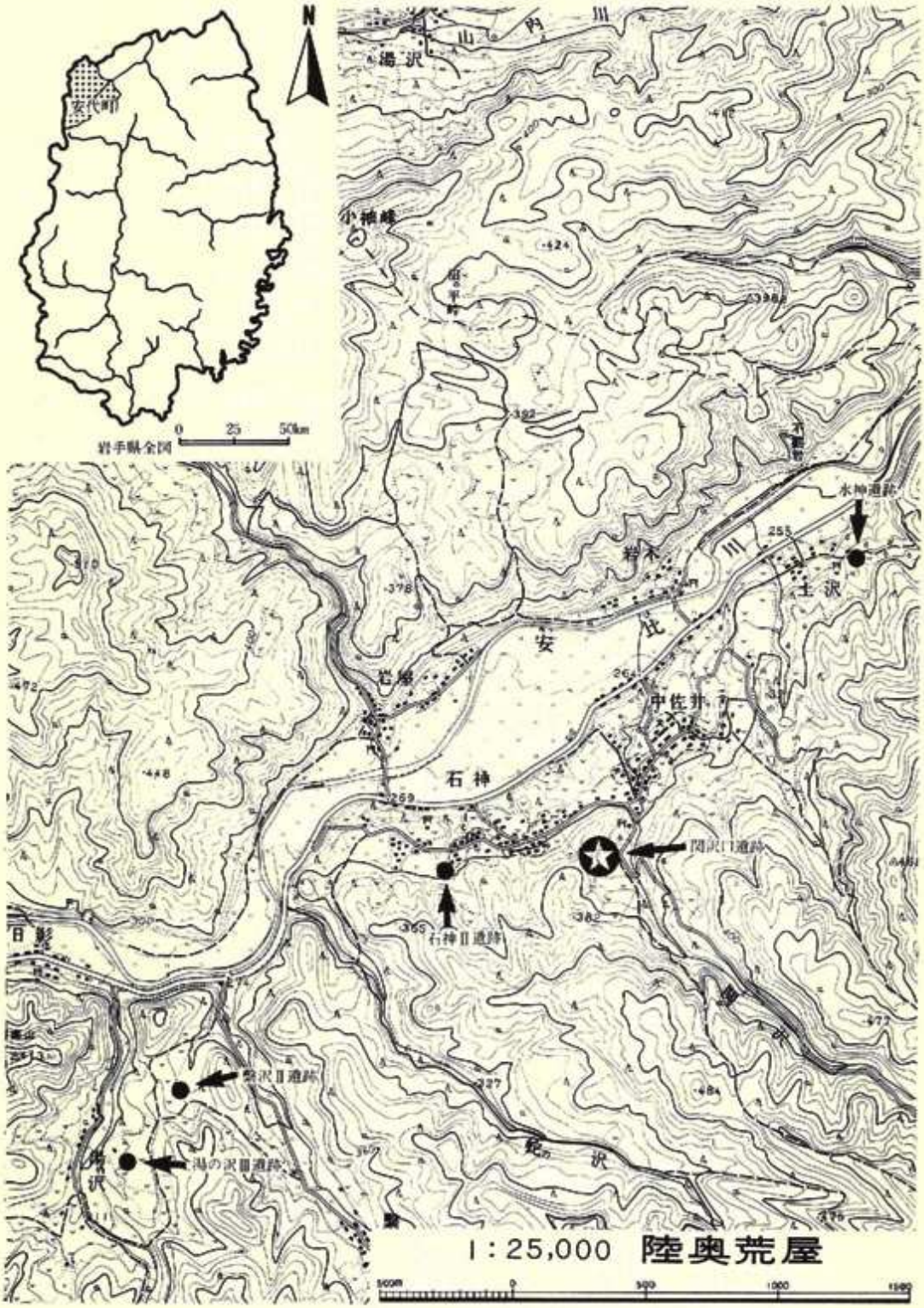
付 表
第1表 周辺遺跡一覧表 …… 115
第2表 竪穴住居址一覧表 …… 112
第3表 石器計測一覧表 …… 117・118
(財団法人) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員 …… 211

図 版 目 次

第１図　岩手県全図・遺跡位置図…… 1
第２図　地形分類図…… 7
第３図　遺跡周辺地形図 …… 9
グリッド配置図
第４図　土層柱状図……12
第５図　周辺遺跡位置図……13
第６図　遺構配置図……17
第７図　FIV－１住居址（遺構）……19
第８図　FIV－１住居址（遺物）……20
第９図　ＦＶ－１住居址（遺構・遺物）……21
第10図　ＦＶ－１住居址（遺物）……22
第11図　ＨＶ－１住居址（遺構）……24
第12図　ＩＶ－１住居址（遺構・遺物）……26
第13図　ＩＶ－１住居址（遺物）……27
第14図　ＩＶ－２住居址（遺構・遺物）……28
第15図　ＩＶ－３住居址・４炉址
（遺構・遺物）……30
第16図　ＩＶ－５住居址（遺構）……33
第17図　ＩＶ－５住居址（遺物）……34
第18図　DIV－１住居址（遺構・遺物）……36
第19図　DIV－１住居址（遺物）……37
第20図　ＤＶ－２住居址（遺構・遺物）……39
第21図　EIV－１住居址（遺構・遺物）……41
第22図　EIV－２住居址（遺構・遺物）……43
第23図　HIV－１住居址（遺構）……45
第24図　HIV－１住居址（遺構）……46
第25図　HIV－１住居址（遺物）……47
第26図　HIV－１住居址（遺物）……48
第27図　ＤＶ－１住居址（遺構）……49
第28図　ＤＶ－１住居址（遺物）……50
第29図　FⅢ－１住居址（遺構・遺物）……51
第30図　FIV－２住居址（遺構）……54
第31図　ＨＶ－２住居址状遺構……55
第32図　ピット(1)……59
第33図　ピット(2)……60
第34図　ピット(3)……63
第35図　ピット(4)……64
第36図　ピット(5)……68
第37図　焼土遺構……69
第38図　墓　壙……73
第39図　墓壙出土人骨(1)……75
第40図　墓壙出土人骨(2)……76
第41図　暗　渠……77
第42図　EⅢ区柱穴群……82
第43図　ＦⅡ区柱穴群……83
第44図　遺構外出土遺物－土器(1)……89
第45図　遺構外出土遺物－土器(2)……90
第46図　遺構外出土遺物－土器(3)……91
第47図　遺構外出土遺物－土器(4)……92
第48図　遺構外出土遺物－土器(5)……93
第49図　遺構外出土遺物－土器(6)……94
第50図　遺構外出土遺物－土器(7)……95
第51図　遺構外出土遺物－土器(8)……96
第52図　遺構外出土遺物－土器(9)……97
第53図　遺構外出土遺物－石器(1)……101
第54図　遺構外出土遺物－石器(2)……102
第55図　遺構外出土遺物－石器(3)……103
第56図　遺構外出土遺物－石器(4)……104
第57図　遺構外出土遺物－石器(5)……105
第58図　遺構外出土遺物－石器(6)・
石製品……106
第59図　遺構外出土遺物－土製品・
鉄器……107

写真図版目次

PL－1　遺跡遠景……157
PL－2　遺跡全景……158
PL－3　FIV－1住居址……159
PL－4　FV－1住居址……160
PL－5　FV－1・HV－1住居址……161
PL－6　IV－1住居址……162
PL－7　IV－2・3住居址……163
PL－8　IV－3・5住居址……164
　　IV－4炉址
PL－9　DIV－1住居址……165
PL－10　DV－2住居址……166
PL－11　EIV－1住居址……167
PL－12　EIV－2住居址……168
PL－13　HIV－1住居址……169
PL－14　HIV－1・DV－1住居址……170
PL－15　DV－1・FIV－2住居址……171
PL－16　FIII－1・FIV－2住居址……172
PL－17　住居址状遺構・ピット(1)……173
PL－18　ピット(2)……174
PL－19　ピット(3)……175
PL－20　ピット(4)……176
PL－21　ピット(5)……177
PL－22　ピット(6)・焼土遺構……178
PL－23　墓　壙(1)……179
PL－24　墓　壙(2)……180
PL－25　墓　壙(3)・暗渠……181
PL－26　基本層序・現地説明会……182
PL－27　作業風景……183
PL－28　遺構内の遺物(1)……184
PL－29　遺構内の遺物(2)……185
PL－30　遺構内の遺物(3)……186
PL－31　遺構内の遺物(4)……187
PL－32　遺構内の遺物(5)……188
PL－33　遺構内の遺物(6)……189
PL－34　遺構内の遺物(7)……190
PL－35　遺構内の遺物(8)……191
PL－36　遺構内の遺物(9)……192
PL－37　遺構内の遺物(10)……193
PL－38　遺構内の遺物(11)……194
PL－39　遺構内の遺物(12)……195
PL－40　遺構内の遺物(13)……196
PL－41　遺構外の遺物（土器－1）……197
PL－42　遺構外の遺物（土器－2）……198
PL－43　遺構外の遺物（土器－3）……199
PL－44　遺構外の遺物（土器－4）……200
PL－45　遺構外の遺物（土器－5）……201
PL－46　遺構外の遺物（土器－6）……202
PL－47　遺構外の遺物（土器－7）……203
PL－48　遺構外の遺物（土器－8）……204
PL－49　遺構外の遺物（石器－1）……205
PL－50　遺構外の遺物（石器－2）……206
PL－51　遺構外の遺物（石器－3）……207
PL－52　遺構外の遺物（石器－4）……208
PL－53　遺構外の遺物（石器－5・石製品）……209
PL－54　遺構外の遺物（土製品・鉄器）……210



第1図 安代町内8次区間関連遺跡位置図

Ⅰ　調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車専用道である。このうち本県にかかわる第７次施行命令区間は約27.6km、第８次施行命令区間は26.7kmである。第７次施行命令区間に所在する遺跡の調査は昭和58年度で全て終了しており、安代町の分岐点から浄法寺町・二戸市を通り一戸インターチェンジに至る第８次施行命令区間の発掘調査を終了すれば、八戸線関連の調査は全て終了することとなる。

昭和53年11月に第８次施行命令が出され、その後命令区間の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との間で協議が重ねられた。そのなかで浄法寺町には天台宗の古刹で種々の重要文化財を有する天台寺が存在し、天台寺緑地保全地域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることとなった。

県教育委員会文化課では、昭和54年12月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿い500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両者で協議を重ねた。昭和56年５月の日本道路公団による路線発表後、文化課では路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い約30の遺跡を確認した。昭和57年度には安代町分５遺跡の発掘調査範囲について確認調査を行った。

昭和58年度には安代町内４遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繋沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の調査と関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査を行い、関沢口遺跡は昭和59年度継続調査となった。またこの年度中に文化課による浄法寺町分12遺跡の発掘調査範囲の確認調査が行われている。

昭和59年度には、安代町分２遺跡、浄法寺町分９遺跡の発掘調査が当センターに委託され、安代町分では関沢口遺跡と水神遺跡、浄法寺町分では柿ノ木平Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、五庵Ⅱ遺跡、海上Ⅰ遺跡、海上Ⅱ遺跡、大久保Ⅰ遺跡の調査と沼久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡の工事用道路分の調査を行った。このうち沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰ遺跡は昭和60年度継続調査となった。

この年度中に文化課による二戸市分、一戸町分それぞれ６遺跡の発掘調査範囲確認調査が行われ、その際に浄法寺町分として五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡が新たに追加された。この結果浄法寺町分の遺跡は以前に確認されていた田余内Ⅰ・田余内Ⅱ・安比内Ⅰ遺跡を加え14遺跡となった。

II　調査の方法

1．野外調査

(1) 調査区の設定

グリッドの設定は日本道路公団の路線中心杭STA26＋60とSTA27＋40を使用し、軸線の方向が平面直角座標第X系のX座標・Y座標に一致するようにした。その手順は以下のとおりである。

① STA27＋40からSTA26＋60を見通す直線と平面直角座標第X系のX軸線との偏角を成果表から計算する。その値は右に17°34′24″である。

② STA27＋40からSTA26＋60を見通し、右に17°34′24″振った直線が平面直角座標第X系のY＝22300,0000と交わる点をP_1とする。

③ STA27＋40からP_1を見通し、その延長上の任意の遠地点をP_2とする。

④ P_1からP_2を見通した後、左に90°振り、平面直角座標第X系のX＝13000,0000と交じわる点をP_3とする。

以上の結果、P_3の平面直角座標第X系による成果値はX＝13000,0000・Y＝22300,0000となる。またP_3とP_1を結ぶ直線はY＝22300,0000の線に一致する。なお、上記③の手順は誤差を少なくするためである。以下P_3を基準に5mメッシュのグリッドを設定した。大区画は当初(昭和58年度)50m毎に設定したが、昭和59年度の調査では25m毎とした。グリッドの名称は、大区画が北から南へB～I、西から東へI～VIIを与え、その組み合わせでBI区、BII区というように呼称した。小区画は5m毎に北から南へa～e、西から東へ0～4を与え、大区画名と組み合わせてBI a0、BII b1というように呼称した。なお、A区に相当する区域は調査範囲外にある。

(2) 粗掘り・遺構検出

粗掘りは、表面採集遺物の比較的多い地域は人力、少ない地域は2m幅のトレンチを数本入れて層位などを確認したあと重機を用いて行った。粗掘り後は鋤簾等を用いて遺構を検出し、遺構には大区画毎に次の番号を与えた。住居址と炉址・住居址状遺構は1～、ピットは51～、陥し穴状遺構は101～、焼土遺構は151～、墓壙は201～、暗渠は251である。遺構名はその番号に大区画名をつけ、DIV—1住居址、EIV—51ピット、FI—151焼土のように呼称した。

(3) 精査方法

住居址は4分法、他は2分法を原則とした。精査の各段階で必要に応じて図面の作成や写真撮影を行った。ただし、ピット類の土層断面の場合、必要な情報をフィールド・カードへ記載するにとどめ、実測や写真撮影を省略したものがある。

(4) 出土遺物の取り上げ

粗掘り時点で出土した遺物は地区名、層位を記入し、グリッド一括で取り上げた。必要に応じて平板測量によって出土地点を確認したほか、一部は大区画一括で取り上げている。遺構から出土した遺物のうち埋土中のものは状況に応じて埋土、埋土上部、埋土下部、床面直上に分けている。床面あるいは底面からの遺物はできるだけ実測図に位置とレベルを記録して取り上げた。

(5) 実測と写真

平面実測は1mメッシュを基本としている。ライン名は調査区域ほぼ中央のグリッドGIV a0の北西端を座標原点とし、1mきざみに北方向はN1、N2…、南はS1、S2…、東はE1、E2…、西はW1、W2…とした。断面図は任意の高さで作成している。縮尺率は$^{1}/_{20}$を原則とし、場合によって$^{1}/_{10}$も併用した。写真による記録には6×7cm版のモノクロ1台、35mm版のモノクロとカラースライド各1台のカメラを用いている。

2．室内整理と報告書

(1) 作業手順

整理作業は遺構実測図の点検、合成、トレース、遺物の仕分、登録、復元、実測、拓本、トレース、図版の作成の順に進めた。これらの作業は調査員の指示、点検のもとに室内作業員が行った。遺構、遺物別の整理方法と報告の内容は以下のとおりである。

(2) 遺構関係

遺構図版には現地で作成した実測図を点検、合成したものを掲載している。図版は原則として以下のものを掲載した。

◎住居址＝平面図・土層断面図・炉およびカマド断面図。

◎ピット・焼土・暗渠＝平面図・土層断面図。ただし、土層断面図を省略したものがある。

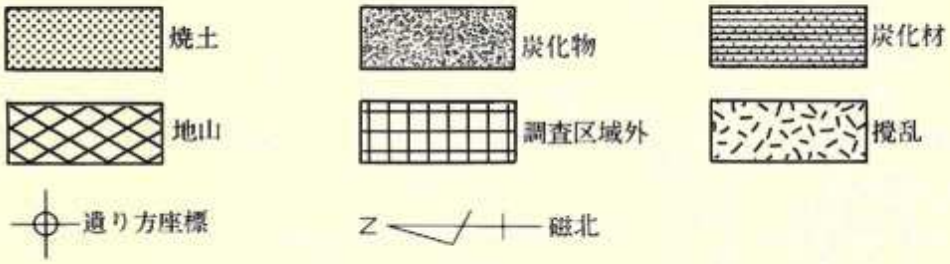
◎墓壙＝平面図・人骨出土状態

図版の縮尺は次のとおりである。なお、図版中にもS＝1/Nで示している。

◎住居址・ピット・焼土・墓壙・暗渠—1/40　・墓壙出土人骨—1/20　・柱穴群—1/60

◎遺構配置図—1/400

図版中に使用したスクリーン・トーンおよびその他の表示は次のとおりである。



基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層名はアラビア数字で表し、層がさらに細分される場合はアルファベットの小文字を付記している。

遺構写真の縮尺率は不定である。

(3) 遺物関係

出土遺物は野外調査時に水洗、注記をすませ、室内整理では種類別の仕分け、接合、復元を行った。土器は出土量の大半が破片で、完形品や復元実測可能なものは少ない。本報告では完形品、復元実測可能個体のほか遺構の時期決定資料、時期別の特徴をよく表している破片を選択して掲載している。石器、石製品、土製品、鉄器は出土量が少なく、大部分を掲載している。墓壙の副葬品、炭化した堅果類、鉄滓は写真のみを掲載している。

各遺物の縮尺率は原則として次のとおりである。図版中にもその旨を記している。

◎土器—1/3　◎土製品—2/3　◎剥片石器—1/2　◎礫石器—1/3　◎石製品—1/2
◎鉄器—2/3

出土地点および層位は各遺物の右肩に示している。遺物番号は図版、写真図版とも共通である。

写真図版の縮尺はおおよそ次のとおりである。

◎土器—1/2を原則とし、大型のものは1/3ないし1/4　◎剥片石器—2/3　◎礫石器—1/2

◎土製品—原寸ないし1/2　◎石製品—1/2ないし1/3

◎その他—1/2（ただし、墓壙内副葬品の鉄鍋と徳利は不定）

III　遺跡の立地と環境

1．位置と地形

関沢口遺跡は岩手県二戸郡安代町大字中佐井字関沢口に所在し、国鉄花輪線荒屋新町駅の北東約4.3kmに位置する。

安代町は岩手県の北西端に位置し、西は秋田県、北は青森県に接している。地勢を概観すると安代町は四方を1000m級の山々に囲まれ、標高400m以上の山地・丘陵地が総面積の85%以上を占める。この地域の山地は概ね3つに分けられる。安比川を挟んで東部にある七時雨山・御月山を中心とする山地、西部にある馬場山・缺の山・大沢山などからなる山地、それに奥羽山脈の一部をなす中岳・二ツ森・皮投岳などからなる山地である。奥羽山脈は比較的急峻な山が多いが、他はそれに比してなだらかで、起伏量が少ない。低地及び段丘は安比川・米代川流域に見られるが総面積に占める割合は少ない。安比・米代両水系については上の山VII遺跡発掘調査報告書(種市ら、1983年)に詳しいので、ここでは本遺跡に関わる安比川水系について略述する。

安比川は安比岳付近に源を発し、その東麓を開析しながら北流する。荒屋新町を抜けた五日市付近で流路をやや東方に変え、浄法寺町内を通って一戸町鳥越付近に至って馬淵川に合流する。比較的発達した段丘地形は赤坂田・扇畑付近で右岸に、曲田川・目名市沢との合流付近で左岸に、中佐井付近で右岸にそれぞれ見られる。沖積地は荒屋新町や中佐井付近に比較的広く形成され、その幅は300mから800mである。

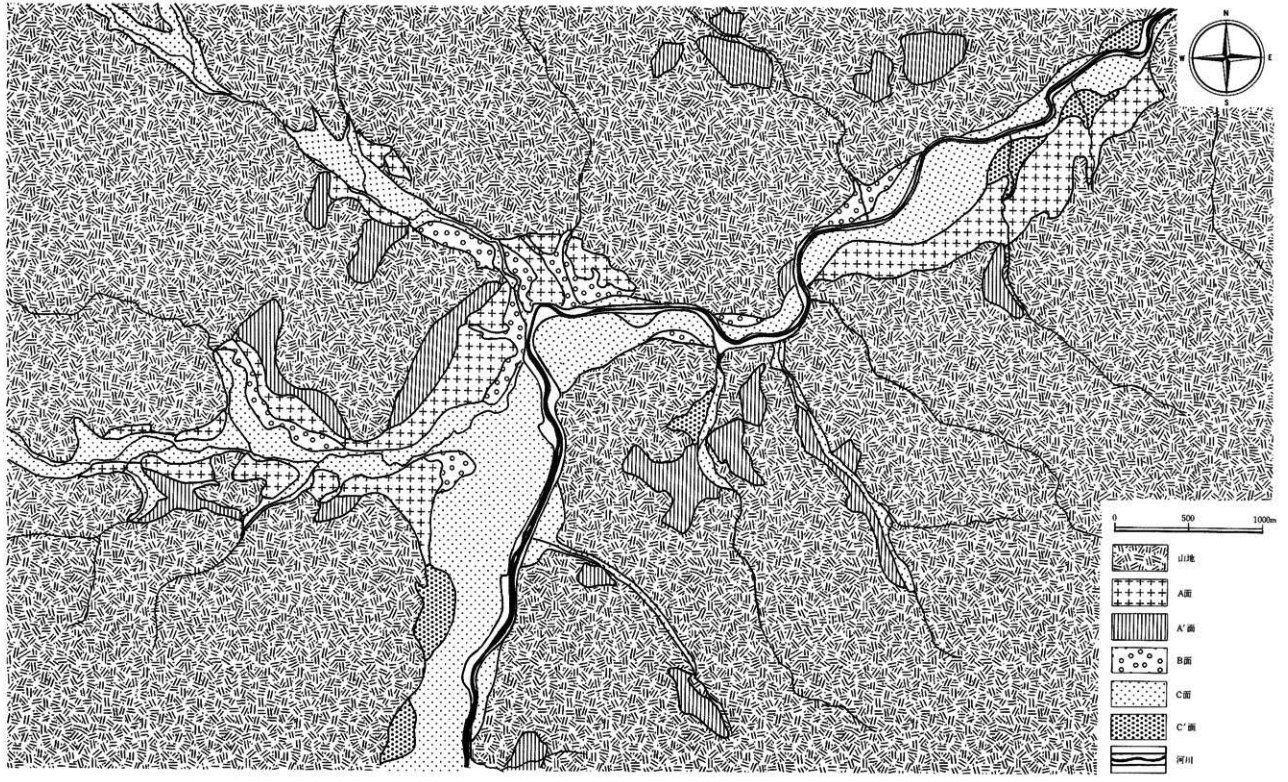
2．地形分類

第4図に掲げた地形分類図は湯の沢III遺跡発掘調査報告書に掲載された原図を利用した。安代町内には数多くの遺跡が確認されており、遺跡の立地は地形と密接な関係がある。

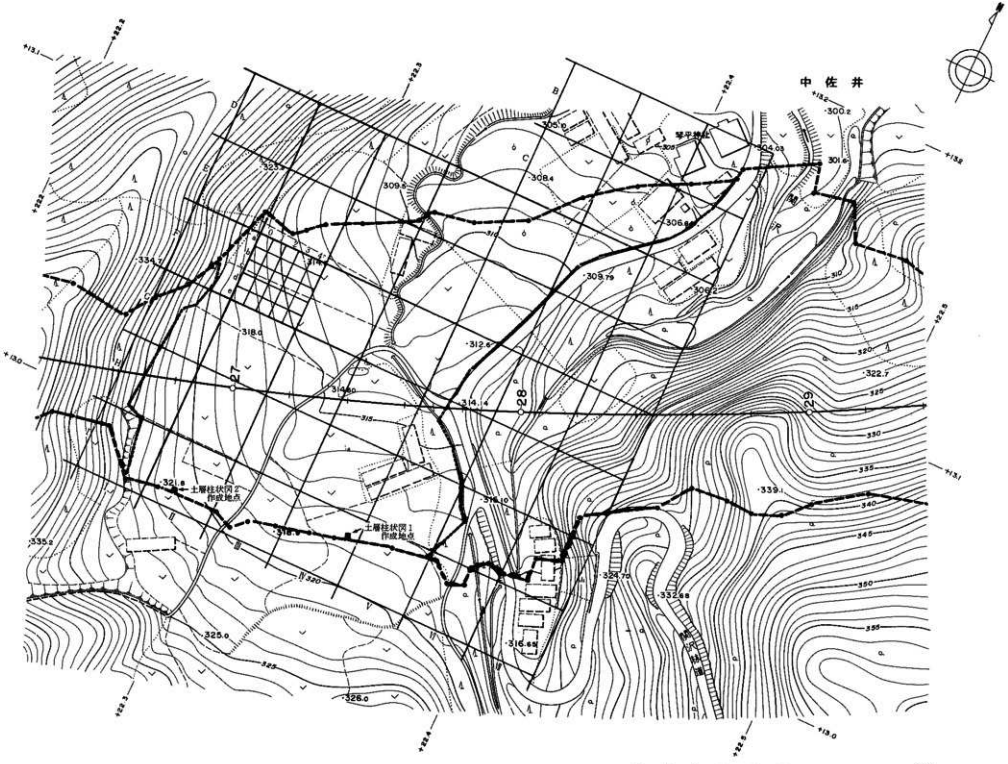
A面　谷底平野（C面）の後背地に発達する段丘面。種市進氏は二戸地域の馬淵川流域福岡段丘に対比される洪積段丘との考えを提示している[註1]。多くの遺跡が立地する。

A′面　山地と低地の傾斜変換点付近の地形面。山地縁辺部や山麓地の緩斜面などが相当する。関沢口遺跡をはじめ、A面に次いで多くの遺跡が立地する。

B面　A面に比べると未発達段丘面である。曲田川・目名市沢と安比川の合流付近などでA面とC面の間に部分的に見られる。種市氏は馬淵川流域堀野段丘に対比される沖積段丘としている。



第2図　地形分類図



第3図　遺跡周辺地形図・グリッド配置図

C面　現沖積面

C′面　C面の背後に発達する小規模な扇状地。

B面・C面・C′面に立地する遺跡はきわめて少ない。

3．遺跡付近の地形

関沢口遺跡は田代山西麓の山地縁辺部緩斜面上に立地する。遺跡の東方および南東方向には田代山と七時雨山が並列してそびえている。関沢をはじめ両山を源とする幾筋もの沢がその西麓を開析し、所々に緩斜面を形成して安比川にそそぐ。関沢は遺跡付近で流路を北西から北に変える。遺跡の載る緩斜面は遺跡内を流れる小さな沢や埋積谷によって微地形が形成されているものの、全体的には関沢の流路にそって北側に開けている。東・西・南側の三方は田代山から延びる尾根に囲まれている。関沢はさらに北流し、現在の中佐井地区の集落の載る段丘を開析して小規模な扇状地を形成しつつ安比川にそそぐ。遺跡付近の標高は305～320m、関沢とは7m前後、安比川とは45～60mの比高がある。現況の土地利用は畑作地・牧草地・リンゴ園である。

4．基本層序

基本土層図は調査区南端のグリッドⅠⅡc1とⅠⅣb4の2地点で作成した。以下に各層の概略を述べる。

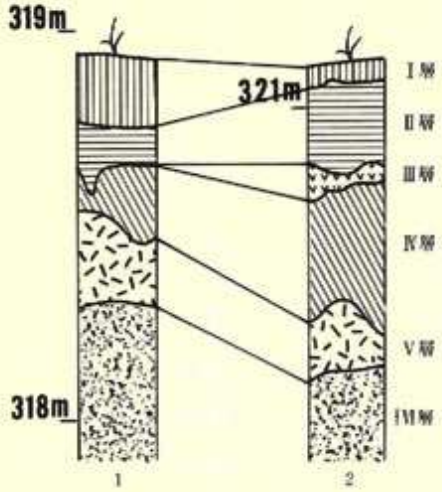
Ⅰ層　黒褐色(10YR3/2)　耕作土。遺跡全面をおおい、層厚は5～20cmである。遺跡中央を北流する沢に向かって厚くなる。この沢付近では砂層との互層状態が一部で観察される。

Ⅱ層　黒　色(10YR1.7/1)　クロボク。Ⅲ層起源である。層厚は20cm前後であるが、調査区東側にはこの層を欠く所も多い。

Ⅲ層　灰黄色～黄褐色(2.5Y6/2～2.5Y5/3)　浮石。層として確認される所は少なく、多くはブロック状に堆積する。平安時代の遺構や凹地に観察される。乾くと灰白色を呈し、遺構の事実記載で灰白色浮石としているのはこの浮石である。[註2)]

Ⅳ層　暗褐色(10YR3/3)　小規模な遺物含包層である。層厚は30cm前後であるが、調査区東側にはこの層を欠く所もある。Ⅴ層土と混合し、遺構の埋土となることが多い。

Ⅴ層　黄褐色(10YR5/8)　遺構の多くはこの層を掘り込んでおり、主な遺構検出面となっている。八戸火山灰に相当すると思われる。



第4図　土層柱状図

VI層　にぶい黄褐色～にぶい黄橙色（10YR5/4～10YR6/'4）
粘土質土。無遺物層。

5．周辺の遺跡

安代町内で遺跡台帳に登載されている遺跡は138か所である。その中から安比川水系に所在する縄文時代から中世にかけての84遺跡を第5図に掲載した。種類別の内訳は散布地49、集落跡31、その他4、時代別では縄文時代81、弥生時代3、古代13、中世6である。なお、重複の場合はそれぞれ1遺跡と数えた。このうち、発掘調査された遺跡は昭和50年の保土沢遺跡、昭和53年以降の東北縦貫自動車道建設に伴う赤坂田I遺跡をはじめとする18遺跡の計19遺跡である。以下、調査された遺跡を中心に、時代別に概略を述べる。

縄文時代

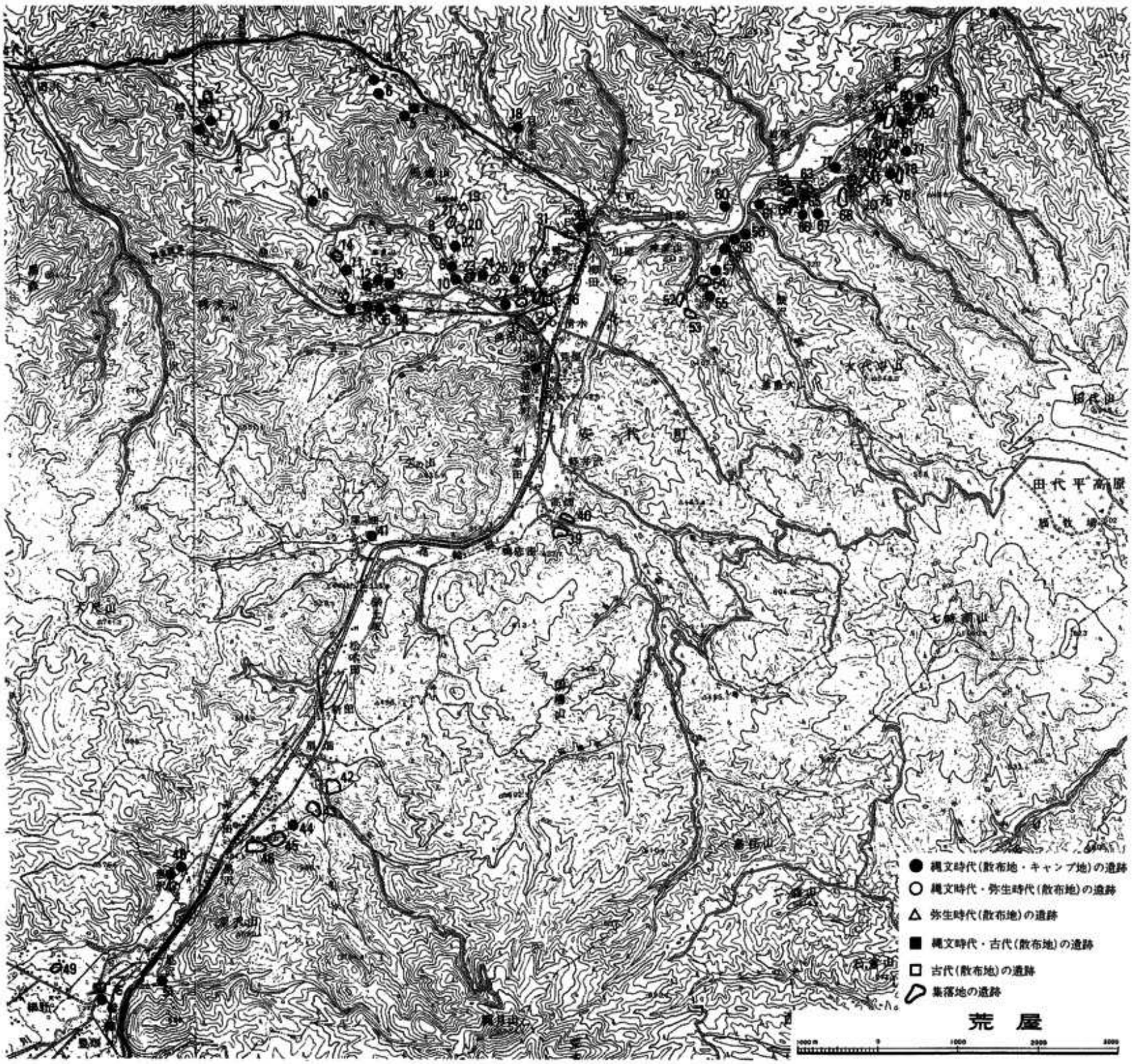
縄文時代の時期別では早期1、前期7、中期26、後期31、晩期21である。散布地は各時期のものがあるが、発掘調査で検出された住居址は中、後、晩期のもので、早、前期を欠く。中期の住居址は12遺跡から44棟、後期が8遺跡から59棟、晩期が4遺跡から59棟、中期末葉から後期初頭にかけてが6棟、その他時期不明が17棟である。中期の遺跡で10棟を越える住居址を検出している遺跡はなく、1～3棟の遺跡が多い。後期になると5～8棟の遺跡が多く、水神遺跡のように10棟を越える例もある。晩期になると、曲田I遺跡では55棟、他の遺跡では1～2棟が検出されている。住居址が検出された遺跡数は時期が下がると減り、一遺跡あたりの住居址数は逆に増える傾向にある。

弥生時代

この時代の遺構が検出された遺跡は曲田I遺跡と水神遺跡である。水神遺跡からは住居址、曲田I遺跡からは墓壙が検出されている。他には当遺跡と上の山館遺跡から若干の土器片を出土したのみで、この時代の遺跡は少ない。

古　代

検出された住居址はいずれも平安時代に属し、奈良時代のものはない。10遺跡から72棟の住居址が検出され、10棟を越える遺跡が扇畑I遺跡（11棟）と上の山VII遺跡（39棟）の2か所に


縄文時代(散布地・キャンプ地)の遺跡
縄文時代・弥生時代(散布地)の遺跡
弥生時代(散布地)の遺跡
縄文時代・古代(散布地)の遺跡
古代(散布地)の遺跡
集落地の遺跡
荒屋
安代町
田代平高原

第5図　周辺遺跡位置図

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代（時期）	番号	遺跡名	種別	時代（時期）
1	越戸 I	散布地	縄文時代	43	扇畑 II	集落跡	縄文時代
2	越戸 II	集落跡	縄文時代（中期）	44	寄木	散布地	縄文時代
3	越戸 III	散布地	縄文時代	45	赤坂田 I	集落跡	縄文時代（後・晩期）・古代
4	戸沢 I	散布地	縄文時代・古代	46	赤坂田 II	集落跡	縄文時代（中・後期）
5	戸沢 II	散布地	縄文時代（中～晩期）	47	黒沢 I	キャンプ	縄文時代
6	戸沢 III	散布地	縄文時代	48	黒沢 II	キャンプ	縄文時代
7	戸沢 IV	散布地	縄文時代	49	細野	集落跡	縄文時代（後期）
8	曲田 I	集落跡	縄文時代	50	豊畑 I	散布地	縄文時代（中・後期）
9	曲田 II	散布地	縄文時代	51	星沢	キャンプ	縄文時代（中期）
10	曲田 III	散布地	縄文時代	52	湯の沢 I	集落跡	縄文時代（中・後期）
11	曲田 IV	散布地	縄文時代	53	湯の沢 II	集落跡	縄文時代（中・後期）
12	曲田 V	散布地	縄文時代	54	湯の沢 III	集落跡	縄文時代（中～晩期）
13	曲田 VI	散布地	縄文時代	55	湯の沢 IV	散布地	縄文時代
14	曲田 VII	集落跡	縄文時代	56	繋沢 I	散布地	縄文時代（中期）
15	曲田 VIII	散布地	縄文時代	57	繋沢 II	散布地	縄文時代（前・中期）
16	曲田 IX	散布地	縄文時代（中期）	58	日影 I	散布地	縄文時代
17	曲田 X	散布地	縄文時代（後・晩期）	59	日影 II	散布地	縄文時代
18	日名市	散布地	縄文時代（後期）	60	岩屋	散布地	縄文時代
19	上の山 I	散布地	弥生時代（中期）	61	山口	散布地	縄文時代
20	上の山 II	散布地	縄文時代・弥生時代（後期）	62	八幡館跡	集落跡・館跡	縄文時代（前・中期）
21	上の山 III	集落跡	縄文時代（後・晩期） 弥生時代（中期）	63	石神 I	集落跡	縄文時代（前期）
22	上の山 IV	散布地	縄文時代（中期）	64	石神 II	散布地	縄文時代
23	上の山 V	集落跡	縄文時代・古代	65	石神 III	散布地	縄文時代（前期）
24	上の山 VI	散布地	縄文時代	66	石神 IV	散布地	縄文時代（後・晩期）
25	上の山 VII	集落跡	縄文時代（中・後期）・古代	67	石神 V	散布地	縄文時代（後・晩期）
26	上の山 VIII	散布地	縄文時代・古代	68	関沢口	集落跡	縄文時代（中・後期）・古代
27	上の山 IX	散布地	縄文時代（中・後期）	69	古屋敷	散布地	古代
28	上の山 X	集落跡	縄文時代（中・後期）・古代	70	山の神	集落跡	縄文時代（後・晩期）
29	上の山館	集落跡・館跡	縄文時代（中期）・古代・中世	71	北ノ城	館跡	縄文時代・中世
30	有矢野館	散布地・館跡	縄文時代（中・後期）・中世	72	中佐井 I	集落跡	縄文時代（後・晩期）
31	有矢野	集落跡	縄文時代（早～晩期）・古代	73	中佐井 II	集落跡	縄文時代（後・晩期）
32	ヤカマシダ	散布地	縄文時代（晩期）	74	中佐井 III	集落跡	縄文時代（中～晩期）
33	横間台	散布地	縄文時代（前・中期）	75	中佐井 IV	集落跡	縄文時代（中～晩期）
34	横間 I	散布地	縄文時代	76	中佐井 V	散布地	縄文時代
35	横間 II	散布地	縄文時代	77	山卓 I	散布地	縄文時代（後・晩期）
36	保土坂	散布地	古代	78	山卓 II	集落跡	縄文時代（晩期）
37	保土沢	集落跡	縄文時代（中・晩期）・古代	79	土沢 I	散布地	縄文時代（後・晩期）
38	荒屋館	散布地・館跡	縄文時代・古代・中世	80	土沢 II	散布地	縄文時代（後・晩期）
39	荒屋 I	集落跡	縄文時代（中・後・晩期）	81	土沢 III	散布地	縄文時代（後・晩期）
40	荒屋 II	集落跡	縄文時代（中期）	82	水神	集落跡	縄文時代
41	小屋畑	散布地	縄文時代（前期）	83	下の田	散布地	縄文時代（後期）
42	扇畑 I	集落跡	縄文時代（後期）・古代	84	下の田館	集落跡・館跡	縄文時代（後・晩期）・中世

ある。他の8遺跡はいずれも1～5棟の検出である。安比川流域には奈良時代のものはほとんどなく、平安時代の遺跡の多いのが一つの特徴といえる。

中・近世

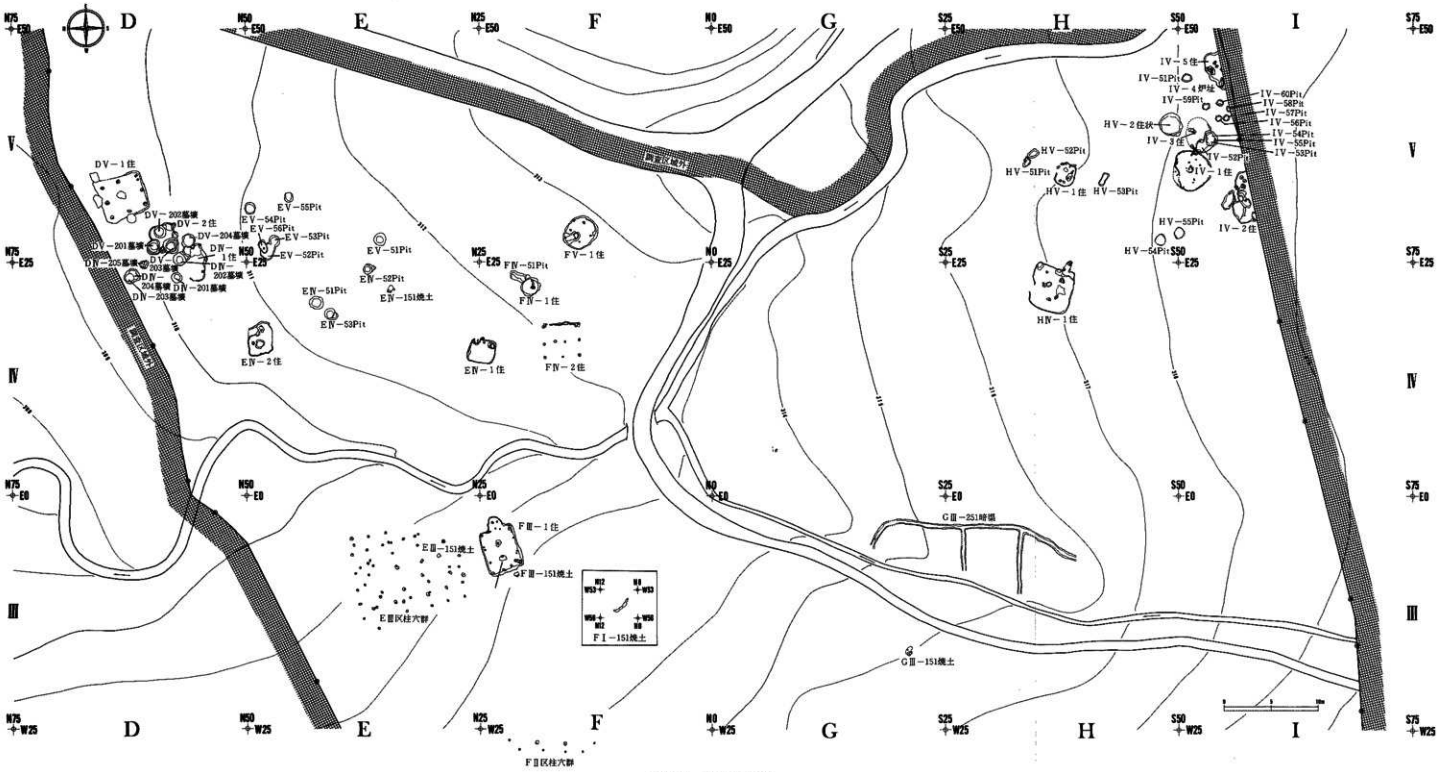
中・近世のものと思われる建物跡遺構は当遺跡の3棟をはじめ上の山館遺跡、曲田Ⅰ遺跡にある。共伴遺物等によって所属時代が明確にされている例はないが、形態から中世ないしは近世前期頃までの遺構としたものが多い。

註1)　種市進(1983)上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書「遺跡の立地と環境」　岩手県埋蔵文化財センター

註2)　井上克弘氏（岩手大学農学部）・山田一郎氏（東北大学農学部）による鑑定結果である。この鑑定は当埋蔵文化財センターが安代町・浄法寺町内で発掘調査を行った6遺跡18か所からの試料をもとに分析している。当遺跡からの試料はⅠⅡc_1から採集したⅢ層の灰白色浮石である。鑑定結果の全文は紙面の都合上割愛させていただくが、当遺跡の試料に関わる所見を以下に抜粋する。なお、全文は当センター文化財調査報告書第90集「海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ遺跡調査報告書」に収録している。

「グループⅡ（当遺跡の試料はこのグループに入る―引用者註）の火山灰は十和田―a火山灰と大湯浮石の中間的組成を示している。……グループⅡの火山灰はいわゆる粉状パミスに相当し、粗粒質で比較的大きな発泡性のよい浮石を多く含むことから、噴出源は遺跡群の位置する安代町や浄法寺町の近くにある十和田火山が考えられる。またテフラの種類としては大湯浮石の可能性が強い。大湯浮石は3つのfall unitからなるといわれ（町田ら、1981）、これらがまじったものである可能性もある。しかし、グループⅡの火山灰の重鉱物組成は大湯浮石に類似するが、火山ガラスの形態は扁平状およびスポンジ状火山ガラスを主とし、扁平状ガラスが少ない大湯浮石と性質が異なっている。

粉状パミスのテフラの種類については一次鉱物組成だけで結論を出すことは困難であり、強磁性鉱物の化学組成（井上・山田、1982）や火山灰のRb、Srなど微量金属元素組成（三辻、1984）による判定が有効と思われる。」


D
E
F
G
H
I
DV－1住
DV－201墓壙
DV－2住
DV－204墓壙
DV－203墓壙
DV－202墓壙
DV－1住
DV－204墓壙
DV－201墓壙
DV－203墓壙
EV－55Pit
EV－54Pit
EV－56Pit
EV－53Pit
EV－52Pit
EV－51Pit
EV－52Pit
EV－151機土
EV－51Pit
EV－53Pit
EV－2住
EV－1住
FV－1住
FV－51Pit
FV－1住
FV－2住
EⅢ－151機土
EⅢ区柱穴群
FⅢ－1住
FⅢ－151機土
FⅠ－151機土
FⅡ区柱穴群
GⅢ－251時墓
GⅢ－151機土
IV－5住
IV－51Pit
IV－4炉址
IV－59Pit
IV－60Pit
IV－58Pit
IV－57Pit
IV－56Pit
IV－54Pit
IV－55Pit
IV－53Pit
HV－2住炉
IV－3住
IV－52Pit
IV－1住
IV－2住
HV－52Pit
HV－51Pit
HV－1住
HV－53Pit
HV－55Pit
HV－54Pit
HV－1住

第６図　遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1．住居址

(1)　縄文時代

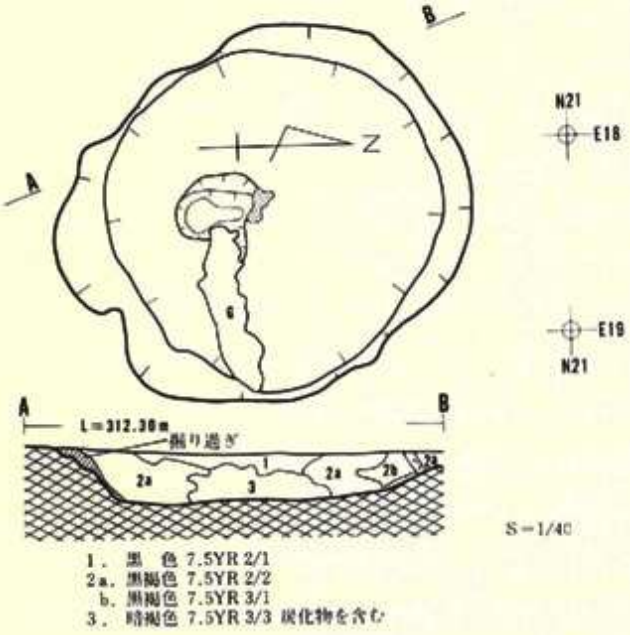
ＦⅣ－１住居址

遺構（第７図；ＰＬ－３）

この住居址は北西向きの緩斜面に構築されている。付近は基本層序Ⅱ―Ⅳ層を欠き、Ⅴ層が検出面である。平面形はいく分歪みのある円形であるが、部分的には角ばっている。規模は径2.0ｍを測る。

埋土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土で構成され、４層に細分できる。３層は多くの炭化物粒を下部に含んでいる。

壁はゆるやかに湾曲して立上がり、北壁と南壁はいく分オーバーハングの状態になる。壁高は10～27cmを測り、斜面上方の南東部が高い。床面はほぼ平らである。中央部付近から東壁にかけての一部にはⅤ層に含まれる巨礫が露出している。炉は中央からわずかに南に寄った部分に位置する。地床炉で、径30×50cm・深さ５cmの楕円形のピットを伴う。現地性焼土がピットの北縁に小規模に認められるほか、内部には多くの炭化物粒が分布している。柱穴や壁溝は検出されていない。



第７図　ＦⅣ－１住居址

遺物（第８図；ＰＬ－28）

出土遺物には縄文土器と礫石器があるが、少量である。１は床面直上から出土した。

縄文土器（第８図１）　粗製の深鉢である。体部上半に最大径があり、口縁部に向かっていくぶん狭ばまったあと、口縁部は

第8図　FⅣ－1住居址出土遺物

わずかに外反する。口縁部は幅2.5cmが無文で、その下位には縦位の複節斜縄文が施文されている。器形や施文からみて、中期末葉から後期前葉の時期内に位置づけられるであろう。

礫石器（第8図2）　小型の磨石である。全体が滑らかであるが、とくに先端部に平担な面が認められる。

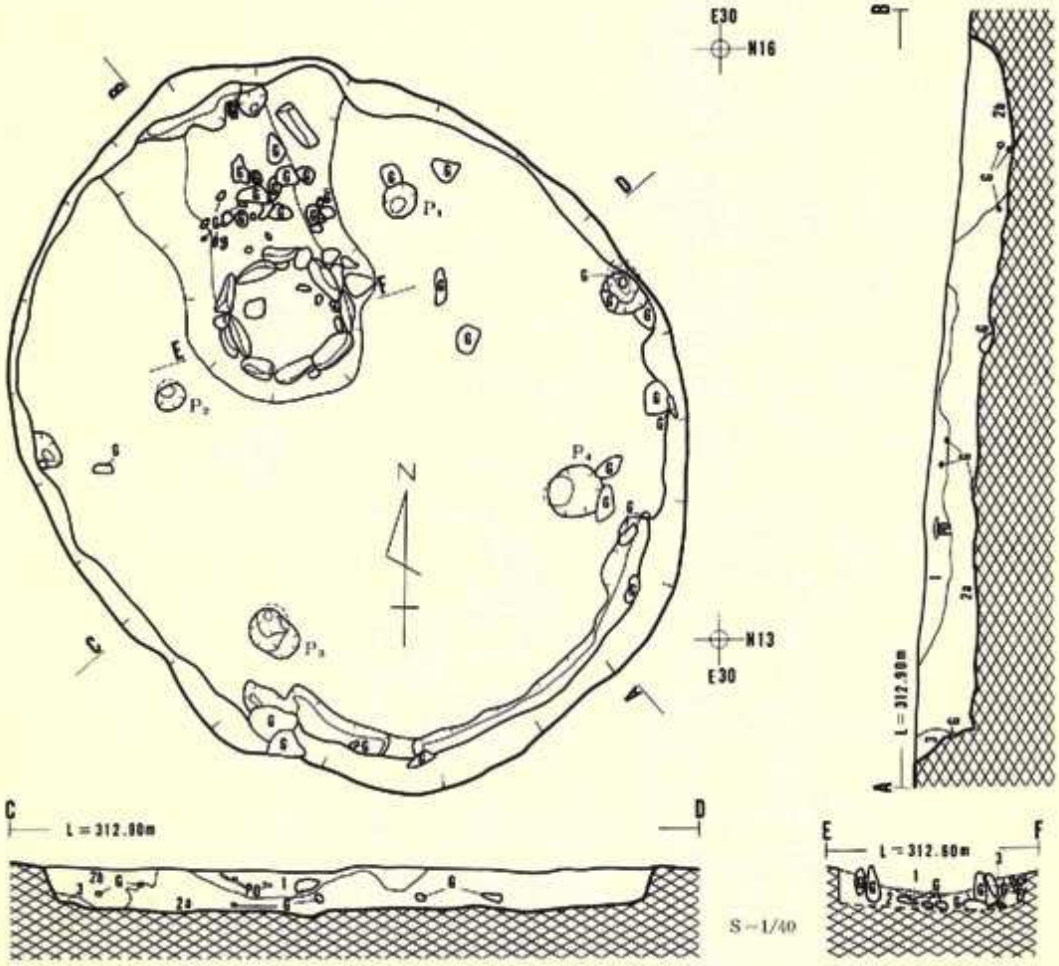
ＦＶ－1住居址

遺構（第9図；PL－4・5）

この住居址はFⅣ－1住居址の南東5mに位置し、検出面も同じである。平面形は北西－南東方向に長軸を持つ楕円形で、規模は3.15×3.85mを測る。

埋土は黒色土・暗褐色土・褐色土で構成され、4層に細分できる。1層の黒色土は中央から南東の部分に分布する。炭化物や礫・多くの土器片を含んでいる。

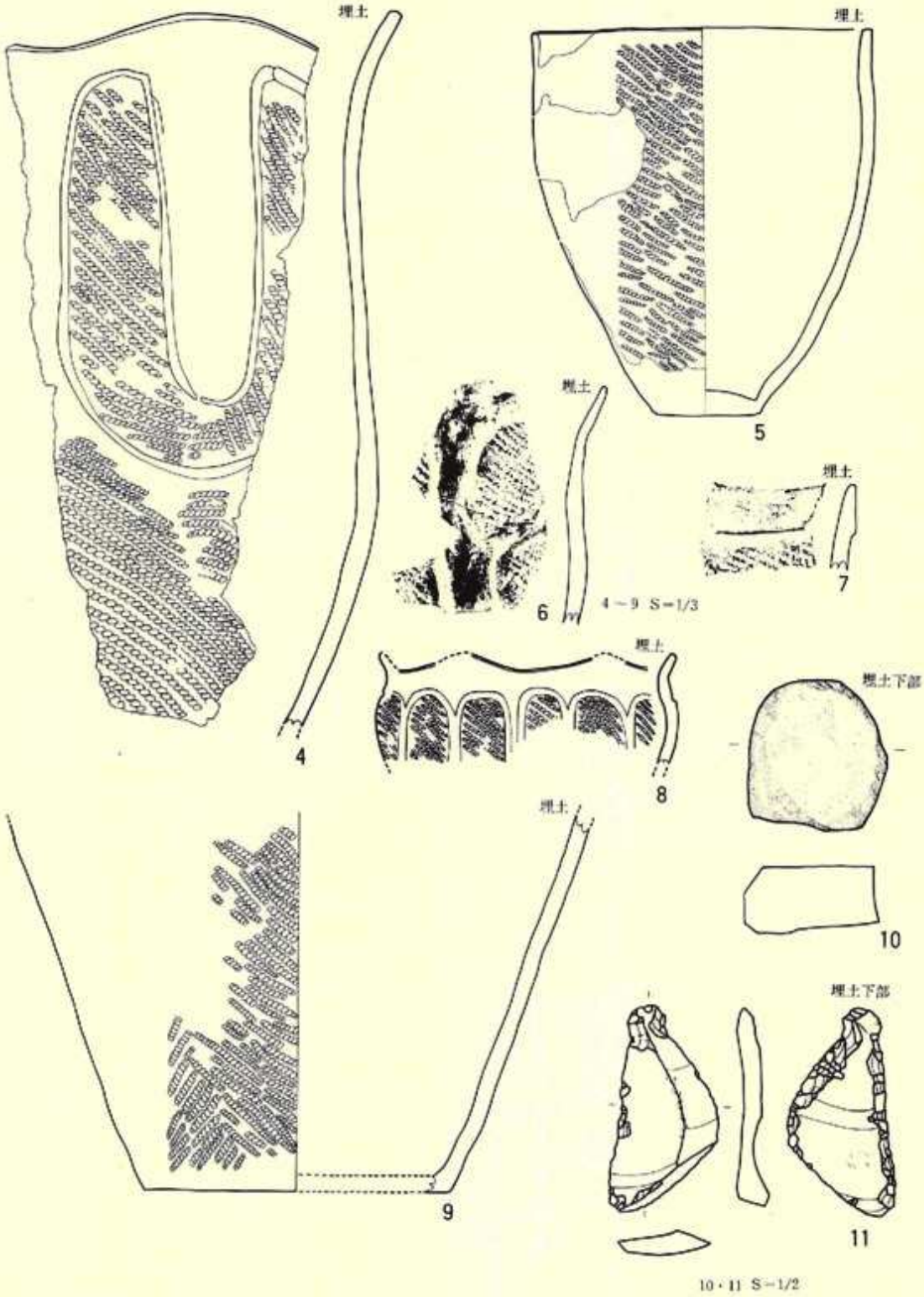
壁は、南東壁の中・下部が直壁であるほかは外傾している。壁高は5～30cmを測り、斜面上方の南東部が高い。床面にはV層に含まれる礫が露出し、とくに北東部に著しい。中央部付近は非常に堅くしまっている。また、炉に隣接する北側の部分は壁からゆるやかに傾斜して下がっている。炉は北西壁寄りに位置する。石囲い部と前庭部で構成される複式炉である。石囲い部は粒径10～25cmの亜角礫13個を径70cmの規模で円形に埋置している。内部には焼土が形成され、とくに東側の部分に著しい。前庭部は浅く窪み、石囲い部に接する北縁には三角柱状の亜角礫1個を伴う。　柱穴は、P_1（径18cm・深さ37cm）・P_2（径15cm・深さ16cm）・P_3（径20cm・深さ45cm）・P_4（径26cm・深さ44cm）の4個が検出され、方形の配置になる。P_1・P_3・P_4が深さ



1．黒　色 7.5YR 2/1 炭化物、中礫を含む
2a．暗 褐 色 7.5YR 3/3 中礫を含む
b．極暗褐色 7.5YR 2/3 炭化物、中礫を含む
3．褐　色 7.5YR 4/6 中礫を含む

1．明赤褐色 5YR 5/8 焼土
2．褐　色 7.5YR 4/6
3．褐　色 7.5YR 4/4

第9図　FV－1住居址



第10図　FV－1住居址出土遺物

40cm前後であるのに対し、P_2は浅い。また、P_3とP_4はいく分外傾している。壁溝は斜面上方にあたる南壁から東壁の部分にあり、長さ280cm・幅10～15cm・深さ5～10cmを測る。

遺物（第9・10図；PL－28・29）

埋土中から比較的多くの土器が出土している。石器類は少ない。

縄文土器（第9・10図3～11）　3～9は深鉢である。4は体部からいくぶん内傾して立ちあがり、口縁部は外反している。ゆるやかな波状口縁で、沈線で区画されたU字状文およびその下方には縦位を主とするLRが施文されている。8は小型である。口縁部は6単位の小波状になる。口縁部は無文で、体部文様は縦位のLRが充填されたΩ字状文や楕円形と推定される。6は唇部が外側からすられているため、非常に薄くなっている。文様意匠は「Ω」文と縦位楕円形文の組み合せと推定される。縄文は縦位のLRである。3は大型の粗製土器である。体部上半に最大径があり、口縁部は直線的にわずかに外傾する。地文はLRで、縦位が主である。5は中型の粗製土器である。体部から口唇部まではほぼ直立する。口唇部が6mm幅で無文である以外は縦位のLRが施文されている。9は体部下半が残っている。地文は横位と縦位のLRで、体部下端は2cm幅で無文になっている。7は折り返し口縁をもち、地文は単節斜縄文である。6・8は中期後葉大木9式、4は中期末葉大木10式に相当する。7は後期前葉のものであろう。3・5・9もそれらの時間幅におさまるものであろう。

剥片石器（第10図11）　縦形石匙である。主に表面から二次加工し、両側縁に刃部を作り出している。

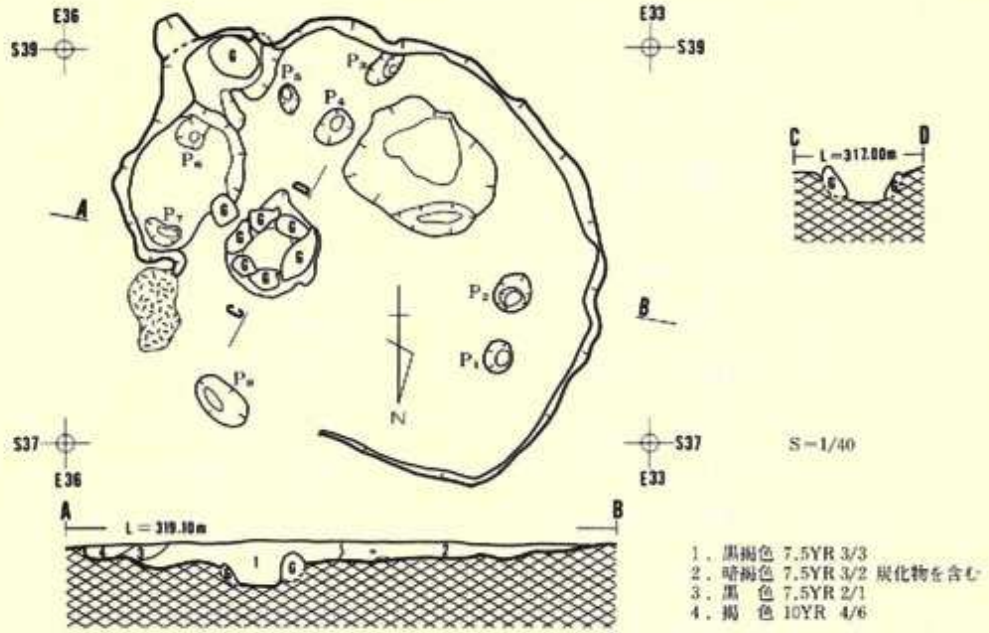
石製品（第10図10）　円盤状石製品の一種である。不整な方形状に打ち欠いたあと全体を研磨しているが、角や稜線を多く残している。

ＨＶ－１住居址

遺構（第11図；PL－5）

この住居址は遺跡の南東部ＨＶ区の北向き緩斜面に構築されている。平面形は北西－南東方向に長軸を持つやや不整の楕円形で、規模は2.7×2.0mを測る。

埋土は4層に細分でき、1・2層の黒褐色土・暗褐色土が卓越する。1層の下部には一部黒色土の薄層が見られ、2層には炭化物が含まれる。3・4層は風倒木による撹乱と思われる。壁は斜面下方の北側がほとんど残存せず、一部その痕跡をとどめるにすぎない。南壁は凹凸があり、東壁は風倒木によると思われる撹乱を受け不安定である。壁高は3～10cmを測り、斜面上方の南壁の残りが比較的よい。床面は炉の周辺を中心に1.5×1.0mの範囲が非常に堅くしまっている。全体的に小さい凹凸が多く、特に南壁寄りに著しい。炉は中央からやや東壁寄りに位置する。石囲い炉で、径45～50cm・深さ20cmの円形のピットの縁にそって一辺40cm規模の



第11図　ＨＶ－１住居址

方形に礫を配置している。構成礫は比較的扁平な亜円または亜角の礫で、粒径は14～32cmである。炉の東側は壁際まで楕円形状に窪み非常に堅くしまっている。この部分は前庭部とみることができ、複式炉の系統を引くものである。焼土は検出されていないが、構成礫の上端部に煤が多く付着し、炉の西側床面に炭化物粒が多く分布する。柱穴状小ピットは P_1（径15cm・深さ36cm）・P_2（径22×17cm・深さ18cm）・P_3（20×11cm・深さ22cm）・P_4（径18cm・深さ18cm）・P_5（径16×11cm・深さ50cm）・P_6（径16cm・深さ6cm）・P_7（径20×12cm・深さ6cm）の７個検出されている。P_1・P_5 は掘り込みが深い。P_6・P_7 は東壁際で対になる。規模・深さ・位置関係から柱穴の一端を構成したと思われるものはこの４個で、他の P_2・P_3・P_4 の性格については不明である。壁溝は検出されていない。

ＩＶ－１住居址

遺構（第12図；PL－６）

この住居址は調査区の南東端ＩＶ区の北向き緩斜面に構築されている。平面形は不整の円形で、規模は径4.1mである。

埋土は黒褐色土の単層で、炭化物粒や小量の焼土粒、Ｖ層起源の汚れた火山灰を粒状・ブロック状に含む。南壁際は汚れ火山灰が多く色調は明色であるが、中央部に向かって漸移的に暗色となる。

壁は直立に近く、凹凸が著しい。斜面下方の北側は残存しない。壁高は残りのよい南側で20

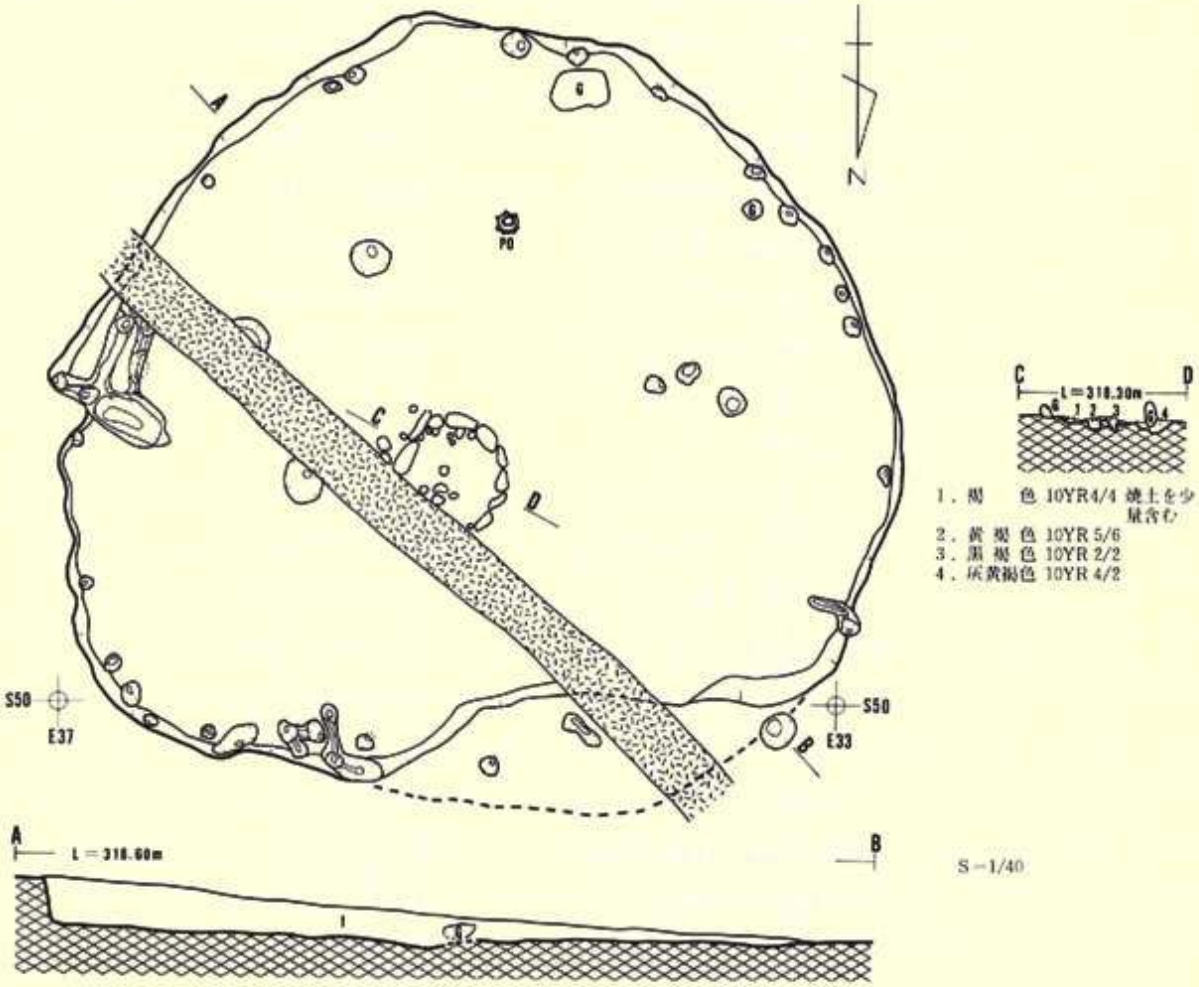
～30cm、東・西側は5～15cmである。床面は小凹凸は多いが、全体的には平坦で、しまりもよく堅い。炉はほぼ中央に位置する。石囲い炉で、北東部が最近の攪乱を受け残存しないが、径60cm規模の円形を呈していたと思われる。構成礫は粒径10～20cmの亜円礫で9個残存する。内部には焼土が形成され、層厚は2cmである。柱穴状小ピットは壁際に20個余り、床面上から数個検出されている。壁際をめぐる20個余りの小ピットは配列が不規則で、掘り込み・形状も不安定なことから壁柱穴としての確実性を欠く。東壁際で検出された長楕円形の小ピットは長軸が壁に直交する。規模は径40×25cm・深さ30cmである。その東側には径10cmの2個の小ピットが連なる。南側には壁に平行して溝状の窪みが2条ある。これらは出入口に関連する施設と考えられる。壁溝は検出されていない。

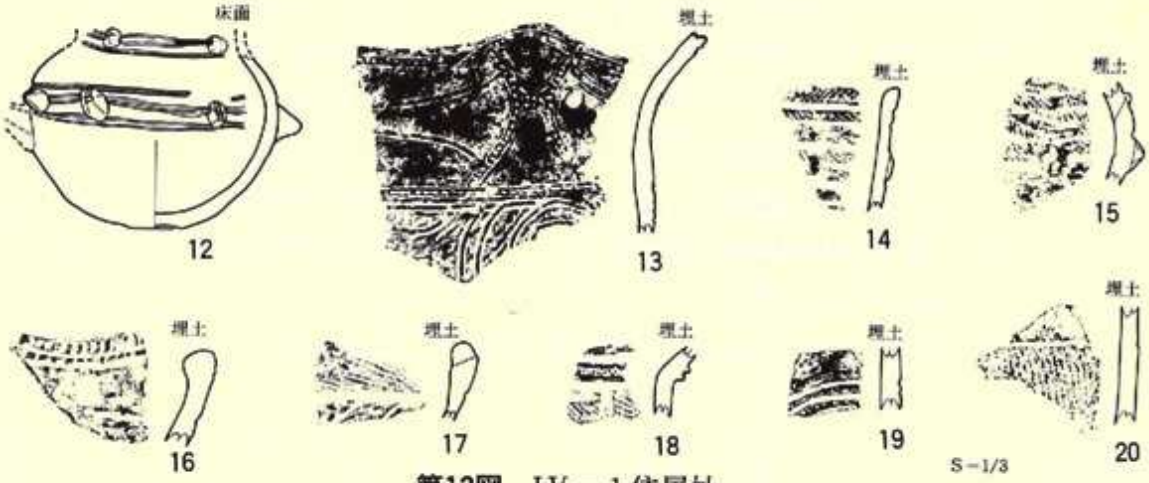
遺物（第12・13図；PL－29）

出土遺物の量は多くない。12は床面から出土し、時期決定資料となっている。

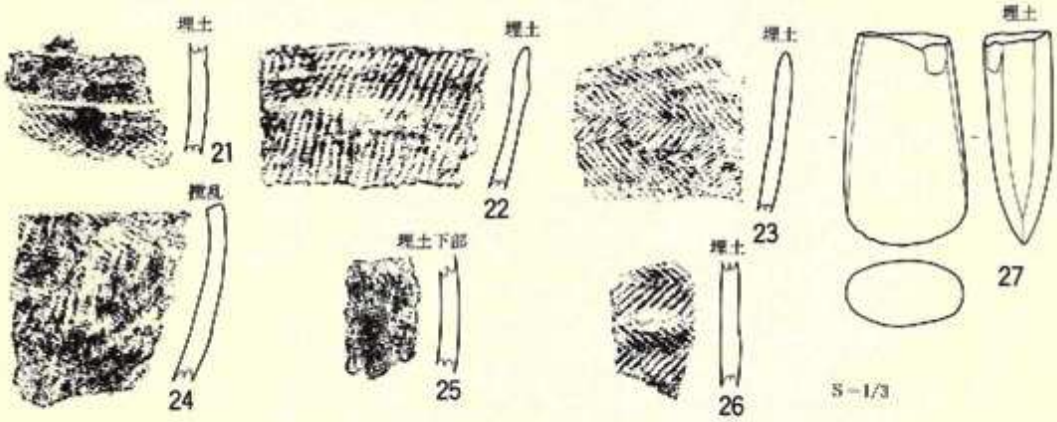
縄文土器（第12・13図12～26）　12は注口土器である。注口部と口縁部の大部分を欠いている。底部は小さく、わずかに揚げ底風である。外面はていねいにみがかれて無文である。瘤は肩部と体部につき、肩部では1条、体部では2条の沈線がその間を結ぶ。体部につく瘤は上面に刻みを伴い、注口部をはさんで2個1対の2組、注口部の反対位置の1個とその両側に1個ずつ、計7個で構成される。13は深鉢である。口縁部は波状で、強く外反する。波状部の頂部には沈線が引かれ、円形刺突文が両側に加えられる。それ以外の口唇部は斜位の刻目文が連続施文されている。口縁部と体部の文様は半截竹管による曲線的な意匠をもつ。口唇部と頸部にめぐる1条、それらを接続するH字状の部分は円形刺突文で充填されている。14・15は瘤を伴う。14は平行帯縄文で、低い瘤1個がみられる。　15は壺で、磨消縄文による文様のほか上下2段の瘤をもつ。上位のものは低く小さく、下位のものは上下に刻みを伴う。16は波状口縁である。口唇部にめぐる1条の沈線をはさんで刻目文が連続し、その下位は幅広い無文帯になる。17は波状口縁の頂部の小突起を伴う。体部には磨消縄文がみられる。18は小型の土器で、円形竹管文が連続施文された角ばった隆帯が頸部にめぐり、その上下は狭い幅で研磨されている。体部には垂下する沈線1条がみられる。19～21は磨消縄文をもつ体部破片である。22～24は粗製深鉢の口縁部破片である。22は口唇部の内側がそがれた形である。22は縦位のＲＬ、23は羽状縄文、24は単節斜縄文が地文である。25は櫛歯状文、26は羽状縄文を地文にする体部破片である。以上の土器の所属時期はすべて後期である。13・18はⅠ群、16はⅡ群2類、17はⅡ群、12・14・15はⅢ群1類に含まれる。

石斧（第13図27）　基端を含む部分を失なった磨製石斧である。刃部はほぼ円刃で、側面形は両凸刃である。


A
B
C
D
N
S50
E37
S50
E33
L＝318.30m
1．褐　色 10YR4/4 焼土を少量含む
2．黄 褐 色 10YR 5/6
3．黒 褐 色 10YR 2/2
4．灰黄褐色 10YR 4/2
L＝318.60m
S－1/40
1．黒褐色 7.5YR 3/2 被覆の焼土を含む


床面
12
埋土
13
埋土
14
埋土
15
埋土
16
埋土
17
埋土
18
埋土
19
埋土
20
S－1/3

第12図　Ⅳ－1住居址



第13図　IV－1住居址出土遺物

IV－2住居址

遺構（第14図；PL－7）

この住居址はIV－1住居址の南5mに位置し、遺構の約半分は調査区外に延びる。検出された部分からの推定による平面形は不整の隅丸方形状を呈するが、形状は不整である。規模は東西方向5.4m、南北方向は検出された部分で2.3mである。

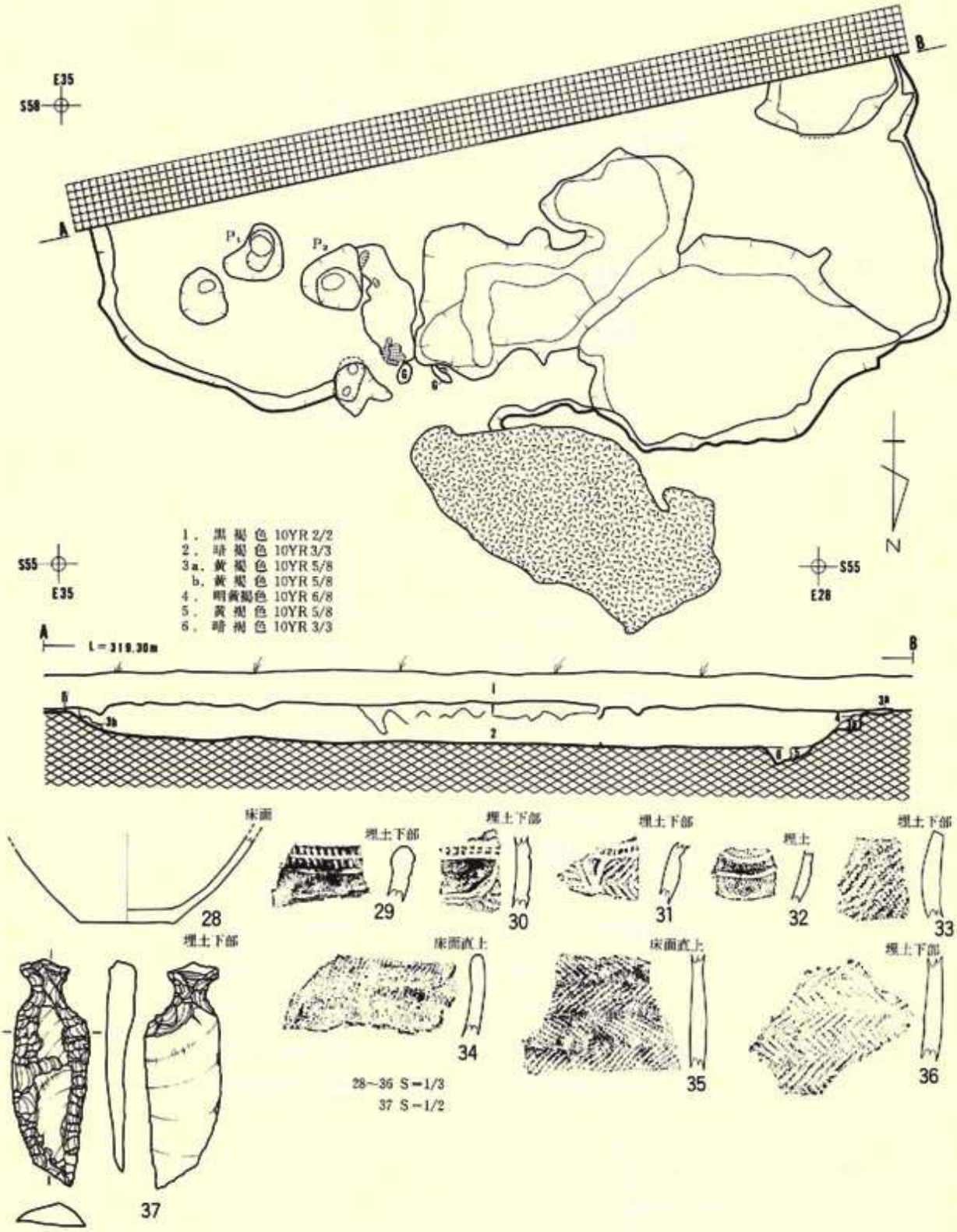
埋土は7層に細分され、黒褐色土と暗褐色土が卓越する。1層が黒褐色土、2層が暗褐色土で、色調は下部ほど明色になるが、漸移的に変化する部分もあり、1・2層の境界が不明の所もある。壁付近に見られる3～6層土はV層起源の汚れ火山灰で、壁崩壊土と考えられる。

壁は北側が風倒木の撹乱を受けて残存しない部分もある。東側は外傾し、西側は直立に近いが、凹凸が著しい。壁高は5～25cmを測る。床面は一部に堅くしまった面が残存するが、撹乱が著しく、立ち上がりの不明な部分も多い。炉は、P_2の西から北西側にかけての窪みに現地性の小規模な焼土が散在すること、焼成痕を持ついく分扁平な亜角礫が2個検出されていること、炭化物が多く散在していることから、その部分に存在した可能性が強い。形態は礫の存在から石囲い炉と考えられる。柱穴状小ピットはP_1（径40×30cm・深さ40cm）・P_2（径40cm・深さ44cm）の2個が検出されている。形状は不整の楕円または円形状で、本住居址の柱穴を構成するか不明である。

遺物（第14図；PL－29・30）

出土遺物は縄文土器・剥片石器であるが、少量である。

縄文土器（第14図28～36）　28は底部を含む体部下半が残っている。両面とも研磨され無文である。内面には朱が付着している。29～31は刻目文をもつ。29は口唇部の裏面が肥厚してい


E35
S58
A
B
P1
P2
S55
E35
S55
E28
N
1. 黒褐色 10YR 2/2
2. 暗褐色 10YR 3/3
3a. 黄褐色 10YR 5/8
b. 黄褐色 10YR 5/8
4. 明黄褐色 10YR 6/8
5. 黄褐色 10YR 5/8
6. 暗褐色 10YR 3/3
L=319.30m
床面
28
埋土下部
29
埋土下部
30
埋土下部
31
埋土
32
埋土下部
33
埋土下部
37
床面直上
34
床面直上
35
埋土下部
36
28~36 S=1/3
37 S=1/2

第14図　IV－2住居址

る。上下2段の刻目文が口唇部にめぐり、2条の沈線で区画されている。その下位は無文帯になる。30・31は頸部にめぐる2条の沈線内を刻目文が充填している。体部には磨消縄文がみられる。31は小型の壺形土器で、体部地文は羽状縄文である。32は磨消縄文をもつ小型の壺の体部破片である。33・35は粗製深鉢の口縁部破片である。33は口唇端にも単節斜縄文が施文されている。35・36は羽状縄文を地文にする体部破片である。すべて後期に属する。29〜31はII群2類、32は同群に時間的に近いものであろう。

剥片石器（第14図37）　縦形の石匙である。刃部には急傾斜の二次加工が裏面から施されている。

IV—3住居址

遺構（第15図；PL－7・8）

この住居址はIV—1住居址の東側に接するように位置している。南西側がIV—52〜55のピット群と重複関係にあり、南西部床面をピット群に切られている。平面形は東西方向に長軸を持つ楕円形と推定され、規模は3.7×2.6mである。

埋土は土層図の11・12層の他、2・4・8層の一部がその構成土と考えられる。褐色土・暗褐色土・黒褐色土で構成され、微量の炭化物粒やV層起源の火山灰が粒状に含まれる。

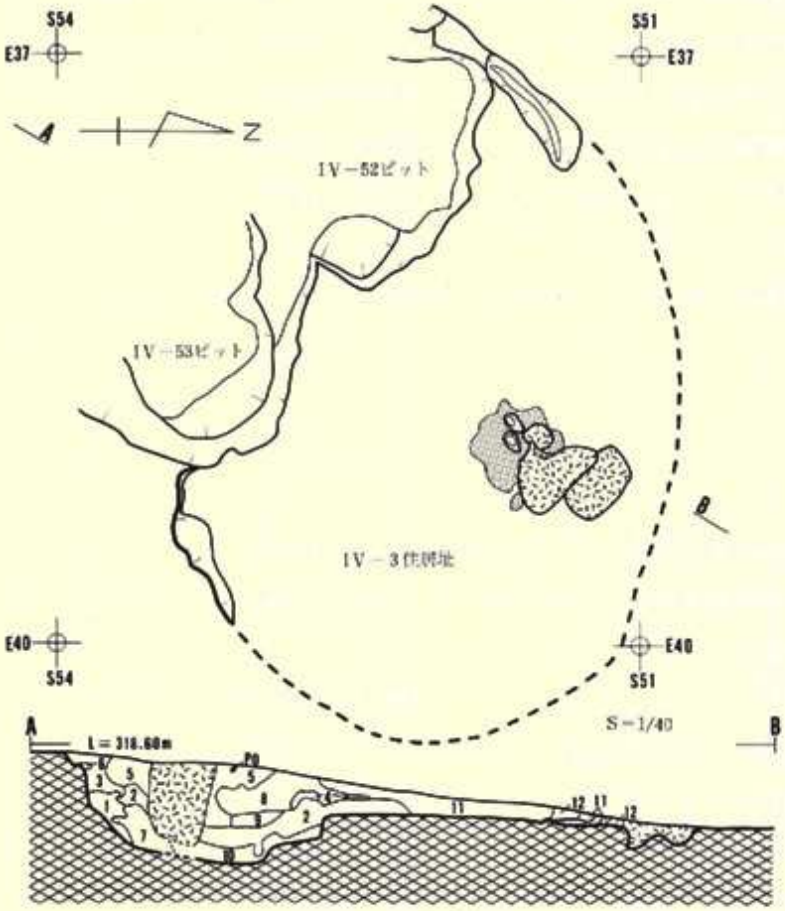
壁は南西部がピット群に切られており、北側・東側もほとんど残っていない。僅かに南壁の東側と北壁の南側にそれぞれ長さ1m、壁高3〜10cmの範囲で残存する。床面は小凹凸が多く、しまりも弱い。炉は床面中央からやや北寄りに位置し、地床炉の形態を示す。焼土は北側が木根による撹乱を受けているが、55×48cmの範囲に不整形に広がり、層厚は3cmである。柱穴は検出されていない。

遺物（第15図；PL－30）

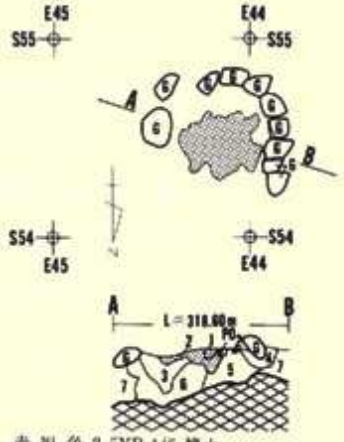
大きく削剥を受けていることや重複するピットに切られているために出土遺物は少量である。

縄文土器（第15図38〜43）　38はゆるやかな波状口縁で、頂部は二股に分かれている。その部分の口唇端には刻みが加えられる。口唇部は内面がいくぶん肥厚し、外面は5mm前後の幅で横位のLRが施文されている。39・40は磨消縄文と羽状縄文が文様を構成する体部破片である。41は斜位の撚糸文を地文にし、平行沈線が垂下している。42・43は羽状縄文を地文にする粗製深鉢の口唇部破片である。いずれも後期の土器で、38〜40はII群に分類できる。42・43も同じ分類群の時期に位置づけられるであろう。41はI群の時期に含まれるかもしれない。

剥片石器（第15図44・45）　44は尖基無茎式の石鏃である。45は掻器である。表面には自然面が残り、刃部は急傾斜の二次加工が裏面から施されている。



a. IV－3住居址

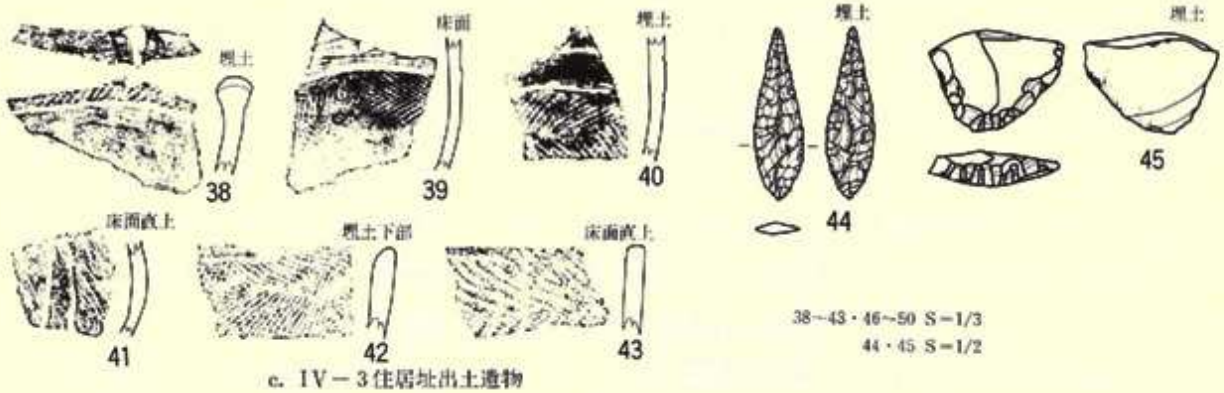


1．赤 褐 色 2.5YR 4/6 焼土
2．暗赤褐色 2.5YR 3/4 汚れた焼土
3．黒 褐 色 7.5YR 3/1 炭化物、焼土を若干含む
4．極暗褐色 7.5YR 2/3
5．暗 褐 色 7.5YR 3/3 焼土を若干含む
6．黒 褐 色 7.5YR 2/2 炭化物を含む
7．黒 褐 色 7.5YR 2/2

b. IV－4炉址

IV－3住埋土

1．褐　　色 10YR 4/6
2．黒　　色 10YR 3/2
3．暗 褐　色 10YR 3/3
　黄 褐　色 10YR 5/6
4．褐　　色 10YR 4/4
5．黒 褐　色 10YR 3/2
6．黄 橙　色 10YR 7/8
7．黄 褐　色 10YR 5/6
　黒 褐　色 10YR 2/3
8．黒 褐　色 10YR 3/2
9．黒 褐　色 10YR 3/2
10．暗 褐　色 10YR 3/3
　にぶい黄褐色 10YR 4/3
11．暗 褐　色 10YR 3/3
12．褐　　色 10YR 4/4



c. IV－3住居址出土遺物

d. IV－4炉址出土遺物

第15図　IV－3住居址・IV－4炉址

IV－4炉址

遺構（第15図；PL－8）

この炉址はＩＶ—3住居址の南東約4ｍに位置し、下位からはＩＶ—5住居址が検出されている。

炉は表土から20数cm下位のIV層中に検出されている。9個の亜角礫で半円状に構築された石囲い炉の形態を示す。礫は北側が開く形で、若干内側に傾けて埋置されている。規模は径80cmである。東側の2個の礫は半円形からいく分ずれるが、埋置の仕方は他の礫と同様である。構成礫は粒径10～20cmで、一部は強い加熱を受けて脆くなっている。内部には焼土が形成されており、その規模は東西42cm、南北35cm、最大層厚12cmである。

遺物（第15図；PL－30）

住居址と想定して精査を進めて遺物を取りあげた。その一部を掲載したが、必ずしも共伴あるいは固有の遺物とはいいがたい。

縄文土器（第15図46～50）　いずれも深鉢の破片である。46は横位の平行沈線で区画された磨消縄文帯をもつ。48は磨消縄文と羽状縄文が文様を構成する。47は波状口縁である。幅の狭い折り返し口縁で、その上と下位には半載竹管による刺突文が連続する。49は口唇部が肥厚し、断面は三角形である。横位のＬＲが施文される。50は木目状撚糸文をもつ体部破片で、胎土には繊維を含まない。50は前期の円筒下層式ｂ～ｄのうちいずれか、49は中期中葉円筒上層式ｅに比定されるであろう。41・48は後期II群の土器で、48は3類である。47については不明である。

ＩＶ—5住居址

遺構（第16図；PL－8）

この住居址は調査区南東端にあり、遺構の約半分は調査区外に延びる。検出された部分からの推定による平面形は楕円形状を呈する。検出された部分の規模は東西4.2m・南北1.8mである。

埋土は12層に細分される。上部には「湯沢パターン」（高橋、1978）[注1]の汚れ火山灰（2層）が見られ、層相によって3層に細分可能である。下部は多量の焼土と炭化物（材）を含んだ黒褐色土が主体である。

壁や床面は凹凸が多く不安定な形態を示す。東壁はきつい角度で外傾するが、西壁はなだらかに傾斜している。壁高は5～20cmを測る。床面の中央部は非常に堅くしまっている。炉は、調査区外にまたがって検出された現地性焼土がその一部と考えられる。床面の中央に位置し、地床炉の形態をもつものであろう。検出された範囲での焼土の規模は、36×19cm・層厚5cmで

ある。焼土部分は非常に堅くしまっており、上位には黒褐色土がのり、下位には層厚2cmの褐色土が入る。柱穴状小ピットは、P_1（径40×30cm・深さ30cm）・P_2（径30cm・深さ30cm）・P_3（径30×20cm・深さ30cm）・P_4（径20cm・深さ37cm）・P_5（径22cm・深さ30cm）・P_6（径30×20cm・深さ40cm）・P_7（径33×25cm深さ27cm）の7個が検出されている。配列等の詳細は不明であるが、一部は柱穴を構成すると思われる。

床面および床面直上10cm内に多量の炭化物（材）と焼土が散在している。炭化材は北東―南西方向のものが主体で、一部東西方向のものがある。炭化材の上に焼土がブロック状にのる例がいくつかある。床面または床面直上から焼土や炭化物の付着した亜円・亜角の礫が数個検出されている。これは焼失住居の様相を示している。

遺物（第17図；PL－30・31）

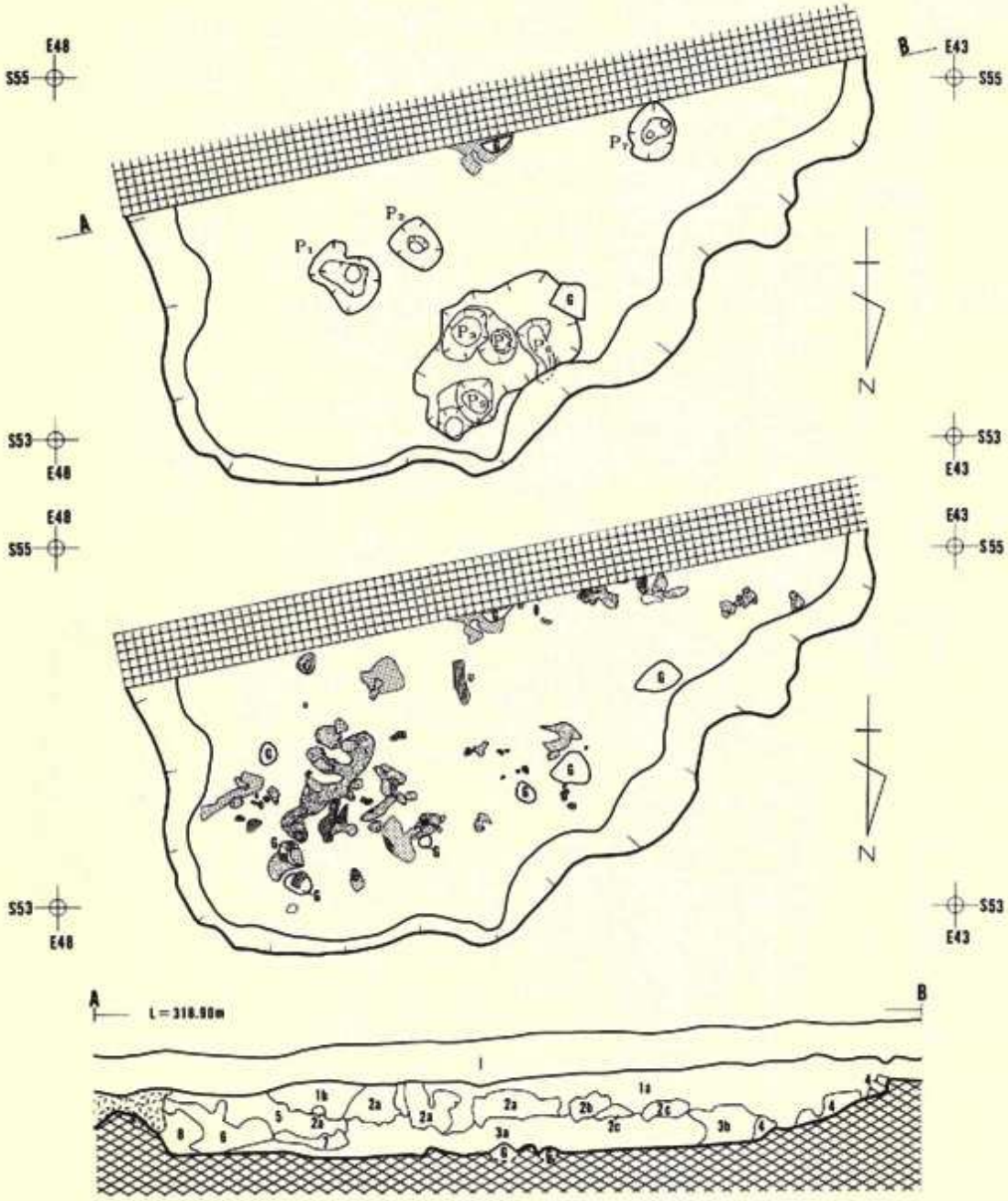
出土遺物は大型破片を含む縄文土器と石器が出土している。床面直上からは栗とみられる堅果類が出土しているが僅少である。

縄文土器（第17図51～57）　いずれも深鉢である。51は4個の突起をもつものであろう。直立気味の体部から口縁部にかけては外傾している。口唇部は折り返し状にいくぶん肥厚している。体部文様は上半に限られ、細い粘土紐を貼りつけて横方向への弧状文を主にした文様が展開する。一部の突起部の直下には逆三角形の文様も認められる。地文は横位のＬＲである。52は口縁部が強く内湾し、隆沈線による文様がみられる。地文は複節斜縄文である。53は台形になる口縁部突起である。無文の上に粘土紐を貼りつけて弧状の文様を描き、その上に単節の縄文を回転施文している。付け根には刻みを伴う。54は口縁部に小突起をもつが一部を欠損している。口唇部には細い粘土紐をめぐらせて区画し、刻目文が連続する。その下位は縦位のLRの地文の上に平行沈線ほかがみられる。裏面は口唇部に細い粘土紐を貼りつけ、その下方には断面が三角形を呈する低い隆帯がめぐる。55は隆沈線による三角形文・渦巻文が口唇部文様帯を構成する。前面につく小突起の上面には渦巻文がみられる。56はゆるやかな波状になる口縁部で内湾する。口縁部は無文で、その直下には沈線によるΩ形文あるいは楕円形文の文様が展開するが、Ω形の短かい隆起線を一部の上端に伴う。57は頸部に刺突文をめぐらせ、口縁部文様帯は絡条体圧痕、体部は刺突文の直下に綾絡文、その下位には羽状縄文がみられる。少量の繊維を含む。

57は前期末葉円筒下層式d_1、51・53は中期中葉円筒上層式ｄ、52・54・55は中期中葉大木８ａ式、56は中期後葉大木９式に相当する。

剥片石器（第17図58・59）　58は凹刃削器である。奥行きの深い二次加工が裏面から右側縁に施されている。59は側縁部と先端部に刃部をもつ削器状石器である。

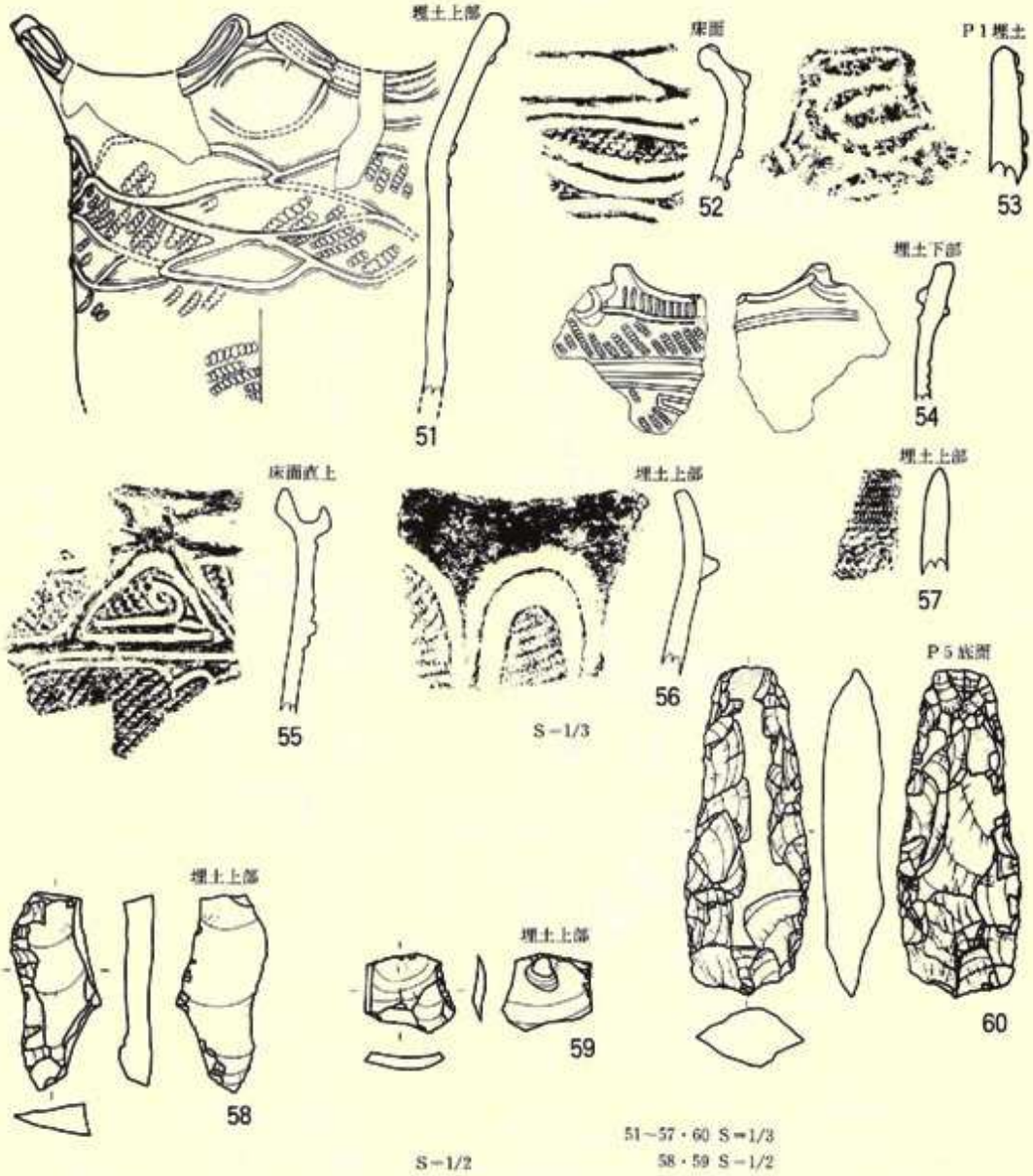
打製石斧（第17図60）　両面加工の打製石斧で、表面の一部には自然面が残っている。



1a．褐　色 7.5YR 4/3
　b．暗褐色 7.5YR 3/4
2a．褐　色 10YR 4/6
　b．暗褐色 7.5YR 3/4
　c．暗褐色 7.5YR 3/4
3a．黒褐色 7.5YR 3/1 炭化物、焼土が多い
　b．極暗褐色 7.5YR 2/3 炭化物、焼土を若干含む
4．褐　色 7.5YR 4/6
5．黒褐色 7.5YR 2/2 微量の炭化物を含む
6．褐　色 7.5YR 4/3 炭化物、焼土を若干含む
7．極暗褐色 7.5YR 2/3 炭化物、焼土を若干含む
8．褐　色 7.5YR 4/4 炭化物を含む

S＝1/40

第16図　Ⅳ－5住居址



第17図　IV－5住居址出土遺物

(2) 平安時代

DⅣ－1住居址

遺　構（第18図；PL－9）

この住居址は調査区北東部の北向き緩斜面に構築されている。北側は近世の墓壙群などによる攪乱を受けている。南側の残存部からの推定による平面形は方形状を呈するが、かなり不整形である。規模は東西4.0m、南北は残存部分で2.20mである。

埋土は大きく3層に分かれる。1層は黒色土で、灰白色の浮石と若干汚れた橙色の浮石を薄層状に含む。2層は粗砂混じりの暗褐色土、3a層が灰白色の浮石を床面直上までブロック状に含む極暗褐色土、3b層が浮石を含まない暗褐色土である。

壁は南側と西側の一部に残存する。西壁は礫層が露出していて小凹凸が多い。南壁は小ピットP_2の部分が若干南に張り出す。壁高は西壁で5cm、南壁で10～25cmである。床面は礫層が露出し凹凸が著しい。特に西側に礫が多く、なかには粒径40cmを越す大礫もある。壁溝は検出されていない。

カマドは東壁南寄りに構築されているが、残存状態はよくない。カマドの上位は全面を焼土や焼土を多量に含む土でおおわれている。左袖部は黄褐色土・褐色土で構築され、右袖部は残存しない。燃焼部には58×48cm・層厚5cmの焼土が形成されている。煙道部は壁際から外に向かって緩やかに上昇し、粒径10～20cmの9個の亜円礫・亜角礫を馬蹄形状に埋置している。長さは80cmを測る。

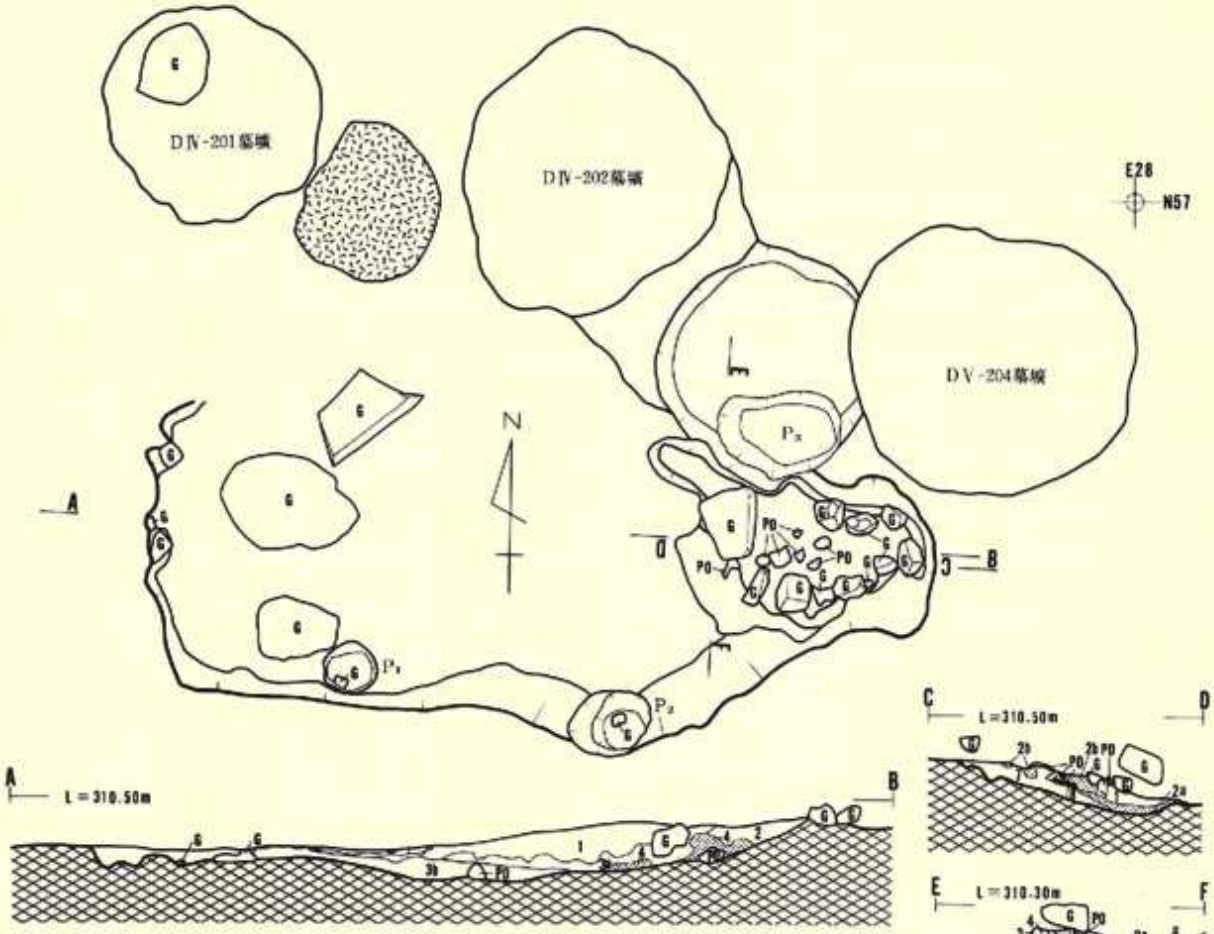
共伴する施設としてはカマド左袖隣りにピットがある。楕円形を呈し、規模は開口部径62×40cm・底部径48×30cm・深さ35cmである。埋土にはカマドの上位を覆っている焼土が底面直上まで入っている。

柱穴状小ピットはP_1（径27cm・深さ10cm）・P_2（径43×35cm・深さ13cm）の2個が南壁際から検出されている。どちらも掘り込みが浅い。

遺　物（第18・19図；PL－32・33）

出土遺物は土器片のみである。カマドやその付近からの出土量が多く、他に床面直上や埋土からの出土である。土師器甕が主体を占め、坏が数点含まれる。

土師器甕（第18・19図61～68）68は底部、他は口縁部破片である。器形全体を知ることのできる資料はない。61～63、65、66はロクロ使用で、口縁部は短かく外傾した後直立する。61、65の体部外面にはヘラケズリ、62にはナデ調整が施されている。66は体部外面に刷毛目を施した上でヘラケズリ・ナデ、内面に刷毛目とナデによる調整が施され、特に口縁部は丁寧に横ナデされている。64、67、68はロクロ未使用である。64、67の口縁部には、内外面とも丁寧な横

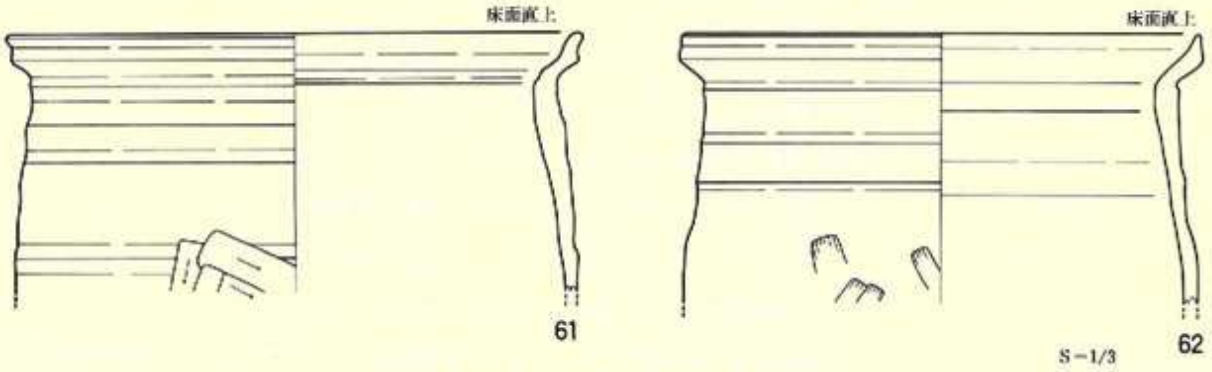


DⅣ－1住埋土

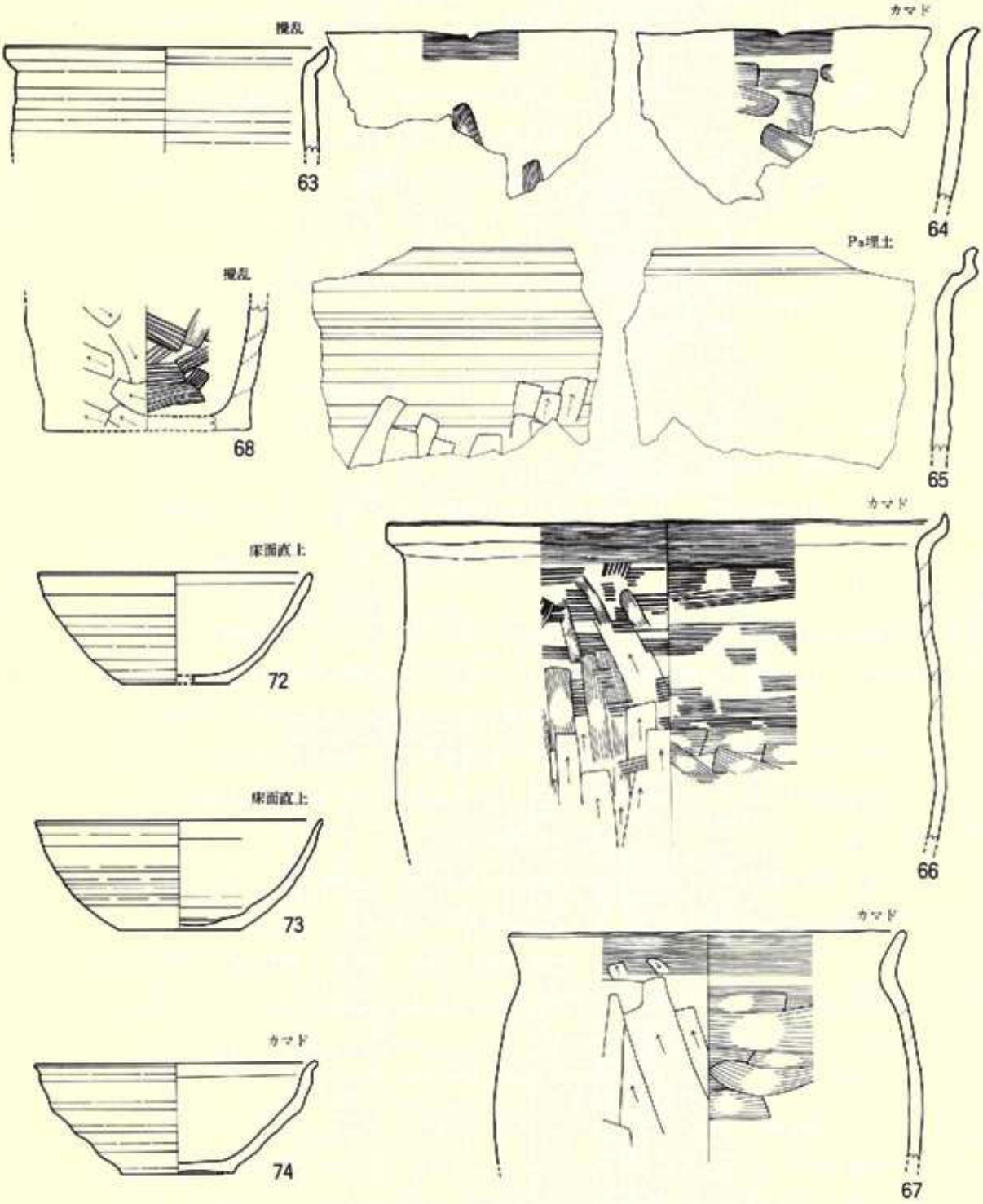
1．黒　色 7.5YR 1.7/1 灰白色または黄橙色の浮石を含む
2．暗 褐 色 10YR 3/3
3a．極暗褐色 7.5YR 2/3 灰白色浮石を含む
b．暗 褐 色 7.5YR 3/3
4．赤 褐 色 5YR 4/8 焼土

DⅣ－1住 カマド(C－D，E－F)

1．明黄褐色 10YR 6/6 焼土を少量含む
2a．明赤褐色 2.5YR 5/8 焼土
b．明赤褐色 2.5YR 5/6 焼土
3．黄 褐 色 10YR 5/6
4．褐　色 10YR 4/4
5．黄 褐 色 10YR 5/6 焼土が混じる
6．暗 褐 色 10YR 3/4
7．暗 褐 色 10YR 3/4
8．黄 褐 色 10YR 5/6 焼土を少量含む



第18図　DⅣ－1住居址



69～71は欠番

S＝1/3

第19図　DⅣ－1住居址出土遺物

ナデ、体部内面ナデ、67、68の体部外面にはヘラケズリ、68の内面には刷毛目調整が施されている。61はＤＶ—２住居址埋土下部やカマド出土の破片と接合する。

坏（第19図72～74）　いずれもロクロ使用の非内黒土器である[注2]。器形の特徴や調整法に類似性がある。体部が内湾気味に外傾し、外面には凹凸がある。72の口唇部は外反しないが、73、74のそれはわずかに外反する。切り離しは回転糸切りで再調整はない。72、73には黒斑が見られる。色調はいずれもにぶい黄橙色ないしにぶい橙色を呈す。

ＤＶ—２住居址

遺　構（第20図：ＰＬ—10）

この住居址はＤⅣ—１住居址の北東に隣接し、近世の墓壙群ＤＶ—201～203墓壙に切られ、床面積の約半分が失われている。残存部から推定される平面形は歪んだ正方形で、規模は南北2.50m・東西2.85mを測る。

埋土は９層に細分され、黒色土・黒褐色土・暗褐色土等で構成される。２層の黒色土は粒径３㎜の小ブロック状の灰白色浮石を含む。４層は浅黄色浮石で、この浮石は３層・７層にも小ブロック状に含まれる。

壁は墓壙群に切られて多くを失っているが、残存部は直立に近い。壁高は5～25cmを測り、南側が高く、北側が低い。床面は凹凸が著しく、しまりも弱い。柱穴や壁溝は検出されていない。

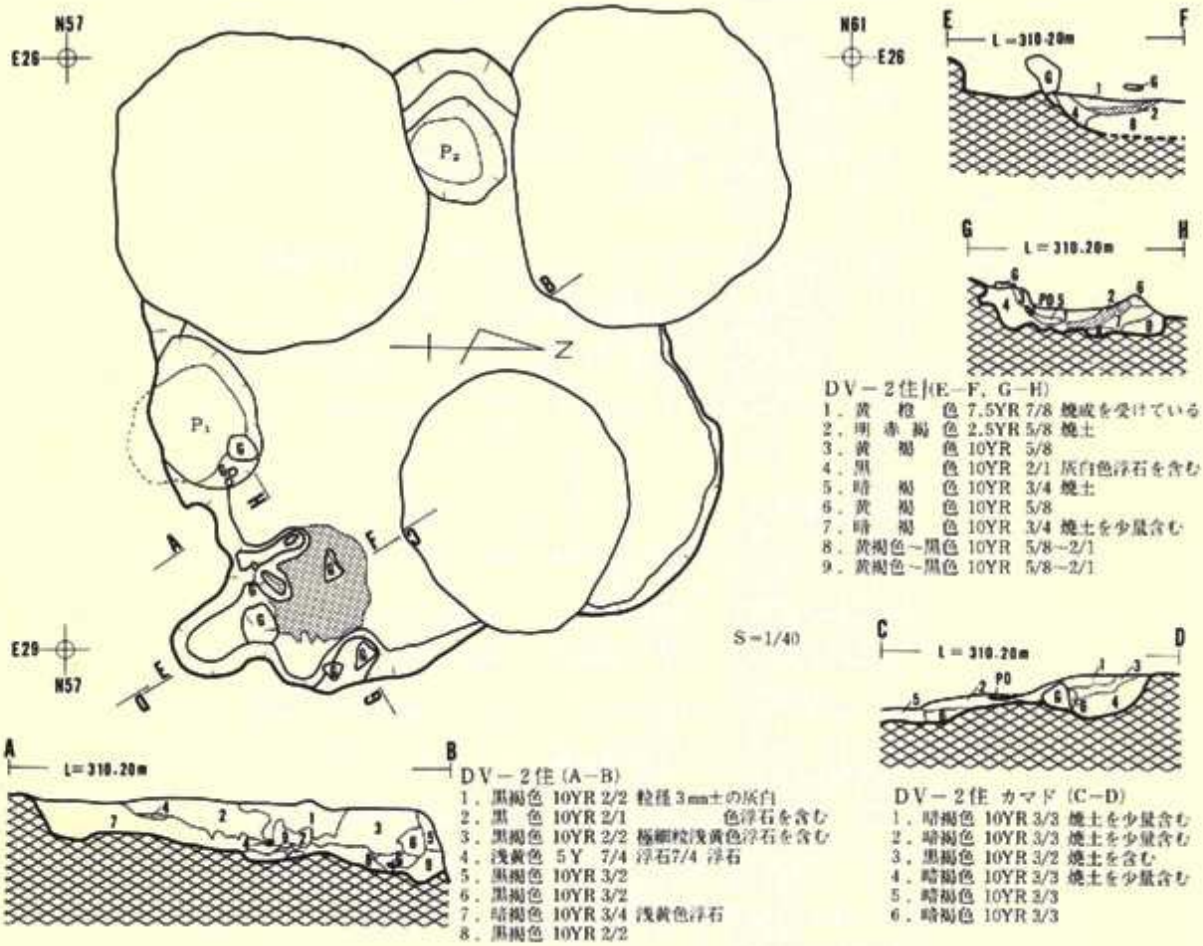
カマドは南壁の東端に構築されている。袖部は主にＶ層起源の火山灰を用いて造られている。右袖の一部には風化した凝灰岩が使われ、左袖下部には灰白色浮石を含む黒色土を一部にはさむ。燃焼部には、径50×60cm・層厚5cmの焼土が形成されている。煙道部は壁際で立ち上がり、緩く上昇し、煙出し部は直立する。長さは40cmを測る。

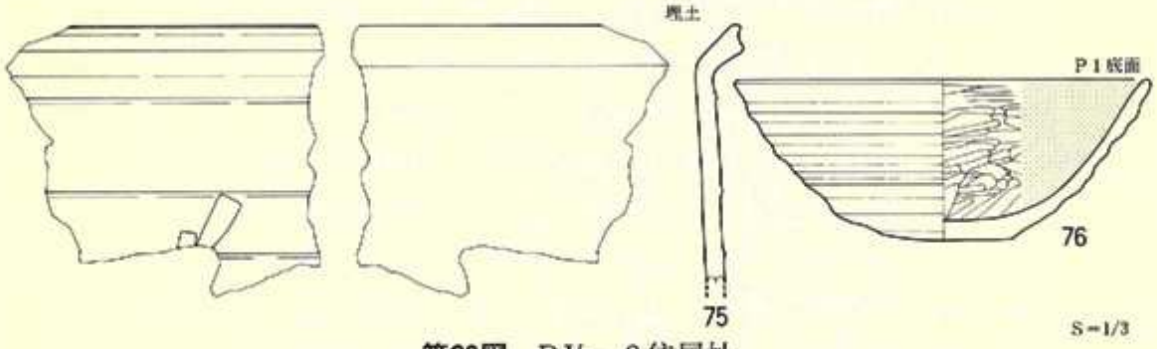
共伴する施設としては南壁際中央と北西隅とに２基のピットが検出されている。P_1は平面形が楕円形状を呈し、規模は開口部径80×53cm・底部径62×50cm・深さ35cmである。壁は南側がオーバーハングするほかは直立気味に外傾する。埋土は大部分がＶ層起源火山灰をブロック状に含む暗褐色土で、上部に黒褐色土の薄層が見られる。底面からは坏が出土している。P_2は浅皿状のピットで、規模は径50cm・深さ12cmである。埋土には灰白色浮石が底面直上まで小ブロック状に含まれる。

遺　物（第20図：ＰＬ—33）

出土遺物は土器片のみで、出土量は少ない。出土層位は埋土からのものが主体を占め、他にカマドやその周辺からの出土がある。土師器甕の他には土師器坏２～３点が出土している。

土師器甕（第20図75）　ロクロ使用で、口縁部は短かく外傾する。体部外面に一部ヘラケズリ調整が見られる。





第20図　DV－2住居址

土師器坏（第20図76）　ロクロ使用で、器形は体部が内湾し、口唇部がわずかに外反する。内面には全体に丁寧なヘラミガキ調整を施し、黒色処理を行っている。切り離しは回転糸切りで、再調整はない。

E Ⅳ－1住居址

遺　構（第21図；PL－11）

この住居址は北西向きの緩斜面に構築されている。平面形は正方形で、規模は東西2.5m・南北2.85mを測る。

埋土は4層に細分でき、2層の暗褐色土が卓越する。3層の浮石は黄褐色であるが、Ⅲ層に類似し、多くはブロック状に散在する。一部は床面直上まで含まれる。

壁は湾曲して立上がり、北壁がいく分外傾するほかは直立する。壁高は8～25cmを測り、斜面上方の東壁が高い。床面は小凹凸があるものの、ほぼ平らで、比較的堅くしまっている。柱穴や壁溝は検出されていない。

カマドは東壁の北端に構築されている。煙道部は検出されていない。本体を覆うように焼土や炭化物が広がり、それらは右袖部外側にある崩壊土にも含まれている。本体は礫を芯材として作られているが、構築土は右袖部外側に崩壊土として確認できただけである。右袖部は床面を掘り込んで2個の亜角礫を埋置している。壁寄りの1個が直立しているのに対し、別の1個はいく分内傾している。左袖部には2個の抜き取り痕があり、礫は割れた状態で燃焼部に検出された。本体中央には支脚になる1個の亜角礫が直立しているが、埋置はされていない。支脚の前面の28×40cmの範囲には現地性焼土が形成され、深さ5cmまで赤色に変化している。

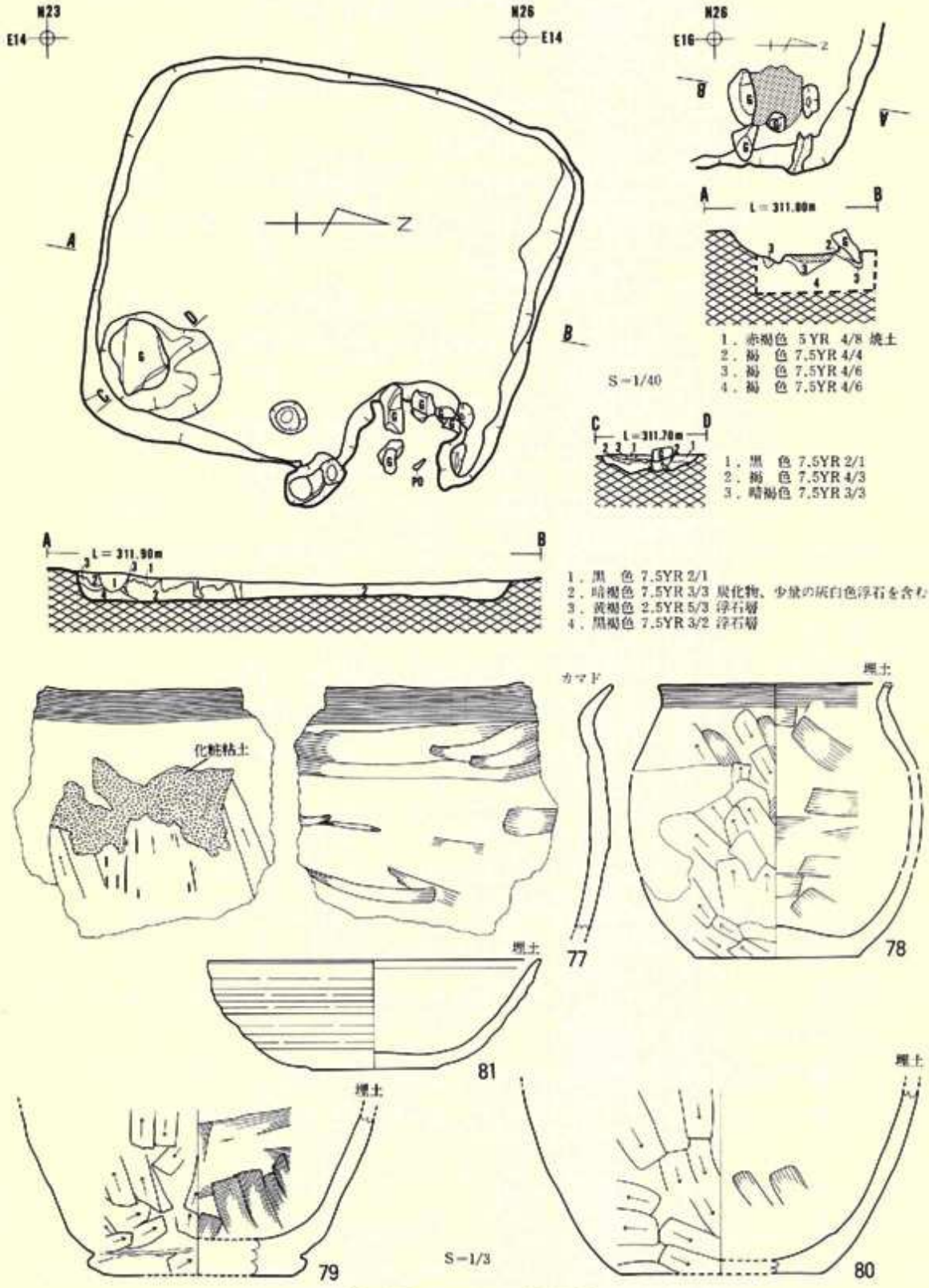
南東隅には、不整形で、断面形が浅皿状のピットがある。規模は径80×68cm・深さ12cmを測る。内部には粒径48cmの扁平な亜角礫が落ち込んでいる。

遺　物（第21図：PL－33・34）

出土遺物は土器片のみで、出土量は少ない。出土層位は埋土からのものが大半で、他にカマドからのものが77を含めて数片ある。81の坏を除いては土師器甕である。

土師器甕（第21図77～80）　いずれもロクロ未使用で、77は口縁部、79・80は底部の破片、78は頸部から底部にかけて約1/2個体残存する。77・78は口縁部が短かく外反する。78の体部は大きく張らみ、頸部がややくびれる。内外面とも横ナデ、体部外面にヘラケズリ・ナデ、体部内面ナデの調整が行われている。78の調整は非常にあらい。77の体部外面には「化粧粘土」をぬりつけている。79・80の体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整が行われている。79も粗雑な土器である。

坏（第21図81）　ロクロ使用の非内黒土器である。器形は体部が外傾し、口縁端部は直立気味である。体部外面には凹凸がある。切り離しは回転糸切りで、再調整はない。色調はにぶい黄橙色を呈す。


N23
E14
N26
E14
N26
E16
A
B
C
D
L=311.80m
L=311.70m
L=311.90m
S=1/40
1．赤褐色 5YR 4/8 焼土
2．褐 色 7.5YR 4/4
3．褐 色 7.5YR 4/6
4．褐 色 7.5YR 4/6
1．黒 色 7.5YR 2/1
2．褐 色 7.5YR 4/3
3．暗褐色 7.5YR 3/3
1．黒 色 7.5YR 2/1
2．暗褐色 7.5YR 3/3 炭化物、少量の灰白色浮石を含む
3．黄褐色 2.5YR 5/3 浮石層
4．黒褐色 7.5YR 3/2 浮石層
化粧粘土
カマド
埋土
77
78
81
79
80
S=1/3

第21図　EⅣ－1住居址

ＥⅣ－2住居址

遺　構（第22図；PL－12）

この住居址はＥⅣ－1住居址の北約25mに位置する。平面形は方形を基本とするが、かなり不整形で、規模は東西3.50m・南北2.60mを測る。

埋土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土で構成され、4層に細分できる。黒色土はⅢ層起源のクロボクで、少量の灰白色浮石をブロック状に含む。南東部には粒径12～33cmの亜円礫・亜角礫が多く、カマド付近の上位には焼土が多く含まれる。

壁の残存状況は悪い。壁高は5～10cmを測り、北壁の一部は残存しない。床面は礫層が露出し、凹凸が著しい。特に東側に多いほか、西壁際にも粒径30cmや60cmを越す大礫が露出している。柱穴や壁溝は検出されていない。

カマドは東壁に構築されているが残存状態が悪い。東壁際に現地性の焼土が61×54cmの範囲に不整形に形成されており、層厚は3cmである。袖部や煙道部は残存しない。

共伴する施設として、北壁から40cm内側に、楕円形の窪みが検出されている。規模は径42×30cm・深さ5cmを測る。内部の東側約半分と中央に露出している現地性の亜角礫が焼成を受けている。窪みの中央部には暗青灰色の細粒砂質土が見られる。

遺　物（第22図；PL－34・35）

出土遺物は土器片と総重量約1050gの鉄滓がある。土器は埋土や床面直上からの出土で、量は少ない。土師器甕が主体で、他に土師器坏がある。鉄滓は住居址北側の焼土を伴うピット付近の埋土や床面直上からの出土が多い。砂鉄を原鉱とする椀形鍛錬鍛冶滓という鑑定結果を得ている[2(3)]。

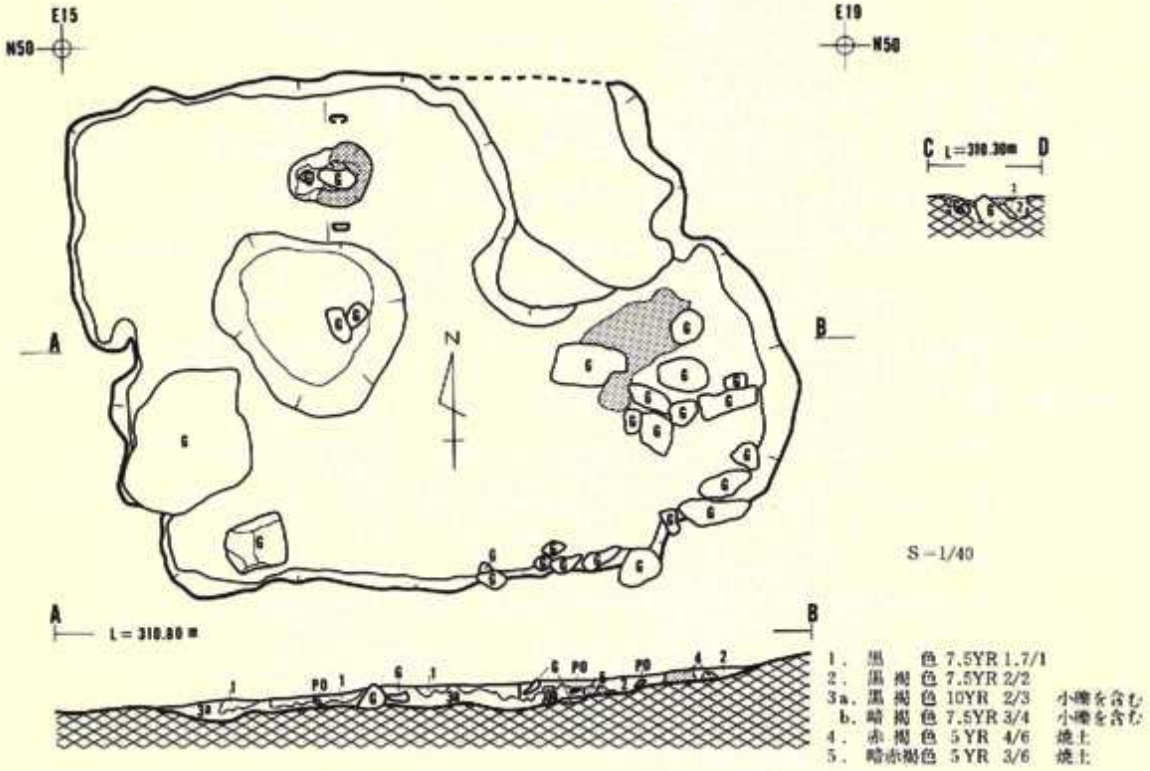
土師器甕（第22図82～85）　83・85は口縁部破片、84は底部破片、82は口縁部破片の他に接合はしないが底部破片もある。83はロクロ使用、82・84・85はロクロ未使用である。口縁部の形態はいずれも短かく外反し、83は反りが大きいのに対し、85の反りはわずかである。82は外面の頸部から体部にかけてナデ、83が内面ヘラミガキ、体部外面にはヘラケズリ・ナデの調整を施している。84・85は内面ナデ、体部外面にはヘラケズリ・ナデ、85の口縁部には内外面横ナデの調整を行っている。

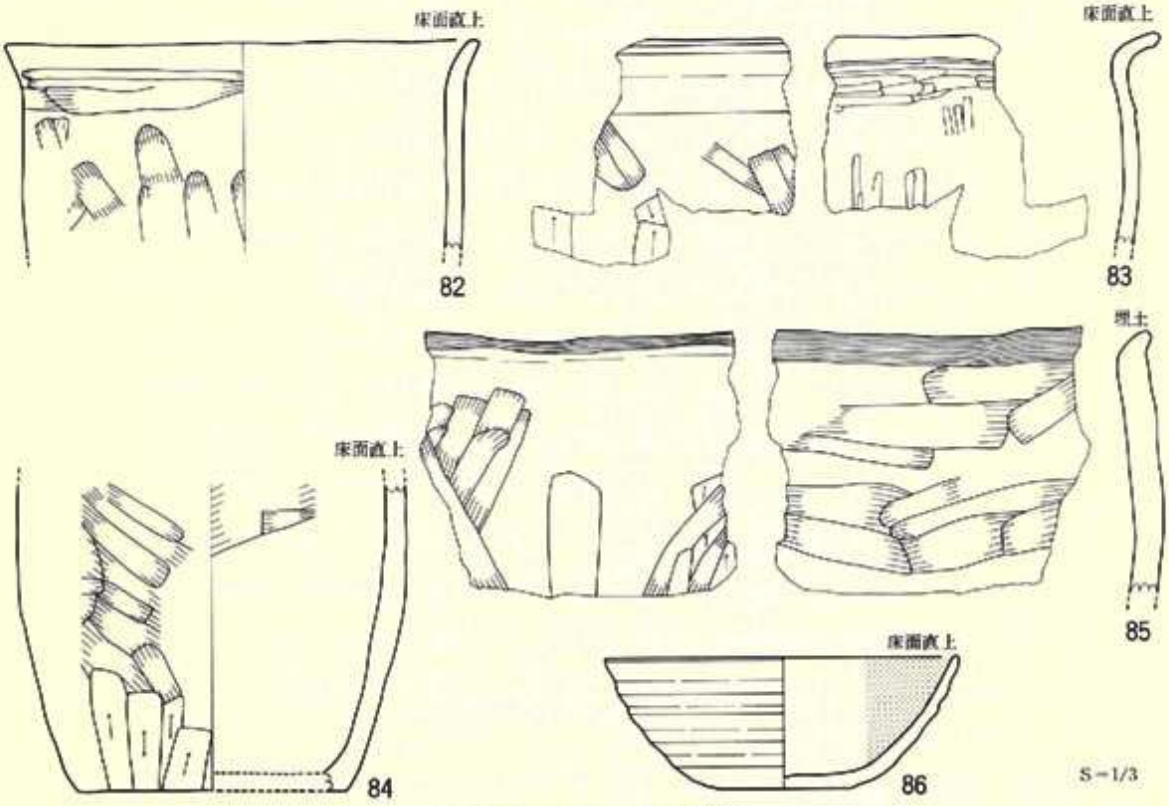
土師器坏（第22図86）　ロクロ使用で、体部は内湾する。内面にヘラミガキが施され、黒色処理を行っている。切り離しは回転糸切りで、再調整はない。底面に黒斑が見られる。

ＨⅣ－1住居址

遺　構（第23・24図；PL－13・14）

この住居址は北向き緩斜面に構築されている。平面形は方形で、規模は東西4.70m・南北4.40


E15
N50
E19
N50
C L=310.30m D
A
B
N
S=1/40
A L=310.80m B
1. 黒　色 7.5YR 1.7/1
2. 黒褐色 7.5YR 2/2
3a. 黒褐色 10YR 2/3　小礫を含む
b. 暗褐色 7.5YR 3/4　小礫を含む
4. 赤褐色 5YR 4/6　焼土
5. 暗赤褐色 5YR 3/6　焼土


床面直上
82
床面直上
83
埋土
85
床面直上
84
床面直上
86
S=1/3

第22図　EⅣ－2住居址

mを測る。

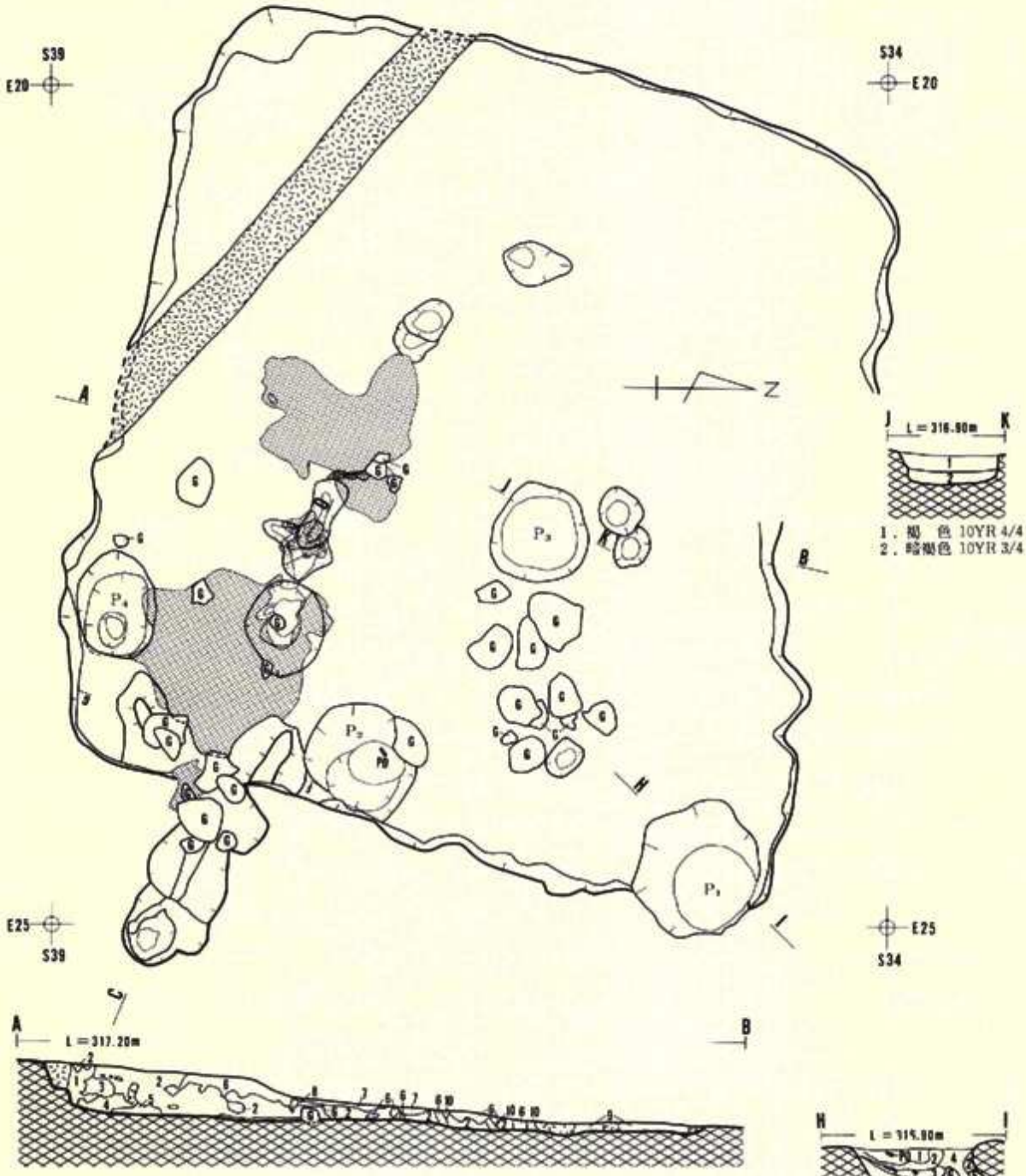
埋土は10層に細分され、灰白色浮石を含む黒色土や黒褐色土が卓越する。2層の黒褐色土に含まれる灰白色浮石は壁寄りに多く、粒径10～70mmのブロック状に中央部に向かって傾斜して分布する。南壁際にはV層起源の火山灰が壁から40cmの間に堆積し、間に互層状に黒色土をはさむ。この火山灰は灰白色浮石を小ブロック状に含み、汚れは少なく、ルーズな堆積状態である。その下位からは焼土や炭化物が検出されている。埋土上部の東側には草本類の炭化物を多量に含む有機質の黒色土が110×220cmの範囲に分布する。また、灰白色浮石とは別の淡黄色極細粒浮石が層厚2cmの規模で埋土上部に部分的に分布する。

壁は湾曲して立ち上がり、上部はほぼ直立する。斜面下方の北壁は一部が削剝されている。残存部の壁高は1～30cmの範囲で、斜面上方の南壁の残りがよい。床面は凹凸はあるが、全体的にはほぼ平坦で、締まりも比較的よい。

カマドは東壁南端に構築されている。袖部は礫を芯材とし、粘土質土で構築されている。燃焼部付近は堆積した焼土におおわれており、下位に現地性焼土が検出されている。規模は104×112cm、層厚4cmである。煙道部は壁際から緩やかに上昇し、外側へ約120cm延びる。煙出し部は径40cm・深さ20cmの円筒形状を呈する。

共伴するのは、ピット4基と工房址と思われる施設である。P_1は北東隅に位置し、平面形は円形を呈する。規模は開口部径76cm・底部径45cm・深さ45cmである。底面は湾曲し、壁は北東側がオーバーハングするほかはゆるい角度で外傾する。埋土の下半は焼土で、中から炭化した堅果類(トチ)が数個出土している。P_2はカマド左袖北隣りに位置し、平面形は円形を呈する。規模は開口部径64cm・底部30cm・深さ45cmである。底面は平坦で、壁は外傾し、断面形はバケツ形を呈する。埋土下部はP_1と同様焼土で占められる。層厚は30cmで、多量の炭化物を含む。埋土中から多くの土器片や少量の鉄滓が出土している。P_3は住居址中央からやや北東寄りに位置し、平面形は円形を呈する。規模は開口部径57cm・底部径44cm・深さ18cmである。底面は平坦で、壁は直立に近い。埋土はV層起源の汚れ火山灰が卓越する。P_4はカマド右袖西隣りに位置し、平面形は楕円形状を呈する。規模は開口部径64×48cm・底部径48×36cm・深さ13cmである。底部はゆるやかに湾曲し、壁は東側が若干オーバーハングするほかはゆるやかに外傾する。埋土の上部には焼土や炭化物が多量に分布する。鍛冶の工房址[註4]と思われる施設はカマドの前面に位置する。燃焼部前面に浅い窪みがあり、その西側には浅い溝状の窪みが連なる。溝状の内部からは暗青灰色の細粒砂質土が検出されている。現地性焼土は窪みの内部およびその西側に広範囲に広がる。これらの窪みの埋土は炭化物を多量に含む黒褐色土・黒色土で、鉄滓やふいごの羽口の一部が出土している。

遺　物（第25・26図；PL－36・37・38）

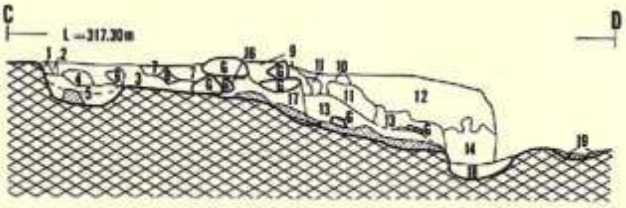


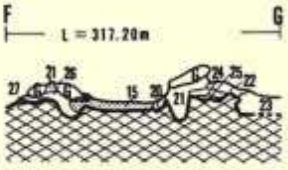
1．明黄褐色 10YR 6/8
2．黒 褐 色 10YR 3/2　灰白色浮石を粒状またはブロック状に含む
3．黒　　色 10YR 2/1
4．黄 褐 色 10YR 5/6
5．暗 褐 色 10YR 3/4
6．黒　　色 10YR 2/1　発泡不良の灰白色浮石を含む
7．暗 褐 色 10YR 3/3
8．淡 黄 色 2.5Y 8/4　淡黄色極細粒浮石
9．明黄褐色 10YR 6/8
10．黄 褐 色 10YR 5/8

S＝1/40

1．暗 褐 色 10YR 3/3 小ブロック状に浮石を含む
2．褐　　色 10YR 4/6
3．黒 褐 色 10YR 2/2 焼土を少量含む
4．黒 褐 色 10YR 2/3 微量の焼土を含む
5．褐　　色 10YR 4/6
6．暗赤褐色 5YR 3/4 焼土を基層にしている

第23図　HⅣ－1住居址





1．暗　褐　色 7.5YR 3/3
2．にぶい褐色 7.5YR 5/4
3．褐　色 7.5YR 4/3　焼土を多く含む
4．褐　色 7.5YR 4/3　焼土を多く含む
5．黒　色 7.5YR 2/1
6．明　褐　色 7.5YR 5/6　焼土を少量含む
7．褐　色 7.5YR 4/4　焼土を少量含む
8．にぶい橙色 7.5YR 7/4　焼成を受けている
9．暗　褐　色 7.5YR 3/4
10．黒　褐　色 7.5YR 3/2
11．明　褐　色 7.5YR 5/6　微量の焼土を含む
12．黒色～黒褐色 7.5YR 3/1～2/1
13．褐　色 7.5YR 4/3　焼土を少量含む
14．暗　褐　色 10YR 3/3　浅黄色の極細粒浮石(粒径20mm)を含む

1．赤　色 10YR 4/8　焼土
2．明黄褐色 10YR 7/6～～明赤褐色 2.5YR 5/8　焼土を含む
3．にぶい黄褐色 10YR 5/4　焼土を少量含む
4．褐　色 10YR 4/4　焼土を少量含む
5．褐　色 10YR 4/4　焼土を少量含む
6．明黄褐色 10YR 6/6
7．黄　褐　色 10YR 5/6　焼土を含む
8．褐　色 10YR 4/6　焼土を含む
9．灰　白　色 10YR 8/2　粘土
10．黄　褐　色 10YR 5/6　焼土をわずかに含む
11．暗　褐　色 10YR 4/4　焼土を含む
12．にぶい黄橙色 10YR 6/4　焼土を小ブロック状に含む
13．暗　灰　色 N31

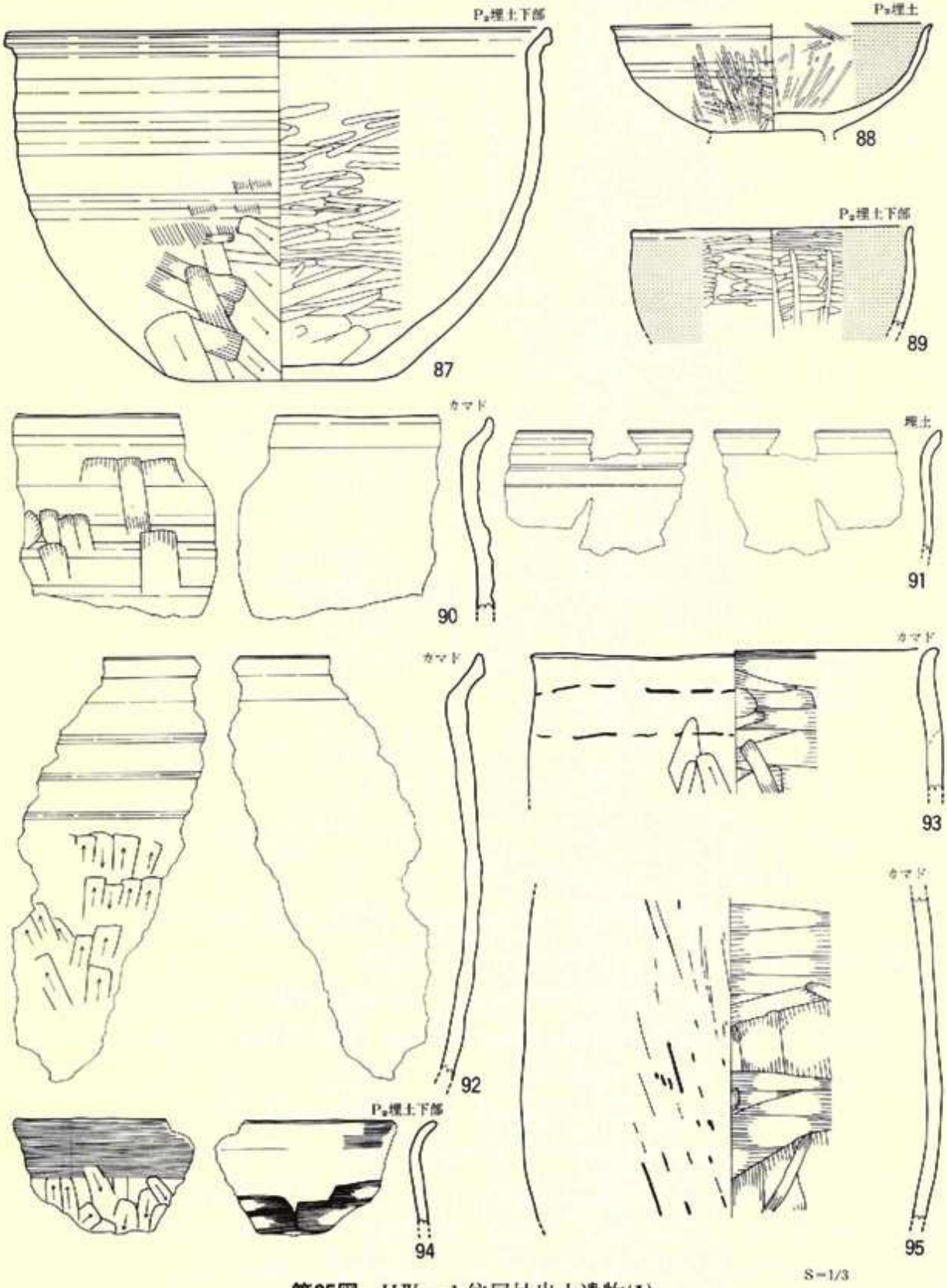
第24図　HⅣ－1住居址 カマド・煙道土層断面

出土遺物は土器片の他に鉄滓、ふいごの羽口、炭化した堅果類がある。土器の出土層位は埋土、カマド、煙道部埋土、ピット P_1～P_4 の各埋土である。出土量は他の平安時代住居址に比べて多い。土師器甕主体で、土師器坏や非内黒の坏が数点ある。P_2 埋土からは甕の口縁部破片を多く出土している。鉄滓は総重量約1180ｇで、住居址南半の埋土下部からその約８割が、残りは煙道部や P_2 埋土からの出土である。EⅣ―２住と同様、砂鉄を原鉱とする鍛冶滓である。ふいごの羽口は南西部床面直上から、炭化した堅果類は住居址埋土や P_1 埋土からの出土である。

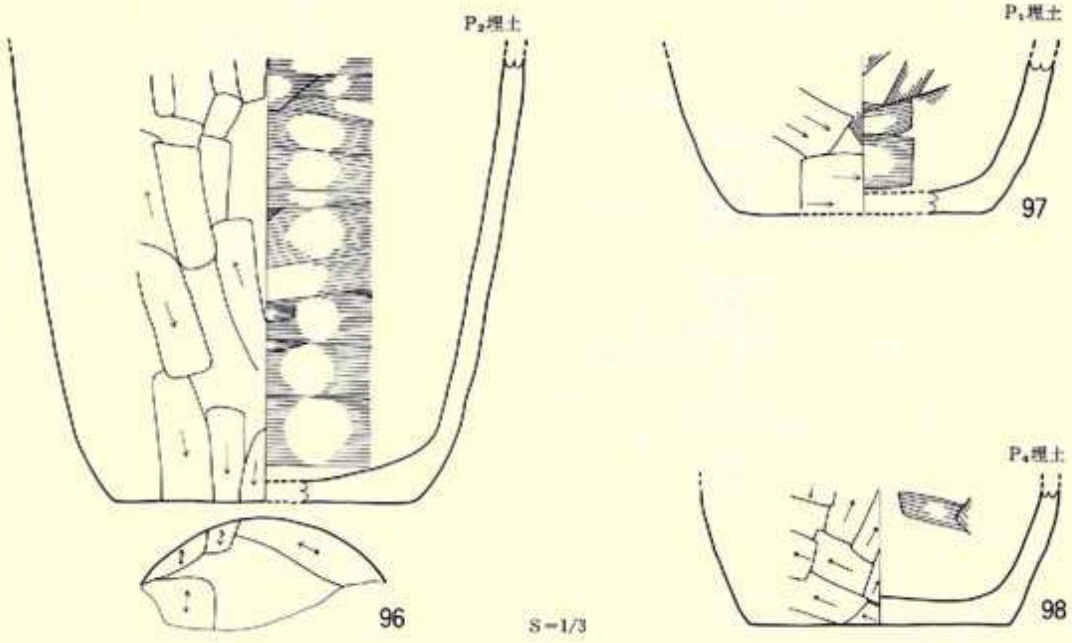
土師器甕（第25・26図90～98）　90～92・94は口縁部破片、93は口縁部1/2～1/3、95は体部約1/2、96・97・98は底部である。口縁部の残存する土器のうち90～92はロクロ使用、93・94はロクロ未使用である。ロクロ使用土器の口縁部は短かく外傾した後、直立する。ロクロ未使用の口縁部は短かく外反する。93は反りが小さく、輪積み痕が見られる。体部外面にヘラケズリ調整の行われているのは92～98、ナデが90である。96は底部にもヘラケズリがある。93～98の体部内面にはナデ調整が施されている。口縁部の横ナデは93の内面と94の内外面に施されている。

土師器坏（第25図88・89）　どちらもロクロ使用である。88は台付であるが、台部分は欠落している。どちらも内外面にヘラミガキを施し、88は内面を、89は内外面を黒色処理している。

土師器鉢（第25図87）　鉢はこの１点だけである。器形は体部が湾曲して外傾し、上部はほぼ直立する。口縁部は短かく外傾する。器高は17.5cm、口径27cmと大型である。ロクロ使用で、体部外面にはヘラケズリ・ナデ、内面にはヘラミガキ調整が施されている。この土器は本住居址 P_2 埋土下部出土とＤＶ―２住居址カマド出土、DⅣ―２住居址埋土出土の各破片が接合した。内面に黒色処理がなされているが、本住居址出土の破片は二次焼成を受けて、にぶい橙色



第25図　HⅣ－1住居址出土遺物(1)



第26図　HⅣ－1住居址出土遺物(2)

を呈している。DⅣ－2住居址出土破片の体部外面には煤が付着している。胎土には砂を混入しており、底面には特に多い。

(3)　中・近世

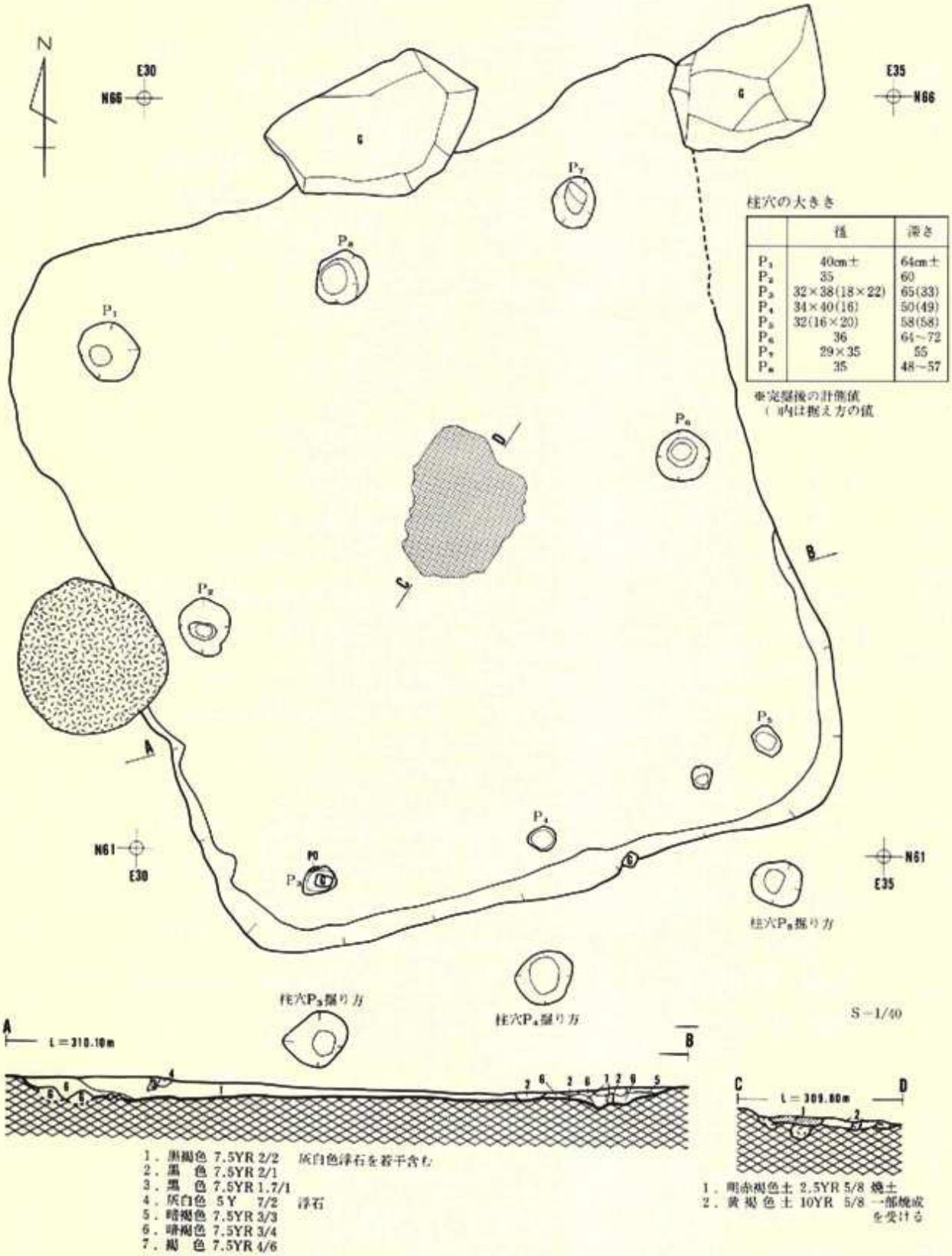
DⅤ－1住居址

遺　構（第27図；PL－14・15）

この住居址は調査区北東端の北向き緩斜面に構築されている。平面形は北辺がやや長い歪んだ方形で、規模は南北5.0～5.1m・東西4.4～4.8mを測る。

埋土は7層に細分でき、1層の黒褐色土が卓越する。1層に含まれる灰白色浮石は床面直上からも検出され、粗粒のものと極細粒のものとが見られる。南東部床面直上には粒径10～30cmの亜円礫・亜角礫が多い。

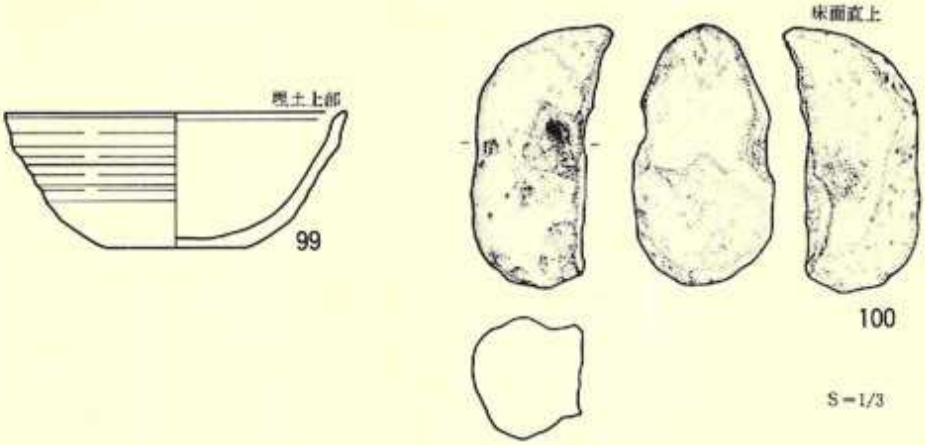
壁は斜面上方の南壁と東・西壁の一部が残存し、下方の北側は削剝されている。壁高は南壁が15～25cm・東、西壁が5～20cmを測る。床面は礫層が一部に露出し、小凹凸が多い。しまりはよく、特に中央付近は非常に堅い。南西部を除くほぼ4分の3に貼床が施され、南東部は灰白色の粘土質土を1～2cmの厚さに、北半部は灰白色浮石をブロック状に含む黒褐色シルト質土で5～10cmの厚さに敷設している。炉は床面中央からやや北東寄りに位置し、地床炉の形態を示



	径	深さ
P_1	40cm±	64cm±
P_2	35	60
P_3	32×38(18×22)	65(33)
P_4	34×40(16)	50(49)
P_5	32(16×20)	58(58)
P_6	36	64～72
P_7	29×35	55
P_8	35	48～57

※完掘後の計測値
（ ）内は掘え方の値

第27図　DV－1住居址



第28図　ＤＶ－１住居址出土遺物

す。焼土は100×85cmの範囲に不整形に広がり、層厚は６cmを測る。

柱穴は各辺に３個づつ、計８個検出されている。P_3・P_4・P_5からは掘り方を伴う。柱あたりの埋土は黒色または黒褐色の締まりの弱い土である。掘り方部分の埋土は黒色土・黒褐色土に褐色土・黄褐色土がブロック状に混じる。P_5・P_6の埋土上部にはしまりのよい粘土質土や小・中礫含みの堅い土が見られる。各柱穴の間隔はP_1—P_2・P_2—P_3・P_5—P_6・P_6—P_7が1.85～2.0mで、P_3—P_4・P_4—P_5・P_7—P_8・P_8—P_1が1.55～1.70mである。壁溝は検出されていない。

遺　物（第28図；ＰＬ－38）

埋土や床面直上から約1/2個体の坏を含む数片の土器と石器１点が出土している。

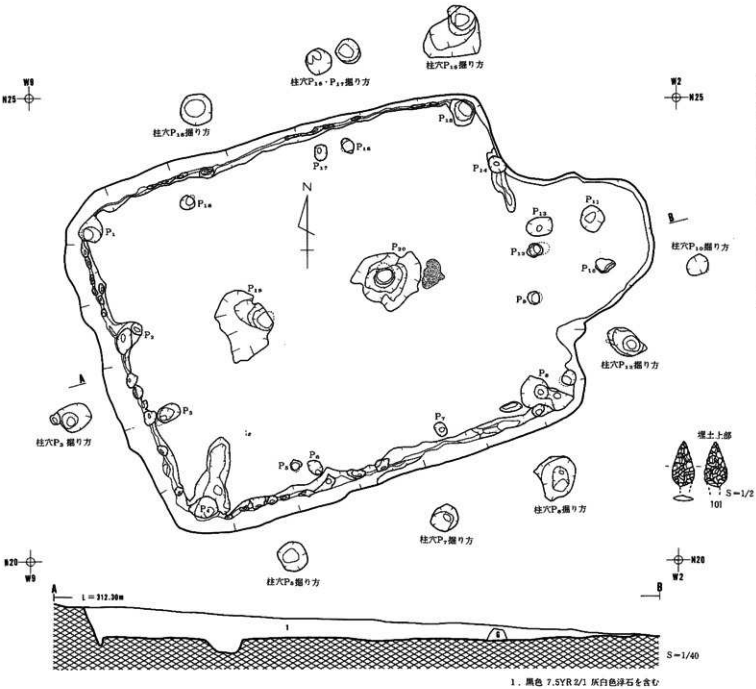
坏（第28図99）　ロクロ使用の非内黒土器である。体部は内湾気味に外傾し、口唇部がわずかに外反する。体部外面には凹凸があり、煤が付着する。切り離しは回転糸切りで、再調整はない。色調はにぶい黄橙色を呈し、底面や体部内外面に黒斑がある。

礫石器（第28図100）　破損しているが、亜円礫をもちいた凹石である。凹みは表面に１個、裏面には重複する３個があり、いずれも深い。

ＦⅢ－１住居址

遺　構（第29図；ＰＬ－16）

この住居址は調査区中央を北流する沢の西側、ＦⅢ区の北東向き緩斜面の下端に構築されている。平面形は長方形を基本とし、東側に半楕円形の張り出し部分を持つ。規模は南北が4.0m、東西が4.8mで、張り出し部分を含めると6.2mを測る。



柱穴の大きさ

	径	深さ
P_1	27cm±	59cm±
P_2	16×28	22
P_3	30×34(18×26)	35(34)
P_4	25	68
P_5	30(12)	29(26)
P_6	14×18	58
P_7	25×33(11×16	34(33)
P_8	48(16)	68(67)
P_9	14	35
P_{10}	20×25(14×20)	30(30)
R_1	27	41
R_2	26×41(14×17)	38(37)
R_3	30×28	36
R_4	19	20
R_5	42×62 (30)	62(62)
R_6	27 (12×18)	45(41)
R_7	27 (13×18)	30(28)
R_8	35(16)	35(32)
R_9	22×30	64
R_{10}	27×42	52

※完掘後の計測値
（ ）内は掘え方の値

第29図　FⅢ－1住居址

埋土は黒色土の単層で、V層起源火山灰を粒状・小ブロック状に、灰白色浮石を粒状に含む。南壁際には黒色土と黄褐色土の混じったものが25cmの幅で帯状に貼りついている。

壁は120°の角度で外傾する。壁高は3～35cmを測り、斜面上方の西側の残存状態がよい。床面はしまりがよく堅い。全体的には平坦であるが、小凹凸があり、特に柱穴付近や壁溝付近は盛り上がっている。P_7付近では床面と6cmの高低差がある。P_{20}の東側の床面はわずかに焼け、上位には炭化物粒が33×22cmの範囲に広がる。確実ではないが、炉の可能性をもつことも考えられる。柱穴は20個検出し、そのうちP_3・P_5・P_7・P_8・P_{10}・P_{12}・P_{15}・P_{16}・P_{17}・P_{18}の10個は掘り方を伴う。中央の2個と四隅の4個の掘り込みは50cm以上と深い。南壁際と北壁際に並ぶ柱穴はそれぞれ対をなす。張り出し部分にあるP_9・P_{10}・P_{11}・P_{13}は出入口施設に関わる柱穴と思われる。柱穴の埋土は黒色のしまりの弱い土で、掘り方部分の埋土は黒色土にV層起源火山灰がブロック状に混じる。壁溝は東壁の張り出し部分を除いてほぼ一周する。幅5～20cm、深さ10cmであるが、所により深さ20cmを越す。単に樋状に巡るのではなく、小ピットが連続し、その間を溝で繋ぐ形状を示す。

遺　物（第29図；PL－38）

出土遺物は僅少である。縄文土器・土師器の小破片のほか、石鏃1点が出土した。

剥片石器（第29図101）　凸基有茎式石鏃であるが、茎部を失っている。両面加工である。

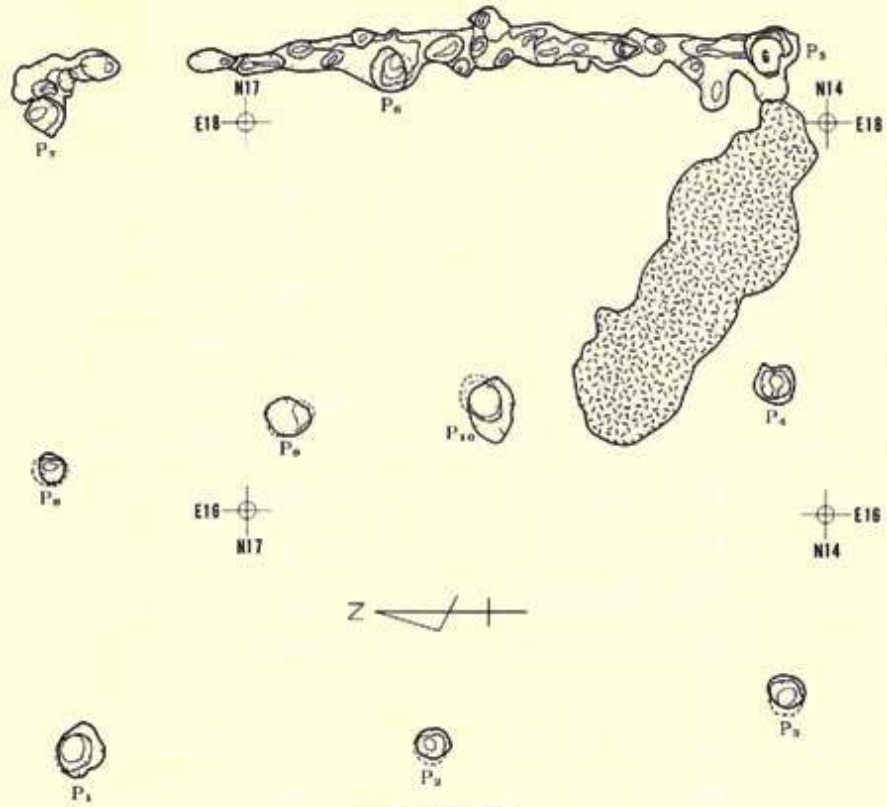
FⅣ－2住居址

遺　構（第30図；PL－15・16）

この住居址は北西向きの緩斜面に構築されている。斜面上方にあたる東側で溝が検出されている。壁は検出されていないが、竪穴住居址であったものが削剥された可能性をもつ。平面形は方形で、規模は東西3.30m・南北3.70mを測る。

埋土は住居址本体のものはないが、柱穴や溝の埋土はFⅢ－1住居址類似の黒色土で、灰白色浮石を小斑状に含む。

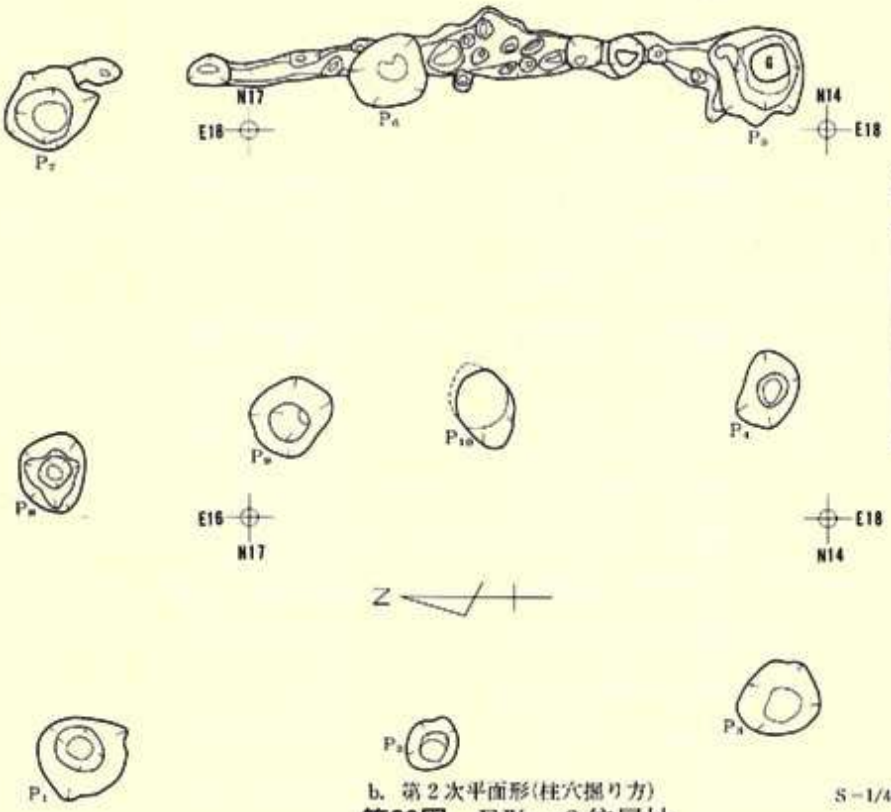
床面は全体的に平坦である。柱穴は各辺に3個づつと中央に2個の計10個である。いずれも掘り方を持っており、掘り方部分の埋土もFⅢ－1住居址のそれに類似し、黒・黒褐色土にV層起源火山灰をブロック状に含む。各柱穴の規模はほぼ一定するが、深さは最大50cmから最小21cmまでばらつきが見られる。各柱穴の間隔は南北のP_1—P_2・P_2—P_3・P_5—P_6・P_6—P_7が1.80～1.95mとほぼ一定であるが、東西のP_7—P_8・P_8—P_1・P_3—P_4・P_4—P_5はそれぞれ1.80m・1.45m・1.60m・1.70mと多少ばらつきが見られる。中央の柱穴と四隅の柱穴を結ぶP_9—P_1・P_9—P_7・P_{10}—P_8・P_{10}—P_5の間隔は2.05～2.30mとほぼ一定である。溝は東側のP_5—P_7間で検出されている。規模は幅20cm・深さ5～10cmを測る。形態は連続する小ピットが溝状に繋がり、FⅢ



柱穴の大きさ（a図）

	径	深さ
P_1	24×28cm±	30cm±
P_2	16	30
P_3	18	41
P_4	20	21
P_5	23	21
P_6	19×23	35
P_7	20	35
P_8	15	25
P_9	22	24
P_{10}	22×32	50

a. 第1次平面形



柱穴の大きさ（b図）

	径	深さ
P_1	42×46cm±	30cm±
P_2	26	30
P_3	40	41
P_4	28×39	25
P_5	42×50	21
P_6	35×40	43
P_7	43	49
P_8	34×40	27
P_9	36×44	25
P_{10}	30×35	50

b. 第2次平面形（柱穴掘り方）

S－1/40

第30図　FⅣ－2住居址

—1住居址の壁溝に類似する。炉は検出されていない。

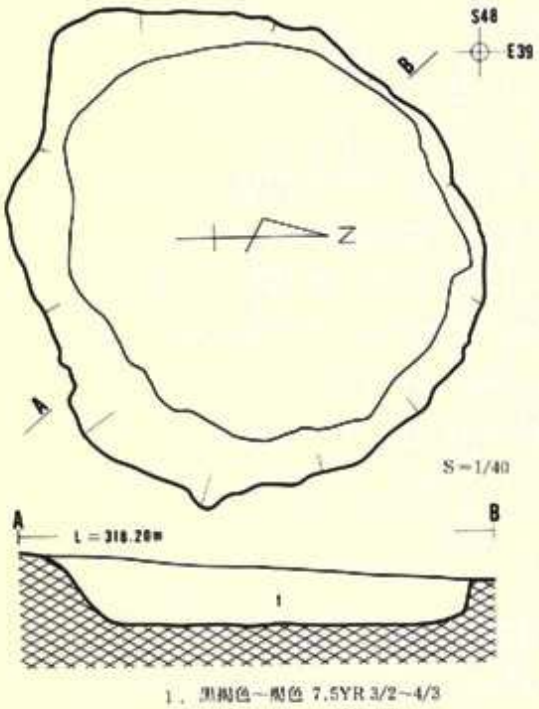
出土遺物はない。

(4) 住居址状遺構

HV—2住居址状遺構

遺　構（第31図；PL—17）

この遺構は北向き緩斜面に構築され、IV—3住居址の北隣りに位置する。平面形は北東—南西方向に長軸を持つやや歪んだ楕円形を呈し、規模は2.40×2.70mを測る。



第31図　HV—2住居址状遺構

埋土は壁際が褐色土、中央部が黒褐色土で漸移的に変化する。色調の違いはV層起源火山灰が占める量の違いである。

壁は外傾し、北側の傾斜はきついが、南側のそれはゆるやかである。壁高は15～25cmで、斜面下方の北側がやや低い。床面は平坦で、凹凸が少ない。規模・形態からは住居址としての可能性も否定できないが、炉や柱穴が検出されないことから住居址状遺構とした。

遺物は埋土上部から縄文土器の小破片が出土しているが、時期の特定はできない。

註1)　高橋文夫他（1978）　湯沢遺跡発掘調査報告書　岩手県埋文センター調査報告書第2集

註2)　桑原が須恵系土器（1975）とか小笠原があかやき土器（1974）と呼んでいる土器と同系統の土器である。土師器と区別するため非内黒の坏形土器とした。

註3)　鉄滓の鑑定結果についてはそのすべてを第Ⅵ章に掲載している。

註4)　鉄滓の鑑定結果から鍛冶の工房址とした。

2．ピット

ＥⅣ—51ピット

遺　構（第32図；PL－17）

このピットは調査区北東部の北西向き緩斜面にある。平面形は開口部・底部とも円に近い楕円形である。底部は中央やや東寄りの部分が低く、椀状に湾曲している。礫層に掘り込まれているため、凹凸が著しい。壁は底面からゆるやかに湾曲して立ち上がり、開口部付近では直立に近い。規模は開口部径152×132cm・底部径105×88cm・深さ43cmである。埋土は黒褐色土の単層で、亜円の大礫・中礫を多く含む。西壁寄りの上部にはⅤ層起源の火山灰を含む。

出土遺物はない。

ＥⅣ—52ピット

遺　構（（第32図；PL－18）

このピットはＥⅣ—51ピットの南東約６ｍに位置する。平面形は開口部・底部とも隅丸方形を基本とし、開口部が南側に張り出す。このピットも礫層に掘り込まれており、底面の凹凸が著しい。壁は湾曲して立ち上がり、外傾して開口部へ続く。南壁の傾斜は非常にゆるやかである。断面形は浅皿形状を呈する。規模は開口部135×115cm・底部50cm四方である。埋土は黒褐色土の単層で、亜円の大礫・中礫を多く含む。形態や埋土がＥⅣ—51ピットに類似する。

遺物は埋土中から縄文土器の口縁部小破片１点が出土している。

ＥⅣ—53ピット

遺　構（第32図；PL－18）

このピットはＥⅣ—51ピットの南西隣りに位置する。平面形は開口部・底部とも歪んだ楕円形である。ＥⅣ—51ピットと同様礫層に掘り込まれているため、底面の凹凸が著しい。壁は底面に対して外傾し、南側では段差を持って開口部へ続く。断面形は底面中央がやや低くなっているが、浅皿形状を呈する。規模は開口部径150×125cm・底部径90×75cmである。埋土は黒褐色土の単層で、Ⅴ層起源の火山灰が小ブロック状に混じり、亜円の大礫・中礫を多く含む。このピットも形態・埋土がＥⅣ—51ピットに類似する。

出土遺物はない。

ＥⅤ—51ピット

遺　構（第33図；PL－18）

このピットはEⅣ—52ピットの東南東約2mに位置する。平面形は開口部・底部とも円形である。壁は湾曲して立ち上がり、比較的ゆるい傾斜で外傾するが、開口部付近の西側から北側にかけては直立に近い。断面形は椀形状を呈する。規模は開口部径135cm・底部径70cm・深さ40cmである。埋土は黒褐色土の単層で、V層起源火山灰が小ブロック状に少量混じる。亜円や亜角の大礫・中礫も多く含まれる。埋土中の数個の大礫は西壁に寄りかかるように、西から東へ傾斜した状態で含まれている。このピットも礫層に掘り込まれ、形態・埋土がEⅣ—51ピットに類似する。

遺物は埋土中から縄文土器の体部小破片が3点出土している。

EV—52ピット

遺　構（第33図：PL—19）

このピットはEV—51ピットの北11mに位置し、EV—53・56ピットと重複する。新旧関係は本ピットが一番古い。平面形は開口部・底部とも不整の楕円形である。底面は平坦で、壁は湾曲して立ち上がり、底面に対して外傾する。断面形は浅皿形状を呈する。規模は開口部径180×130cm・底部径155×110cm・深さ15cmである。埋土は黒褐色土の単層で、土層図A—B断面の1層がそれにあたる。褐色土が小ブロック状に混じり、砂や小礫・数個の中礫を含む。

出土遺物はない。

EV—53ピット

遺　構（第33図：PL—19）

このピットはEV—52ピットと重複し、新旧関係は本ピットの方が新しい。平面形は開口部・底部とも楕円形気味の円形である。底面はほぼ平坦で、西から東へ向かっていく分傾斜する。壁はゆるく内湾し、底面に対して外傾する。上部は直立に近い。断面形は浅皿状を呈する。規模は開口部径125cm・底部径80cm・深さ20cmである。埋土は黒褐色土の単層で、土層図A—B断面の2層がそれにあたる。3層は褐色のV層起源火山灰で、壁の残部である。

遺物は埋土上部から縄文土器の体部小破片1点が出土している。

EV—54ピット

遺　構（第33図：PL—19）

このピットはEV—53ピットの北東約3mに位置する。平面形は開口部・底部ともほぼ円形で、断面形は浅皿形状を呈する。底面は平坦で、壁は湾曲して立ち上がり、底面に対して外傾する。規模は開口部径120±5cm・底部径95±5cm・深さ12cmである。埋土は黒色土・黒褐色土か

ら成り、粗砂や細砂を含む。

出土遺物はない。

ＥＶ—55ピット

遺　構（第33図：PL－19）

このピットはＥＶ—53ピットの東南東約４ｍに位置している。平面形は開口部・底部とも隅丸方形気味の楕円形である。底面は凹凸が著しく、南から北に向かってゆるく傾斜している。壁は底面に対して外傾しており、西側から南側にかけてはゆるやかな傾斜であるが、他は直立に近い。規模は開口部径105×90cm・底部径80×50cm・深さ25cmである。埋土は黒褐色土と褐色土から成り、砂混じりで中礫や小礫を多く含む。ＥⅣ—51ピットと埋土はやや異なるが礫層に掘り込まれていること、埋土に礫を多く含むことなど類似点が多い。

遺物は埋土上部から縄文土器の体部破片が１点出土している。

ＥＶ—56ピット

遺　構（第33図：PL－19）

このピットはＥＶ—52ピットと重複し、新旧関係は本ピットの方が新しい。平面形は開口部・底部とも長楕円形である。底面はほぼ平坦で、中央に小ピットがあるがこれは後世の攪乱によるものである。壁はほぼ直立で、北壁から北東壁にかけての上部は崩壊している。短軸の断面形はビーカー形を呈する。規模は開口部径148×70cm・底部径125×60cm・深さ30cmである。埋土は７層に細分され、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土から成る。

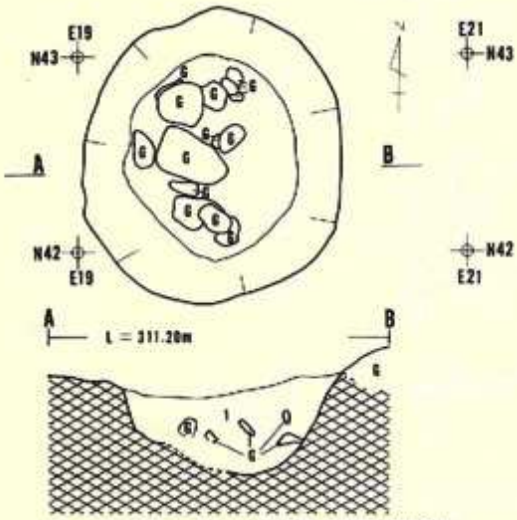
出土遺物はない。

ＦⅣ—51ピット

遺　構（第32図：PL－19）

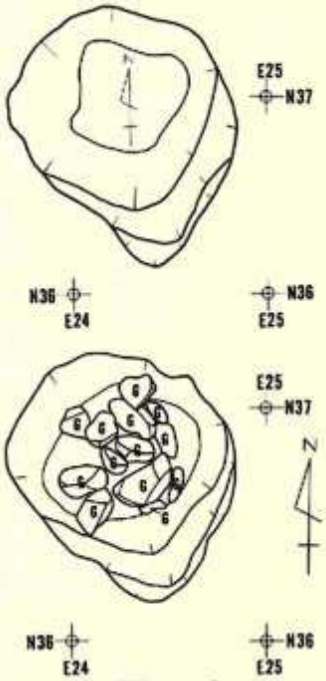
このピットはＦⅣ—１住居址の北東壁に接するように位置する。平面形は開口部・底部とも不整の長楕円形である。底面はゆるやかに波打つような凹凸が見られる。壁は底面から湾曲して立ち上がり、ゆるく外傾して開口部へ続く。短軸の断面形は椀状を呈する。規模は開口部径180×80cm・底部径160×30cm・深さ22cmである。埋土は黒色土の単層で、最上部に灰白色浮石を小ブロック状に、全体的には粒状に含む。

遺物は埋土から縄文土器片が２点出土している。

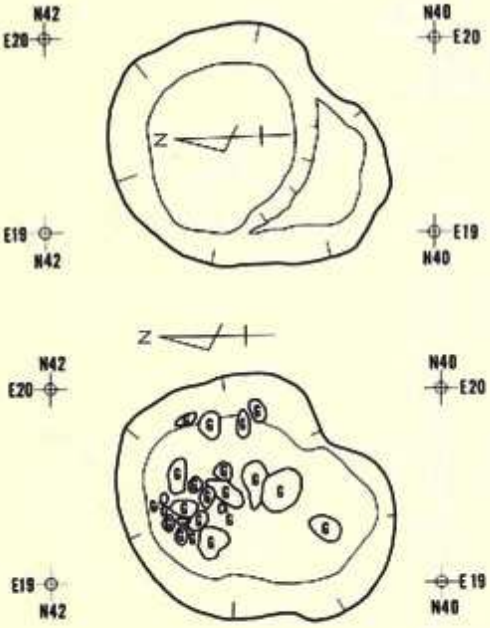


1．黒褐色 7.5YR 3/2 楕円の大礫、中礫を多く含む

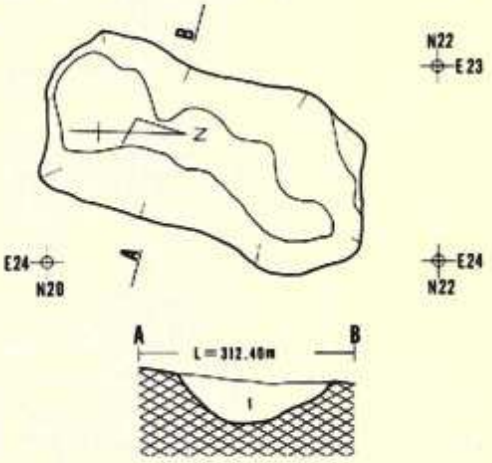
a. EⅣ－51ピット



b. EⅣ－52ピット



c. EⅣ－53ピット

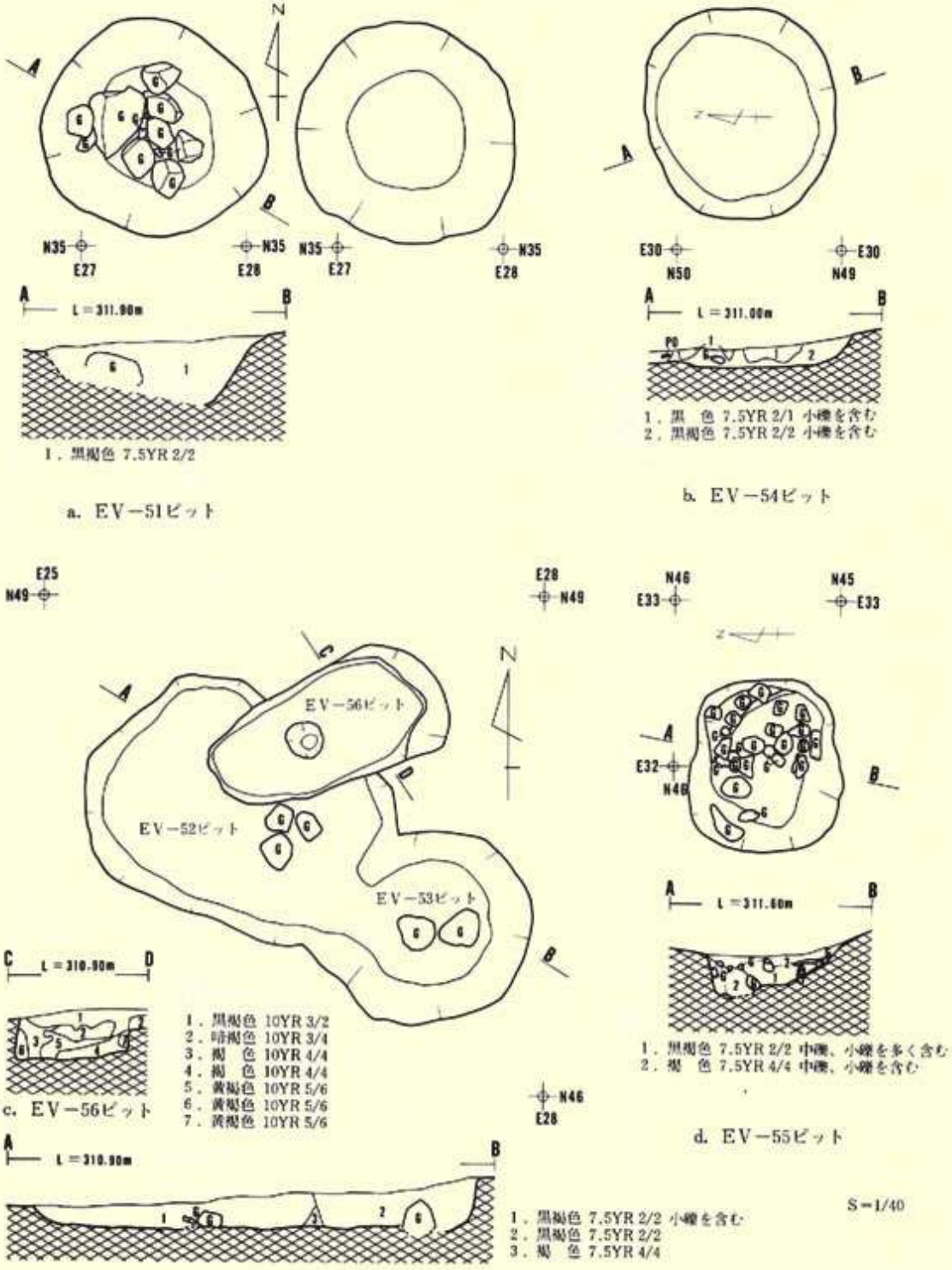


1．黒色 7.5YR 1.7/1

S－1/40

d. FⅣ－51ピット

第32図　ピット(1)


N
A
B
N35
E27
N35
E28
N35
E27
N35
E28
L＝311.90m
1．黒褐色 7.5YR 2/2
a. EV－51ピット
E30
N50
E30
N49
L＝311.00m
1．黒　色 7.5YR 2/1 小礫を含む
2．黒褐色 7.5YR 2/2 小礫を含む
b. EV－54ピット
E25
N49
E28
N49
C
D
EV－56ピット
EV－52ピット
EV－53ピット
L＝310.90m
1．黒褐色 10YR 3/2
2．暗褐色 10YR 3/4
3．褐　色 10YR 4/4
4．褐　色 10YR 4/4
5．黄褐色 10YR 5/6
6．黄褐色 10YR 5/6
7．黄褐色 10YR 5/6
c. EV－56ピット
N46
E28
L＝310.90m
1．黒褐色 7.5YR 2/2 小礫を含む
2．黒褐色 7.5YR 2/2
3．褐　色 7.5YR 4/4
e. EV－52・53ピット
N46
E33
N45
E33
E32
N46
L＝311.60m
1．黒褐色 7.5YR 2/2 中礫、小礫を多く含む
2．褐　色 7.5YR 4/4 中礫、小礫を含む
d. EV－55ピット
S＝1/40

第33図　ピット(2)

ＨＶ—51ピット

遺　構（第34図：PL－20）

このピットはＨＶ—１住居址の北約３ｍに位置する。平面形は開口部・底部とも不整の楕円形であるが、形状は不安定である。底面は中央部が低く、壁寄りはやや高い。壁は内湾して立ち上がり、中部で外湾し、上部はゆるい角度で外傾して開口部へ続く。北東壁は木根等の攪乱で小凹凸が著しい。規模は開口部径110×75cm・底部径80×45cm・深さ35cmである。埋土は４層に細分され、黒褐色土・暗褐色土・褐色土から成る。

出土遺物はない。

ＨＶ—52ピット

遺　構（第34図：PL－20）

このピットはＨＶ—51ピットと北西部で接するように位置する。平面形は開口部・底部とも不整の楕円形であるが、形状がやや不安定である。底面はほぼ平坦で、南へいく分傾斜する。壁には木根の攪乱による小凹凸がある。きつい角度で外傾し、断面形はビーカー形状を呈する。規模は開口部径130×90cm・底部径95×50cm・深さ45cmである。埋土は３層に細分され、１層の黒褐色土が卓越する。壁付近には褐色土が見られる。

遺物は縄文土器の体部破片が９点出土している。

ＨＶ—53ピット

遺　構（第34図：PL－19）

このピットはＨＶ—１住居址の南約３ｍに位置する。平面形は開口部・底部とも長楕円形である。底面は平坦で、壁は内湾し、ややオーバーハングする。規模は開口部径150×55cm・底部径138×50cm・深さ15cmである。埋土は２層に分かれる。黒褐色土が卓越し、褐色土が壁際に若干と黒褐色土中に粒子状に混じる。

出土遺物はない。

ＨＶ—54ピット

遺　構（第34図：PL－20）

このピットはＩＶ—１住居址の西約5.5mに位置する。平面形は開口部・底部とも円形で、断面形はフラスコ型を呈する。底面は平坦である。壁は内湾して立ち上がり、東側は直立に近いが、他は内傾する。頸部は持たない。規模は開口部径120cm・底部径115cm・深さ30cmである。埋土は４層に細分され、黒褐色土や暗褐色土等で構成される。壁や底面付近の３・４層はＶ層

起源の汚れ火山灰である。

遺　物（第34図；PL－38）

剝片石器（第34図102）　石錐で、先端部の一部を折損している。周辺部を両面から二次加工している。刃部は磨耗している。

ＨＶ―55ピット

遺　構（第34図；PL－20）

このピットはＨＶ―54ピットの南東隣りに位置する。平面形は開口部・底部ともやや歪んだ楕円形で、断面形はフラスコ型を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は北西側が直立に近いが、他は内傾する。頸部は持たない。規模は開口部径125×105cm・底部径120×110cm・深さ35cmである。埋土は６層に細分され、黒色土と黒褐色土が卓越する。底面付近にＶ層起源の汚れ火山灰が見られる。このピットは形状・規模・埋土がＨＶ―54ピットに類似する。

遺　物（第34図；PL－38）

縄文土器（第34図103～105）　103は第15図38と同一個体の破片である。２個の補修孔をもつ。104は磨消縄文をもつ体部破片、105は粗製深鉢の口縁部破片で、羽状縄文が地文である。103は後期Ⅱ群、104・105も時間的にそれに近いであろう。

ＩＶ―51ピット

遺　構（第35図；PL－21）

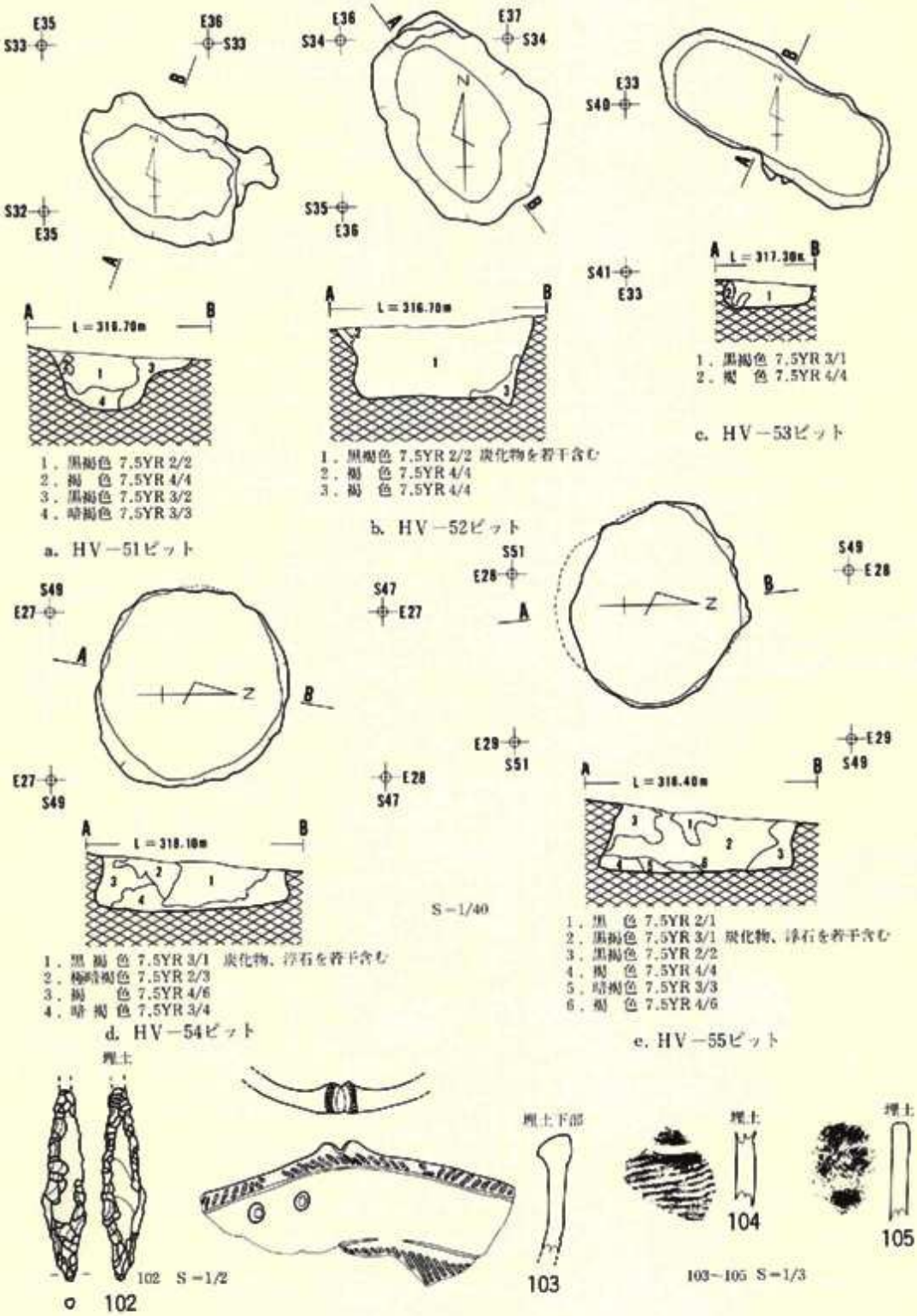
このピットはＩＶ―5住居址の北約２ｍに位置する。平面形は開口部・底部とも不整の楕円形である。底面は中央部が低く、壁付近がやや高い。ゆるやかに波打つような凹凸が見られる。東壁・西壁はゆるやかに湾曲して立ち上がり、途中から内傾して開口部に至る。北壁は掘り過ぎがあるが、土層断面図にあらわれた壁は内傾する。断面形はフラスコ形状を呈する。規模は開口部径105×86cm・底部径80×60cm・深さ16cmである。埋土は２層に分かれ、黒褐色土が卓越する。２層の黄褐色土はＶ層起源の汚れ火山灰で、壁崩壊土と思われる。

遺物は底面直上から縄文時代後期と推定される土器の底部が出土している。

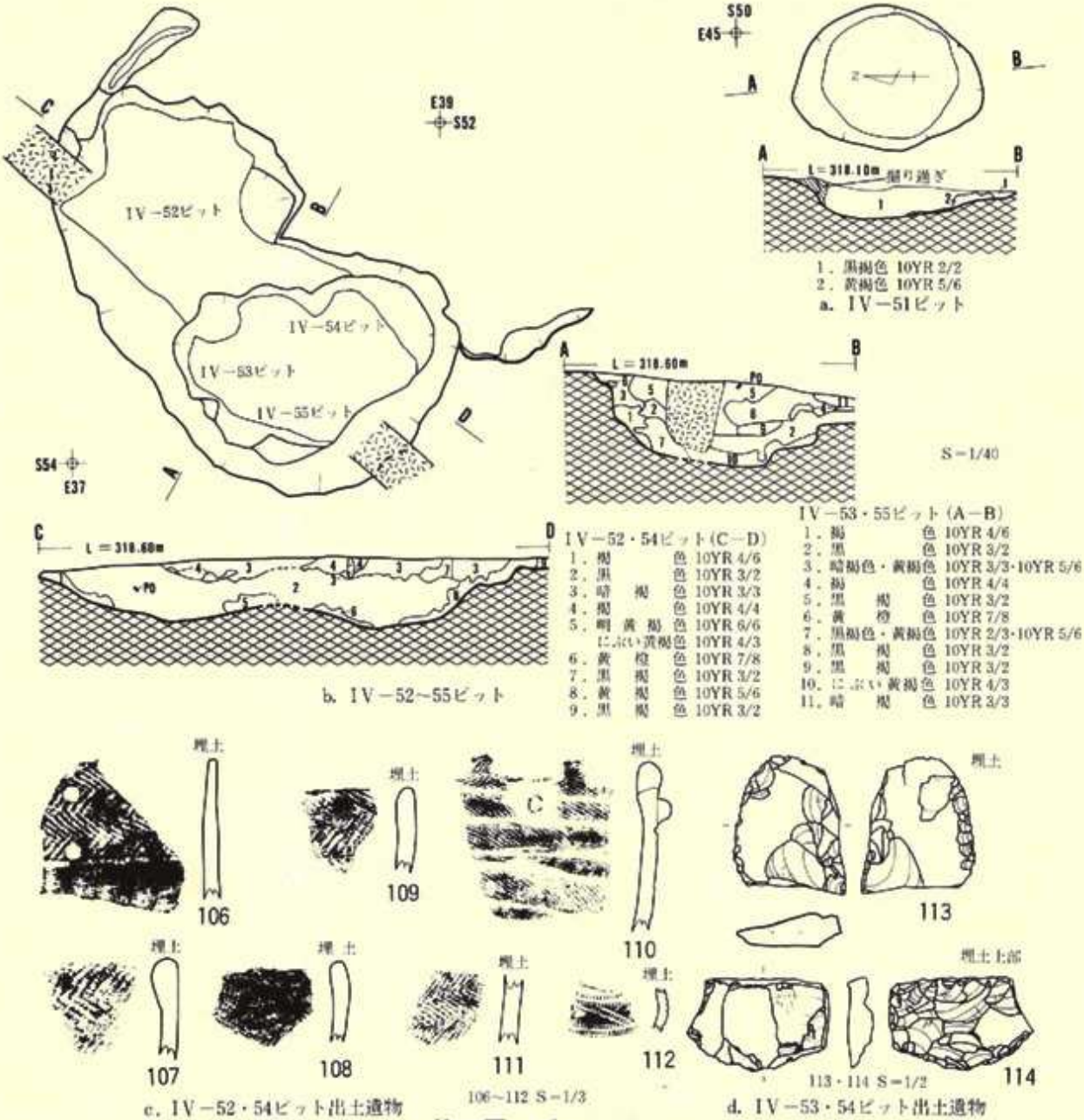
ＩＶ―52ピット

遺　構（第35図；PL－21）

このピットはＩＶ―３住居址やＩＶ―53・54・55ピットと重複する。新旧関係は本ピットがＩＶ―3住居址よりは新しいが、他のピットとの関係は不明である。平面形は開口部・底部とも楕円形を基本とするが、不整な部分が多い。底面はゆるやかな凹凸が見られるが、全体的には


E35
S33
E36
S33
S32
E35
A
B
N
L=316.70m
1
2
4
1．黒褐色 7.5YR 2/2
2．褐　色 7.5YR 4/4
3．黒褐色 7.5YR 3/2
4．暗褐色 7.5YR 3/3
a. HV－51ピット
E36
S34
E37
S34
S35
E36
L=316.70m
3
1．黒褐色 7.5YR 2/2 炭化物を若干含む
2．褐　色 7.5YR 4/4
3．褐　色 7.5YR 4/4
b. HV－52ピット
E33
S40
S41
E33
L=317.30m
1
1．黒褐色 7.5YR 3/1
2．褐　色 7.5YR 4/4
c. HV－53ピット
S49
E27
S47
E27
E27
S49
E28
S47
S51
E28
S49
E28
E29
S51
E29
S49
L=318.10m
L=318.40m
1．黒 褐 色 7.5YR 3/1　炭化物、浮石を若干含む
2．極暗褐色 7.5YR 2/3
3．褐　色 7.5YR 4/6
4．暗 褐 色 7.5YR 3/4
d. HV－54ピット
S=1/40
1．黒　色 7.5YR 2/1
2．黒褐色 7.5YR 3/1 炭化物、浮石を若干含む
3．黒褐色 7.5YR 2/2
4．褐　色 7.5YR 4/4
5．暗褐色 7.5YR 3/3
6．褐　色 7.5YR 4/6
e. HV－55ピット
埋土
102　S=1/2
102
f. HV－54ピット出土遺物
埋土下部
103
埋土
104
埋土
105
103～105 S=1/3
g. HV－55ピット出土遺物

第34図　ピット(3)



第35図　ピット(4)

中央が低く、壁際は高い。壁は木根等の撹乱と思われる小凹凸があり、ゆるやかな角度で外傾する。南東壁はＩＶ—53ピット等と切り合い、残存しない。断面形は椀形状を呈する。規模は残存部分で開口部径144×140cm・底部径120×95cm・深さ45cmである。埋土は土層図Ｃ—Ｄ断面の左側約半分が本ピットのものと考えられる。黒褐色土が卓越し、他に暗褐色土・褐色土等で構成される。

遺　物（第35図： PL－39）

縄文土器（第35図106～108）　106は口縁部が羽状縄文、その下位が磨消縄文である。２個１対の補修孔を上下にもつ。107・108は粗製深鉢の口縁部である。108はやや小型である。地文は、107が羽状縄文、108がＬＲとＲＬである。105は羽状縄文をもつ特徴からみて後期II群、107も時間的にそれに近いものであろう。

ＩＶ—53ピット

遺　構（第35図： PL－21）

このピットはＩＶ—52ピットの南東壁と切り合う形で位置している。平面形は残存部からの推定では開口部・底部とも楕円形であるが、形状はやや不安定である。底面は南壁際がやや高く、北に向かっていく分傾斜する。多少凹凸が見られるが、木根等の撹乱によるものが多い。壁は西側に約半分が残存する。底面から湾曲して立ち上がり、きつい角度で外傾する。断面形はビーカー形状と推定される。規模は残存部の値で、開口部径90cm・底部径75cmである。深さは壁高の最大が20cmであるが、一連のピット群の検出面からは50cmである。埋土は土層図Ａ—Ｂ断面の中央部とＣ—Ｄ断面の中央やや右側の部分が本ピットのものと考えられる。黒褐色土が卓越し、これにＶ層起源火山灰の混入度によってさらに３～４層に細分される。底面直上はＶ層起源の褐色土である。

ＩＶ—54ピット

遺　構（第35図：PL－21）

このピットは南西壁でＩＶ—53ピットと切り合う。平面形は開口部・底部とも楕円形を基本にする。底面は中央部が低く、壁際がやや高い。壁はゆるい角度で外傾し、断面形は椀形状を呈する。規模は残存部の値で、開口部径100cm・底部径65cm・深さ40cmである。埋土は土層図Ｃ—Ｄ断面の右側約1/3が本ピットのものと考えられる。黒褐色土が卓越し、他に埋土上部に暗褐色土、底面直上に黄褐色土等が見られる。

遺　物（第35図：PL－39）

縄文土器（第35図110～112）　110は小突起を伴う瘤付土器で、平行沈線と磨消縄文が文様を構成する。112は小型の壺である。平行沈線の内部と一部が残る低い瘤の上に刻目文を施文する。111は羽状縄文をもつ体部破片である。110と112は後期III群で、110は１類である。

剥片石器（第35図113・114）　113は不規則な小剥離痕が一側縁にみられる削器状石器である。114は２個１対の刃部をもつピエス・エスキーユで、階段状剥離面が互いに接している。

ＩＶ—55ピット

遺　構（第35図：PL－21）

このピットは底部の大半をＩＶ—53・54ピットに切られている。ＩＶ—53・54ピットの北側と南側にこれらのピットの底面より10～15cm高いレベルに平坦面があり、これがＩＶ—55としたピットの底面である。平面形は開口部・底面とも円形を基本とする。壁は外傾するが、直立に近く、断面形はビーカー形と推定される。規模は開口部径140cm・底部径120cm・深さ25cmである。埋土はＩＶ—53・54ピットと区別ができず、共通部分が多い。土層図Ａ—Ｂ断面の左右の段差がこのピットの底面である。埋土は黒褐色土が卓越し、壁や底面付近にＶ層起源火山灰が混入する。

共伴遺物はない。

ＩＶ—56ピット

遺　構（第36図：PL－21）

このピットは調査区南東端の境界線近くに位置し、付近には形態の類似するＩＶ—57～60ピット５基がまとまって検出されている。平面形は開口部・底部とも歪んだ円形で、断面形は浅皿状を呈する。底面は若干の凹凸はあるが、中央部が低く、壁に向かっていく分高くなる。壁は西側は直立に近いが、他は外傾する。規模は開口部径70cm・底部径55cm・深さ10cmである。埋土は暗褐色土にＶ層起源火山灰がブロック状に約50％の割合で混じる。

出土遺物はない。

ＩＶ—57ピット

遺　構（第36図：PL－21）

このピットはＩＶ—56ピットの南隣りに位置する。平面形は開口部・底部とも歪んだ円形で、断面形はやはり浅皿形状を呈する。底面は中央部がやや低く、凹レンズ状に湾曲する。底部東壁寄りにある小ピットは攪乱によるものである。壁は南西側の一部が水道管埋設による攪乱を受けて削平されている、他は直立に近い。規模は開口部径70cm・底部径50×60cm・深さ22cmである。埋土は３層に細分され、黒褐色・褐色土・明黄褐色土から成る。１層の褐色土は黒褐色土とＶ層起源火山灰との混土である。３層の黒褐色土にも同様の火山灰が粒状・小ブロック状に混じる。

出土遺物はない。

ＩＶ—58ピット

遺　物（第36図：PL－21））

このピットはＩＶ—57ピットの東隣りに位置し、南半は調査区外に延びるため、検出されたのは北側約半分である。平面形は、検出された部分からの推定で、開口部・底部とも隅丸方形状である。底面はほぼ平坦である。壁は湾曲して立ち上がり、西側は直壁に近いが、他は外傾する。断面形は浅皿形状を呈する。検出された部分での規模は、開口部の一辺が60cm、底部の一辺が45cm・深さ10cmである。埋土は２層に分かれ、黒褐色土が卓越する。壁際や底面付近にはＶ層起源の汚れ火山灰が見られる。

出土遺物はない。

ＩＶ—59ピット

遺　構（第36図：PL－22）

このピットはＩＶ—56ピットの北東方向約1.2mに位置する。平面形は開口部・底部とも隅丸方形状で、断面形は浅皿状を呈する。　底面はほぼ平坦であるが、若干凹凸があり、壁際がやや高い。壁は西側が木根等の撹乱を受けている他は直立に近い。規模は開口部の一辺が65cm、底部の一辺が55cmである。埋土は黒褐色土の単層で、Ｖ層起源火山灰を大小のブロック状に含む。

出土遺物はない。

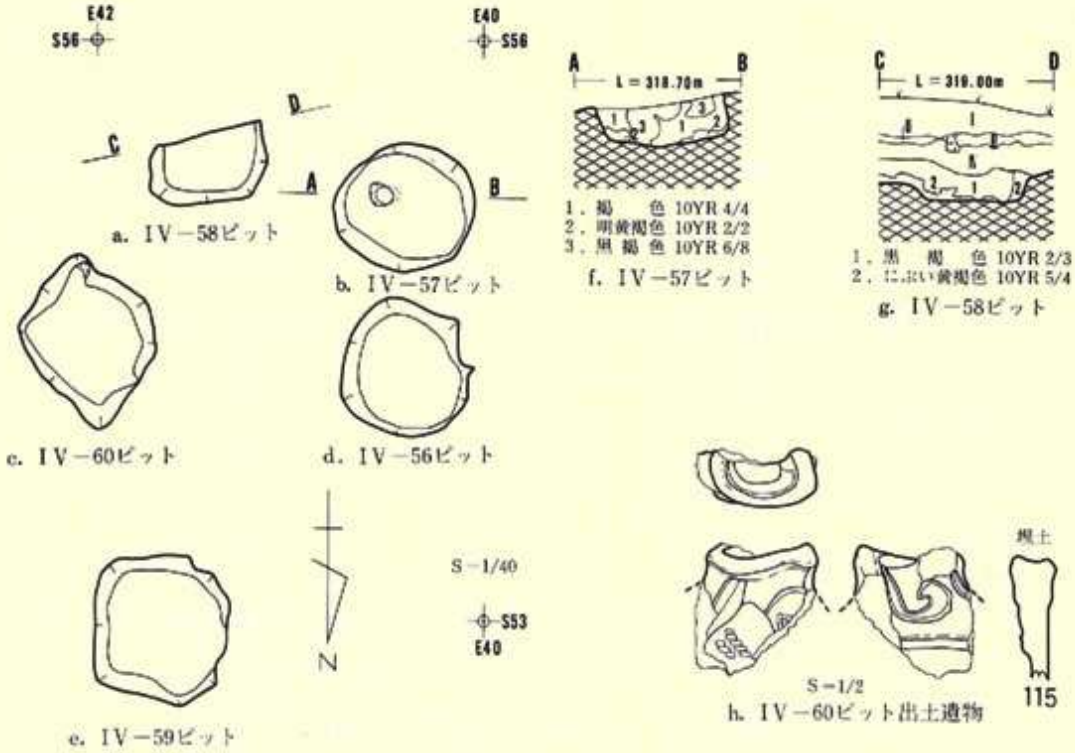
ＩＶ—60ピット

遺　構（第36図：PL－22）

このピットはＩＶ—59ピットの南隣りに位置する。平面形は開口部・底部とも隅丸方形状であるが、形状は不整である。底面はゆるやかな凹凸はあるが、ほぼ平坦である。壁は西側がゆるく外傾する他は直立に近い。断面形は浅皿形状を呈する。規模は開口部径70×60cm・底部径55×45cm・深さ8cmである。埋土は黒褐色土の単層で、Ｖ層起源火山灰を粒状・小ブロック状に含む。微量の焼土も粒状に含む。

遺　物（第36図：PL－39）

縄文土器（第36図115）　口縁部の突起部分である。頂部には粘土紐によって渦巻文を作り、外面にも粘土紐の貼りつけがみられる。内面には細い粘土紐による小渦巻文とその下位には断面が三角形の低い隆帯がみられる。中期中葉大木8a 式に相当するであろう。



第36図　ピット(5)

3．焼土遺構

E III—151焼土（第37図）

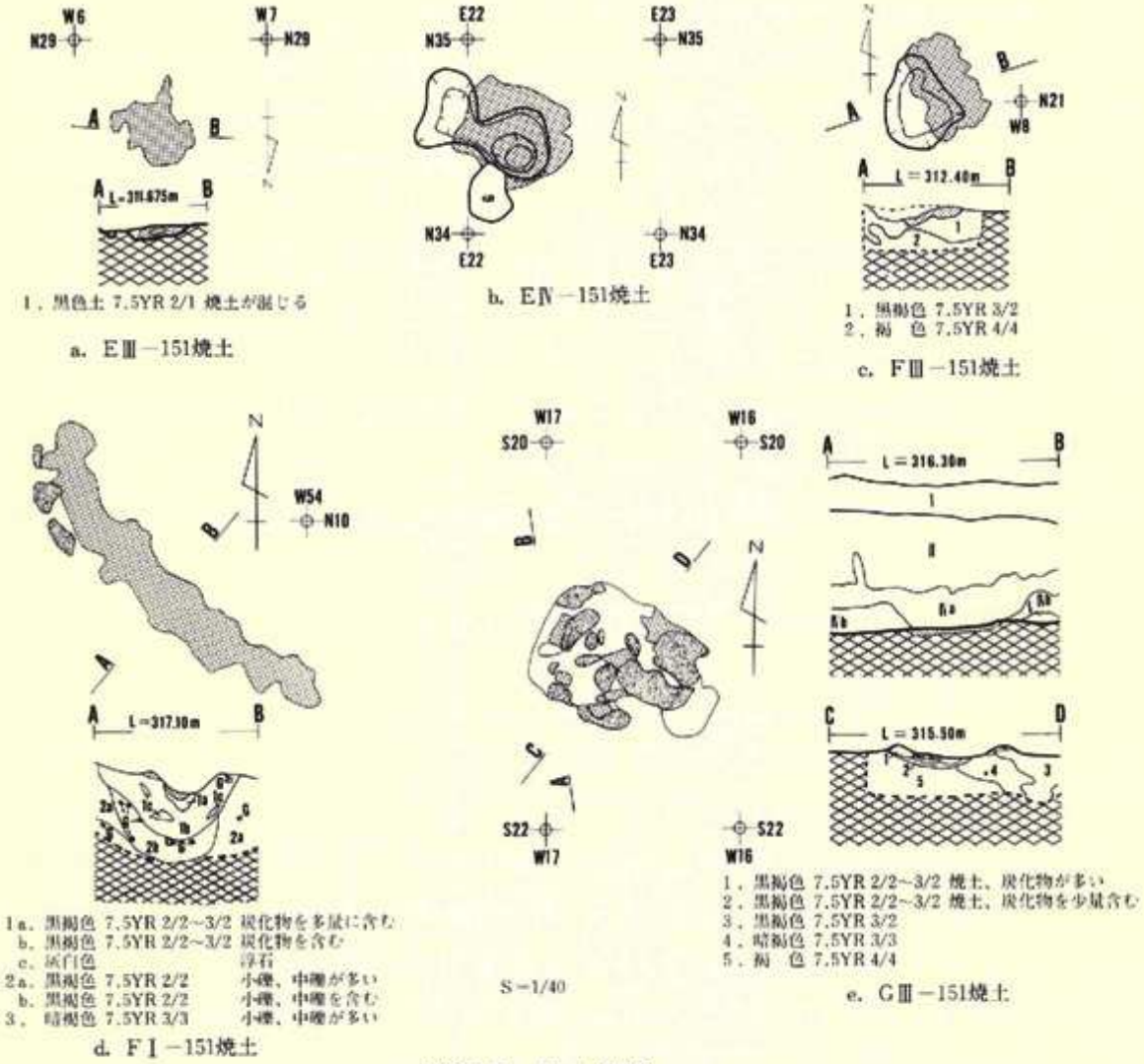
この焼土はF III—1住居址の北側、E III区柱穴群の間に位置している。焼土の広がり方は不整形で、規模は東西43cm・南北47cm・最大層厚6cmである。IV層土が直接焼成を受けており、掘り込み等はなされていない。

遺物はなく、時期・性格については不明である。

E IV—151焼土（第37図）

この焼土はE IV—52ピットの南西約2.5mに位置している。小円形ピットと、その西側に張り出すようにいく分浅い窪みがあり、焼土はそのピット全面と窪みの東半に広がる。規模は東西63cm・南北60cmである。焼土の上位には炭化物等を多く含む黒褐色土がのる。

遺物はなく、時期・性格については不明である。



第37図　焼土遺構

ＦＩ—151焼土（第37図；ＰＬ－22）

この焼土は調査区西端ＦＩ区の北東向き緩斜面の上端に位置する。付近に他の遺構はない。焼土は不整形な溝状の窪みにそって広がる。規模は長さ200cm・幅25cmである。焼土の北西端には比較的まとまった炭化物が検出され、南東端には炭化物粒が多い。焼土の下位は炭化物やブロック状の灰白色浮石を含む黒褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物はなく、時期・性格については不明である。

F Ⅲ—151焼土（第37図；PL－22）

この焼土はF Ⅲ—1住居址の西隣り、西壁から約20cmの所に位置する。不整の楕円形状の浅い窪みがあり、焼土はその窪みの東半から外側にかけて広がる。規模は東西33cm・南北50cm・最大層厚6cmである。窪みはⅣ層土を掘り込んでおり、焼土もⅣ層土が焼成を受けて形成されている。

周辺から土師器の破片が出土しているが、時期・性格については不明である。

G Ⅲ—151焼土（第37図；PL－22）

この焼土は調査区西側G Ⅲ区の北東向き緩斜面の下端に位置する。付近には農道と小沢を挟んで東側に暗渠が検出されている。周囲が馬締形状に高くなっており、焼土はその内部に炭化物と混じって分布する。規模は東西90cm・南北75cmである。焼土の上位には灰白色浮石を小ブロック状に含む暗褐色土がのる。

単独の焼土遺構で、時期・性格の詳細は不明である。

4．墓　壙

D Ⅳ—201墓壙

遺　構（第38・39図；PL－23）

この墓壙は墓壙群の中の南西端に位置し、D Ⅳ—1住居址の北壁を切っている。平面形は開口部・底部とも円形である。底面や壁には大礫・中礫が多く、底面から北西壁にかけては30cmを越す大礫がある。壁はやや外傾しているが、直立に近く、断面形はビーカー形を呈する。規模は開口部径115cm・底部径70cm・深さ43cmである。埋土はしまりの弱い黒褐色土の単層で、Ⅴ層起源火山灰を若干含む。

頭骨は落下して、顔面が底面を向く、大腿骨・下肢骨は折り曲げ、胡坐の状態である。埋葬方法は坐棺である。

遺　物（PL－40）

棺の木片と釘、それに副葬品としてキセルの吸い口・徳利・漆の皮膜が出土している。キセルはD Ⅳ—1住居址床面からの出土であるが、本墓壙に伴うものと推定される。一輪差しは頭骨のそばの東壁際から、漆の皮膜は人骨の下位から出土している。

DⅣ—202墓壙

遺　構（第38・39図；PL－23）

この墓壙はDⅣ—201墓壙の東隣りに位置し、DⅣ—1住居址の北壁を切っている。また、DⅤ—203墓壙とは北東壁開口部の間隔が15cmと近接している。平面形は開口部・底部とも円形である。底面はほぼ平坦で、壁は外傾し、断面形はバケツ形を呈する。壁の上・中部には大礫・中礫が多い。規模は開口部径140cm・底部径80cm・深さ70cmである。埋土は暗褐色土にⅤ層起源火山灰を大小のブロック状に含み、上部には亜円の大礫・中礫が多い。

頭骨の顔面は直上を向いており、大腿骨や腕骨等は折れ重なる状態である。埋葬方法は坐棺である。

遺　物（PL－40）

棺の木片と釘、それに副葬品として寛永通寶4枚・キセルの吸い口とがん首・漆の皮膜が出土している。漆の皮膜は人骨の下位から出土し、漆塗り椀の残存部と思われる状態で検出されている。

DⅣ—203墓壙

遺　構（第38・39図；PL－23）

この墓壙は墓壙群の北西端に位置し、DⅣ—204墓壙に切られている。平面形は開口部・底部とも円または楕円形と推定される。底面北東側にはその面積の約半分を占める大礫がある。壁は北側が直立に近く、他は外傾する。規模は残存部からの推定で、開口部120cm・底部85cm・深さ45cmである。埋土はしまりの弱い黒褐色～暗褐色土でⅤ層起源火山灰を若干含む。

出土人骨は西壁際からの下顎骨だけである。しかし、DⅣ—204墓壙の被葬者の頭部下位から別人の背骨の一部・肋骨の一部・大腿骨・下肢骨等が出土している。その出土状況は坐棺の胸部から上を取り去ったような状態である。両墓壙は切り合っており、この人骨が本墓壙の被葬者の可能性もある。

遺　物（PL－40）

本墓壙からの遺物はないが、DⅣ—204墓壙人骨の下位人骨に接して寛永通寶7枚が出土している。この7枚の寛永通寶は互いにはり付いていた。DⅣ—204墓壙からはこれとは別に3枚の寛永通寶が出土している。

DⅣ—204墓壙

遺　構（第38・39図；PL－23）

この墓壙はDⅣ—203墓壙の南東壁を切っている。平面形は開口部・底部とも長楕円形である。

底面はDⅣ—203と15cmの高低差があり、本墓壙の方が低い。底面や壁は礫等による凹凸が著しい。規模は開口部径155×95cm・底部径125×48cm・深さ55cmである。埋土はDⅣ—203墓壙と同じ黒褐色～暗褐色土にⅤ層起源火山灰を若干含む。

出土人骨は膝を折り曲げて南東向きに横臥し、頭骨は南西端にある。埋葬方法は臥棺である。

遺　物（PL－40）

棺の木片と釘、それに副葬品として寛永通寶3枚・鉄鍋・砥石・漆の皮膜・漆の濾し殻が出土している。鉄鍋は頭骨にかぶせた状態で、砥石と濾し殻は南東壁近くから、漆の皮膜は人骨の下位からの出土である。

DⅣ—205墓壙

遺　構（第38・39図；PL－24）

この墓壙はDⅣ—204墓壙の南東隣りにある。平面形は開口部・底部とも円形を基本とするが、不整部分が多い。底面は凹凸が著しく、南西壁際には大礫がある。壁は直立に近く、凹凸が著しい。断面形はビーカー形状を呈する。規模は開口部径95cm・底部径70cm・深さ30cmである。埋土はDⅣ—201墓壙類似のしまりの弱い黒褐色土で、Ⅴ層起源火山灰を若干含む。

人骨はDⅣ—201墓壙のものと同じような状態で出土している。頭骨は落下して顔面が底面を向き、下半身は胡坐の状態である。埋葬方法は坐棺である。

遺　物（PL－40）

寛永通寶1枚・キセルの吸い口とがん首・火打ち石・漆の濾し殻が出土している。火打ち石には布片が付着している。濾し殻はDⅣ—204墓壙出土のものと同じである。

DⅤ—201墓壙

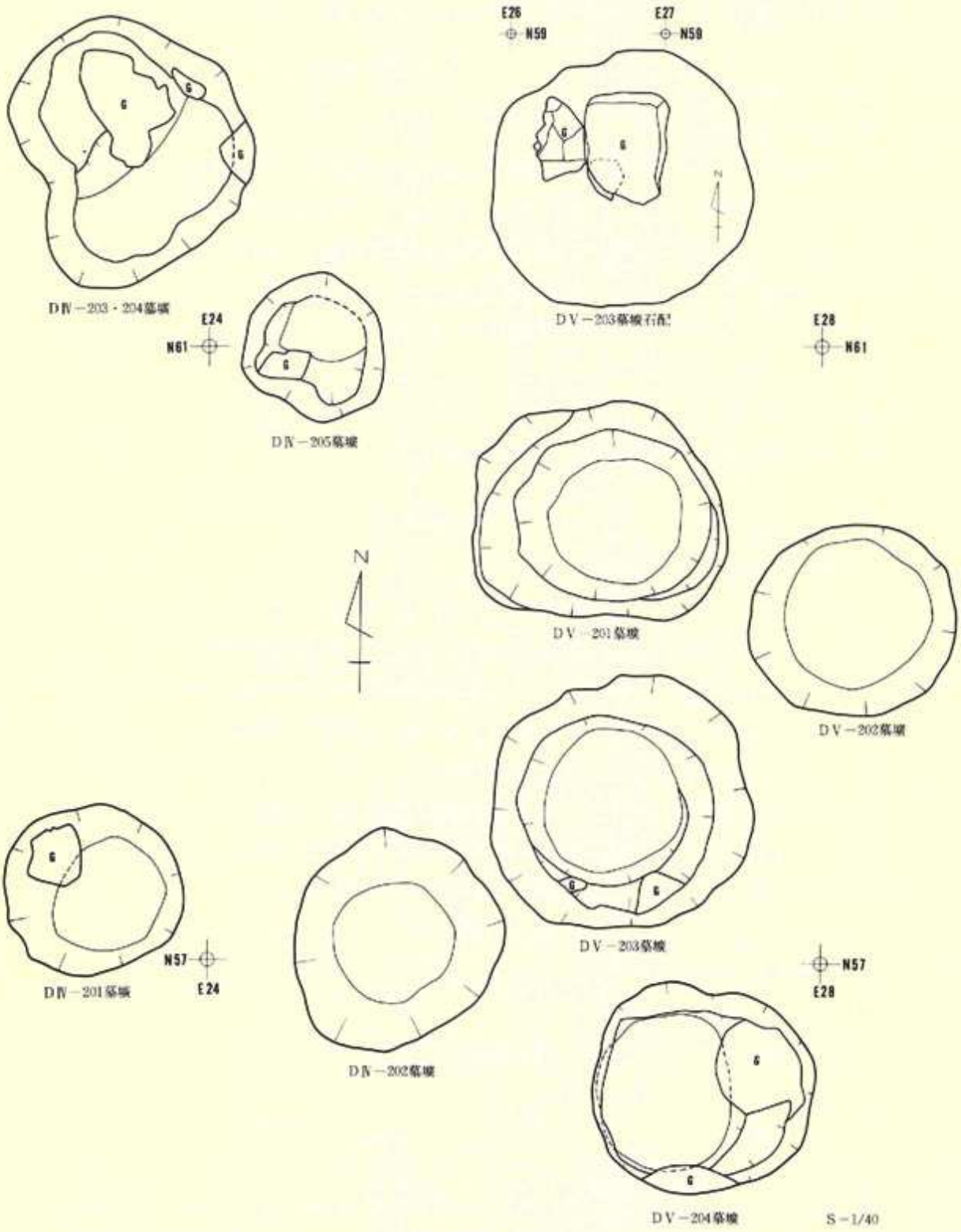
遺　構（第38・39図；PL－24）

この墓壙はDⅣ—205墓壙の南東隣りに位置し、DⅤ—202・203墓壙に近接する。平面形は開口部が東西にやや長い隅丸方形状、底部が円形である。底面は中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。壁は急角度で外傾し、開口部から30cm下位で段差を持つ。断面形はバケツ形を呈する。規模は開口部径165×135cm・底部径85cm・深さ120cmである。埋土は暗褐色土にⅤ層起源火山灰を大小のブロック状に含み、DⅣ—202墓壙に類似する。

頭骨は落下して顔面が底面を向き、大腿骨・下肢骨は膝を折り曲げ、手は組み合わせた状態で出土している。埋葬方法は坐棺である。

遺　物（PL－39）

棺の木片と釘、それに副葬品として寛永通寶6枚・キセルの吸い口とがん首が出土している。


E26
N59
E27
N59
DⅣ－203・204墓壙
DⅤ－203墓壙石配
E24
N61
E28
N61
DⅣ－205墓壙
DⅤ－201墓壙
N
DⅤ－202墓壙
DⅤ－203墓壙
N57
E24
DⅣ－201墓壙
N57
E28
DⅣ－202墓壙
DⅤ－204墓壙
S－1/40

第38図　墓壙

寛永通寶は腐食がひどく、ひとかたまりにはりついて、ほとんど原形をとどめないものもある。

ＤＶ—202墓壙

遺　構（第38・40図；PL－24）

この墓壙はＤＶ—201墓壙の東隣りに位置し、南西隣りにはＤＶ—203墓壙がある。平面形は開口部・底部とも円形である。底面は中央部がやや低いが、ほぼ平坦で、壁は急角度で外傾する。断面形はバケツ形である。規模は開口部径135cm・底部径95cm・深さ120cmである。埋土はＤＶ—201墓壙と同様、暗褐色土にＶ層起源火山灰を大小のブロック状に含む。

頭骨は顔面を南東に向け、大腿骨等は底面にほぼ直立するような状態で出土している。埋葬方法は坐棺である。

遺　物（PL－39）

棺の木片と釘、それに副葬品として寛永通寶が６枚出土している。

ＤＶ—203墓壙

遺　構（第38・40図；写真図版24）

この墓壙はＤⅣ－201・ＤＶ－201・202・204の各墓壙に取り囲まれるように、これらの墓壙の中央に位置する。平面形は開口部・底部とも円形である。底面はほぼ平坦で、壁は上部がゆるい角度で、中・下部は急角度で外傾する。断面形はバケツ形を呈する。規模は開口部径170cm・底部径90cm・深さ145cmで、検出された墓壙の中では最大である。埋土はＤＶ—201墓壙のそれに類似し、暗褐色土にＶ層起源火山灰を大小のブロック状に含む。開口部が120cm下位の地点では一辺55cmの方形状に黒色土が観察された。これは棺の輪郭の跡と推定される。墓壙の上には墓石と思われる大礫が３個検出された。１個は方形状の扁平な石で、大きさは70×55cm・厚さ15cmである。他の２個は不定形で、大きさはそれぞれ55×35cm・24×26cmである。

頭骨は横になって肋骨の上にのり、顔面は南西を向いている。胸部から下位は胡坐の状態である。埋葬方法は坐棺である。

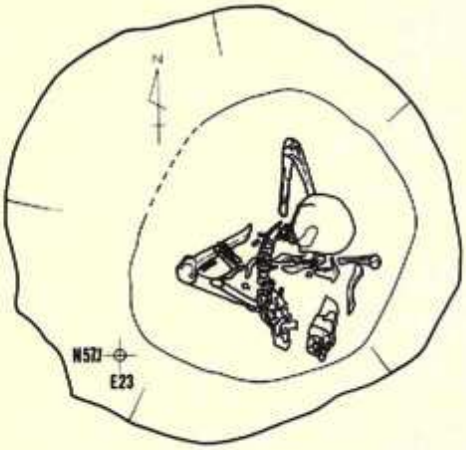
遺　物（PL－39）

棺の木片と釘、それに副葬品として寛永通寶が６枚出土している。

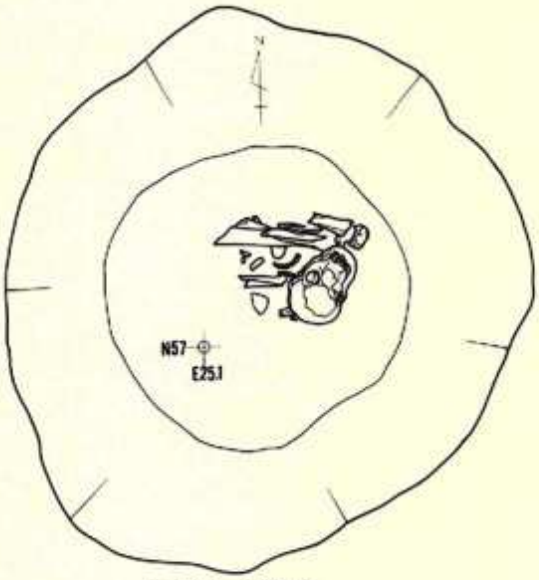
ＤＶ—204墓壙

遺　構（第38・40図；PL－25）

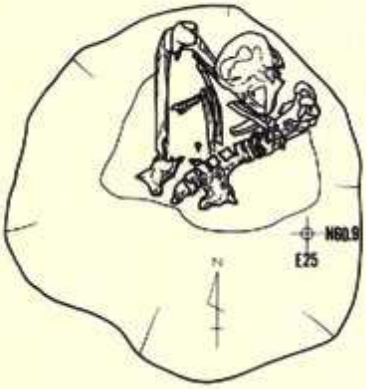
この墓壙はＤＶ—203墓壙の南隣りに位置する。平面形は開口部が東西に長軸をもつ円に近い楕円形、底部が南北に長軸を持つ楕円形である。底面は平坦だが、壁は礫等による凹凸が著し



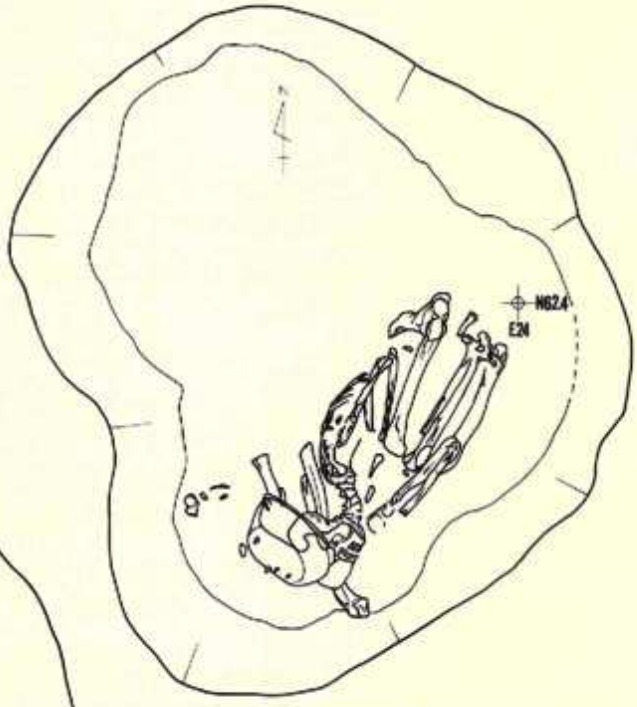
a. DⅣ－201墓壙



b. DⅣ－202墓壙

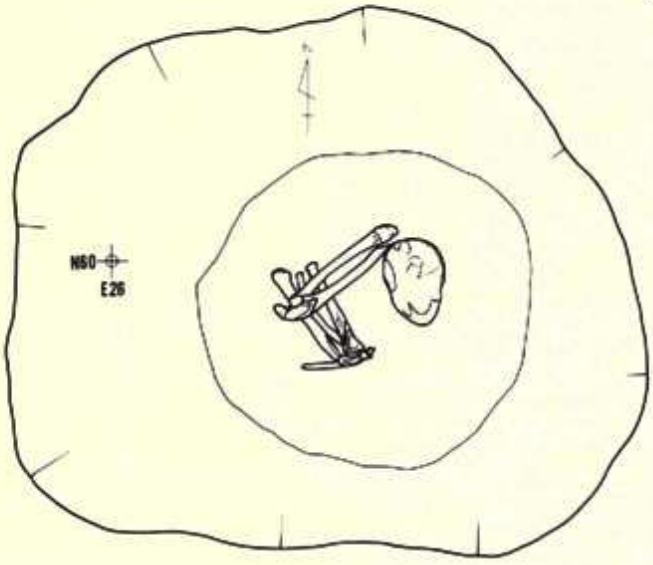


d. DⅣ－205墓壙



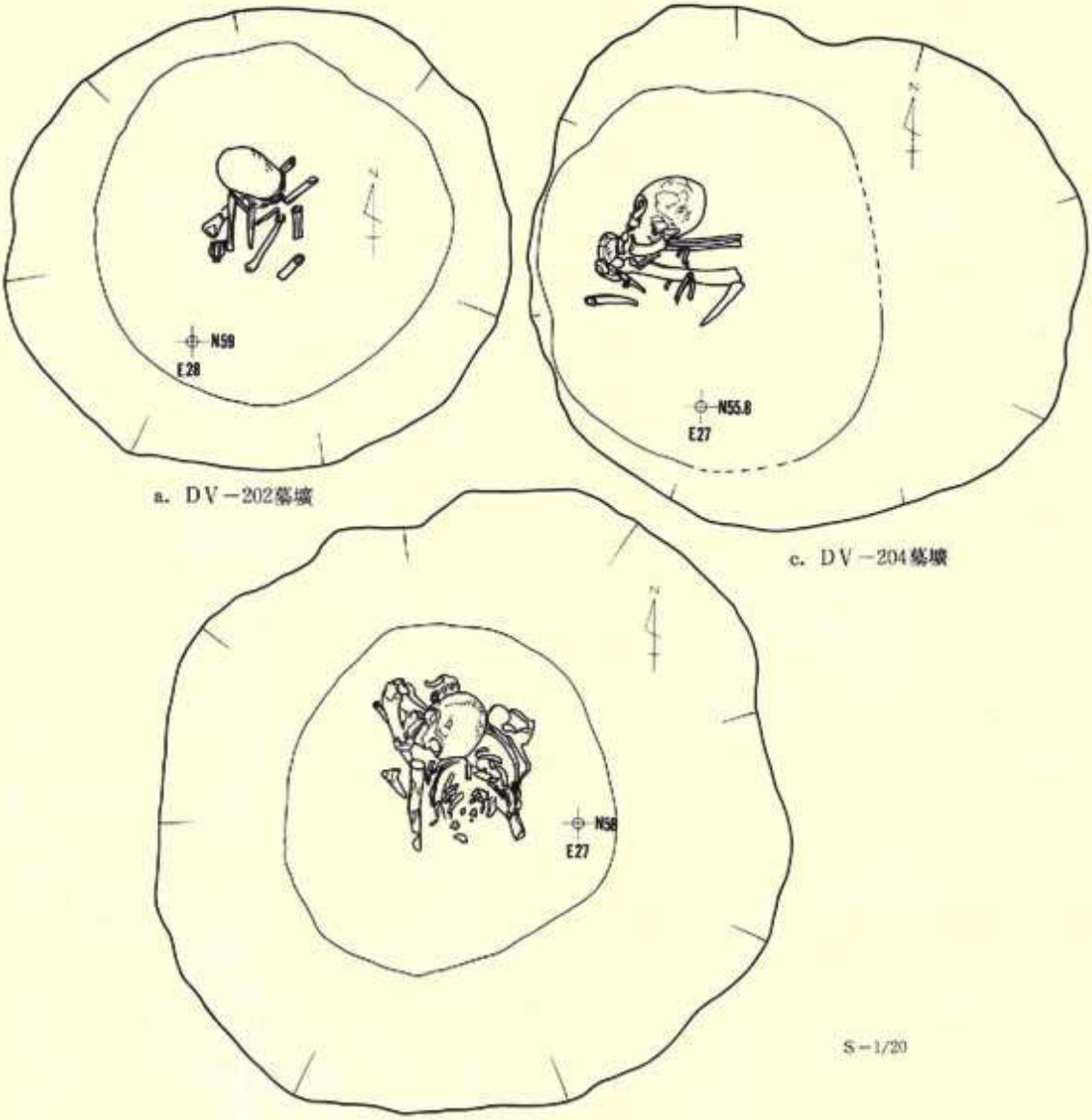
c. DⅣ－203・204墓壙

S＝1/20



e. DⅤ－201墓壙

第39図　墓壙出土人骨



a. DV－202墓壙

c. DV－204墓壙

b. DV－203墓壙

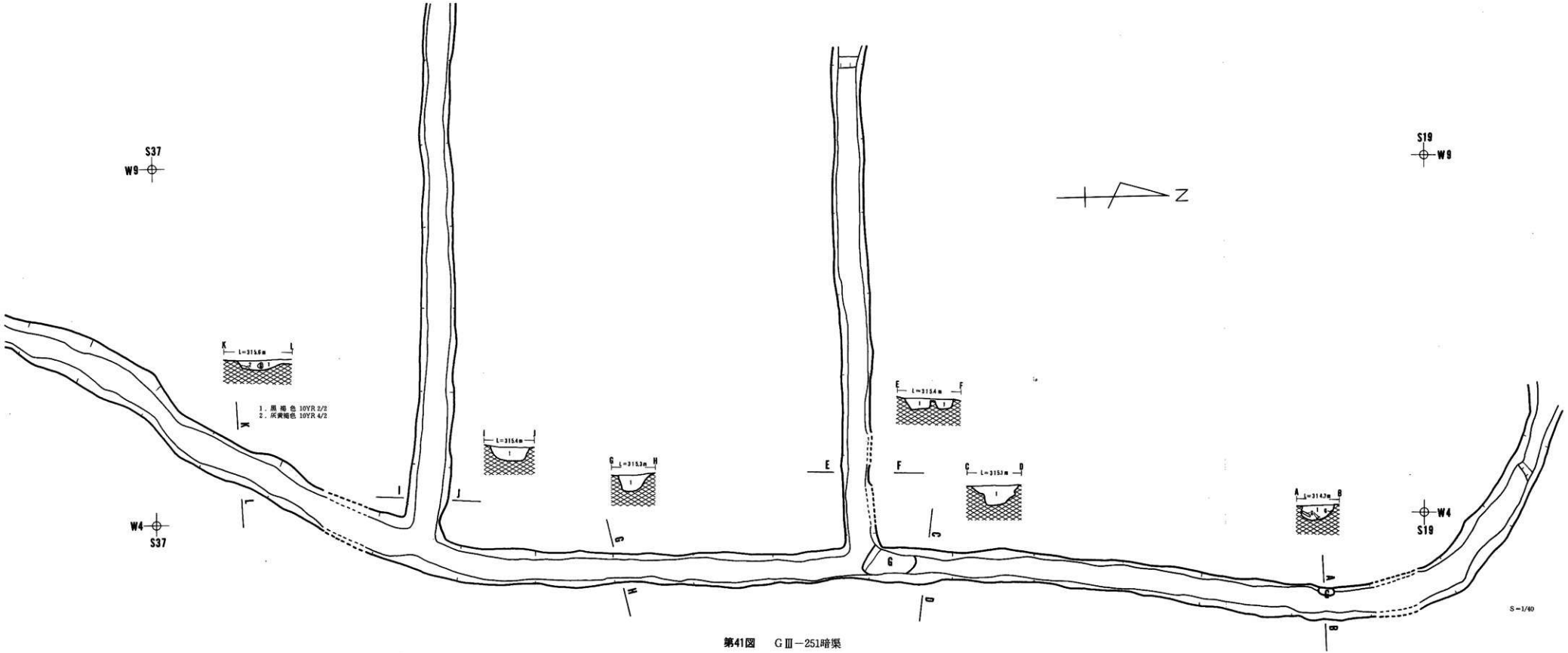
第40図　墓壙出土人骨

い。特に東壁には大礫が張り出し、その分西壁の下半を奥に抉り込んでいる。断面形は歪んだバケツ形を呈する。規模は開口部径145×130cm・底部径100×84cm・深さ130cmである。埋土はDV—201墓壙と同様、暗褐色土にV層起源火山灰を大小のブロック状に含む。

頭骨は落下して顔面は下を向き、大腿骨等は折れ重なる状態である。埋葬方法は坐棺である。

遺　物（PL－39）

棺の木片と釘、それに副葬品として寛永通寶が7枚、キセルの吸い口とがん首が出土してい



第41図　GⅢ－251暗渠

る。寛永通寶７枚のうち２枚は開口部から30cm下位の西壁際から、あとの５枚は人骨と同レベルの地点からの出土である。

５．暗渠・柱穴群

GⅢ—251暗渠

遺　構（第41図；PL－25）

本遺構は調査区中央を北流する小さい沢の東側GⅢ区・HⅢ区に位置する。検出面はⅠ層下位からⅡ層上位にかけてである。この付近はⅠ層土が沢に向かって厚く堆積し、沢近くでは50cmを越える。水路は南北方向に１条と東西方向に２条検出されている。南北方向のそれは規模が長さ24m・幅40～70cm・深さ10～30cmで、北端で流路を北西に変え、沢に注ぐ。東西方向のそれは南北方向のものとT字型に交差し、それから西方向に延びて沢に注ぐ。規模は長さが5mと７mで、幅や深さは南北方向のものとほぼ同じである。

埋土は黒褐色土の単層であるが、部分的に灰黄褐色土がブロック状・層状に入る。埋土の黒褐色土はⅡ層を切っている。

EⅢ区柱穴群

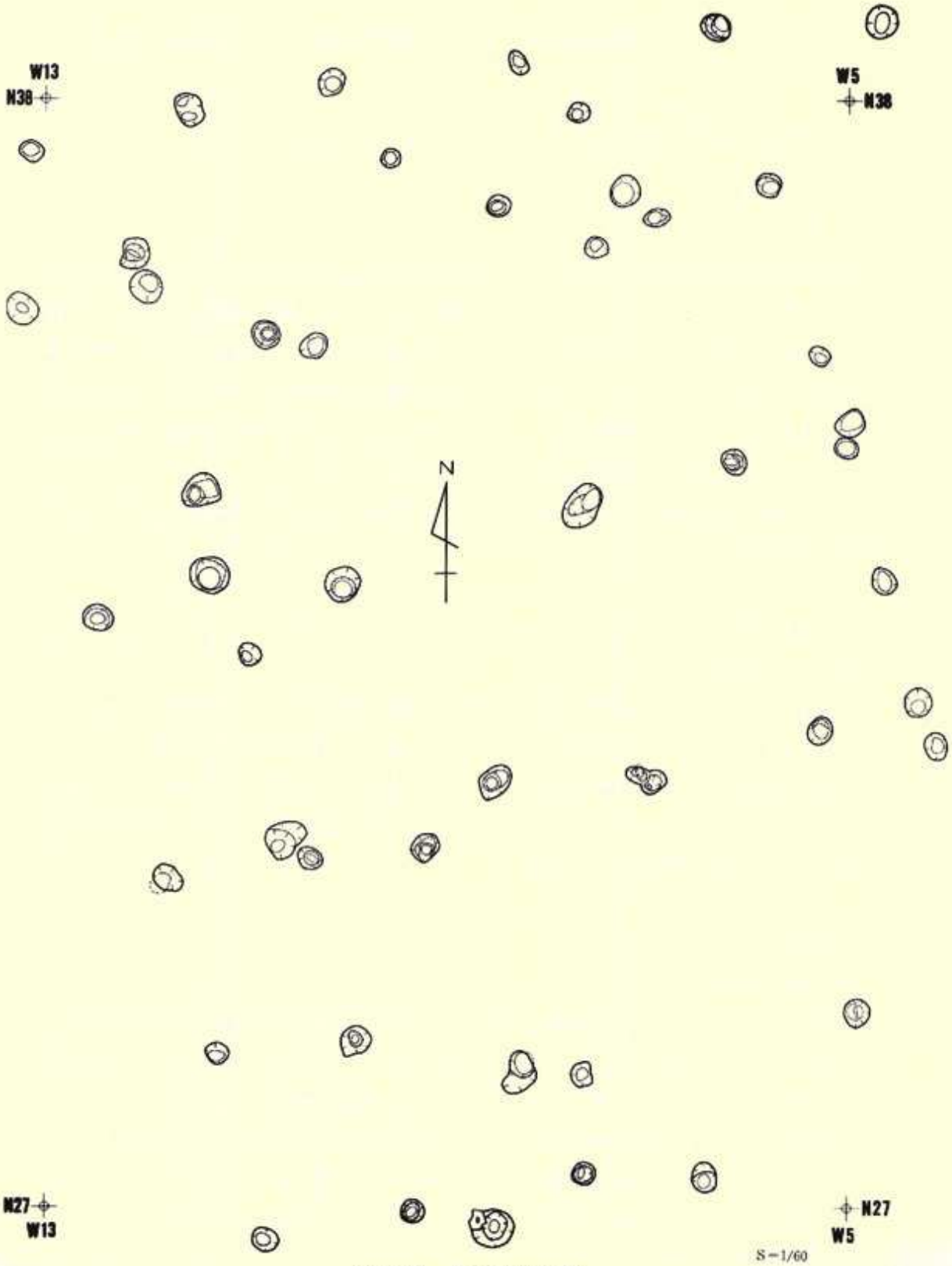
遺　構（第42図）

本遺構はFⅢ—１住居址の北隣りEⅢ区に位置し、49個の柱穴状小ピットが検出されている。規模は径20cmから40cm、深さが22cmから60cmと一様ではない。埋土は黒色土の卓越するもの、黒色または黒褐色土にⅤ層起源火山灰をブロック状に含むもの、暗褐色または黒褐色土に火山灰を粒状・小ブロック状に含むものとがある。配列は直線的に並ぶものがいくつかあるほかは不規則である。時期・性格は不明である。

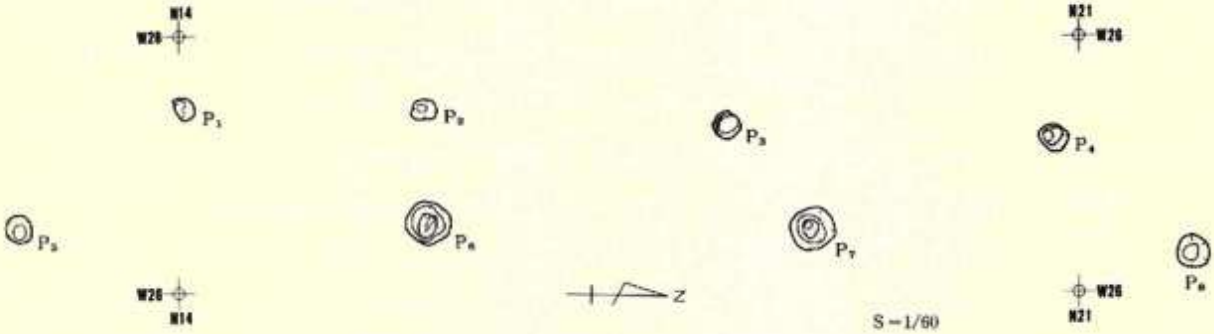
FⅡ区柱穴群

遺　構（第43図）

本遺構はFⅢ—１住居址の西約18mに位置する。柱穴状小ピットが、P_1（径17cm・深さ37cm）・P_2（径18cm・深さ26cm）・P_3（径20cm・深さ40cm）・P_4（径21cm・深さ26cm）・P_5（径20cm・深さ70cm）・P_6（径35cm・深さ37cm）・P_7（径33cm・深さ47cm）・P_8（径26cm・深さ47cm）の８個検出されている。配列は南北方向にP_1からP_4とP_5からP_8の４個づつが２列に並ぶ。ただし、P_5はP_6・P_7・P_8を結ぶ直線上からやや東にずれる。間隔はP_1からP_4の列ではそれぞれ1.88m・2.37m・2.51mで、P_5からP_8の列では3.19m・2.95m・2.99mである。また、２列間の距離は約80cmである。



第42図　EⅢ区柱穴群



第43図　F Ⅱ区柱穴群

埋土は、P_1～P_4とP_8が黒色（7.5YR2/1）土に微量の灰白色浮石とV層起源火山灰を小ブロック状に含む。P_6・P_7は掘り方をもち、柱あたりの埋土はP_1等と同じである。掘り方部分の埋土には黒色土に黄褐色火山灰が半々に混じる。P_5は黒褐色（7.5YR3/2）土で他の埋土と若干異なる。時期・性格については不明である。

6．遺構外の出土遺物

(1)　土器（第44図～第52図・PL－41～48）

a．縄文土器（第44図～第52図）

縄文土器は土師器とともに出土土器の大部分を占める。時期別には前期から晩期にわたり、なかでも後期が主体である。以下、時期別に記載していくが、後期の土器については便宜的な分類をしている。粗製土器や一部しか残っていないために詳細が不明なものは最後に一括して取り扱う。それらについても便宜的に分類をしている。

前期（第48図140～142）

140は円筒形の深鉢である。撚紐圧痕３条が口縁部にめぐるほかは横位のＬＲが施文される。胎土には少量の繊維を含む。141は文様帯を区画する低い隆帯の上に刺突が加えられ、口縁部文様は、撚紐圧痕文をはさんで上下に絡条体圧痕が施文される。胎土には繊維を含む。142は木目状撚糸文を地文にする体部破片で、胎土には繊維を含まない。以上の土器の時期は、140が円筒下層式ａ、141は円筒下層式d_1である。142も円筒下層式のｂ～ｄの型式のいずれかに入る。

中期（第44図・第48図116・143～159）

器種はすべて深鉢である。116は体部から口縁部へは直線的に外傾している。山形口縁で、口唇部隆帯は断面が三角形である。横位のＬＲが全体に施文されている。143・144は同一個体の破片である。大型の突起をもち、口唇部は肥厚している。突起部には粘土紐による楕円形の貼付

文がみられ、口唇部には斜めの撚紐圧痕が連続する。文様帯は口縁部と体部上半に限定され、平行沈線による懸垂文・横線・弧線文が地文の上にみられる。145は体部破片で、143と意匠は異なるが、類似の文様をもつ。以上の土器は中葉円筒上層式eに比定される。

146は口縁部から肩部にかけての部分で、幅広い口縁部は外反気味になる。平行沈線の間は連続刺突文で充填され、地文は縦位のＬＲである。147・148は磨消縄文にΩ状の隆帯を伴う。以上のうち、146は後葉大木９式に平行する中の平Ⅲ式、147・148は大木９式である。

120は最大径が体部にあり、口縁部はゆるやかに外反する。文様帯を区画する波状沈線が体部半ばにめぐり、上半に磨消縄文による文様が展開する。地文は縦位のＬＲである。149～157は磨消縄文による文様をもつ。149・150は波状口縁である。151・152は刺突文を伴い、152は円形区画帯が充填されている。地文は151・153が撚糸文のほかは単節斜縄文で、縦位の回転が多い。158・159は口縁部から肩部への隆帯を伴い、748では円形竹管文がその両側に沿って連続する。以上の土器は末葉大木10式である。

後期（第44図・第45図・第48図～第50図117・122・160～210）

時期別に三群に大別し、それぞれのなかで細分している。

Ｉ群：初頭から前葉に位置づけられる一群

１類．沈線による文様が体部地文の上に描かれるもの（160～163）

いずれも深鉢の体部破片である。沈線による直線的・曲線的な文様が地文の上に描かれるが、意匠の詳細は不明である。162では波状懸垂文、163では平行沈線による弧状文の内部に１個の刺突を伴う。沈線はやや幅広く、Ｕ字形の断面である。地文は160・162は無節、161・163は単節の原体の回転施文である。

２類．沈線による文様が無文の器面の上に描かれるもの（117・164～174）

器形の全体を知ることができるのは117、１点である。171～174は壺、ほかの破片は鉢であろう。117は小型の鉢である。半分以上が残る底部には縁を切る１個の抉りが認められる。本来は２個１対のものである。外面はていねいに研磨され、蛇行懸垂文ほかの文様が展開する。164～174は平行する２本の沈線による文様を主にする。164～166は波状口縁で、さらに165は折り返し口縁になる。沈線は細く鋭い。167～169はいくぶん幅広で断面がＵ字形の深い沈線が引かれる。167は口唇部にめぐる沈線の直下が隆帯気味にふくらむ。168は円形刺突文が口唇部に連続する。169は波状口縁である。170～174は体部破片である。174は無節斜縄文が一部にわずか残るが、この類に含めておく。もちいられる沈線は170をのぞいては細く浅い。164・165・171は器面がていねいに研磨されている。なお171と173は朱が外面の一部に残っている。

３類．帯縄文や円形竹管文による文様をもつもの（175～177）

いずれも鉢の体部破片であろう。175・176は帯縄文が文様を構成し、176は帯縄文の分岐点ほ

かに円形竹管文を伴う。177は円形竹管文をもつ点で176に類似する。

Ⅰ群に含まれるそのほかの土器（178～183）

1類から3類に分類できないが、時期的にはⅠ群に含まれるものについて記載する。

178は口縁部が「く」字状に外反する深鉢である。口唇に平行する沈線の下にはボタン状貼付文があり、その間は弧状や直線の沈線で結ばれる。また、体部には貼付文を起点にした斜線や垂線が引かれる。沈線は半截竹管によるもので、地文は無節斜縄文である。179は幅の広い折り返し口縁をもつ小型の鉢である。無文の口縁部には横位のＬＲで充塡された長楕円形文、体部には曲線的な磨消縄文の文様をもつ。180は無節斜縄文が地文で、沈線による長楕円形文が口縁部にみられる。181は口縁部がわずかに外傾する深鉢である。口縁部は口唇に平行する1～2条の沈線、その下方はやや幅広の沈線が無節斜縄文の上に引かれる。182・183は深鉢の頸部から体部にかけての破片である。182は口縁部が無文で、2本の平行沈線が体部とを区画するが、その狭い間には地文である横位のＬＲが残る。183は口縁部が無文になるであろう。頸部の隆帯の上には刻目文が連続する。

Ⅱ群：中葉に位置づけられる一群

1類．波状やＳ字状・弧状の沈線が懸垂するもの（184～186）

184は深鉢で、波状口縁になる。口縁部は無文で、その下位にほぼ口縁に沿う数条の平行沈線をめぐらせ、Ｓ字状の沈線文を向かいあうように垂下させている。地文は無節斜縄文である。185は懸垂するＳ字状の沈線文と平行沈線に沿う連続刻目文がみられる。地文は横位のＬＲである。186は一段おきに弧状沈線の向きを変えている。沈線の下位は磨消縄文ではなく横位のＬＲが施文される。

2類．刻目文や刺突文をもつもの（187～189）

いずれも小破片である。187は磨消縄文で、沈線に沿う連続刺突文が縄文部分に施文される。188は小型の壺の頸部から体部にかけての部分である。3条の平行沈線が肩部にめぐり、刻目文がその間を充塡する。口縁部・体部とも無文である。189は波状口縁で、刻目文は沈線で区画された口唇部に連続し、その下方は研磨されて無文である。

3類．羽状縄文をもつもの（190～194）

いずれも深鉢の体部破片である。磨消縄文による文様構成と羽状縄文を特徴とする。縄文原体は190・191が単節と0段多条、192・193は0段多条である。193は木葉状の入組文になるであろう。

Ⅲ群：末葉に位置づけられる一群

1類．瘤をもつもの（195～203）

器形の全体を知ることができる資料はないが、鉢が主である。195は内外面に縦の刻みが入る

大型の突起を含む口縁部破片である。突起部の下方に凹みのある瘤がつく。196は山形口縁で、口唇部とその下方の狭い帯縄文の部分に瘤が連続貼付される。口唇部は内面が肥厚する。

197は小型で、口縁部に向かい内湾する器形をもつ。瘤は口唇部に連続貼付されるほか、その下位にもみられる。体部文様は198とともに入組状磨消縄文である。いずれも瘤は小さく、鋭い。199～203は体部小破片で、文様の詳細は不明である。瘤は203が低く小さいほかはやや大きめである。

Ⅲ群に含まれるそのほかの土器（204・205）

1類には分類できないが、時期的にⅢ群に含まれる土器について記載する。

204は小突起を伴う深鉢の口縁部破片である。突起の内外面には縦の刻みが入る。幅の狭い横位のＲＬ帯が口縁部にあり、その下方には沈線と磨消縄文がみられる。205は小型の壺の頸部から体部にかけての破片である。ていねいに研磨されて無文で、平行沈線とともに円形の瘤状貼付文１個がある。沈線間とそれに沿って施文される連続刻目文は貼付文の上にもみられる。

Ⅰ群あるいはⅡ群に含まれるそのほかの土器（206～210）

文様からみて時期的にはⅠ群あるいはⅡ群に含まれるが、詳細は不明な体部破片である。206は平行する帯縄文をもつ。207も同様であろう。208～210は磨消縄文をもつ。

晩期（第45図・第50図123・211～221）

123は小型の鉢である。口唇端には小突起が連続し、口縁部文様は数条の平行沈線と三叉文で構成される。体部地文は横位のＬＲで、体部下端にめぐる１条の沈線以下は研磨されて無文である。211は注口土器で、212は壺であろう。研磨されて無文の器面に三叉文が沈刻されている。211は三叉文の先端部の一部がわらびて状になっている。213は鉢で、小波状口縁になる。３条の平行沈線が三叉文の下にめぐり、その下位は地文帯である。214～221は小型の鉢である。214は小波状口縁で、口縁部の文様は羊歯状文になる。215は小波状口縁、216は２個１対の小突起を口唇端に伴う。２点の口縁部文様は平行沈線と刻目文である。217～220の口縁部文様は３～４条の平行沈線文で、口唇部の裏面には１条の沈線がめぐる。217は小波状口縁である。また218は刻目文が口唇端に連続施文される。221の口縁部文様は平行沈線と工字文である。以上の土器は、123・211～213が初頭大洞Ｂ式、214が前葉大洞Ｂ－Ｃ式、215・216が中葉大洞C_1式、217～220が中葉大洞C_2式、221が後葉大洞Ａ式である。

粗製土器ほか（第44図～第47図・第51図・第52図118・119・121・127～129・131～139・233～267）

ここでは粗製土器のほか、実測図を掲載した無文土器や部分的な残存のために詳細が不明な一群を記載するが、便宜的な分類群を設定する。

１類．網目状撚糸文を地文にするもの（232～235）

232～235は深鉢の破片である。232は折り返し口縁である。

2類．折り返し口縁をもつもの（118・122・236～240）

118は小型の鉢である。全体が研磨されて無文である。122は口縁部から体部上部が残っている。肩部には1条の撚紐圧痕がめぐる。折り返し口縁の部分と口唇端・体部には横位のＬＲが施文され、頸部は無文になる。236～240は深鉢の口縁部破片である。238・239は波状口縁である。239は折り返し口縁の下端に沿って浅い沈線がめぐる。いずれも地文は無節や単節の斜縄文である。

3類．撚紐圧痕が口唇部にめぐるもの（241・242）

241・242は深鉢の口縁部破片である。ともに1条の撚紐圧痕が口唇部外面にめぐる。241は単節斜縄文が口唇端に回転施文されている。241はこの部分では無文、242は無節斜縄文が地文である。

4類．口縁部に無文帯が形成されるもの（243～252）

243～248は口唇部が研磨され、狭い幅で無文になる。243～246は単節、247は0段多条、248は複節の斜縄文が地文である。249・250は1条の沈線が口縁部にめぐり、口縁部はいくぶん幅の広い無文帯になる。2点とも口縁部は外反する。地文は249が斜位、250が縦位のＲＬである。251は体部から口縁部へは直立する器形をもつやや小型の深鉢である。小波状口縁で、沈線で区画された口縁部無文帯はいくぶん幅が狭い。横位のＲＬが地文で、内面はていねいに研磨されている。252は小型の深鉢である。口縁部は外反するが、沈線を伴わない。

5類．羽状縄文が地文であるもの（253・254）

253・254は深鉢の口縁部破片である。253は0段多条、254はＲＬとＬＲの横回転である。

6類．山形口縁や口唇端に小突起を伴うもの（255～257）

255は口唇端に低い山形の小突起が貼付される。256は山形口縁である。口縁部は一部が研磨されて無文になるほか、体部地文と同じＬＲが口唇端に回転施文される。257は2個1対の低い山形口縁になるものであろう。口縁部はやや幅広の無文になる。

7類．底部に網代痕を伴うもの（131・132・266・267）

131・132は底部と体部下端が残っている。131は縦位のＬＲ、132は斜位のＬＲが地文である。266・267は底部破片である。

その他（119・121・127～129・131～139・258～265）

上述の1類から7類に分類することができない土器について記載する。119は小型の鉢である。横位と縦位のＬＲが地文で、口唇上端にも施文されている。121は壺である。体部に最大径があるが、細身で小型である。外面はていねいに研磨され、無文である。127は底部を失っている。128はいくぶん小型である。ともに深鉢で、体部から口縁部にかけて内湾する器形をもつ。地文は、127が横位のＲＬが主で一部に綾絡文を伴い、128は横位のＬＲである。133～138は底部を

含む体部下端が残っている。134は器壁が2cmと厚手である。135は底部がわずかに張り出している。136～138はいくぶん小型である。136は1条の沈線が下端にめぐる。137・138は底部がわずかに張り出し、揚げ底様になる。いずれも単節斜縄文が地文である。139は高台部である。小型で、研磨されて無文である。258～263は単節斜縄文が施文されただけの口縁部破片で、地文は横回転が主である。258は体部地文のLRが口唇上端にも回転施文される。263は小型の鉢である。264は口縁部が外反し、横位のＬＲが1.3cm幅で口唇部に施文されるが、その下位は無文である。265は甕である。口縁部は直立気味で、頸部から体部にかけて膨らんでいく。口縁部は研磨されて無文で、口唇部の内面には1条の沈線がめぐる。129は甕である。最大径は外傾する口縁部にあり、体部上半がわずかに膨らむ。磨耗が著しいが、単節斜縄文が地文である。ここに含めたが、この129は弥生土器である可能性が強い。

b．弥生土器（第45図・第46図・第50図・第51図）

弥生土器の出土数量は少ない。便宜的な分類にしたがって記載する。

Ｉ群：沈線による文様をもつ一群

1類．半載竹管による沈線文と刺突文による文様をもつもの（225～228）

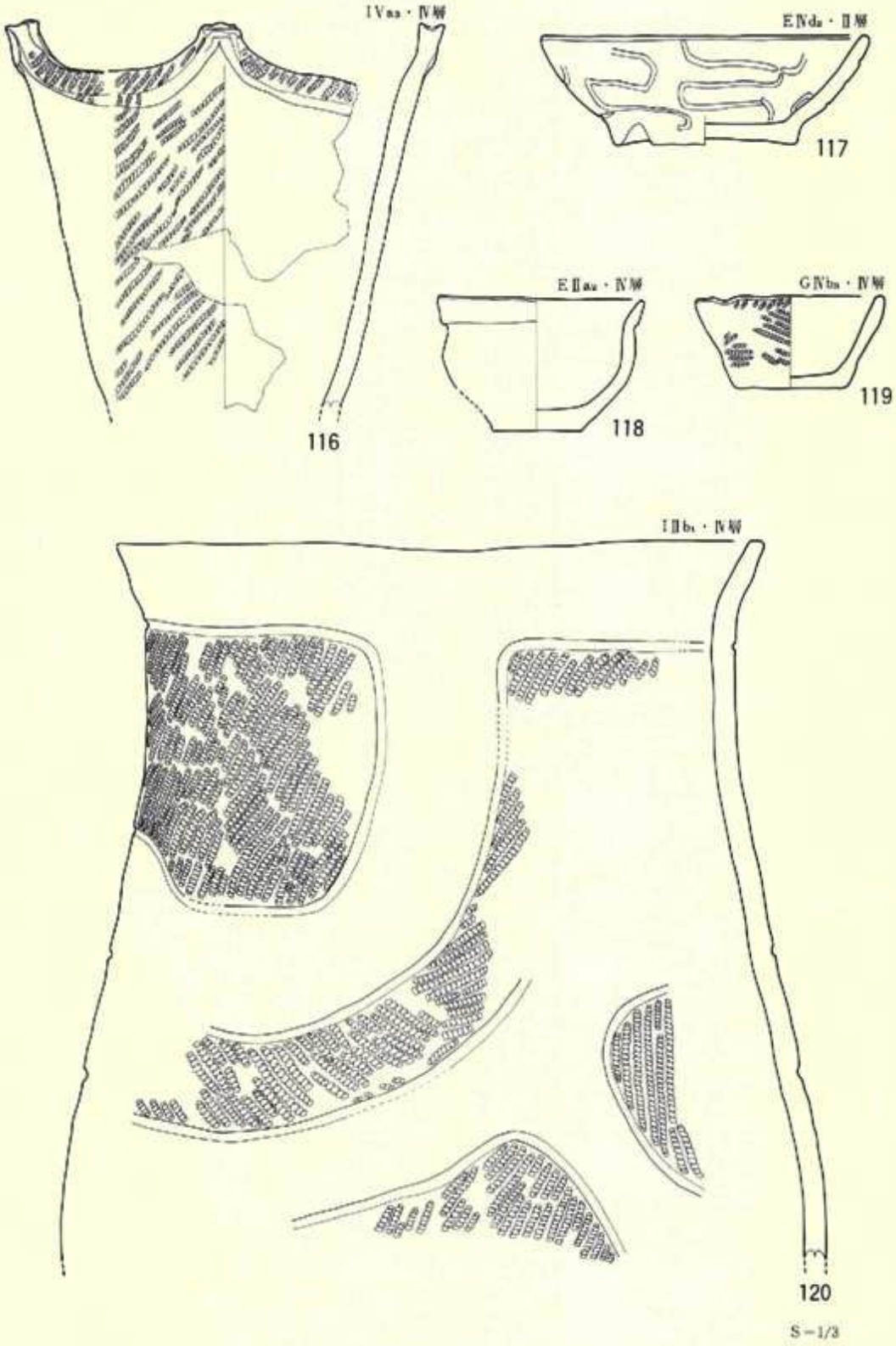
225～228は同一個体の破片である。半載竹管による沈線文と同じ工具の内側を押しつけた刺突文が文様を構成する。228には（重）三角形文のなかに二重の円文、225には入組状の文様が施文される。沈線・刺突文が施文される部分の多くは無文であるが、225・226には単節斜縄文がみられる。色調は浅黄橙色でやや軟質である。器厚は5mmと薄い。器種は不明であるが、壺になるかもしれない。

2類．連続山形文のほかの文様をもつもの（222～224）

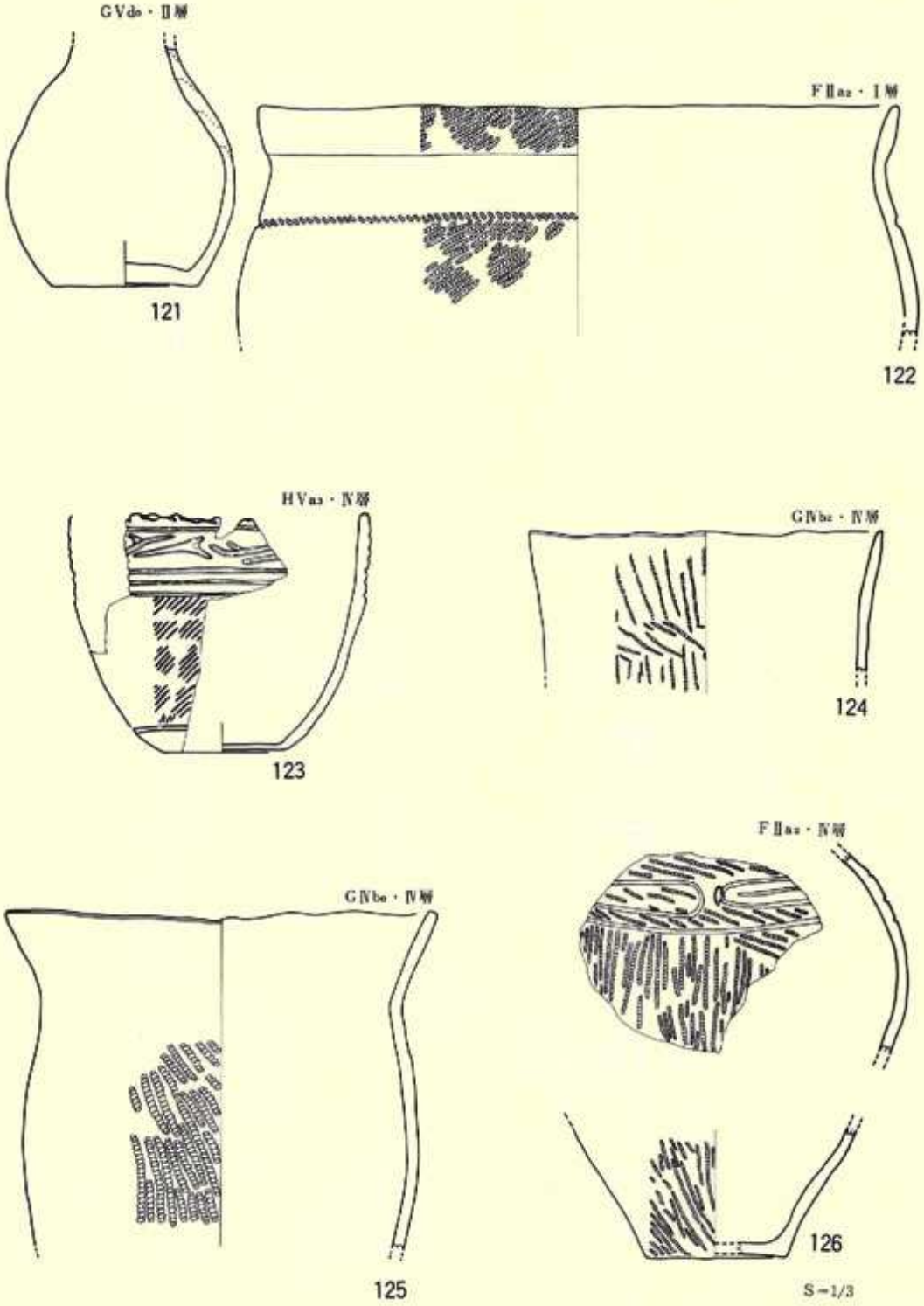
222は甕の頸部から体部にかけての破片である。口縁部はいくぶん外傾する。口唇部を含む部分を失っているために詳細は不明であるが、頸部には2条の平行沈線がめぐり、それにはさまれた部分には連続山形文が施文される。体部文様は磨消縄文である。器厚は5mmで、胎土には粗砂を多く含むが、焼成は良い。223は内湾気味の器形をもつ。3条の平行沈線がめぐり、その下位は長目の連弧文、上位は三角状文が文様を構成する。器厚は5mm、焼成は良好である。外面には煤が付着しており、甕の体部かもしれない。224は壺の口縁部破片であろう。いくぶん内湾気味になり、器厚は5mmであるが、口唇部へ向かい次第に薄くなっている。2本の平行沈線による連続山形文とその下位には連弧文がみられる。色調は浅黄橙色で、軟質である。

3類．変形工字文をもつもの（226・229）

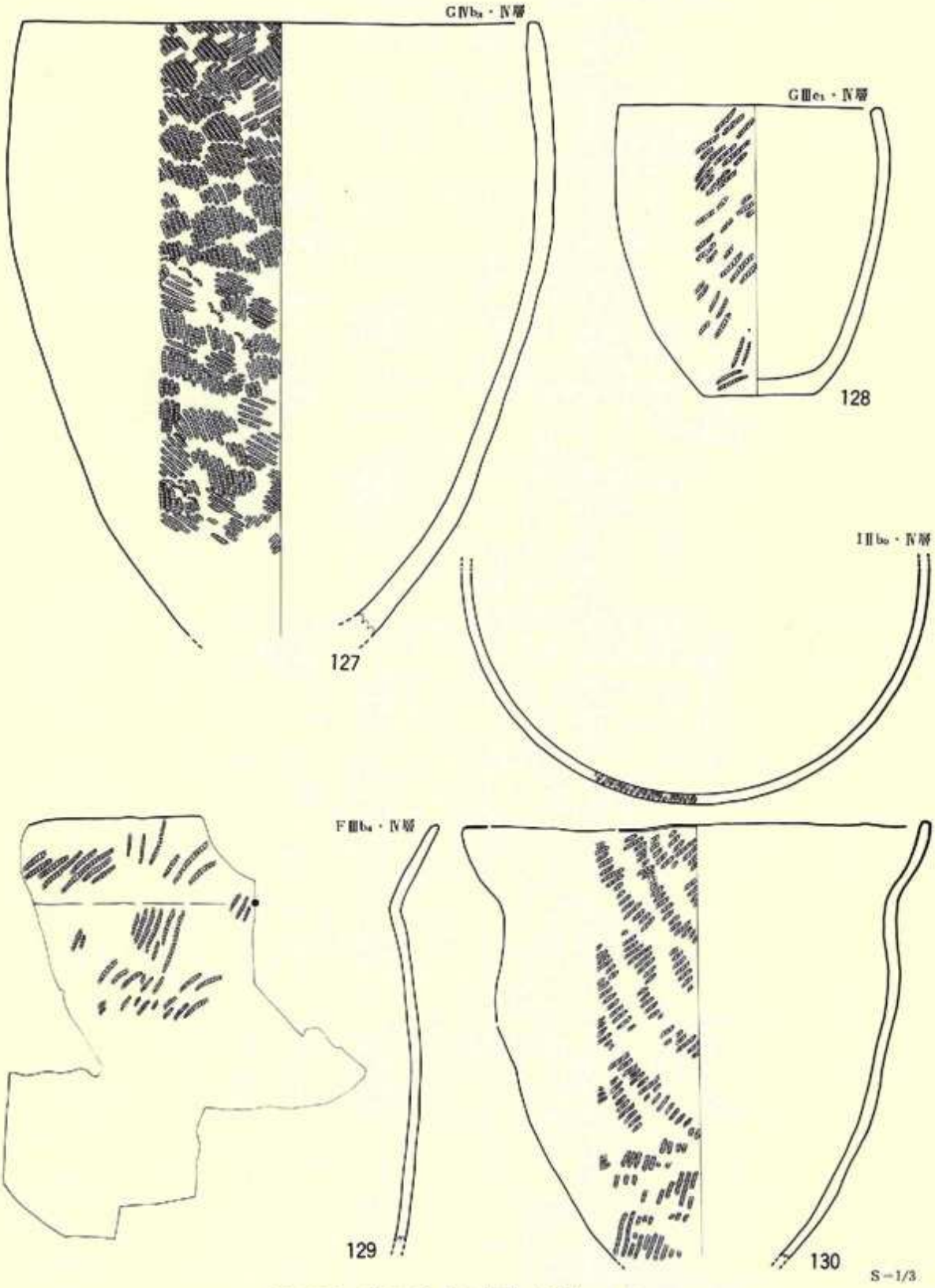
126は口縁部を失った壺である。肩部の文様帯は沈線によって体部地文帯とは区画されている。変形工字文が隣り合う境には縦長の刺突文1個が加えられる。地文は斜位と縦位の撚糸文で、斜位の施文は文様帯に限定されている。229は接合しないが、126の頸部から肩部にかけて



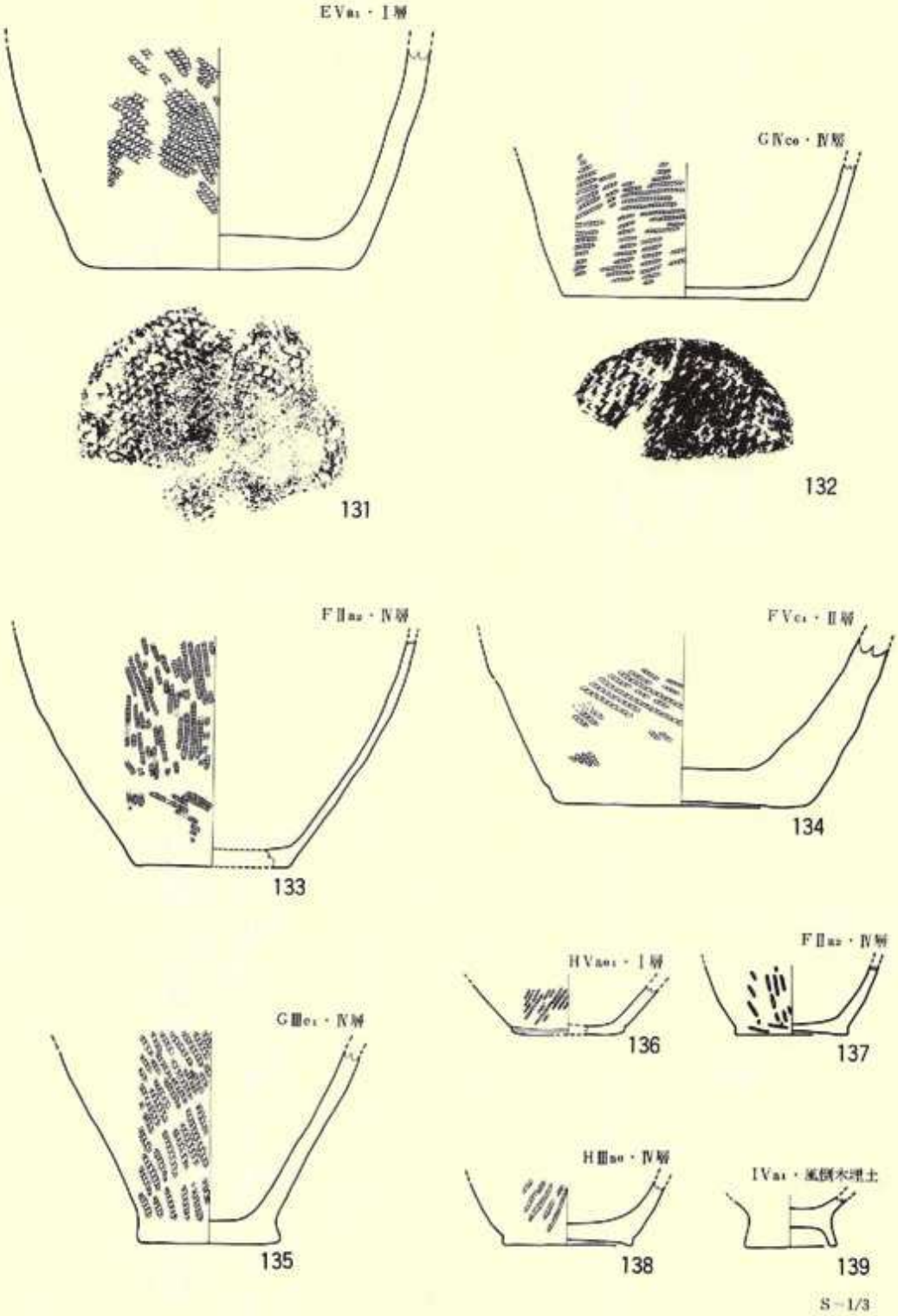
第44図　遺構外出土遺物(土器－1)



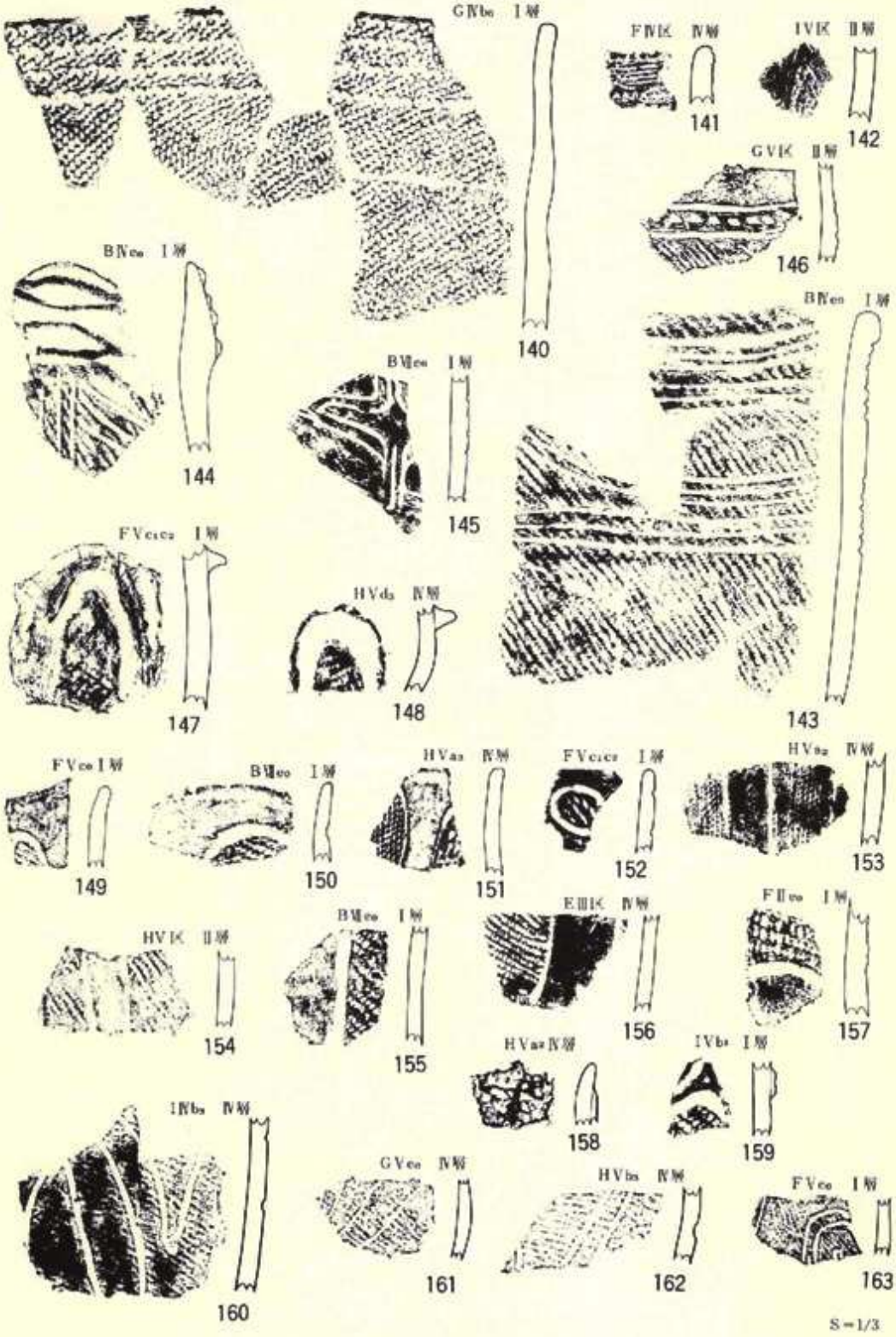
第45図　遺構外出土遺物(土器―2)



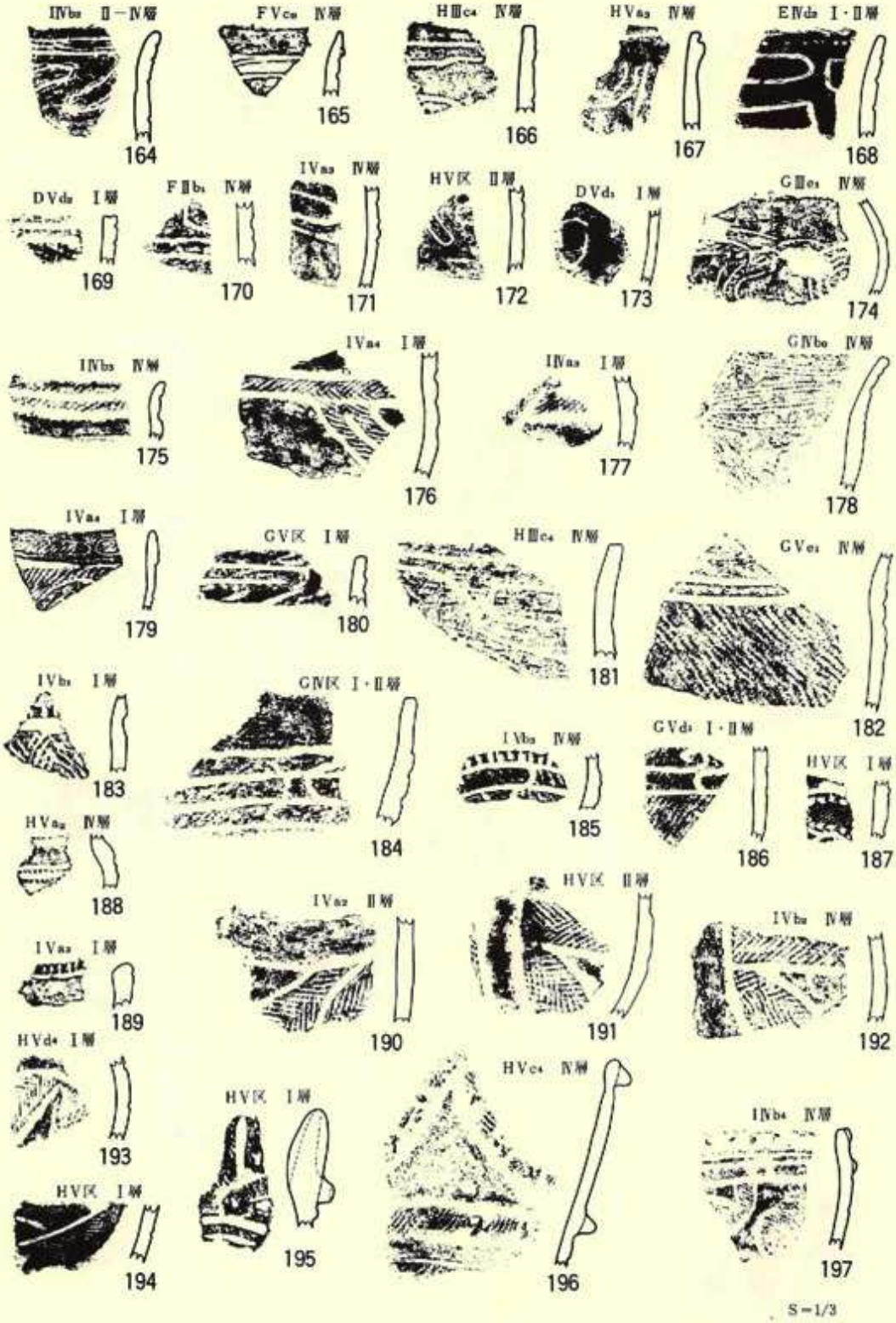
第46図　遺構外出土遺物(土器－3)



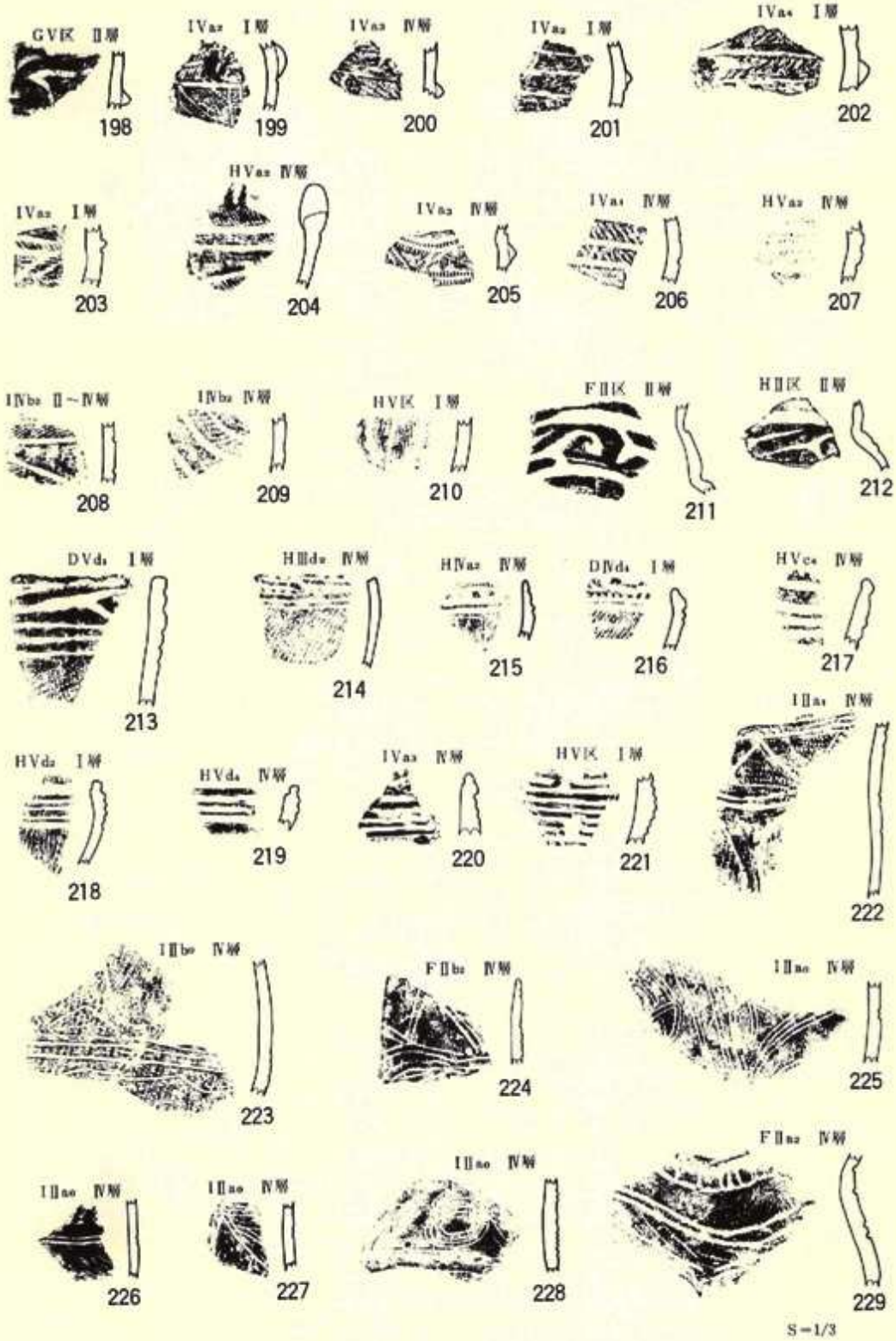
第47図　遺構外出土遺物(土器―4)



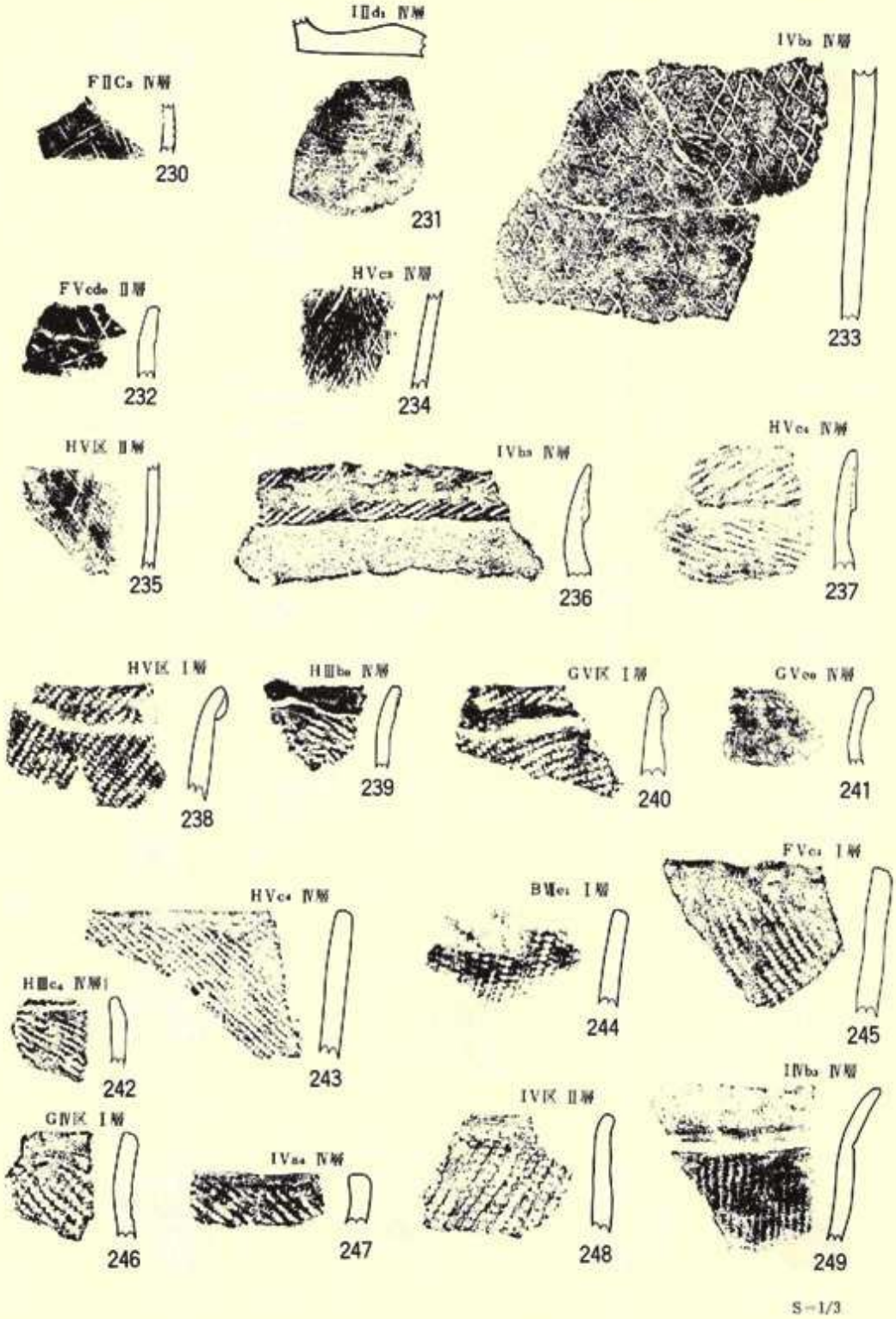
第48図　遺構外出土遺物－土器(5)



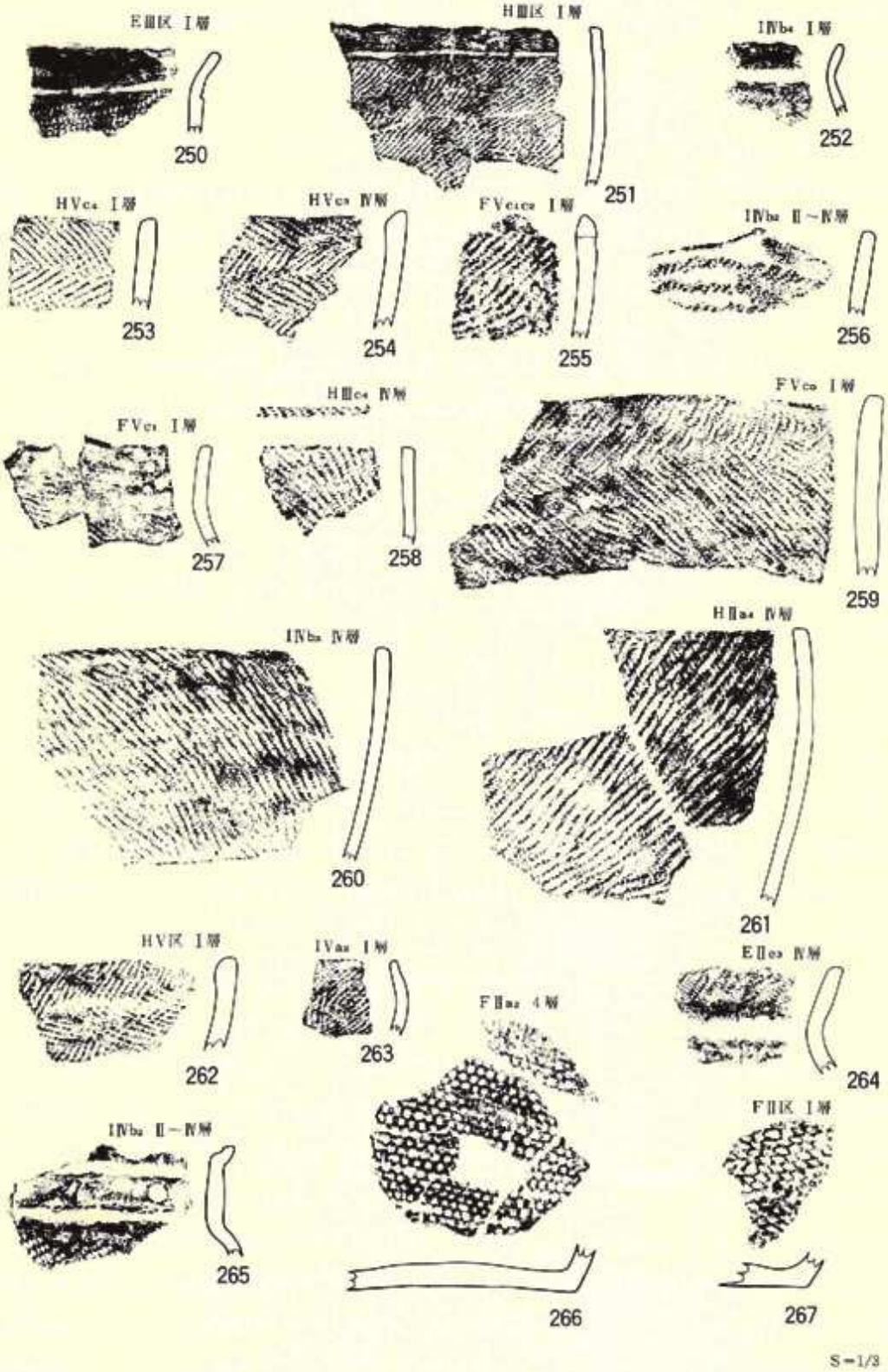
第49図　遺構外出土遺物－土器(6)



第50図　遺構外出土遺物－土器(7)



第51図　遺構外出土遺物－土器(8)



第52図　遺構外出土遺物－土器(9)

の部分である。頸部には2条の平行沈線がめぐり、内部は太いヘラ状工具による縦位の不規則な刻目文で充塡されている。器厚は5㎜で、焼成は良好である。

II群：地文以外の文様がみられないもの

1類．撚糸文が地文のもの（124・230・231）

124は壺である。不規則な波状口縁で、口縁部と体部には縦位、頸部には斜位の撚糸文が施文される。内外面には朱が付着している。色調は浅黄橙色で軟質である。器厚は5㎜である。230は細い撚糸文が斜行する体部破片、231は底部外面の中央部に撚糸文が施文されている。

2類．縄文が地文のもの（125・130）

125は口縁部を含む体部上半が残る甕である。外傾する口縁部に最大径があり、体部は上半がいくぶん膨らむ器形をもつ、幅の広い口縁部は無文で、体部には横位のＲＬが施文される。胎土には小礫を多く含み、焼成は良好である。130は甕である。最大径がある口縁部はゆるやかな内湾気味になり、体部は上半から底部に向かって急傾斜でせばまっていく。地文は縦位のＲＬで、同じ原体は口唇上端にも回転施文される。内面の口唇部には、直径2㎜の円孔が32～45㎜の間隔で施されているが、表面には貫通していない。口縁部は約1／2周を欠き、現存しているのは8個である。

(2) 石器（第53図～第59図・PL－49～53）

a．剥片石器（第53図～第55図268～313）

268～277は石鏃である。268～275は有茎で、凹基有茎式石鏃である271をのぞいては凸基有茎式石鏃に分類できる。272は先端部、273～275は茎部の一部を破損している。273はタール状付着物が茎部に残る。調整は、268～273が両面加工であるのに対し、274は一次剥離面を裏面に残し、275の裏面は周辺加工である。276・277は無茎で、276は平基、277は円基である。277の裏面は周辺加工である。

278・279・281は横形、280・282・283は縦形の石匙である。278の刃部は小剥離痕が連続する。283は浅いが抉入部をもつことから石匙とした。278・280・282・283は小型である。

284～293は削器である。284は凹刃、285は凸刃の削器である。284は短かい刃部が反対縁にも作られ、それに連続する小剥離痕がみられる。287・288は複刃削器である。それぞれが凹刃と直刃の刃部をもつ。286は規則的な2次加工が裏面から周辺部に施されているが、剥離痕は奥行きが浅く小さい。289は主に裏面から2次加工された刃部が右側縁に形成され、小型である。290は破損している。刃部へは裏面から2次加工し、急傾斜であるが規則的な剥離痕が右側縁にみられる。291は凹刃である。反対縁にはノッチ状の刃部がある。292は規則的な2次加工が周辺部に連続する。293は横形削器の破片で、急傾斜の2次加工が刃部に施されている。294～296は側縁が2次加工されているが、剥離痕の奥行きは浅く、小さい。削器状の石器である。297は掻

器である。裏面からの2次加工は刃部から両側縁部にも連続する。

298は1個、299は2個の刃部をもつ抉入石器で、刃部への2次加工は奥行きが浅く小さい。300は尖頭部を含む周辺部全体、301は尖頭部をはさむ両側縁の一部が2次加工された尖頭石器である。302は4個2対、303は2個1対の刃部をもつピエス・エスキーユで、302の裏面では2個の刃部が互いに接している。304・305は折断石器で、304は基部を折断して両側縁、305は基部と先端部を折断して1側縁を刃部にしている。306～308は彫器（高橋、1982）である。306は折り面・古剥離面交差型、307は折り面交差型、308は非折り面型尖頭形である。306・308は樋状の剥離痕1条が裏面から生じている。309～312は2次加工痕をもつ不定形石器である。310は小型で、両面が奥行きの深い剥離面に覆われている。311は奥行きが深く規則的な2次加工による刃部を一辺にもち、削器の仲間かもしれない。313は異形石器といわれるもので、両面からの2次加工が周辺部に連続する。抉入石器の類であろう。

b．磨製石斧（第55図・第56図314～320）

7点のうち完形品は314と316の2個で、ほかは破損している。314・316は刃部がいくぶん偏刃気味で、側面形は両凸刃である。314は研磨されない粗割りの面を多く残している。315は基端を失っている。小型で薄い。刃部には剥落がみられる。317は刃部が残っている。円刃で、側面形は両凸刃である。318～320は基端を含む基部が残存している。318・320は尖基、319は平基である。

c．礫石器（第56図～第58図321～329・331）

321・322は卵形の磨石である。322はいくぶん扁平で、両面が使用面である。323はやや扁平な亜円礫で、敲打による破砕痕が一端に、その反対縁には平滑面が生じた敲石と磨石の複合石器である。324～329・331の7個は凹石である。324は扁平な亜円礫の中央に小さな浅い凹み1個がある。328・329は亜円礫の平坦な一面に2個の凹みがあり、329は互いに接している。327・331は扁平な亜円礫で、複数の凹みが複合する形で両面にみられる。325は断面が三角形状の亜角礫で、三面それぞれに計7個、326は断面が不整な凸辺方形で、四面それぞれに計7個の凹みがある。

(3) 石製品（第58図330・332～337；PL－53）

330は両端と面の一部を破損している石棒である。器面はていねいに研磨され、刻線がめぐる。線は1条が一巡するほか、その上下にも刻線され、2～3条になる部分もある。337は完形の石棒で、折れて二分していたものが接合した。研磨され、断面は円に近い形状を示す。長さは40.8cm、直径は11.2cmである。336は石剣の破片である。全面が研磨され、両側縁はやや鋭利である。石質は粘板岩である。334は円盤状石製品で、周辺部を打ち欠いて成形している。332は砥石で、断面形がU字形の浅い使用面が片面に形成され、裏面には擦痕を伴う。333はスレートが素材で

ある。厚さ3㎜の破片で、一定方向の擦痕が両面に著しい。335は15㎜×24㎜、厚さ4㎜を測る平行四辺形の石製品である。表面は擦痕を伴う平滑面であるが、裏面には自然面を残す。側面はいずれも加工され、一部には擦痕がみられる。333・335の器種は不明である。

(4) 土製品（第59図338～342；PL－54）

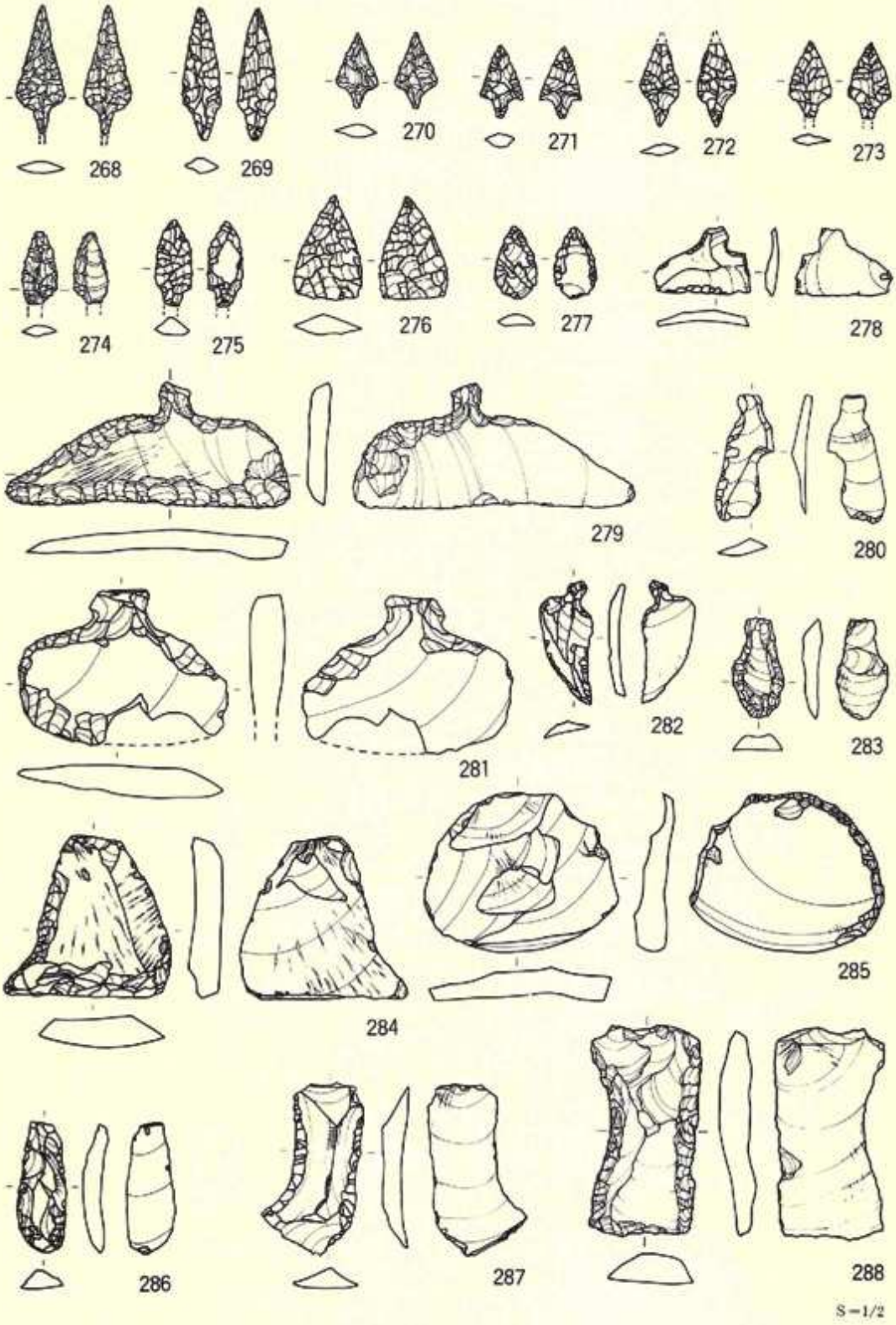
338は円盤状の土製品で、半分を失っている。直径2㎝、厚さ0.6㎝と小型である。中央からわずかに端に寄った部分に両面を貫通する小孔がある。339は土偶で、腹部を中心とした破片である。腹部にはかすかな膨らみが表現され、円形刺突文が縦1列に3個、それからやや離れた上方に斜位刺突の1個、計4個がみられる。340は一端を失っている。丸棒状で、断面は2.7×3.3㎝の楕円形である。器面はていねいに研磨され、直径2㎝の円形のくぼみが末端寄りの一面にある。土偶の脚部の可能性もあるが、確実ではない。341は土玉である。直径は1.4㎝である。342は土器の破片を利用した三角形の板状土製品である。周縁部を研磨されている。土器は円形竹管文が上に連続施文された隆帯とそれに沿う浅い沈線による文様をもつもので、縄文時代後期前葉に位置づけられる。

(5) 陶磁器（図版・写真省略）

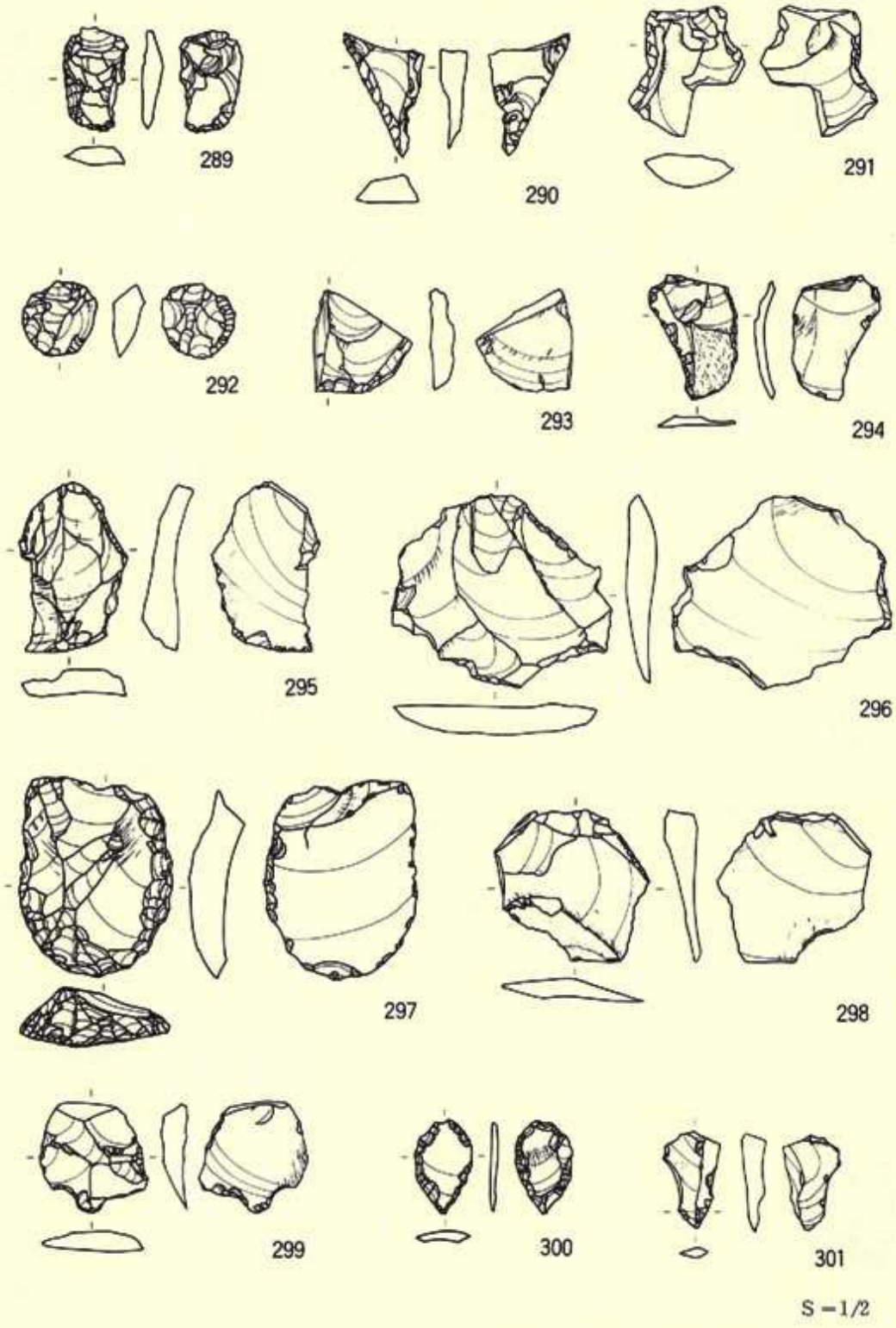
粗掘り段階で3片の陶磁器小破片が出土している。陶器はＨＶ区とＤＶａ2の表土層から甕と思われる体部破片と皿あるいは碗の底部破片が出土している。甕は灰釉陶器であるが2次焼成を受けている。皿あるいは碗の小破片は灰釉または透明釉の釉薬を施している。どちらも近世以降のものと思われる。磁器は青磁の小破片がＦⅢ－1住居址付近から出土している。碗の体部小破片で、中世後半の頃のものと思われる。

(6) 鉄器（第59図343～345；PL－54）

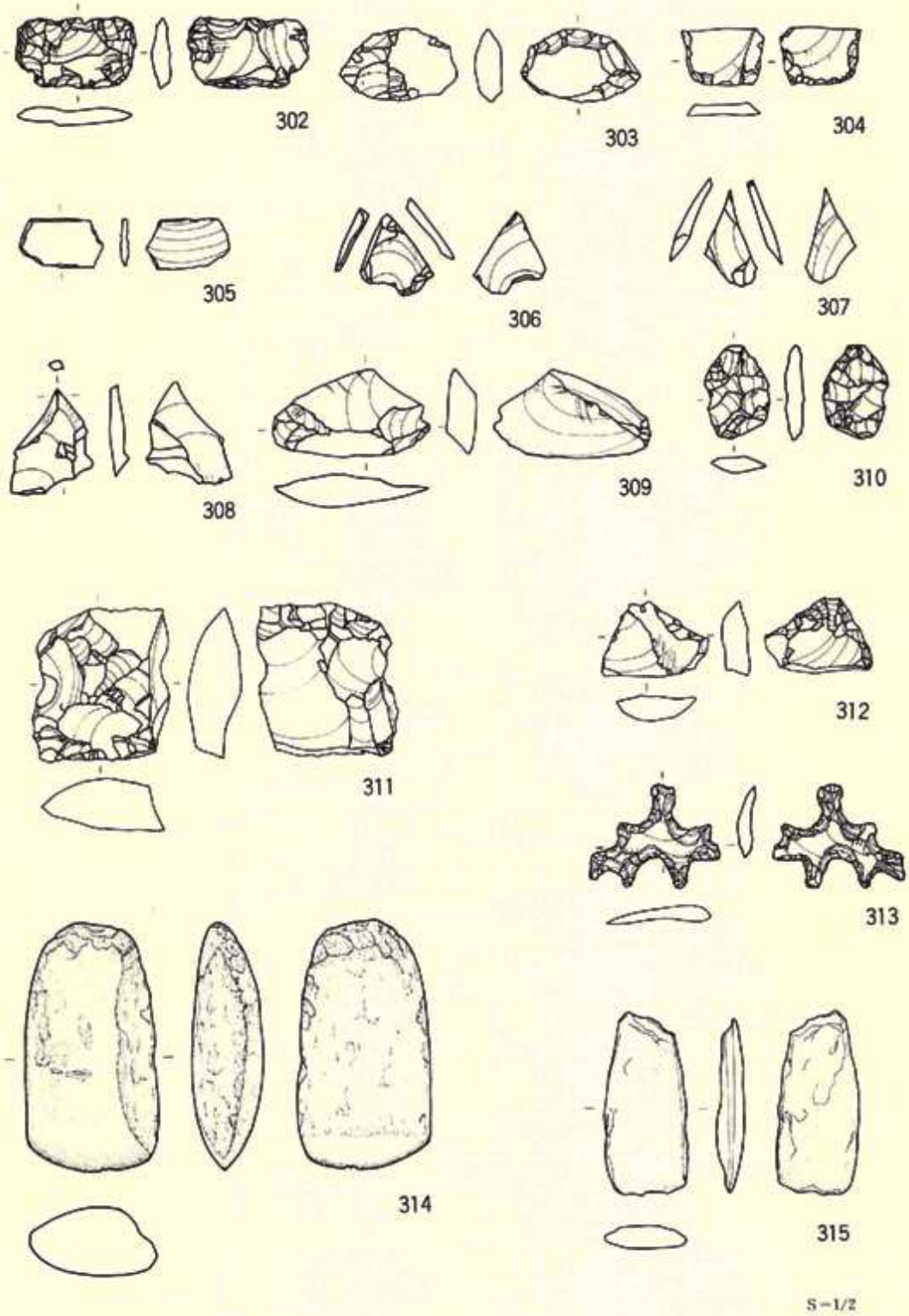
343はＧＶｄ0 の表土層からの出土である。長さ85㎜・幅26㎜・厚さ19㎜・重さ98ｇである。器種は手斧と考えられる。柄の取り付け部分を袋状に折り曲げ、閉じている。その下端に孔がある。そこから上は空洞である。344はＧＶｄ1のⅣ層から出土している。長さ87㎜・幅31㎜・厚さ9㎜・重さ81ｇである。上端に径2～3㎜の孔があり、そこから約15㎜下にＶ字状の刻みが入っている。下端の幅はやや広がり、若干薄くなる。器種は不明である。345はＥＶｂ4の表土層からの出土である。長さ97㎜・幅20㎜・厚さ7㎜・重さ40ｇである。横断面形は湾曲している。先端は幅が狭くなり、楔のような形をしているが器種は不明である。



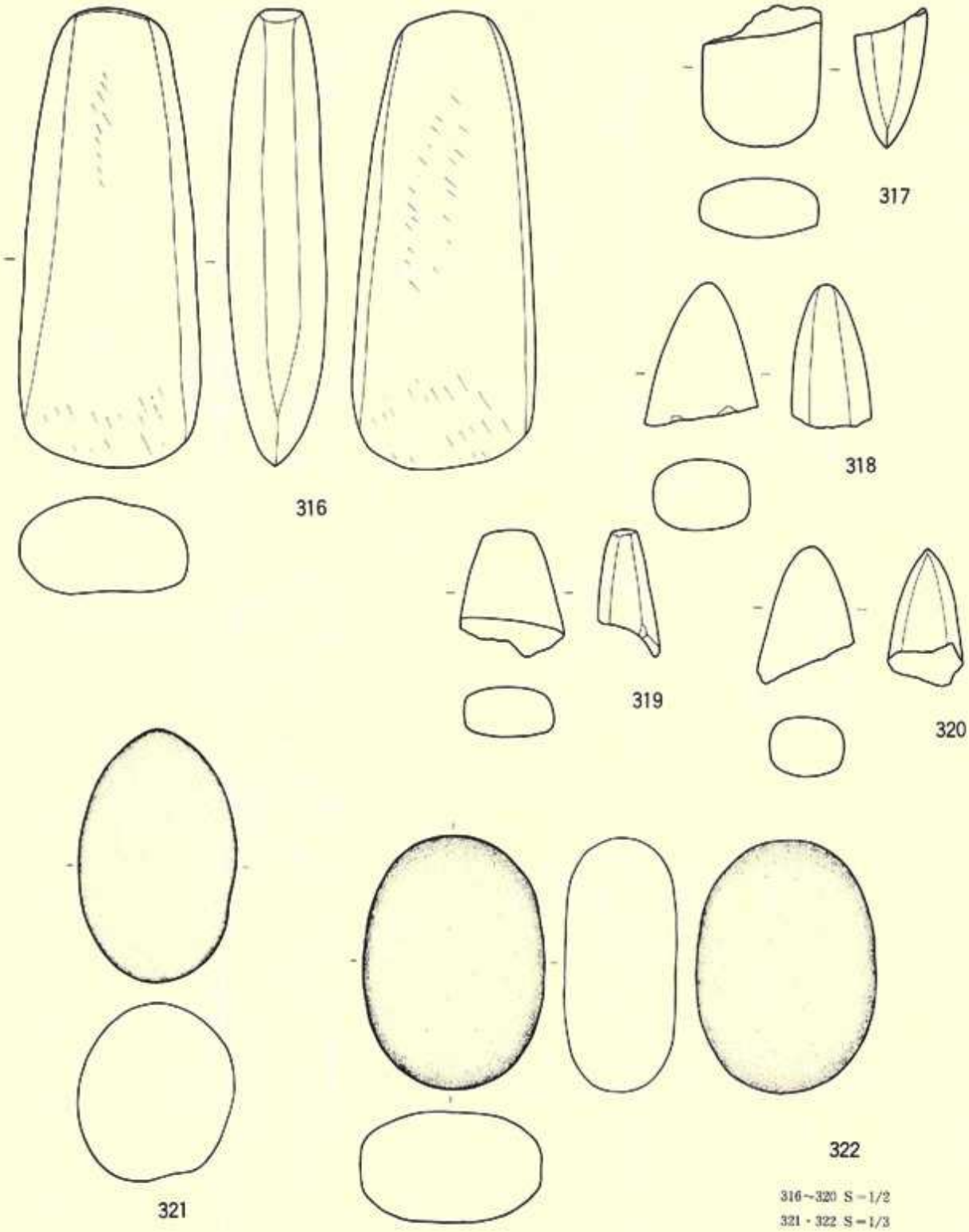
第53図　遺構外出土遺物－石器(1)



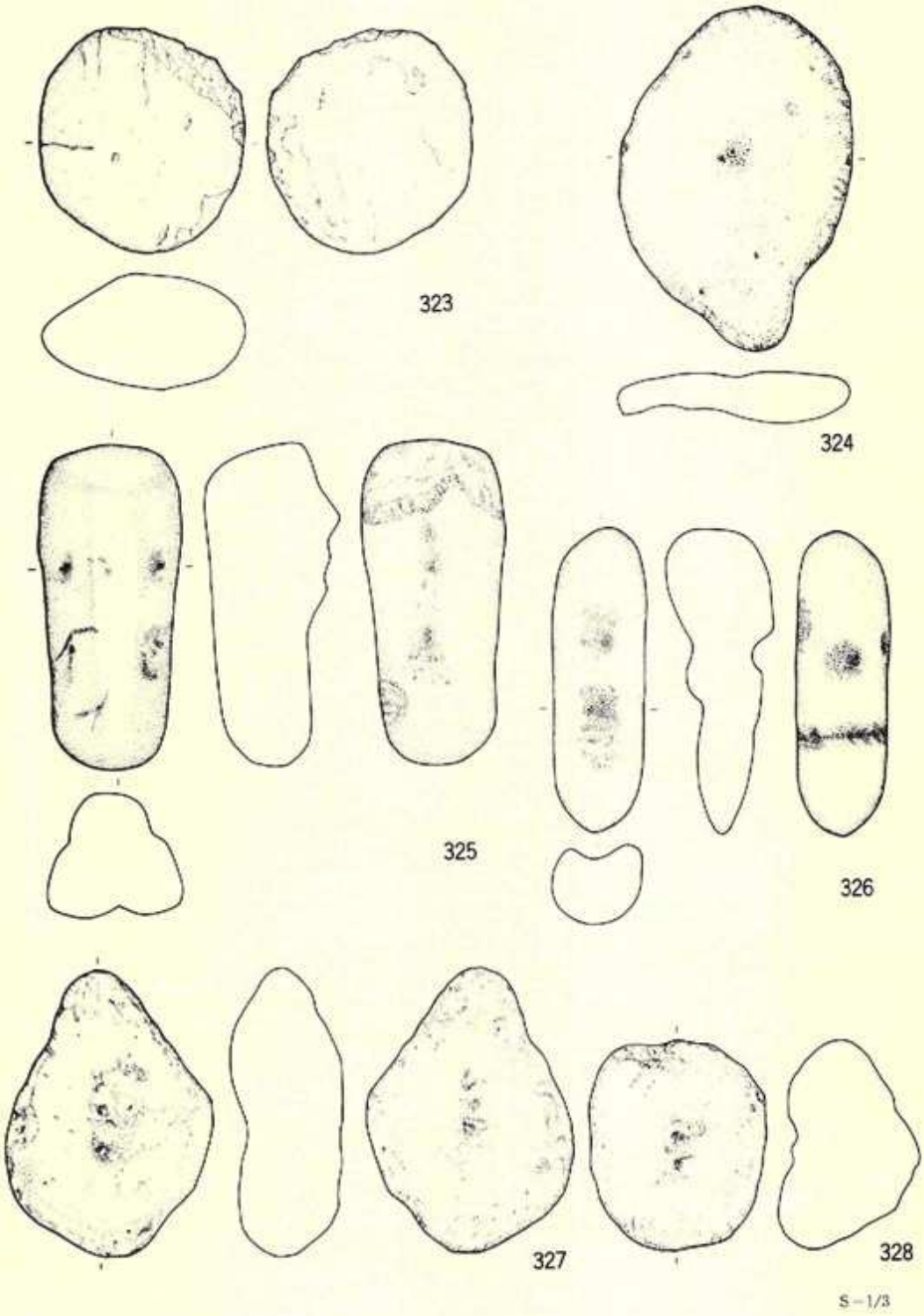
第54図　遺構外出土遺物－石器(2)



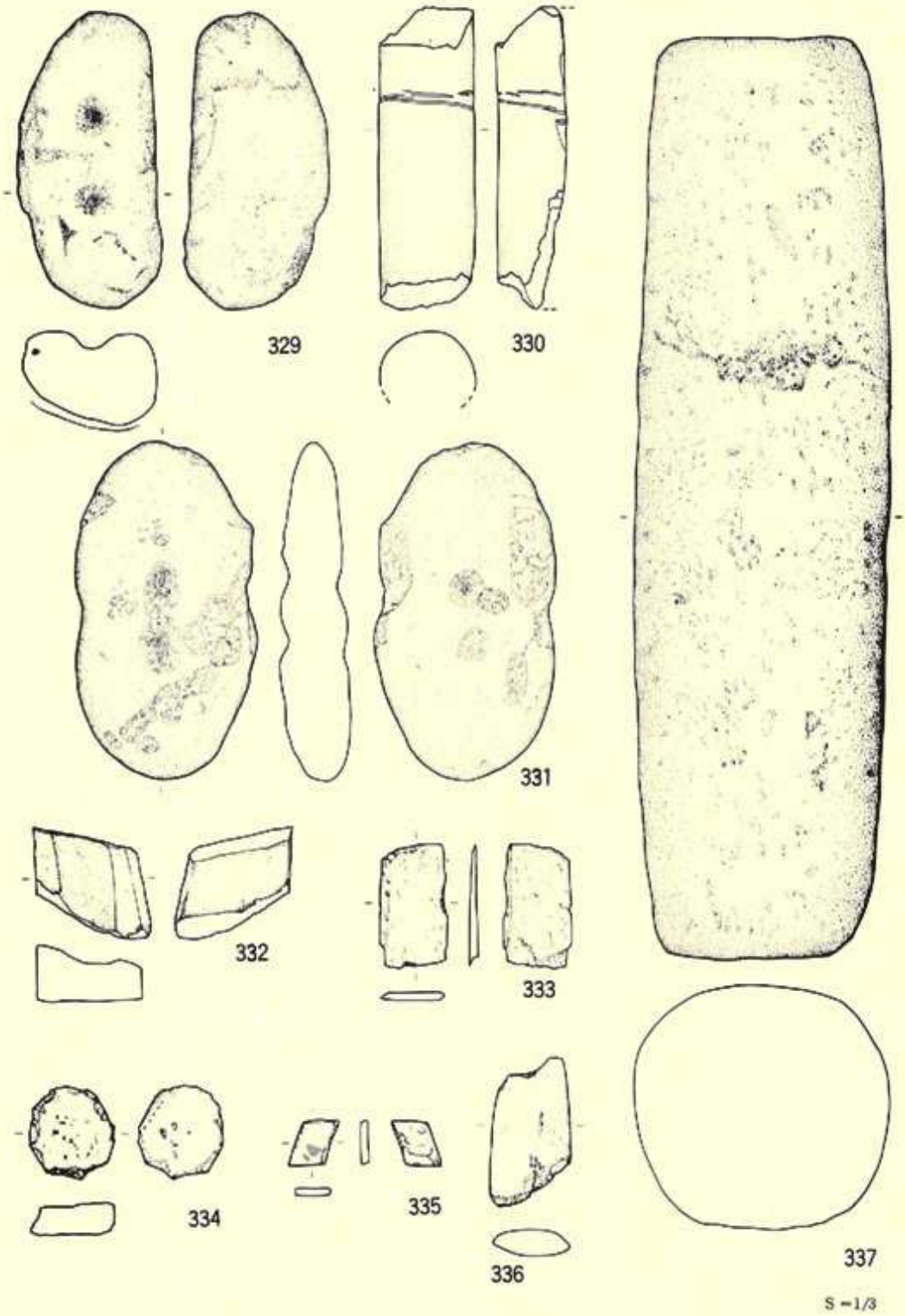
第55図　遺構外出土遺物－石器(3)



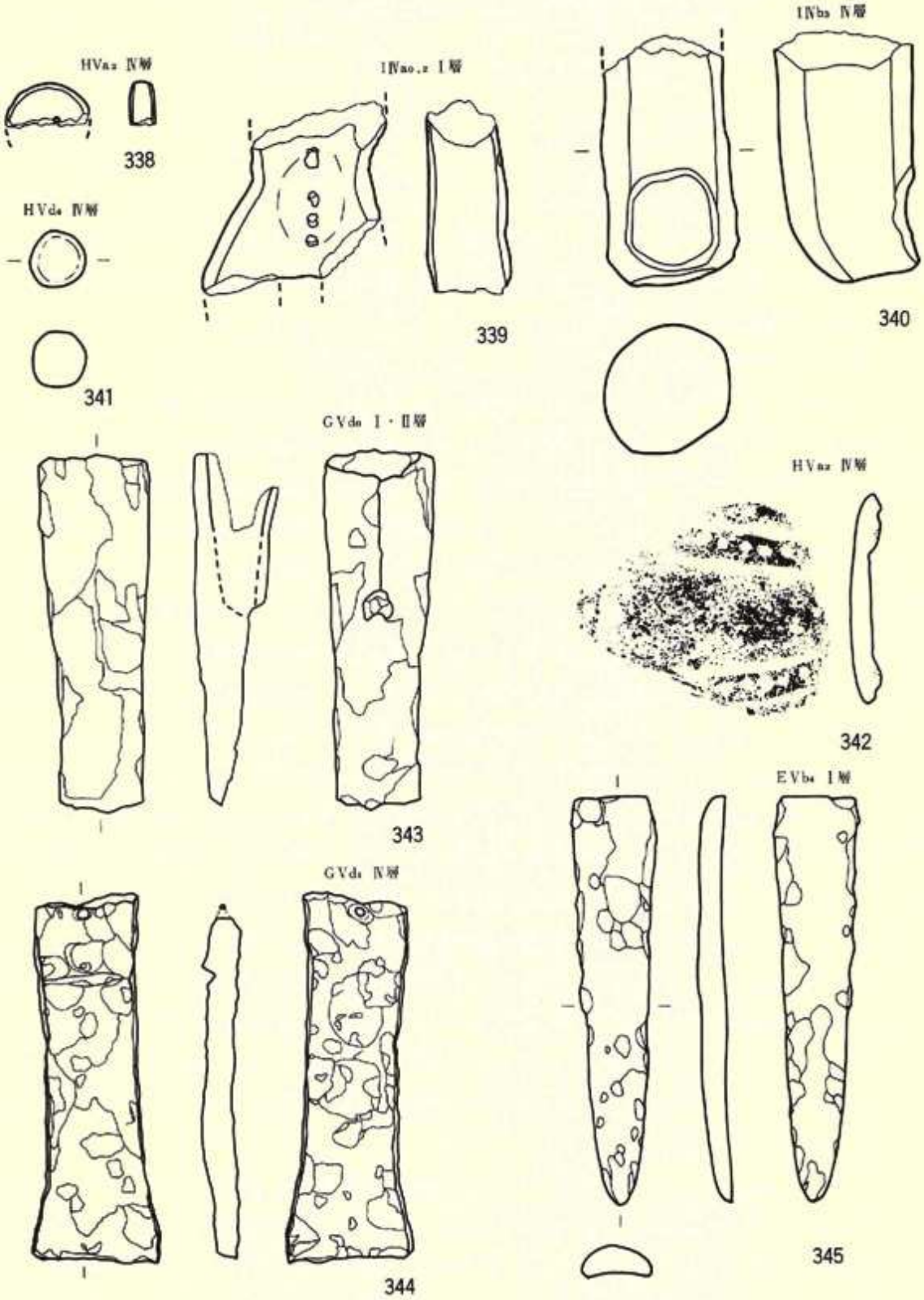
第56図　遺構外出土遺物－石器(4)



第57図　遺構外出土遺物－石器(5)



第58図　遺構外出土遺物－石器(6)・石製品



第59図　遺構外出土遺物－土製品・鉄器

V 要 約

1．遺 構

本遺跡で検出された遺構は住居址15棟、炉跡1基、住居址状遺構１基、ピット25基、焼土5基、墓壙９基、暗渠１条、柱穴群２である。以下に、住居址については時代毎に、それ以外は遺構毎に若干の考察を加えながらまとめとしたい。

(1) 縄文時代竪穴住居址

〔時期・占地〕　時期について出土遺物等から検討を行う。ＦＶ－１住居址は大木９・10式に比定される土器を出土し、複式炉を持つことから中期末葉に位置づけられる。ＨＶ－１住居址からは時期を推定しうる遺物が出土していないが、複式炉の系統を引く炉の形態からみて中期末葉の住居址と推定される。FIV－１住居址は床面直上から出土した粗製深鉢からの推定であるが、中期末葉から後期初頭に属すると思われる。ＩＶ－１住居址は瘤付土器が床面から出土しており、後期末葉に位置づけられる。ＩＶ－２・３住居址は出土した土器から後期前葉と推定される。ＩＶ－４炉址は周辺からの遺物はあるが、直接共伴する遺物がなく、時期は不明である。この炉址の下位からは中期中葉の住居址を検出していることや層準からは後期のものと推定される。ＩＶ－５住居址からは大木８ａ式・円筒上層式ｄに比定される土器を出土しており、中期中葉に位置づけられる。大木式と円筒上層式との分布を知る上での好資料である。

遺構は主に調査区南端のＨＶ区・ＩＶ区の北向き緩斜面に集中している。特に後期に所属すると思われる住居址はいずれもこの地区で検出されている。遺構のあり方から見て、この時期の集落はさらに調査区南側のタバコ畑にも広がると思われる。集中区から50～60m北のＦIV区・ＦＶ区の北向き緩斜面には中期末葉や中期末葉から後期初頭の住居址がある。

〔形状・規模〕　平面形は時期を問わず、円または楕円形を基本とするものが多い。ＩＶ－２住居址は隅丸方形状を呈するが歪みが著しい。大きさを床面積[註1)]で比較すると最小２㎡台（FIV－１住）から最大13㎡台（ＩＶ－１住）までばらつきが見られる。測定可能であった残り３棟の住居址の広さは３㎡台（ＨＶ－１住）５㎡台（ＩＶ－３住）８㎡台（ＦＶ－１住）である。小規模の住居址が多い。

〔炉〕　中期末葉のＦＶ－１住居址は複式炉を持ち、ほかには地床炉を持つもの３棟、石囲い炉を持つもの２棟、複式炉の系統を有するもの１棟である。石囲い炉を持つ住居址のうち、ＩＶ－２住居址はその痕跡を留めているに過ぎない。地床炉を持つ住居址のうち、FIV－１住居址は浅いピットを伴う。ＩＶ－３・５住居址はどちらも床面を直接使用している。炉跡には

ＨＶ－１住居址を除いて、いずれも現地性の焼土が形成されているが、焼成はそれ程著しいものではない。

〔柱穴〕　柱穴配置が明らかなものはＦＶ－１住居址だけで、４本柱である。ほかに、ＨＶ－１、ＩＶ－１・３・５の住居址からも柱穴状小ピットを検出しているが、配置は不明である。

〔壁溝・出入口〕　壁溝はＦＶ－１・ＩＶ－３住居址の２棟から検出されている。どちらも一周するのではなく、斜面上方の壁際の一部に巡るのみである。

ＩＶ－１住居址の南東壁際で検出された長楕円形の小ピットとそれに連続する２個の小ピットは出入口に関わる施設と思われる。これらの小ピットの長軸は壁に直交する。これまでの他の遺跡での類例[註2)]では小ピットが対になって検出されているが、この住居址の場合は対になるピットがあると思われる部分が最近の攪乱を受けており、その存在は確認できない。

(2)　平安時代竪穴住居址

〔時期・占地〕　土師器を出土した住居址はいずれも平安時代のものである。出土遺物については遺物の項でさらに述べるが、どの住居址からもロクロ使用の坏や甕が出土している。調査区北東部DⅣ区・ＤＶ区・EⅣ区の北西向き緩斜面に４棟、HⅣ区の北向き緩斜面に１棟ある。縄文時代の住居址とは占地がやや異なり、斜面のやや下方に居住域が移る。縄文時代の集中区と平安時代の４棟が位置する区域とでは６～７ｍの比高差がある。

〔形状・規模〕　いずれも方形を基本とする。ＤＶ－２・EⅣ－１住居址は正方形に近く、HⅣ－１住居址は長方形、DⅣ－１・EⅣ－２住居址は歪みが著しい。規模を床面積で比較すると、DⅣ区・ＤＶ区・EⅣ区の４棟の住居址は５～７㎡台と小規模で、HⅣ－１住居址は18㎡と他の４棟に比べて大きい。

〔カマド〕　ＤＶ－２住居址のカマドは南壁東端、他の４棟の住居址のカマドは東壁際に構築されている。カマド本体の残存状態はHⅣ－１住居址が比較的よい。DⅣ－１・ＤＶ－２・EⅣ－１の各住居址は袖等の一部が残る。EⅣ－２住居址は燃焼部のみを検出している。ＤＶ－２・EⅣ－１・HⅣ－１住居址のカマドは袖の芯材に礫を用いている。燃焼部の焼土の層厚はどれも３～５㎝である。

〔柱穴・壁溝・貼床〕　柱穴配置を知ることのできる住居址はない。壁溝や貼床を伴う住居址はない。

〔工房址〕　鉄滓を多量に出土したEⅣ－２・HⅣ－１住居址には現地性焼土を伴う小ピットが検出されている。EⅣ－２住居址のそれは楕円形の浅い窪みで、その東半に焼土が形成されている。HⅣ－１住居址のそれは楕円形の浅い小ピットに溝状の窪みが連なる。焼土は小ピットや窪みの内部や周辺に広がる。どちらの焼土にも青灰色の砂質土を伴う。EⅣ－２住居址の場合、形状が不整であること、床面は礫等による凹凸が著しいことなどから居住に適するかど

うか疑問はあるが、カマドを持つことから住居址として位置づけておく。

出土した鉄滓が鍛冶滓であることや焼土の形態、HIV－1住居址からはふいごの羽口が出土していることから、前述の施設は鍛冶工房址と考えられる。また、住居址に共伴する内部施設であることと、鴇田氏が本報告「Ⅵ．鑑定結果」や宮城県沼崎山遺跡の報告書で指摘している点にしたがえば、鍛冶専用工房址ではなく、農鍛冶の工房址としての性格をもつものであろう。

〔その他の共伴施設〕　DIV－1・DV－2・HIV－1住居址は貯蔵穴状のピットを伴う。DIV－1住居址はカマド左袖隣りに1基、DV－2住居址ではカマド右袖隣りと北西隅とに2基、HIV－1住居址ではカマド両袖隣りと北東隅および住居址中央付近とに計4基ある。

EIV－1の住居址には方形状の扁平な石を伴う不整形の浅い窪みが南東隅にある。その機能や何らかの施設とするに足るものかどうかは不明である。

(3)　中・近世の住居址

DV－1・FIII－1・FIV－2の各住居址の形態等には次のような特徴がある。平面形はいずれも方形を基本とし、そのうちFIII－1住居址は東側に半円状の張り出しを持つ。柱穴はFIV－2住居址ではすべてに、他の2棟では一部に掘り方を検出している。DV－1・FIV－2住居址は壁際に3本ずつ、FIII－1住居址は4～5本配置されている。FIII－1・FIV－2住居址では中央部にも2本の柱穴を持つ。両者の柱穴の埋土は酷似している。カマドは持たず、炉は、DV－1住居址が床面ほぼ中央にある。FIII－1住居址からは床面に微かな焼成痕を検出しているが、炉かどうかは不明である。FIV－2住居址からは検出されていない。壁溝はFIII－1・FIV－2住居址から検出され、前者は張り出し部を除くほぼ一周に、後者は斜面上方の東側にある。規模は床面積でFIV－2住居址が14m²台、他の2棟は16m²台である。

これらの住居址は時期決定資料を欠くが、形態的特徴が二戸市の長瀬C・長瀬D・沢内Bや盛岡市のつなぎIII等の各遺跡で中世ないし中世から近世にかけての住居址と報告しているものに類似し、本遺跡の例もその時期に所属をもとめることができるであろう。

(4)　住居址状遺構

竪穴式であるが、炉や柱穴を伴わないことから住居址状遺構とした。縄文土器の小破片が埋土から出土しているが、時期を特定できる資料はない。埋土の層相からは縄文時代の遺構と推定される。

(5)　ピット

検出された25基のピットを形状で大別すると以下のようになる。フラスコ形ピット（HV－54・55、IV－51）3基、ビーカー形と推定されるもの（IV－55）1基、浅皿状を呈するもの（EV－52～54、IV－56～60）8基、長楕円形のもの（EV－56・FIV－51・HV－53）3基、楕円形を基本とするが形状の不安定なもの（HV－51・52、IV－52～54）5基、その

他（EⅣ—51～53、EⅤ—51・55）5基である。

フラスコ形ピット3基のうちHⅤ—54・55の2基はどちらも開口部径120cm前後、深さ30～35cmと同規模で、埋土も類似する。HⅤ—55ピットからは縄文時代後期中葉に比定される土器を出土している。HⅤ—54・55ピットはこの時期のものであろう。ⅠⅤ—51ピットは上部が削剝されており、規模は推定であるが、HⅤ—54・55ピットより小型と思われる。縄文時代後期と思われる土器が出土している。

ピーカー形と推定されるピットは切り合い関係が複雑で、残存部も少ないことから不明な点が多い。縄文時代後期に属すると思われるⅠⅤ—53・54ピットに切られていることや出土遺物・埋土の層相からは縄文時代のピットと推定できるが時期の詳細は不明である。

浅皿状を呈するピットは平面形が楕円形のもの、円形を基本とするもの、隅丸方形を基本とするものとがある。EⅤ区とⅠⅤ区にそれぞれまとまって分布している。ⅠⅤ区の5基のピットは開口部の径またはその一辺が60～70cmと同規模である。EⅤ区の53・54ピットはどちらも円形で、開口部径120cm前後と同規模である。EⅤ—52ピットは浅皿状ピットの中ではただ1つ楕円形を呈する。EⅤ—53・ⅠⅤ—60ピットの埋土からは縄文土器片が少量出土している。

長楕円形のピット間には平面形を除いての共通点や類似点は見あたらない。

不整楕円形のピットはHⅤ区に2基、ⅠⅤ区に重複して3基ある。規模は長径90～140cm・深さ40cm前後のものが多い。ⅠⅤ区のピットは出土遺物から縄文時代後期のものと思われる。

その他の5基は平面形が円形・楕円形・隅丸方形と様々であるが、いくつかの類似点を持つ。埋土は黒褐色土が卓越し、大小の礫を多く含む。いずれもEⅣ・EⅤ区に集中し、礫層に掘り込まれているため、底面や壁は礫による凹凸が著しい。埋土から縄文土器の小破片が出土しているものがあるが時期決定の資料となるものはない。

(6) 焼土遺構

5基の焼土遺構が検出されている。焼成を受けている土層の層準に違いがあり、FⅠ—151焼土ではⅢ層の灰白色浮石を含む層が下位にあり、GⅢ—151焼土では逆に上位にある。EⅢ—151・FⅢ—151焼土はⅣ層が、EⅣ—151焼土はⅤ層が焼成を受けている。EⅣ—151焼土付近はⅡ～Ⅳ層を欠き地表から検出面までの深さは5～20cmである。共伴する遺物はなく、時期を特定できないが、層準からみて、時期別なちがいのあることが推定できる。

(7) 墓　壙

9基検出されているが、埋土および規模・形状から2つに大別できる。1つはDⅣ—201・203・204・205のグループ（A群）ともう1つはDⅣ—202およびDⅤ—201～204のグループ（B群）である。A群の埋土は黒褐色土が卓越し、Ⅴ層起源火山灰を粒状・ブロック状に若干含む。埋土に含まれる礫はB群に比べて非常に少ない。B群の埋土は暗褐色土とブロック状のⅤ層起源

火山灰との混土で、上部に多くの礫を含む。埋土の全体的な色調は前者に比べかなり明色である。掘り込みの深さはA群が30～55cmと浅く、B群は一番浅いDIV－202で70cm、他はいずれも120cm以上と深い。大きさもA群は楕円形のDIV－204を除いて開口部径95～120cmに対し、B群は130～170cmと大きい。埋葬方法は坐棺が8例、臥棺が1例である。臥棺のDIV－204の被葬者は頭部に鉄鍋を被せられており、やや特異な様相を呈している。

副葬品はB群がDIV－202を除いて寛永通寶とキセルだけなのに対し、A群はそのほかに砥石や漆の皮膜・濾し殻などもある。寛永通寶の種類は、A群ではDIV－203が新寛永のみ、DIV－204が新寛永と古寛永、DIV－205は1枚のみの出土であるが新寛永である。B群ではDV－201が新しい時期のものと思われる鉄銭、他は新寛永と古寛永が混じっている。墓壙の時期は寛永通寶を副葬していることから近世以降であろう。しかし、寛永通寶からA群・B群の時期的な前後関係は不明である。DIV－202・204・205には漆関係の副葬品があるが、この地域は古くから漆産業で知られており、被葬者との関連で注目される。

(8) 暗渠・柱穴群

暗渠は遺跡中央を北流する小沢に向かってつくられている。II層を切っていることから新しい時期の遺構と思われる。

柱穴群はEIII区とFII区で検出されている。どちらの柱穴群にも埋土に灰白色浮石を含む柱穴や掘り方を持つ柱穴があるが、時期や性格についてはわからない。

註1） プラニメーターでの測定による。平安、中・近世の住居址も同じ方法による。縄文時代住居址で、調査区外に延びる住居址は検出部分の値を一覧表に記している。

註2） 出入口施設を伴う縄文時代後期の住居址例として報告されているのには川口II遺跡・上斗内III遺跡・扇畑II遺跡等の例がある。

第2表　竪穴住居址一覧表

	遺構名	時代・時期	平面形	規模（単位m）	床面積（単位m²）	炉・カマド	その他
1	FIV－1	縄文時代中期末葉～後期初頭（推定）	円形	径2	2.2	地床炉	
2	FV－1	縄文時代中期末葉	楕円形	3.85×3.15	8.1	複式炉	4本柱　壁溝有
3	HV－1	縄文時代中期末葉（推定）	楕円形	2.7×2.0	3.9	複式炉系統	
4	IV－1	縄文時代後期末葉	円形	径4.1	13.0	石囲い炉	出入口施設有
5	IV－2	縄文時代後期前葉（推定）	隅丸方形	5.4×(2.3)	(8.8)	石囲い炉	
6	IV－3	縄文時代後期前葉（推定）	楕円形	3.7×2.6	5.3	地床炉	壁溝有
7	IV－5	縄文時代中期中葉	楕円形	4.2×(1.8)	(4.4)	地床炉	消失
8	DIV－1	平安時代	方形	4.0×2.2	6.6	東壁	貯蔵穴状ピット有
9	DV－2	平安時代	正方形	2.85×2.5	5.4	南壁	貯蔵穴状ピット有
10	EIV－1	平安時代	正方形	2.85×2.5	6.1	東壁	
11	EIV－2	平安時代	方形	3.5×2.6	7.3	東壁	鍛冶工房址を持つ
12	HIV－1	平安時代	方形	4.7×4.4	18.4	東壁	鍛冶工房址を持つ・貯蔵穴状ピット有
13	DV－1	中世	方形	5.1×4.8	16.6	地床炉	柱穴掘り方有
14	FIII－1	中世	方形	6.2×4.0	16.9	不明	柱穴掘り方有・壁溝有
15	FIV－2	中世	方形	3.7×3.3	14.3	残存せず	柱穴掘り方有・壁溝有

註）規模・床面積の（　）内の数値は調査区外に延びる住居址のため、検出部分の値。

2．遺物

(1) 縄文土器

〔分布〕　遺構外の遺物の分布は調査範囲全体におよぶが、該当する時代の遺構が存在するF区から南側の部分に多い。また遺構が検出されなかったFII区やIII区などの尾根寄りの部分にも少量が分布する。またHV区の沢沿い、IIV区の平坦面には後期を中心にした小規模な包含層が形成されている。基本層序IV層を中心とする。

時期別の土器の分布は次のようになる。前期の土器の出土量は少量であるが、GIV・FV・IV区から出土した。中期中葉の土器は調査区北端のBVII区や同時期の住居址が存在するIV区から出土している。中期後葉・末葉になると、同時期の遺構が存在するFV区・HV区を中心にIV区・BVII区・EIII区・FII区・III区などから出土している。後期初頭・前葉の土器はD区からI区までのIV区・V区を中心に広範囲に分布する。FII区・GIII区の北東向き緩斜面からも少量が出土している。中葉になるとF～I区のIV区・V区、末葉の土器はさらに分布範囲がせばまり、G～I区のIV区・V区を中心に分布する。晩期の土器は少ないが、D・F・H・I区の各区に分散している。

〔後期の土器について〕　後期の土器は時期からI～III群に大別し、文様的な特徴から各群に小分類群を便宜的に設定した。ここでは、詳細な分類をしている岩手県大迫町立石遺跡（中村、1979）の分類群との対比をする。

I群1類は第III群第4類、I群2類・3類は第III群第5類に相当する。そのほかでは、178・180が第III群第4類に相当する。II群1類は第IV群第1類、II群2類・3類は第IV群5類に相当する。III群1類は第V群1類と2類を含んでいる。III群に含まれるそのほかの土器では204が第V群第1類、205は第V群第3類に相当する。

以上の点からみて、I群は堀ノ内I式や十腰内I式・大湯式、II群は加曽利B1～B3式や十腰内II～IV式、III群は西ノ浜式や宮FIIIa式・十腰内V式などの型式に併行する内容を含む。

〔粗製土器ほかについて〕　粗製土器ほかとしたもののうち、1・2類は立石遺跡では第III群4類に共伴するとしており、後期前葉に位置づけることができるであろう。3類としたものの一部も同時期である。4類の土器は251をのぞいては中期末葉～後期前葉のものと推定される。251は晩期である。5類は後期中葉のものであろう。実測図を掲載したもののうち、出土地点や層位・器形・地文ほかからみて、119・121・127・128・139は後・晩期の時期内に位置づけられるであろう。130はいちおうここに含めておいたものの確実な点は不明である。

(2) 弥生土器

〔分布〕　弥生土器の出土量は少ない。分布域は限られ、北向き緩斜面であるGIV区、尾根

から続くFII区・III区の緩斜面である。出土層位はI・II・IV層である。

〔器種と分類について〕　器種が分かるのは甕と壺で、それ以外は出土していない。I群1類は半截竹管文による沈線文と刺突文が特徴である。破片のために文様意匠が明確でないが、直線的・曲線的な文様が展開され、228では（重）三角文のなかに二重の円文がみられ、225では入組状の文様をもつ。I群2類は連続山形文と連弧文・平行沈線文・磨消縄文が主な文様構成要素で、223には三角形状の文様もみられる。I群3類は変形工字文と平行沈線間の刻目文・撚糸文を特徴とする。

以上の分類群のうち、I群2類は一戸町上野B遺跡(小田野、1983)出土のものに類似する。小田野は念仏間式土器（工藤、1968・橋、1971ほか）に対応させ、「上野式土器」として一型式を提唱している。I群1類の（重）三角文も念仏間式の識別形質になっており（橋、1983）、同式との対応関係が考えられる。I群3類の文様的特徴のうち、変形工字文や撚糸文を伴う特徴は念仏間式の後に位置づけられる鳥海山式の特徴とされている（鈴木、1978）。ただ、同式にみられる交互刺突文については明らかでない。平行沈線間の刻目文は上野B遺跡でも1例に知られている。以上の点からみて、I群3類は念仏間式以降に位置づけられる可能性があろう。

次はII群の土器についてであるが、1類とした撚糸文をもつ土器のうち、口縁部から体部上半が残る124は口縁部と体部が縦走、頸部が斜行する撚糸文である。その特徴は、口縁部については不明であるが、I群3類とした126に類似し、時間的にも近いことが考えられる。

(3)　平安時代の土器

本遺跡出土の平安時代の土器には土師器の甕や坏・鉢・それに非内黒の「須恵系土器」とか「あかやき」と呼ばれる坏がある。量的には土師器甕が多く、坏は少ない。鉢はHIV－1住居址出土の1点のみである。須恵器は出土していない。

〔土師器甕〕　甕にはロクロ使用のものと未使用のものとがある。DIV－1・EIV－2・HIV－1の各住居址からはロクロ使用・未使用の両方が出土し、DV－2住居址からは口縁部破片はロクロ使用の1点だけ、EIV－1住居址からはロクロ未使用のものだけ出土している。ロクロ使用の甕はEIV－2住居址出土の83を除いて、いずれも口縁部が短く外傾し、口唇部がつまみだされるaタイプである。調整はケズリ・ナデが一部に見られる。83は口縁部が短く外反するbタイプで、内面にヘラミガキが見られる。ロクロ未使用の甕は口縁部がやや短く外反するcタイプ、短く外反するdタイプ、極端に短く外反するeタイプとがある。DIV－1住居址からはcとe、EIV－1住居址からはc、EIV－2住居址からはdとe、HIV－1住居址からはcとeのタイプが出土している。しかし、いずれも各タイプ1点ずつの出土である。

〔土師器坏〕　すべてロクロ使用で、切り離しは遺構外出土の1点を除いて回転糸切りである。再調整は行われていない。DV－2・EIV－2・HIV－1の各住居址から出土し、土師

器甕とはどのタイプとも共伴する。

〔坏〕　酸化炎焼成で、非内黒の坏はDⅣ－1・EⅣ－1・HⅣ－1の各住居址から出土している。HⅣ－1住居址出土のものは破片のみである。すべてロクロ使用で、切り離しは回転糸切りである。土師器甕とはa･c･eタイプと共伴する。

参考までに、中・近世の住居址としたDⅤ－1出土の坏も非内黒である。

時期について若干の推察を行う。土師器甕には上の山Ⅶ遺跡報告書では比較的早い時期に出現するとされるaタイプのものがあるが、土師器坏はすべて無調整である。また、非内黒の坏は9世紀段階での出土例の報告もあるが、一般的には11世紀頃と見られている。これらのことから、遺物の所属時期は平安時代後半と思われる。

(4) 石器

〔剝片石器〕　遺構内外から出土した器種と数は次のようになる。石鏃12点（有茎式9点・無茎式3点）・石匙8点（縦形5点・横形3点）・削器10点・削器状石器3点・掻器2点・石錐1点・抉入石器2点・尖頭石器2点・ピエス・エスキーユ3点・折断石器2点・彫器3点・不定形石器4点・異形石器1点の13器種53点である。そのほかには2次加工痕や使用痕のある剝片が少数ある。遺構内出土は10点で、多くは遺構外から出土している。その分布は縄文時代の遺構が分布しているFⅣ・FⅤ・HⅤ・ⅠⅤの4区で半数以上を占める。また同時代の遺構の存在が不明なF～Ⅰ区のⅠ・Ⅱ区からも9点が出土している。

〔磨製石斧・打製石斧〕　遺構内外から出土した磨製石斧は8点である。完形品は2点で、残りは破損している。遺構外出土の7点のうち6点はHⅤ・ⅠⅣ・ⅠⅤの3区に分布する。打製石斧1点は縄文時代中期中葉の住居址からの出土である。

〔礫石器〕　遺構内外から出土した器種と点数は、磨石3点、敲石と磨石の複合したもの1点、凹石8点である。遺構から出土したのは2点である。残る9点のうち4点はHⅤ・ⅠⅤ区に分布する。

(5) 石製品

遺構内外から出土したものの器種と数は、円盤状石製品2点、石棒2点、石剣1点・砥石1点・不明1点である。遺構からは円盤状石製品1点が出土したにすぎない。遺構外での分布はE区から南側であるが、分散している。

(6) 土製品

遺構外から5点出土した。器種は土偶・土玉・三角形板状土製品・円盤状土製品・不明で、各1点ずつである。分布はHⅤ区とⅠⅣ区である。所属時期は、土偶が縄文時代後期前葉～中葉、後期前葉の土器片を利用している三角形板状土製品はそれに近接した時期と推定される。

(7) 鉄　器

いずれも遺構外からの出土で、時期は不明である。343・344は鍛冶工房址を検出しているHIV－1住居址に比較的近い地点から出土しているが、それと関連するかどうかはわからない。

(8) 陶磁器

遺構外から3点出土している。陶器は近世以降、青磁は中世後半のものと思われる。青磁は中・近世の住居址としたFIII－1付近からの出土で、この住居址と関わりがあるかもしれないが、小破片が1点のみであり、しかも粗掘り段階での出土なので、推測の域を出ない。

《引用・参考文献》

岩手県農政部北上山系開発室(1974)：『土地分類基本調査』荒屋

遠藤勝博・本沢慎輔・佐々木清文(1981)：『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』　長瀬C遺跡・長瀬D遺跡　岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集

大原一則・高橋与右エ門(1984)：『上斗内III・IV・V遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第71集

小笠原好彦(1974)：「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

小田野哲憲(1983)：「3．出土遺物　(2)弥生土器」『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書IV　V上野B遺跡』一戸町教育委員会、190－195.

工藤竹久(1968)：「下北半島尻屋念仏間遺跡」考古学ジャーナルNO.23、21－23

桑原滋郎(1975)：「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

小平忠孝・種市　進・四井謙吉(1982)：『有矢野遺跡・上の山X遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第38集

近藤宗光・佐々木清文他(1981)：『扇畑I遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第17集

近藤宗光・佐々木清文他(1982)：『扇畑II遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第39集

近藤宗光・佐々木清文他(1982)：『上の山館遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第40集

近藤宗光・佐々木清文他(1983)：『赤坂田I・II遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第58集

佐々木清文・佐々木嘉直(1984)：『湯の沢III・繋沢II・石神II遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第79集

鈴木克彦(1978)：「青森県における弥生時代終末期の土器文化」考古風土記、第3号、29－40

鈴木隆英(1985)：『曲田I遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集

高橋文夫(1982)：「縄文時代の彫器」紀要II、(財)岩手県埋蔵文化センター、55～73.

高橋文夫他(1982)：『湯沢遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集

高橋与右エ門(1978)：『二戸市　沢内B遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集

高橋与右エ門・玉川英喜(1985)：『川口II遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第84集

高橋正之・高橋与右エ門(1980)：『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』つなぎIII遺跡　岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集

橋　善光(1971)：「青森県尻屋念仏間の弥生式土器について」北海道考古学、第7号、39～43.

橋　善光(1983)：「第四章弥生時代」『青森県の考古学』青森大学出版局、301－345

中村良幸(1979)：『立石遺跡－昭和52年・53年度発掘調査報告書』大迫町教育委員会.

光井文行・四井謙吉・種市　進(1983)：『上の山VII遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第60集

遊佐五郎他(1980)：『沼崎山遺跡』宮城県豊里町教育委員会

(財)岩手県埋蔵文化財センター(1985)：『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩手県埋文センター文化財調査報告書第88集

『多賀城跡－昭和51年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究所年報1976　宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

四井謙吉・小平忠孝・種市　進(1981)：『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』荒屋I遺跡・荒屋II遺跡・越戸II遺跡　岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集

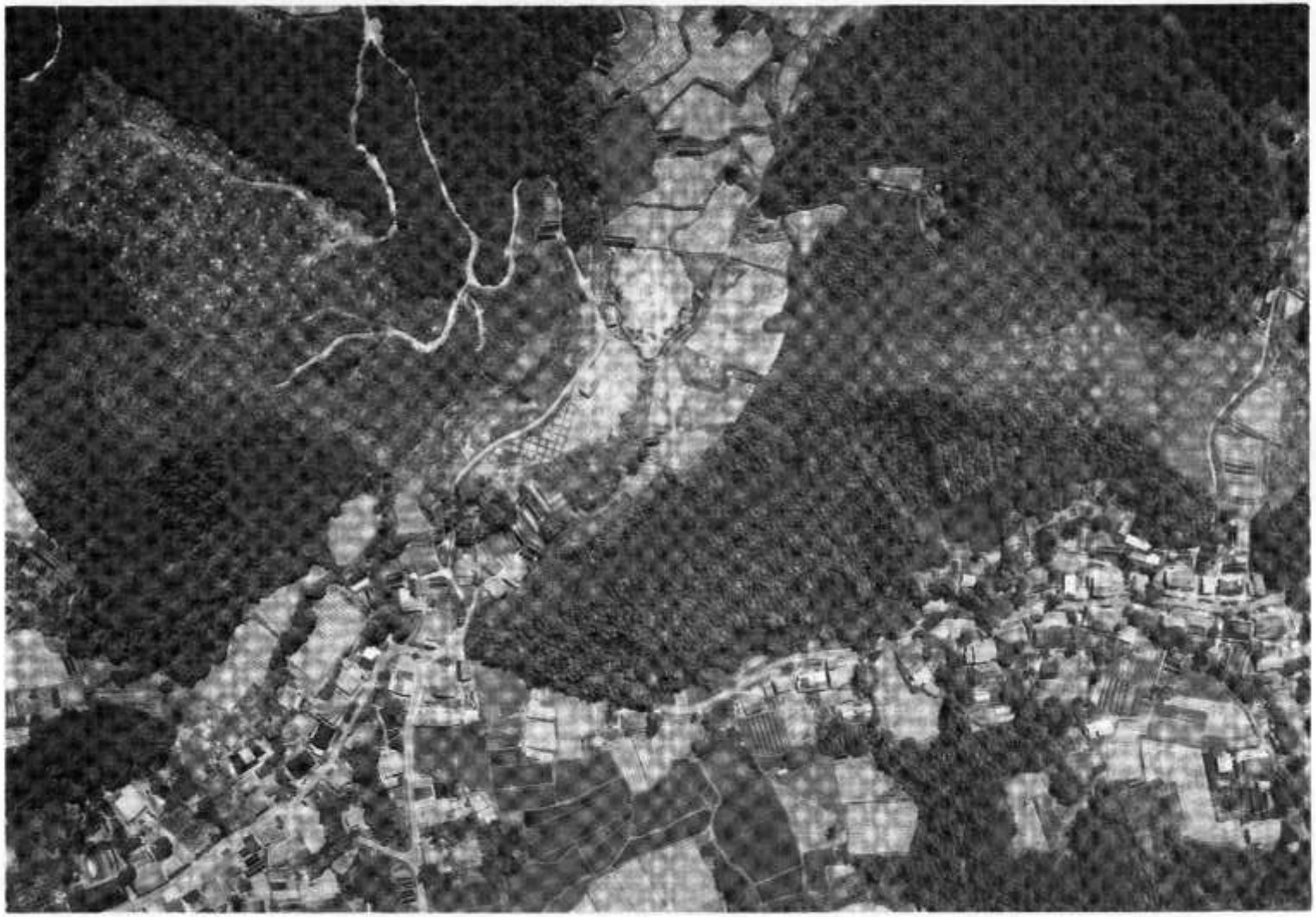
第3表　掲載石器・石製品一覧表

（　）は現存部分

図版—番号	出土地点・層位	器　種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重　量 g	石　質	産　地
8— 2	FIV-1住　炉上	磨　石	8.4	5.6	4.4	303.0	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
10— 10	FV-1住Q，埋土下部	円盤状石製品	4.3	4.5	2.0	65.0	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
10— 11	FV-1住Q，埋土下部	楔形石器	6.4	3.1	0.8	13.8	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
13— 27	IV-1住　Q，埋土	磨製石斧	(8.0)	4.6	2.6	(164.0)	輝石安山岩	北上山地　中生界
14— 37	IV-2住　埋土下部	楔形石器	7.6	2.5	0.8	17.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
15— 44	IV-3住Q，床面直上	尖基無茎式石鏃	4.5	1.3	0.4	1.7	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
15— 45	IV-3住　Q，埋土	掻　器	3.3	2.7	0.8	7.1	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
17— 58	IV-5住Q，埋土上部	凹刃削器	5.1	2.1	0.9	9.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
17— 59	IV-5住　埋土上部	削器状石器	2.3	2.1	4.4	1.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
17— 60	IV-5住　P，直面	打製石斧	13.0	4.9	2.4	15.8	粘板岩	北上山地　古生界
28—100	DV-1住Q，床面直上	凹　石	10.2	4.3	5.1	290.0	閃輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
29—101	FIII-1住Q，埋土上部	凸基有茎式石鏃	(2.5)	1.5	0.3	(0.8)	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
34—102	HV-54FP　埋土	石　錐	(5.7)	1.3	0.8	(4.2)	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
35—113	IV-53、54pit　埋土	削器状石器	4.3	4.5	1.1	17.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
35—114	IV 53pit　埋土上部	ピエス・エスキーユ	4.7	2.9	1.0	14.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—268	FIIIb0　IV層	凸基有茎式石鏃	3.9	1.5	0.4	1.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—269	GIIe4　I層	凸基有茎式石鏃	4.1	1.2	0.5	1.7	粘板岩	北上山地　古生界
53—270	HIVa2　I層	凸基有茎式石鏃	2.3	1.3	0.4	0.8	チャート	北上山地　古生界
53—271	IIIb0　I層	凹基有茎式石鏃	2.2	1.3	0.5	0.8	チャート	北上山地　古生界
53—272	FIIb1　IV層	凸基有茎式石鏃	(2.5)	1.2	0.4	(0.8)	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—273	FIc4　IV層	凸基有茎式石鏃	(2.3)	1.3	0.4	(0.8)	粘板岩	北上山地　古生界
53—274	FIVK　I層	凸基有茎式石鏃	(2.2)	1.2	0.4	(0.8)	粘板岩	北上山地　古生界
53—275	IIIc0　火山灰下部	凸基有茎式石鏃	(2.6)	1.1	0.5	(1.4)	粘板岩	北上山地　古生界
53—276	GIVa2　IV層	平基無茎式石鏃	3.1	2.1	0.7	3.4	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—277	HVb0·1　I層	円基無茎式石鏃	2.1	1.2	0.3	0.7	チャート質鶏板岩	北上山地　古生界
53—278	HIVc4　I層	横形石匙	2.0	2.8	0.5	1.8	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
53—279	IIIa1　IV層	横形石匙	3.7	8.7	0.7	23.1	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—280	HVK　II層	縦形石匙	3.9	2.0	0.5	2.0	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—281	IVb3　I層	横形石匙	4.7	6.5	1.0	(20.9)	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—282	HIIIc4　IV層	縦形石匙	3.7	1.5	0.6	1.9	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—283	IVK　I層	縦形石匙	3.1	1.6	0.6	2.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—284	IVa4　I層	凹刃削器	5.4	5.4	1.0	26.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—285	HIIIa0　IV層	凸刃削器	4.9	5.7	1.2	31.0	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—286	IIIVb4　IV層	掻　器	4.0	1.5	0.6	3.5	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—287	IIIa2　IV層	鋸刃削器	5.2	2.9	0.8	8.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
53—288	GIIId1·2　II層下位	鋸刃削器	6.5	3.4	1.0	24.9	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—289	FIV・FVK　I層	剥　器	3.0	1.9	0.6	3.1	チャート	北上山地　古生界
54—290	HVK　I層	剥　器	4.1	2.0	0.9	4.7	輝緑凝灰岩	北上山地　古生界
54—291	HVK　II層	凹刃削器	4.0	3.4	0.9	10.5	硬質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—292	GIIK　II層	剥　器	2.4	2.2	0.9	3.9	鶏板岩質チャート	北上山地　古生界
54—293	GIVe2　IV層	横形削器	(3.2)	(3.2)	(0.8)	(6.1)	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—294	HVab0·1　I層	削器状石器	3.8	2.3	0.5	3.6	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—295	HVc4　IV層	削器状石器	5.0	3.4	1.2	15.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統

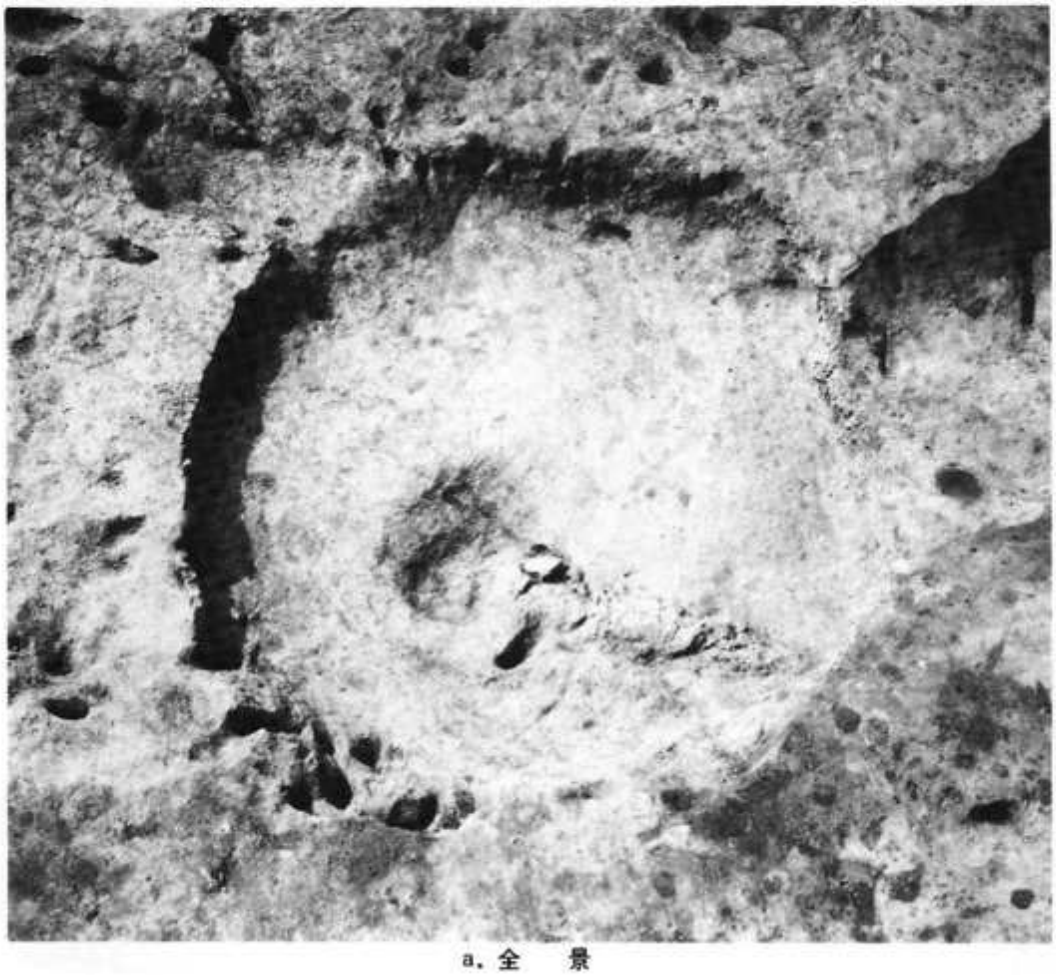
図版—番号	出土地点・層位	器種	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石質	産地
54—296	FII区 II層	削器状石器	6.4	5.7	1.0	31.4	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—297	FIV・FV区 I層	楔器	6.1	4.5	1.4	40.7	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—298	IIIa0 IV層	挟入石器	5.0	4.1	1.1	15.3	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—299	FVcd0-1 I層	挟入石器	3.3	3.4	0.8	6.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—300	HVa2 IV層	尖頭石器	2.8	1.8	0.3	1.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
54—301	HVc1 I層	尖頭石器	2.9	1.8	0.7	2.7	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
55—302	IIIb3 IV層	ピエス・エスキーユ	3.6	2.0	0.6	5.2	チャート質淡緑色凝灰岩	北上山地 古生界
55—303	IVa2 I層	ピエス・エスキーユ	3.6	2.2	0.9	6.9	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—304	EV区 表採	折断石器	2.4	1.7	0.4	2.3	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—305	HV区 I層の1（ろ紙除去中）	折断石器	2.5	1.5	0.3	1.2	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—306	HVb0 I層	彫器	2.0	2.1	0.3	1.4	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—307	FVa1 I層	彫器	2.9	1.3	0.4	1.2	珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—308	FVc0-1 I層	彫器	2.2	3.3	0.5	2.3	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
55—309	IVb1 I層	不定形石器	4.6	2.6	1.0	10.6	流紋岩質極細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
55—310	HVab0-1 I層	不定形石器	2.8	1.9	0.5	1.7	玻璃質流紋岩	奥羽山地新第三系中新統
55—311	GIVe2 IV層	不定形石器	4.3	4.7	1.6	37.5	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—312	FVcd0-1 I層	不定形石器	3.2	2.4	0.7	5.9	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
55—313	HIIb2 IV層	異形石器	3.1	4.0	0.6	4.0	チャート質粘板岩	北上山地 古生界
55—314	IIIb2 IV層	磨製石斧	7.3	3.9	2.1	90	淡緑色凝灰質千枚岩	北上山地 古生界
55—315	IVb0 IV層	磨製石斧	(5.4)	2.4	0.9	(16.0)	淡緑色凝灰質千枚岩	北上山地 古生界
56—316	HIIb4 IV層	磨製石斧	14.6	5.8	2.9	422	チャート質淡緑色凝灰岩	北上山地 古生界
56—317	HVab0-1 I層	磨製石斧	(4.6)	3.8	2.2	(48.4)	輝石安山岩	北上山地 古生界
56—318	HVb0-1 I層	磨製石斧	(4.6)	(3.5)	(2.5)	(47.8)	輝石安山岩	北上山地 古生界
56—319	HVd3 IV層	磨製石斧	(4.2)	(3.3)	(1.8)	(31.3)	チャート質淡緑色凝灰岩	北上山地 古生界
56—320	HVc4 IV層	磨製石斧	(4.7)	(3.2)	(2.4)	(34.3)	輝石安山岩	北上山地 古生界
56—321	FId4 IV層の上部	磨石	12.1	8.5	7.5	1,130	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
56—322	HV区 II層	磨石	12.2	8.7	5.4	980	角内黒雲母花崗岩	北上山地 中生界
57—323	HVab0-1 I層	敲石＋磨石	9.9	9.2	5.0	610	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
57—324	FIIb1 IV層	凹石	15.1	10.4	3.1	542	閃輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
57—325	FId4 IV層の上部	凹石	14.3	6.4	5.7	582	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
57—326	HV区 II層	凹石	13.5	4.2	4.3	290	輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
57—327	GIVb4 IV層	凹石	12.6	9.0	5.4	685	閃輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
57—328	FIII区 II層	凹石	9.0	7.9	6.2	535	閃輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
58—329	HVc4 IV層	凹石	13.4	6.3	4.5	420	閃輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
58—330	HVab0-1 I層	石棒	(13.5)	4.2	3.0	(280)	粘板岩	北上山地 古生界
58—331	IVa2 I層	凹石	15.2	8.1	3.3	505.0	閃輝石安山岩	奥羽山地新第三系中新統
58—332	EIIIe3 IV層	砥石	5.3	5.0	2.2	65.0	白色細粒凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
58—333	HII区 II層	不明	5.6	3.1	0.3	9.6	粘板岩	北上山地 古生界
58—334	GIVb0 IV層	円盤状石製品	3.8	4.2	1.5	32.0	石英安山岩	奥羽山地 中新統
58—335	HV区 I層	不明	2.4	1.5	0.4	2.0	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地新第三系中新統
58—336	EIVe3 II層	石剣	(6.9)	(3.5)	(1.2)	(40.5)	粘板岩	北上山地 古生界
58—337	EIIe2-3 IV層	石棒	40.8	11.2	10.7	7500	石英安山岩	奥羽山地新第三系中新統

写　真　図　版



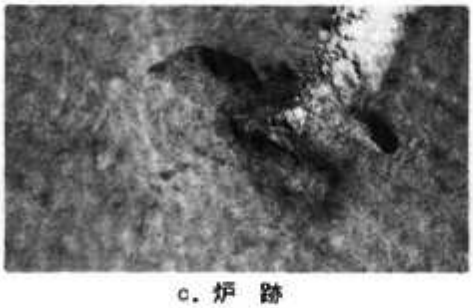
PL－1　遺跡遠景（空中写真）

PL－2　遺跡全景（空中写真）



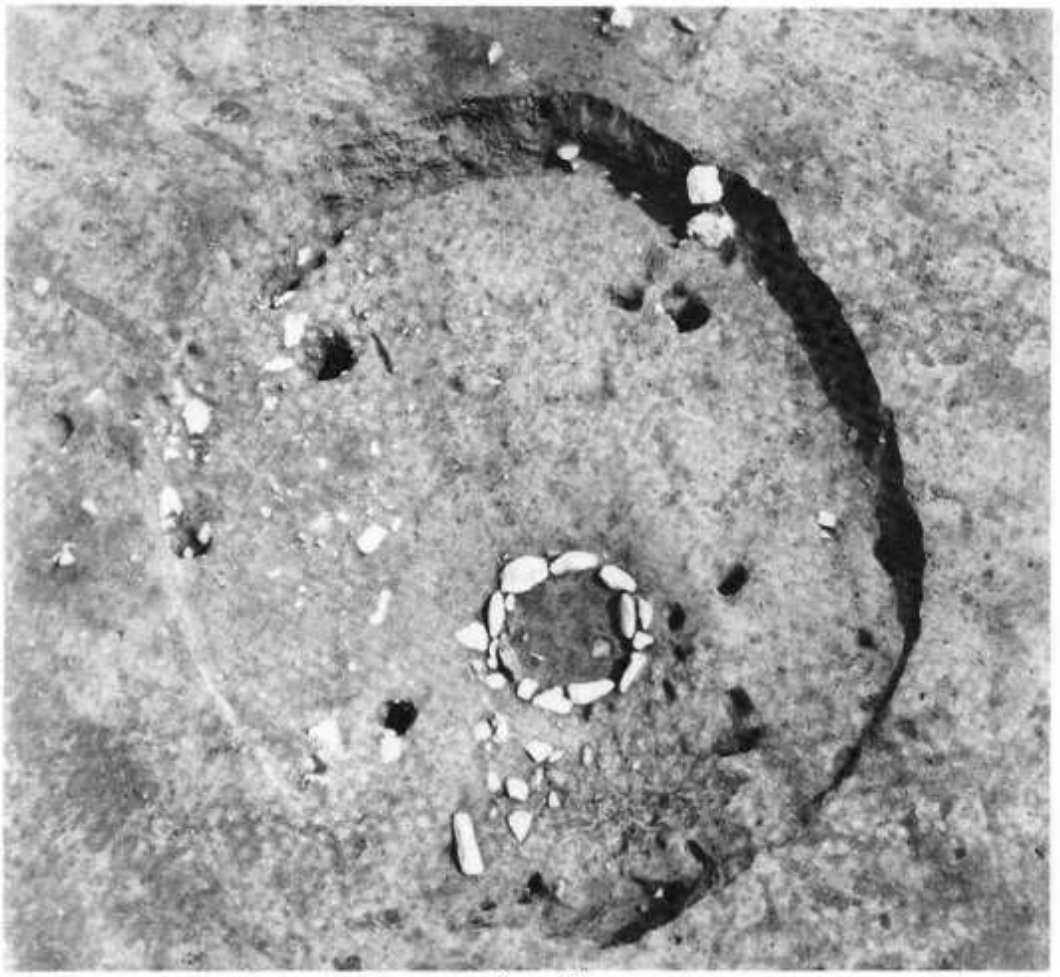
a. 全　景

b. 土層断面



c. 炉　跡

PL－3　FⅣ－1住居址

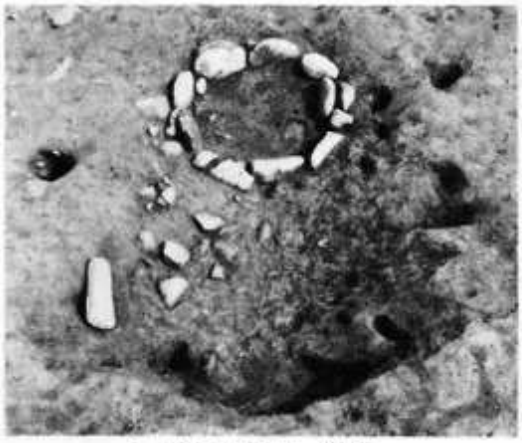


a. 全　景

b. 土層断面

c. 炉跡断面

PL－4　FV－1住居址



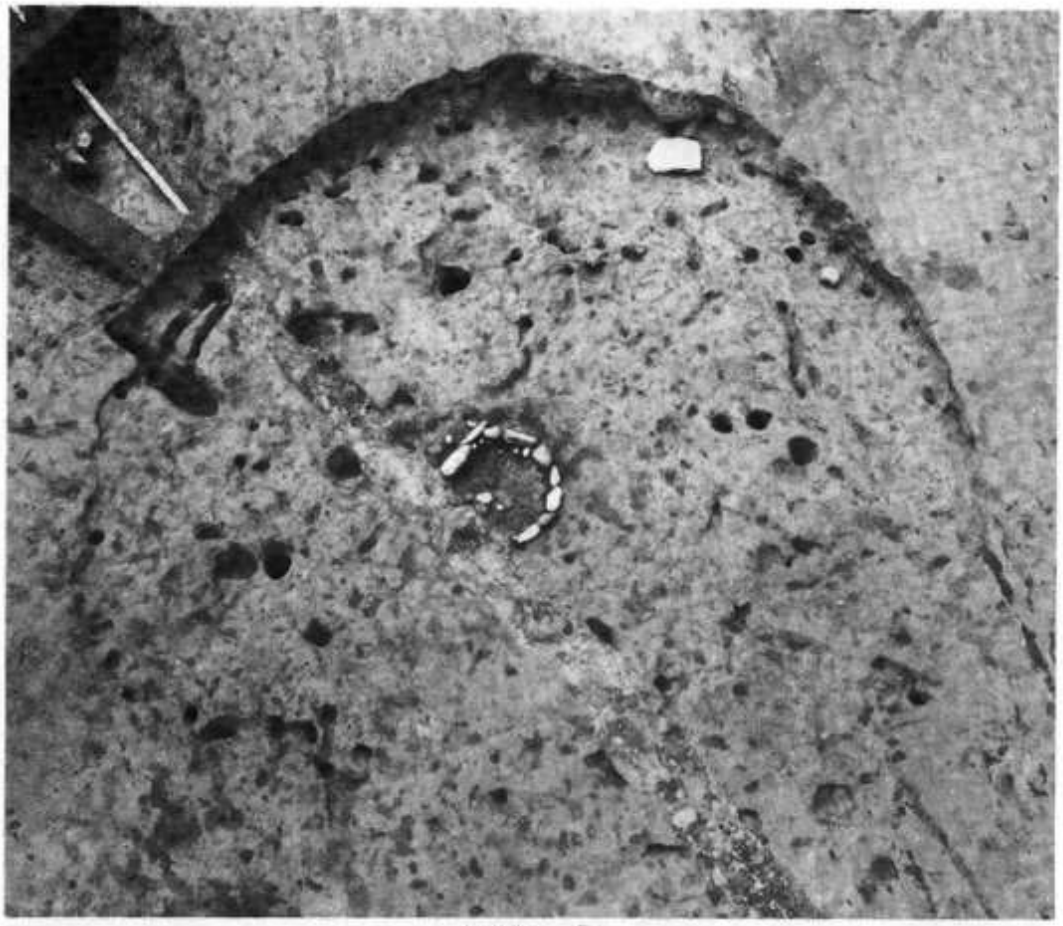
a. FV1住居址　炉跡

b. HV－1住居址　炉跡

C. HV－1住居址　全景

d. HV－1住居址　土層断面

PL－5　FV－1・HV－1住居址



a. 全　景

b. 土層断面

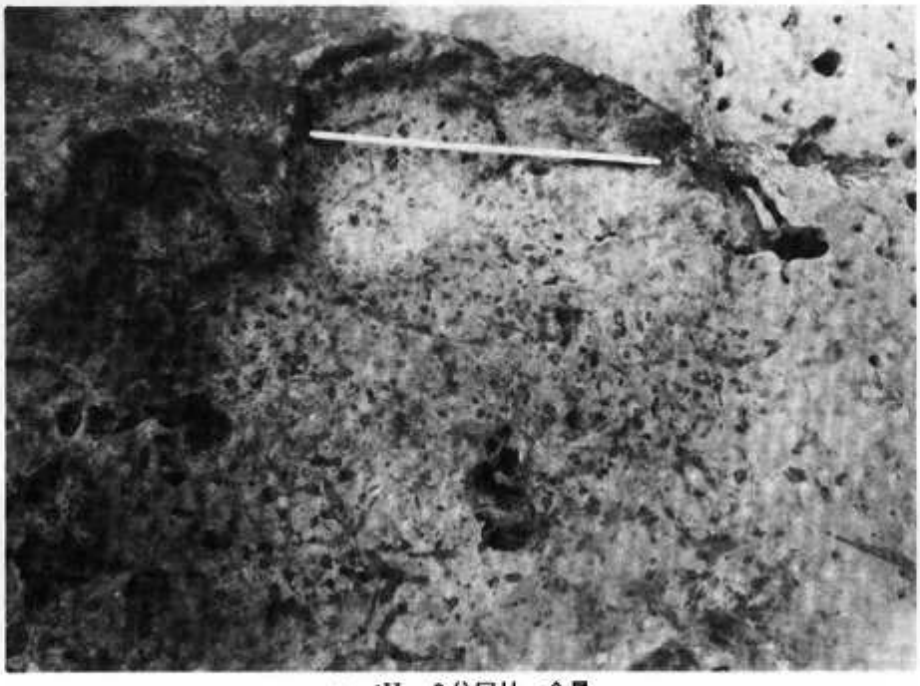
c. 炉　跡

d. 出入口状施設

PL－6　IV－1住居址

a. Ⅳ－2住居址　全景

b. Ⅳ－2住居址　土層断面



c. Ⅳ－3住居址　全景

PL－7　Ⅳ－2・Ⅳ－3住居址

a. IV－3住居址　土層断面

b. IV－4炉址

c. IV－4炉址　断面

d. IV－5住居址　全景

e. IV－5住居址　土層断面

PL－8　IV－3・IV－4・IV－5住居址

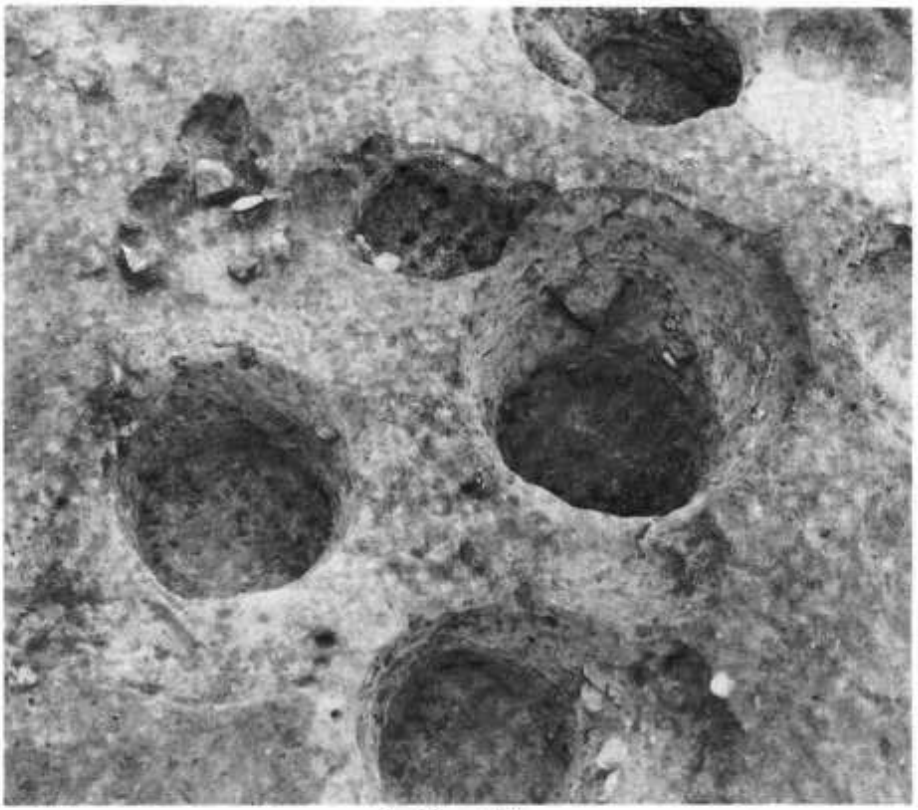
a. 全　景

b. 土層断面

c. カマド

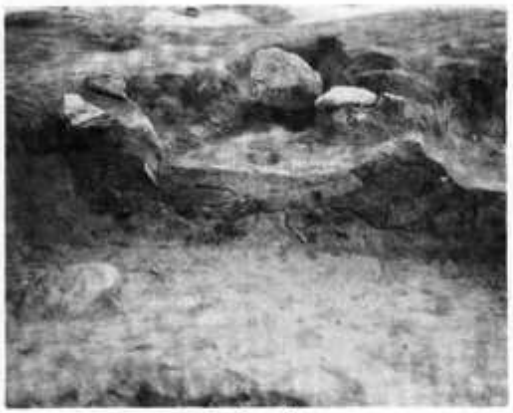
d. カマド断面

PL－9　DⅣ－1住居址



a. 全　景

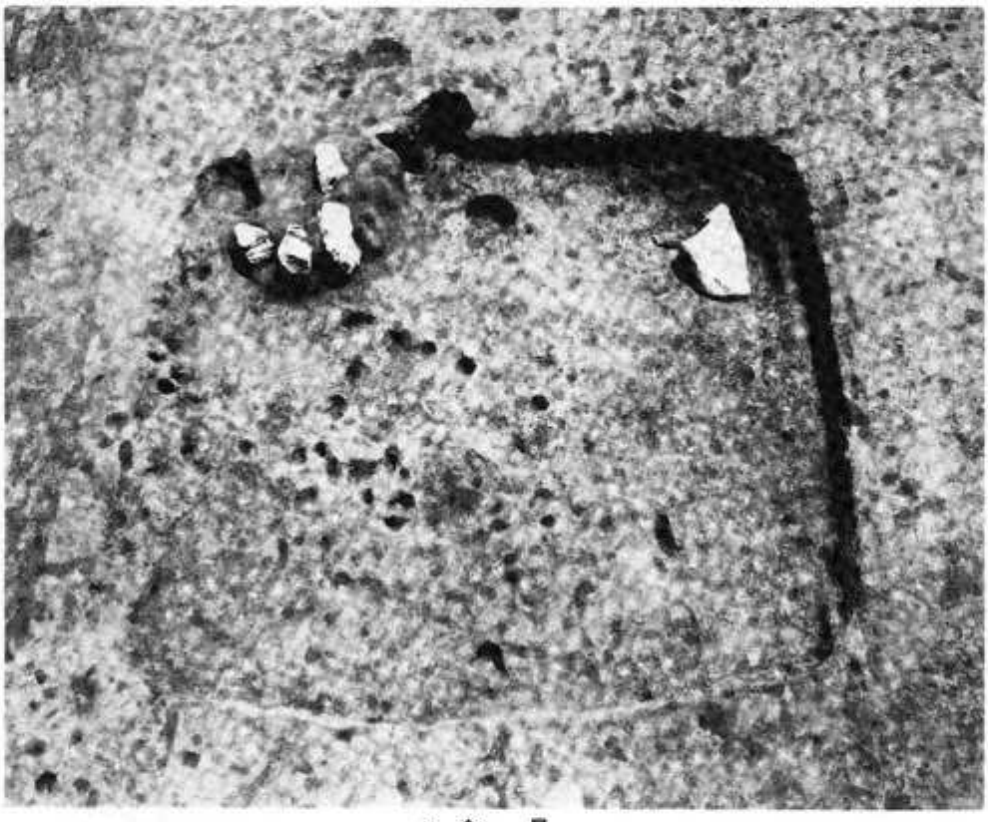
b. 土層断面



c. カマド

d. カマド断面

PL－10　DV－2住居址



a. 全　景

b. 土層断面

c. カマド

d. カマド断面

PL－11　EⅣ－1住居址

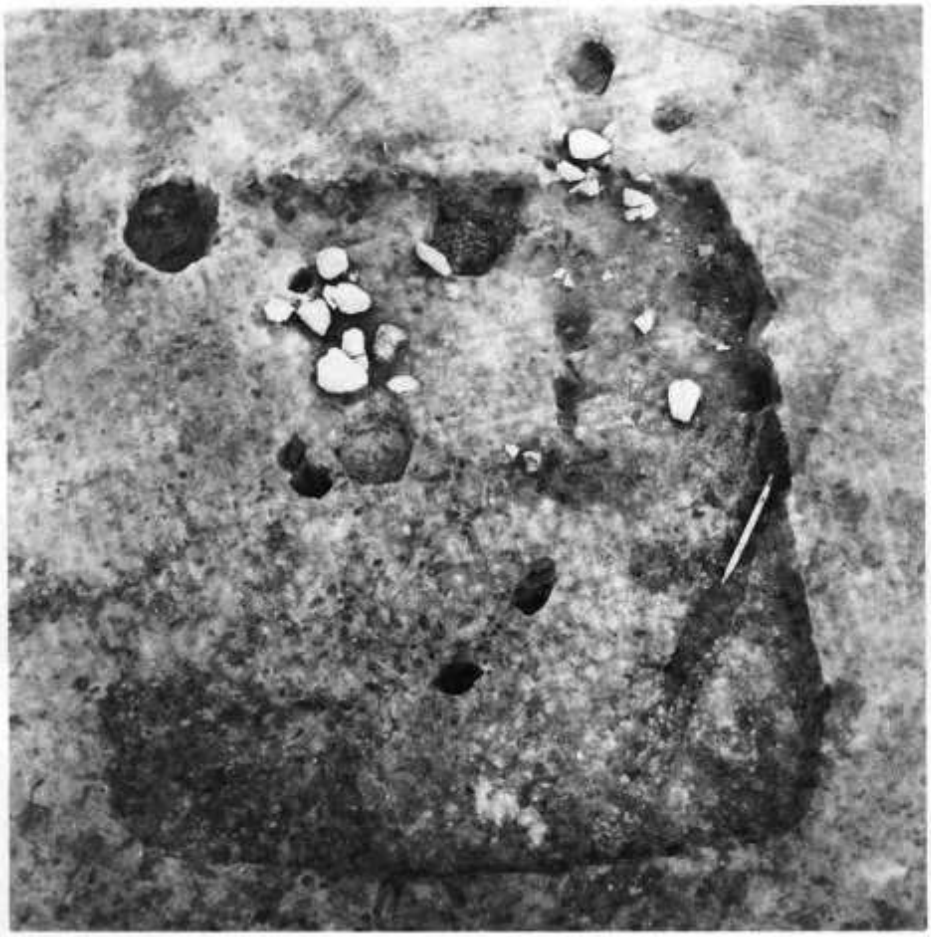
a. 全　景

b. 土層断面

c. カマド

d. 焼土

PL－12　EⅣ－2住居址



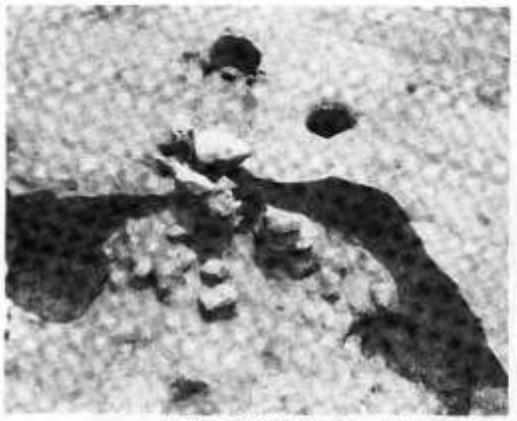
a. 全　景

b. 土層断面

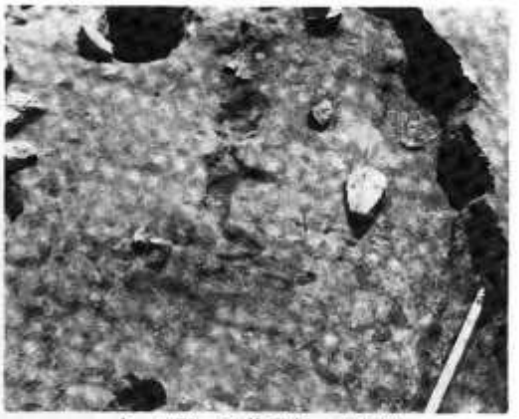
c. P_1土層断面

d. P_3土層断面

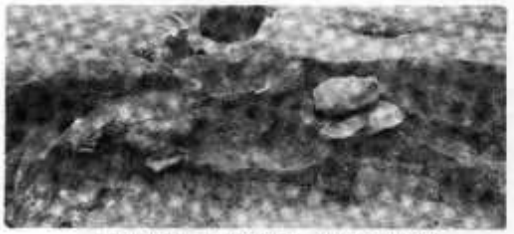
PL－13　HⅣ－1住居址



a. HⅣ－1住居址　カマド

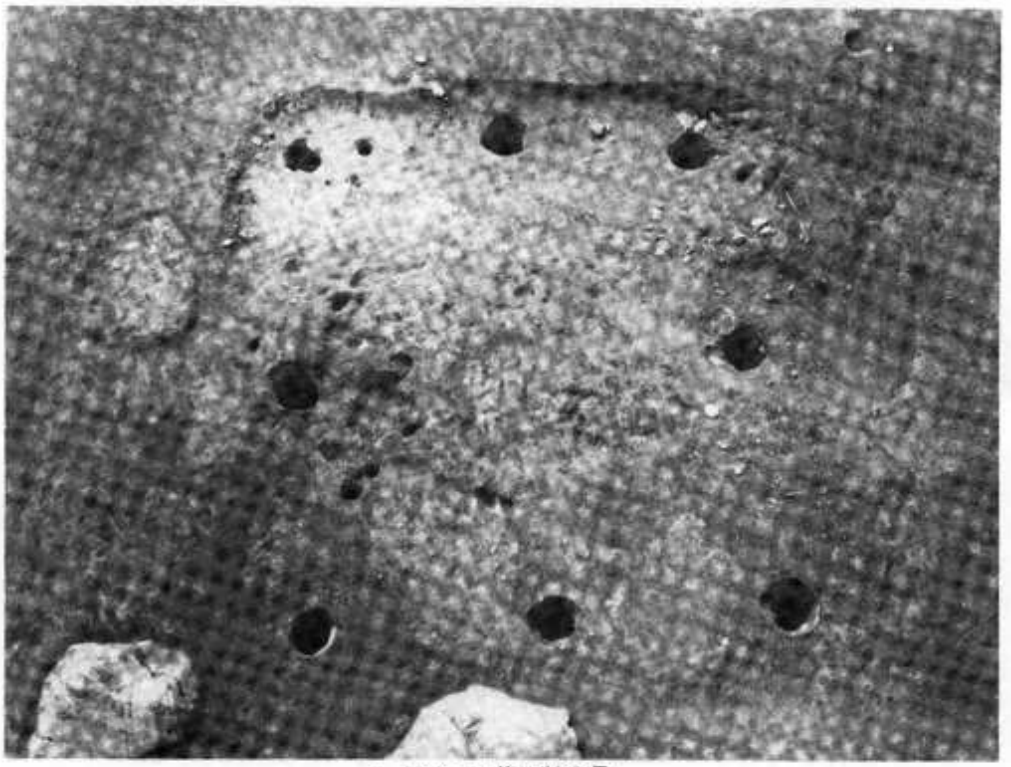


b. HⅣ－1住居址　工房址



c. HⅣ－1住居址　カマド断面

d. HⅣ－1住居址　煙道断面

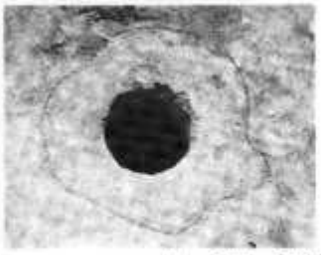


e. DⅤ－1住居址全景

PL－14　HⅣ－1・DⅤ－1住居址

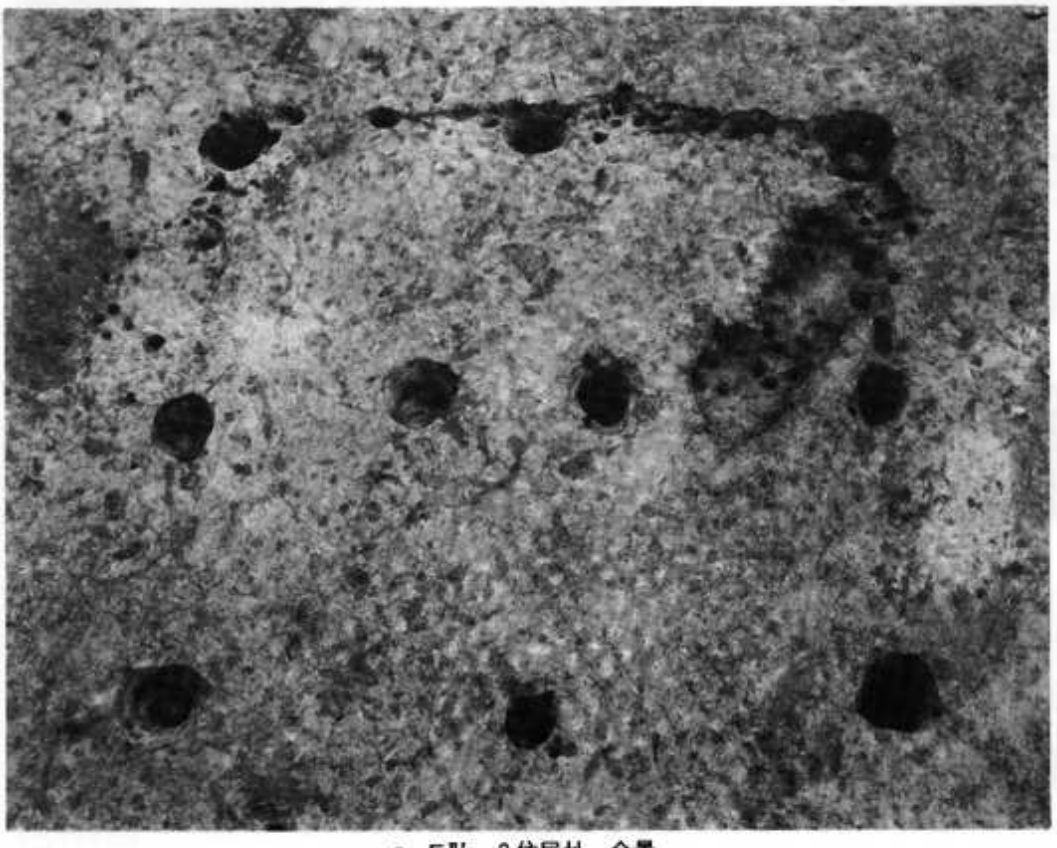
a. DV－1住居址　土層断面

c. DV－1住居址　炉跡



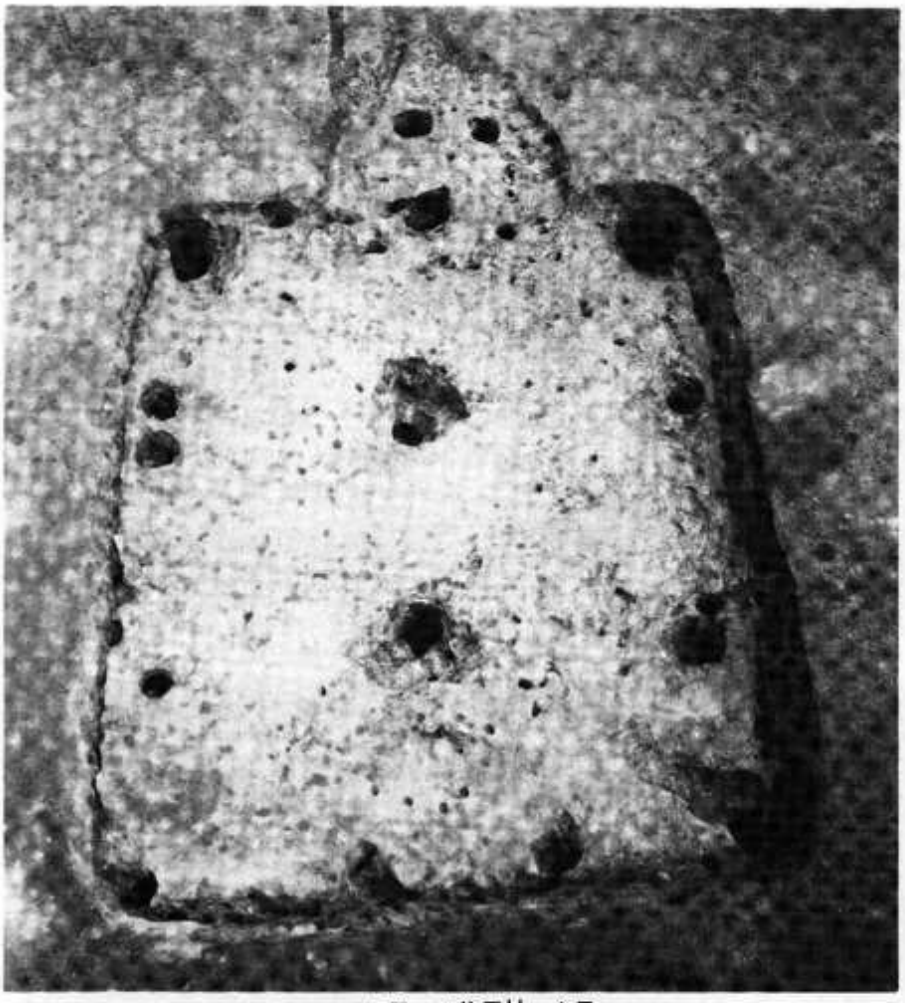
b. DV－1住居址　柱穴掘り方

d. DV－1住居址　炉断面



e. FⅣ－2住居址　全景

PL－15 DV－1・FⅣ－2住居址



a. FⅢ－1住居址　全景

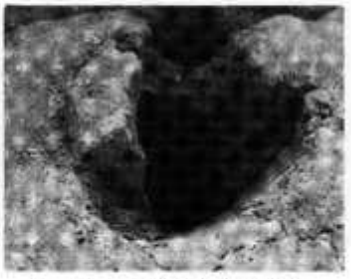
b. 壁溝

c. 壁溝

d. FⅢ－1住居址　土層断面

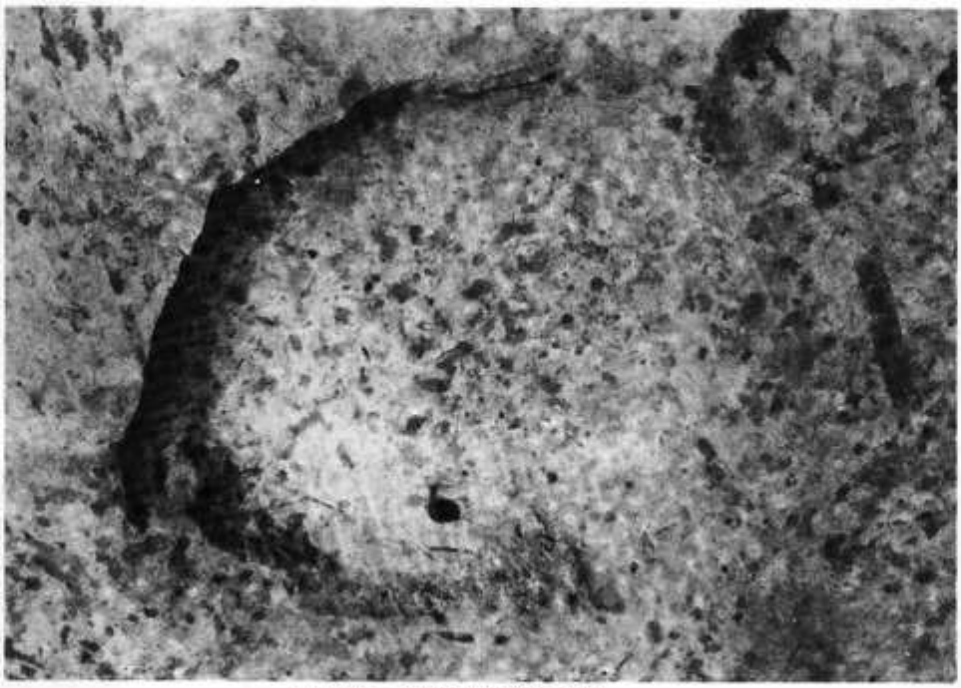
e. FⅣ－2住居址　柱穴

f. FⅣ－2住居址　柱穴

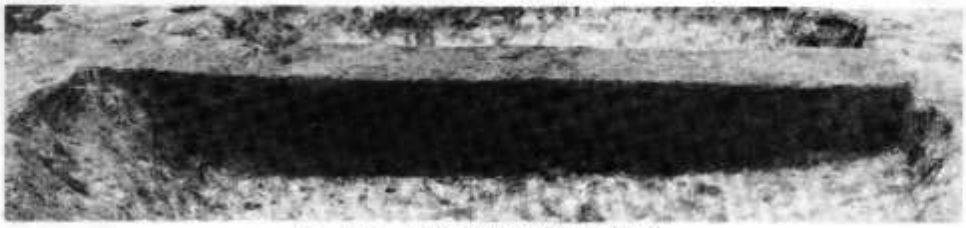


g. FⅢ－1住居址　柱穴

PL－16　FⅢ－1・FⅣ－2住居址



a. HV－2住居址状遺構全景



b. HV－2住居址状遺構土層断面

c. EⅣ－51ピット全景

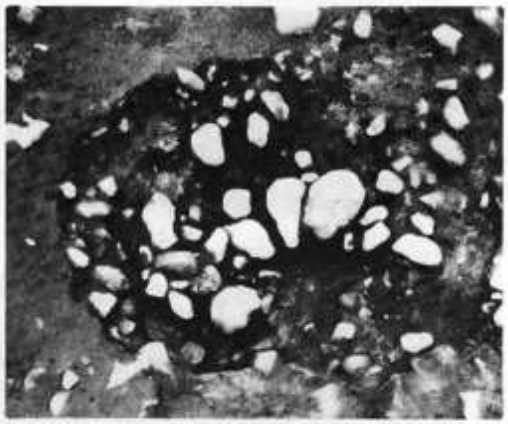
d. EⅣ－51ピット土層断面

PL－17　住居址状遺構・ピット(1)

a. EⅣ−52ピット全景

b. EⅣ−52ピット礫分布状況

c. EⅣ−53ピット全景



d. EⅣ−53ピット礫分布状況

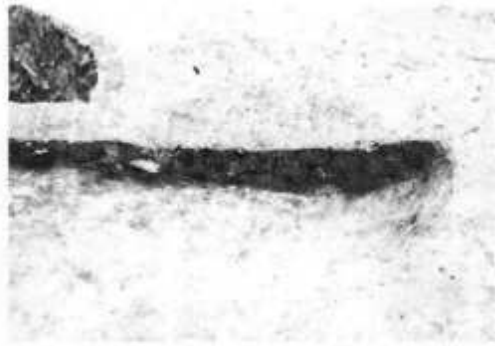
e. EⅤ−51ピット全景

f. EⅤ−51ピット土層断面

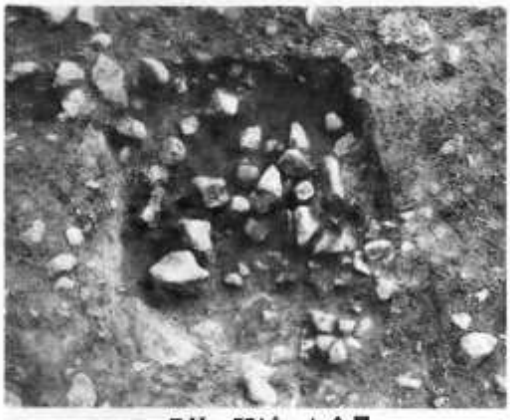
g. EⅤ−51ピット礫分布状況

PL−18　ピット(2)

a. EV－52・53ピット土層断面



b. EV－54ピット土層断面

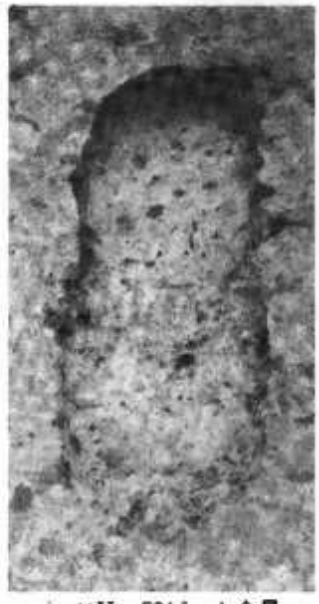


c. EV－55ピット全景

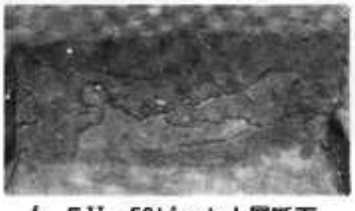
d. EV－55ピット土層断面

e. EV－56ピット全景

g. FⅣ－51ピット全景



i. HV－53ピット全景

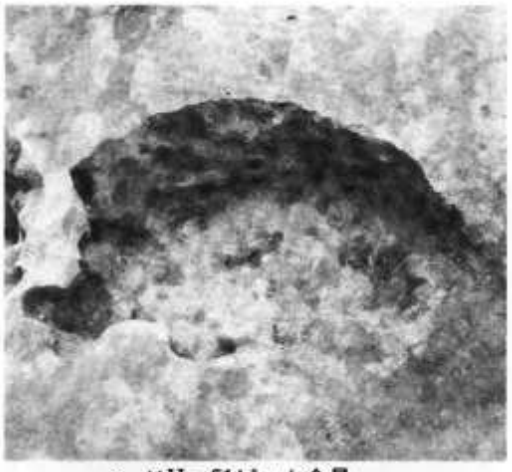


f. EV－56ピット土層断面

h. FⅣ－51ピット土層断面

j. HV－53ピット土層断面

PL－19　ピット(3)

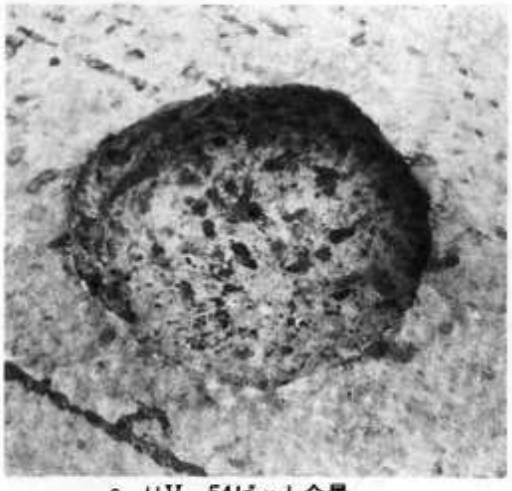


a. HV－51ピット全景

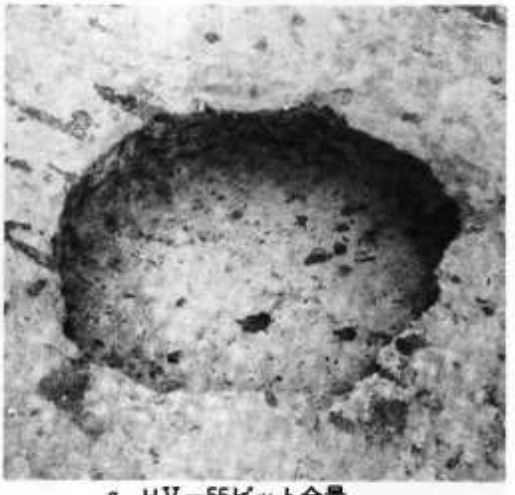
c. HV－52ピット全景

b. HV－51ピット土層断面

d. HV－52ピット土層断面



e. HV－54ピット全景

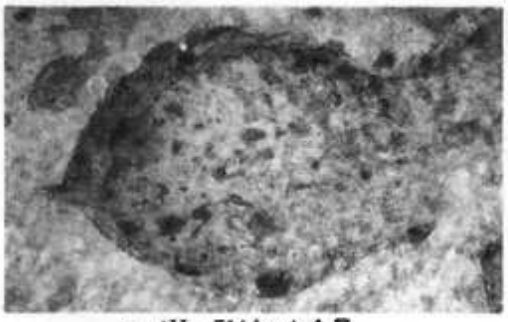


g. HV－55ピット全景

f. HV－54ピット土層断面

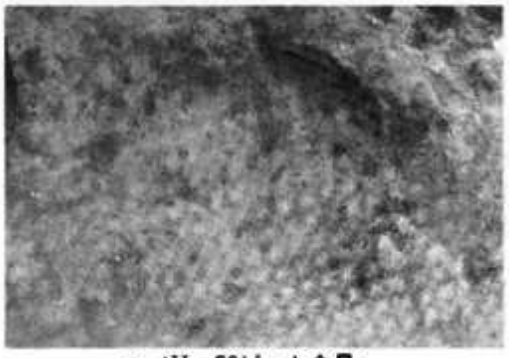
h. HV－55ピット土層断面

PL－20　ピット(4)

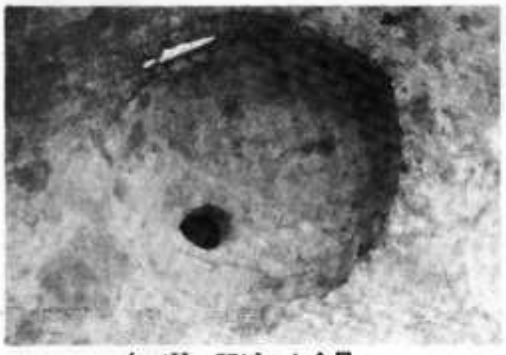


a. IV－51ピット全景

b. IV－51ピット土層断面

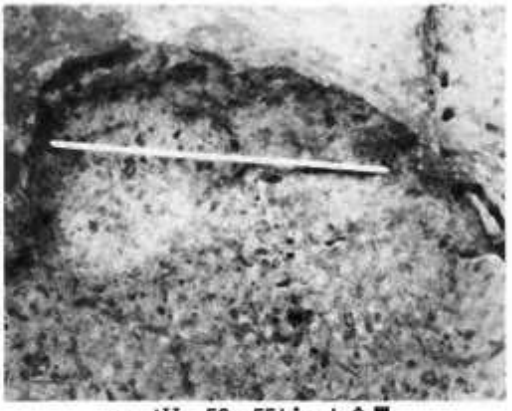


e. IV－56ピット全景



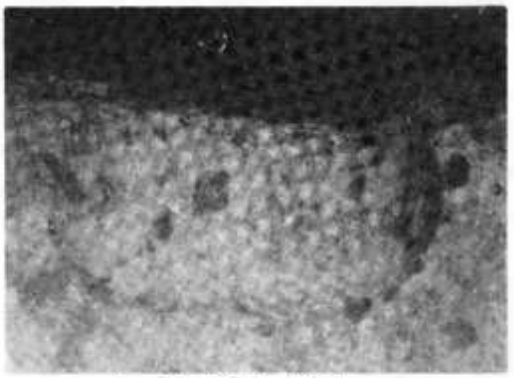
f. IV－57ピット全景

g. IV－57ピット土層断面



c. IV－52～55ピット全景

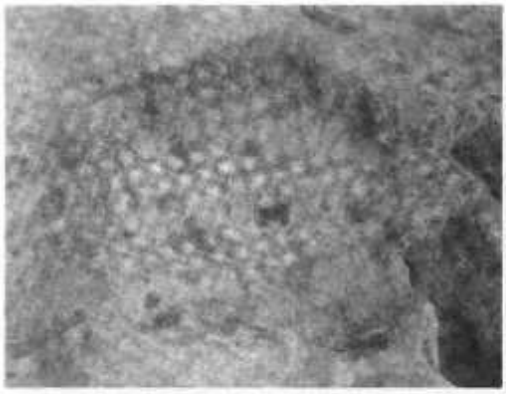
d. IV－52～55ピット土層断面



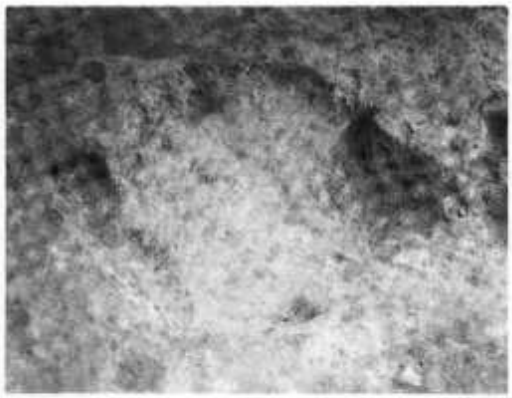
h. IV－58ピット全景

i. IV－58ピット土層断面

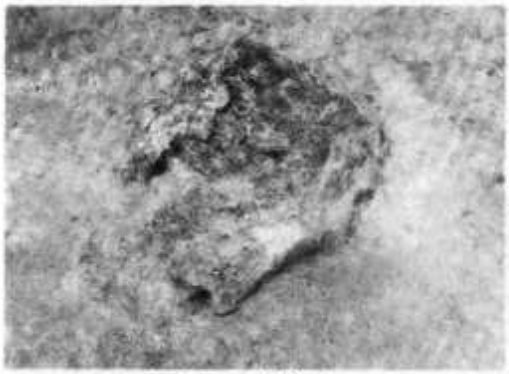
PL－21　ピット(5)



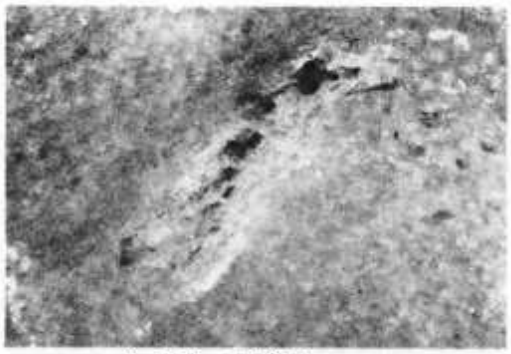
a. IV－59ピット全景



b. IV－60ピット全景



c. GⅢ－151焼土



f. FⅠ－151焼土

d. GⅢ－151焼土断面

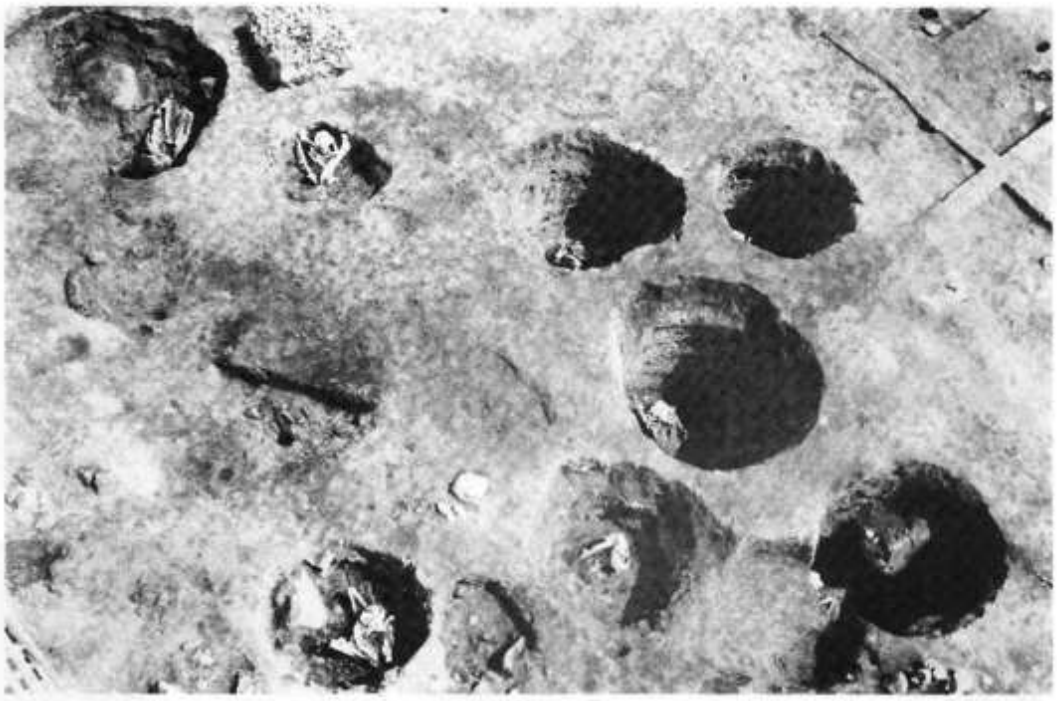
g. FⅠ－151 焼土断面

e. GⅢ－151焼土埋土

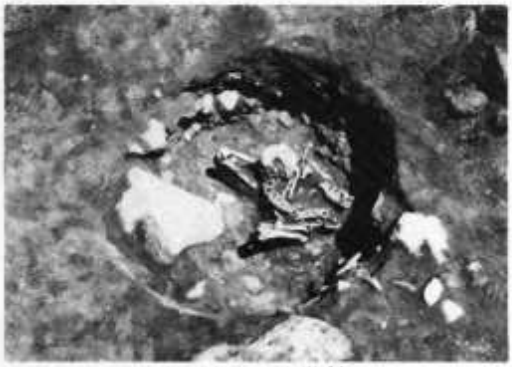
h. FⅢ－151焼土

i. FⅢ－151焼土断面

PL－22　ピット(6)・焼土遺構



a. 墓壙群全景



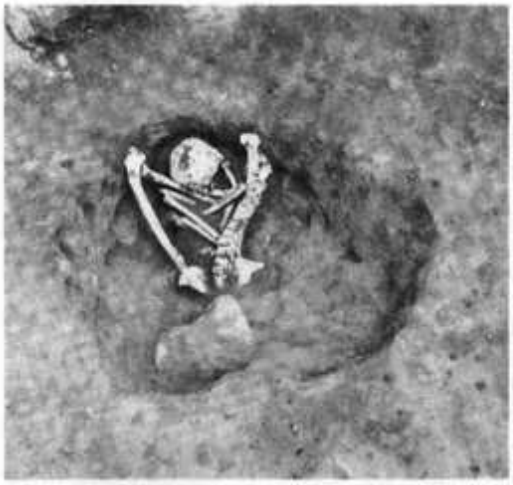
b. DⅣ－201墓壙

c. DⅣ－203・204墓壙

d. DⅣ－202墓壙

e. DⅣ－202墓壙

PL－23　墓壙(1)

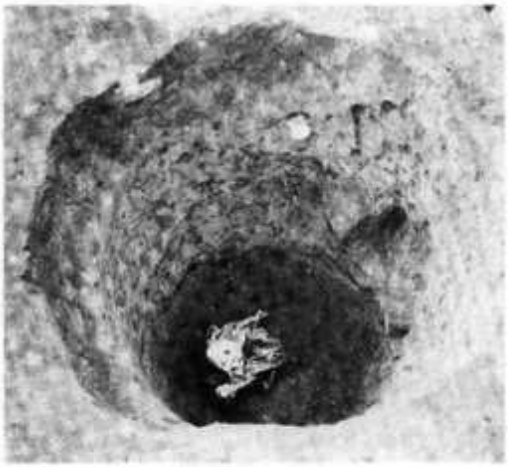


a. DⅣ－205墓壙

b. DⅤ－201墓壙

c. DⅤ－202墓壙

d. DⅤ－202墓壙



e. DⅤ－203墓壙

f. DⅤ－203墓壙

PL－24　墓壙(2)

a．DV－204墓壙

b．DV－204墓壙

c．GⅢ－251暗渠全景

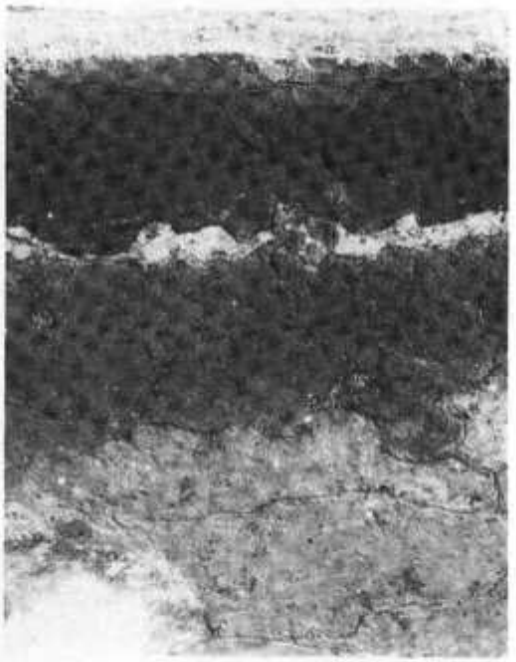
d．暗渠断面（グリッドHⅢb4）

e．暗渠断面（グリッドHⅢa4）

f．暗渠断面（グリッドHⅢb4）

PL－25　墓壙(3)・暗渠

a. 基本層序(IⅣb3グリッド)



b. 基本層序(IⅡc2グリッド)

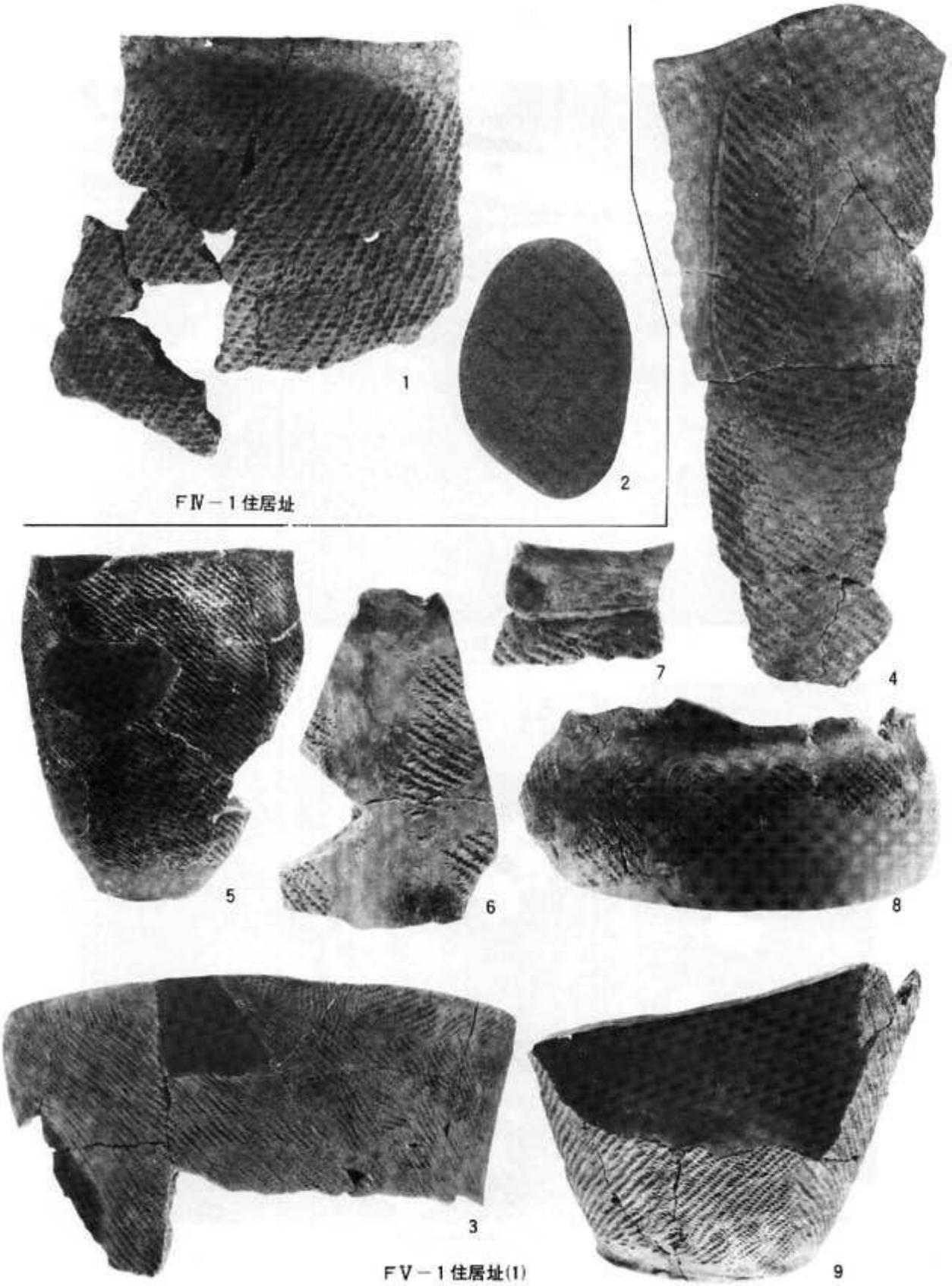
c. 現地説明会

PL－26　基本層序・現地説明会

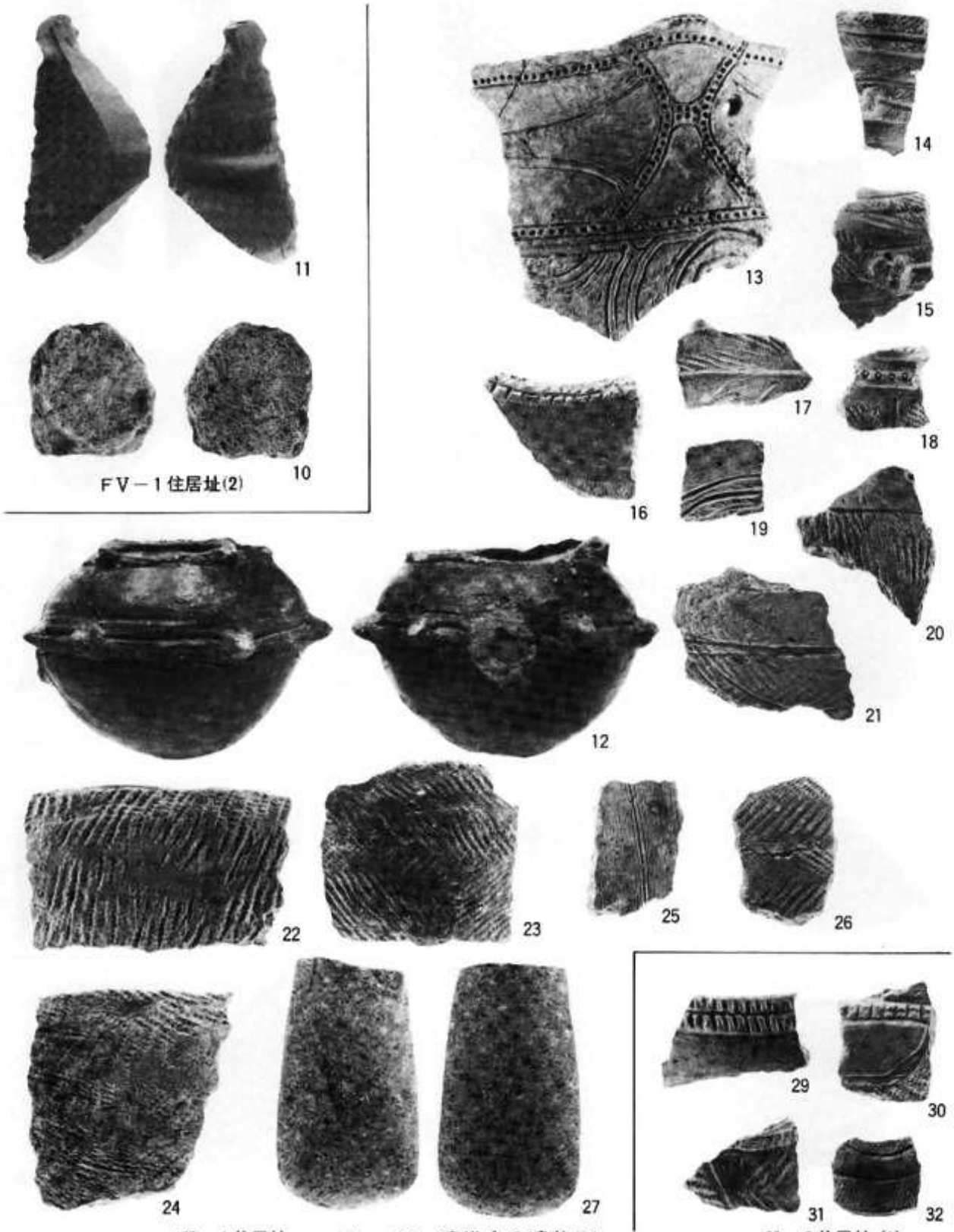
a. 精　査

b. 人骨の取り上げ

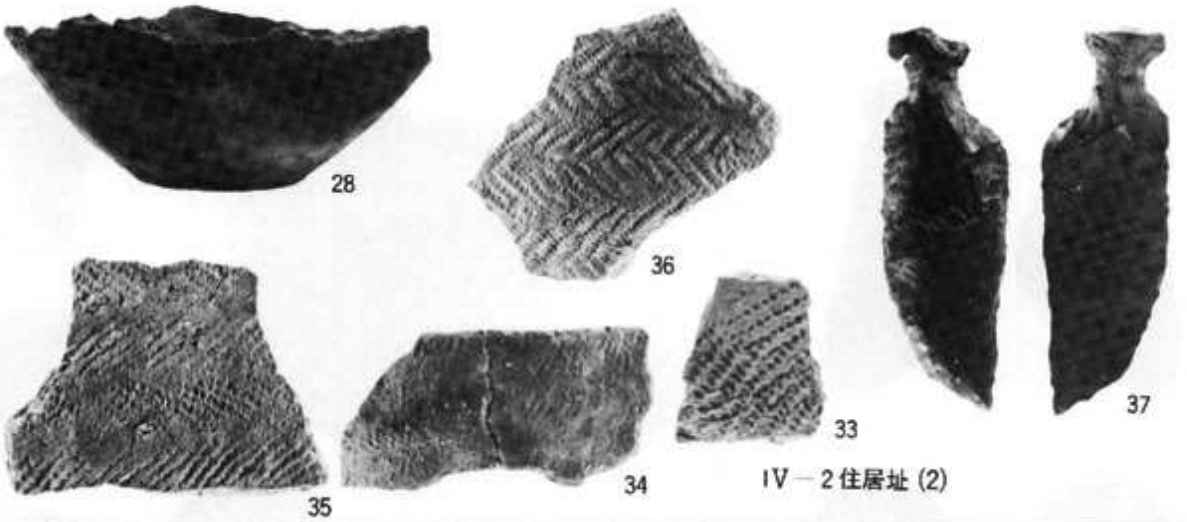
PL－27　作業風景



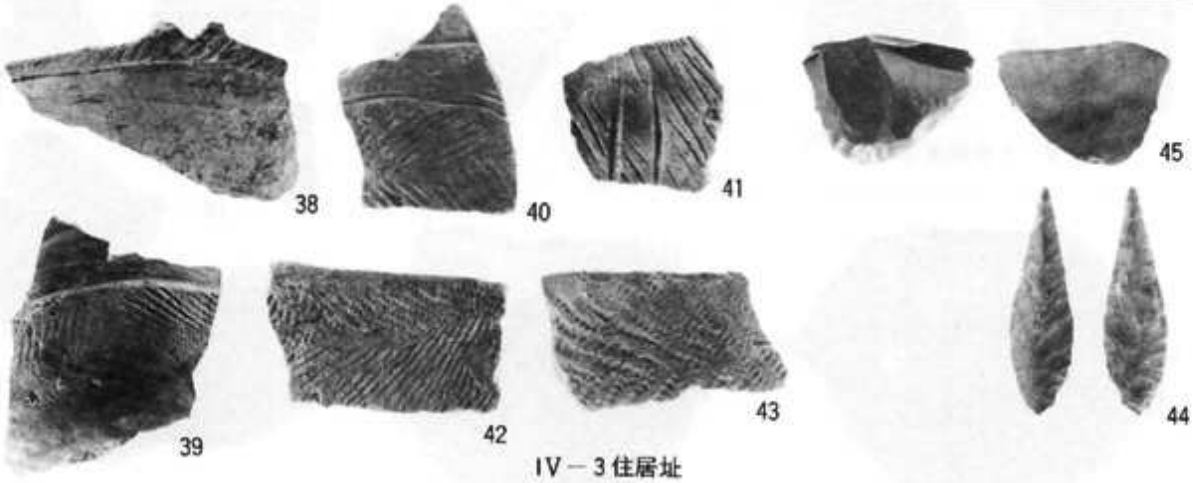
PL－28　遺構内の遺物(1)



IV－1住居址　PL－29　遺構内の遺物(2)　IV－2住居址 (1)



IV－2住居址 (2)



IV－3住居址

IV－4住居址

IV－5住居址 (1)

PL－30　遺構内の遺物(3)

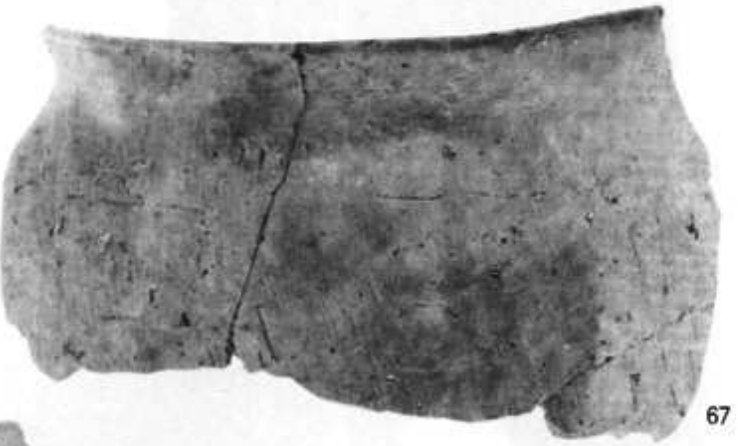
IV－5住居址(2)　　炭化した堅果類

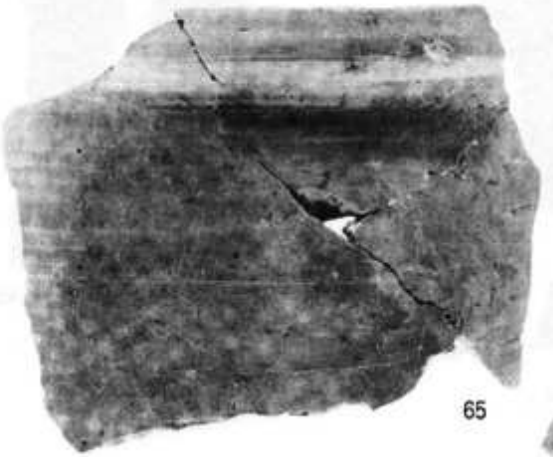
PL－31　遺構内の遺物(4)

66

61

68


67


65

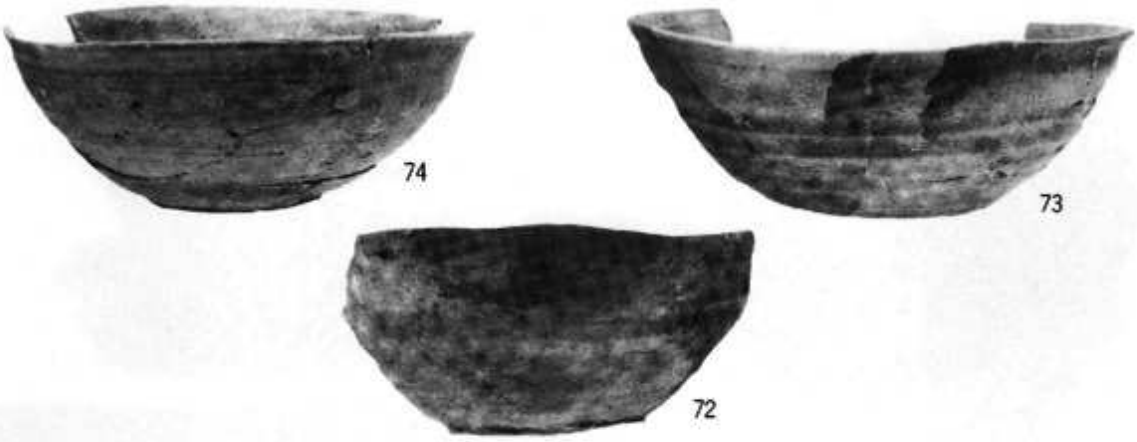
64

63

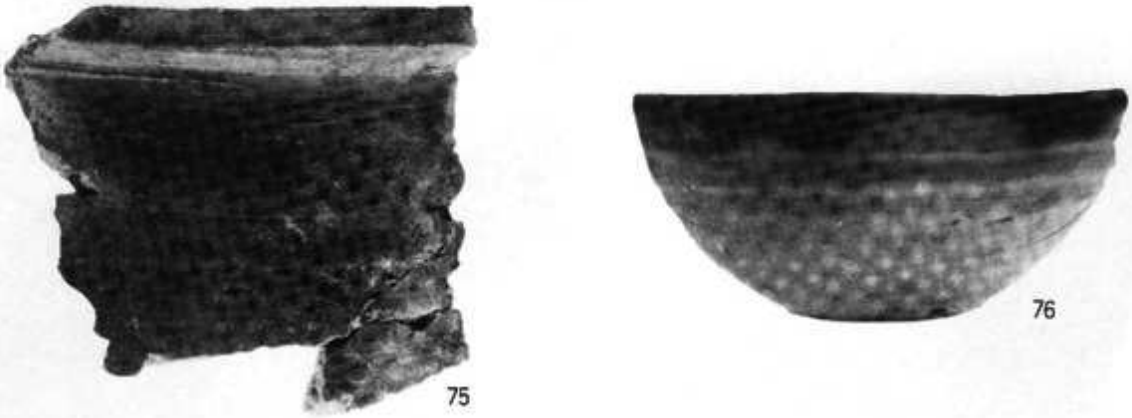
62

DⅣ－1住居址(1)

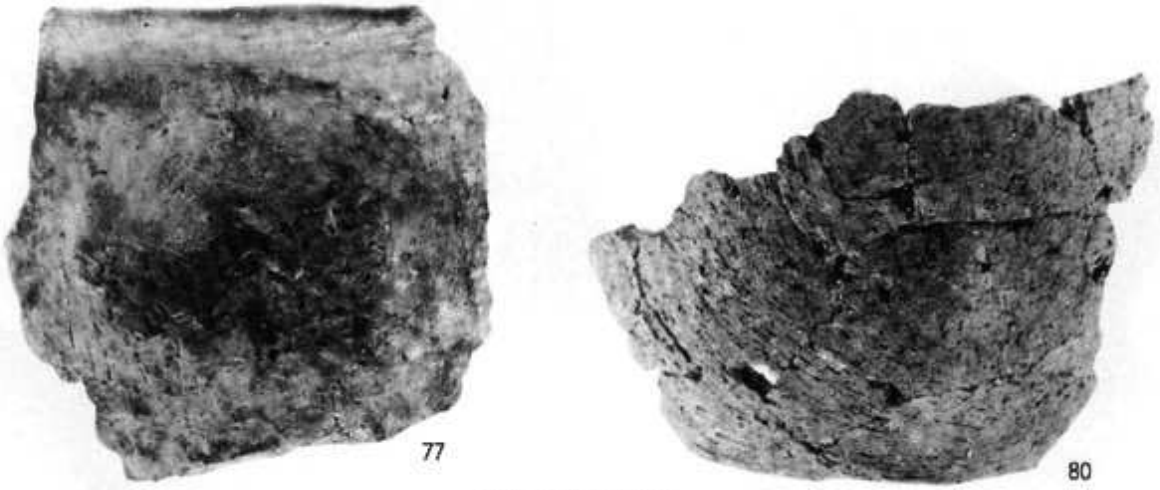
PL－32　遺構内の遺物(5)



DⅣ－1住居址(2)



DⅤ－2住居址



EⅣ－1住居址(1)

PL－33　遺構内の遺物(6)

78

79

81

EⅣ－1住居址(2)

85

82

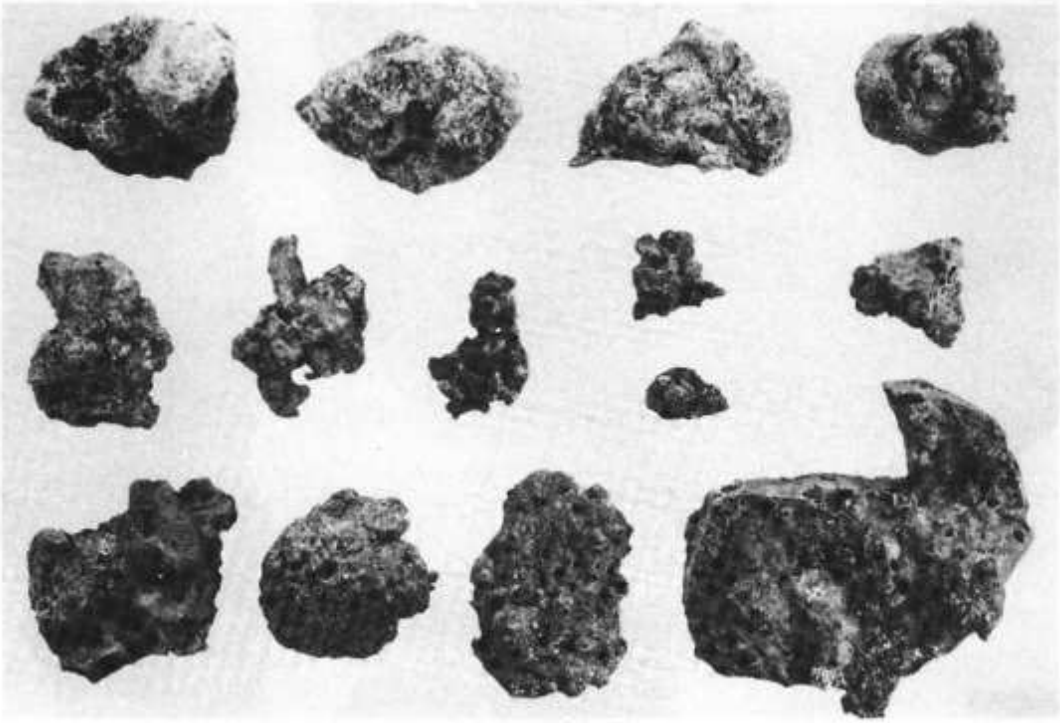
84

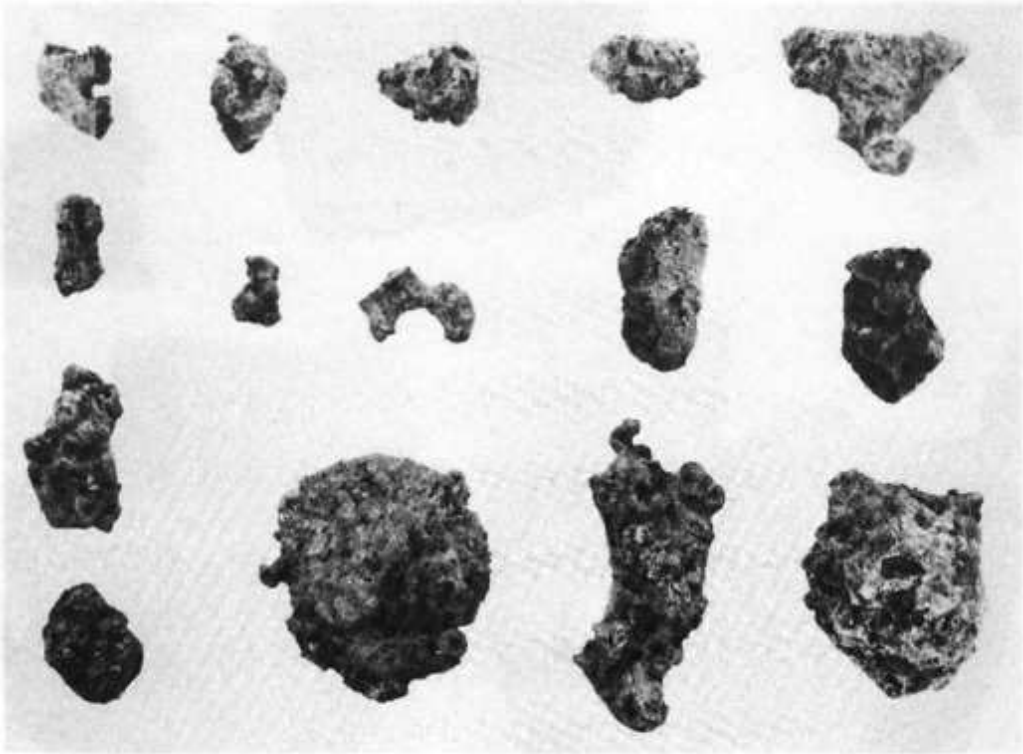
83

86

EⅣ－2住居址(1)

PL－34　遺構内の遺物(7)

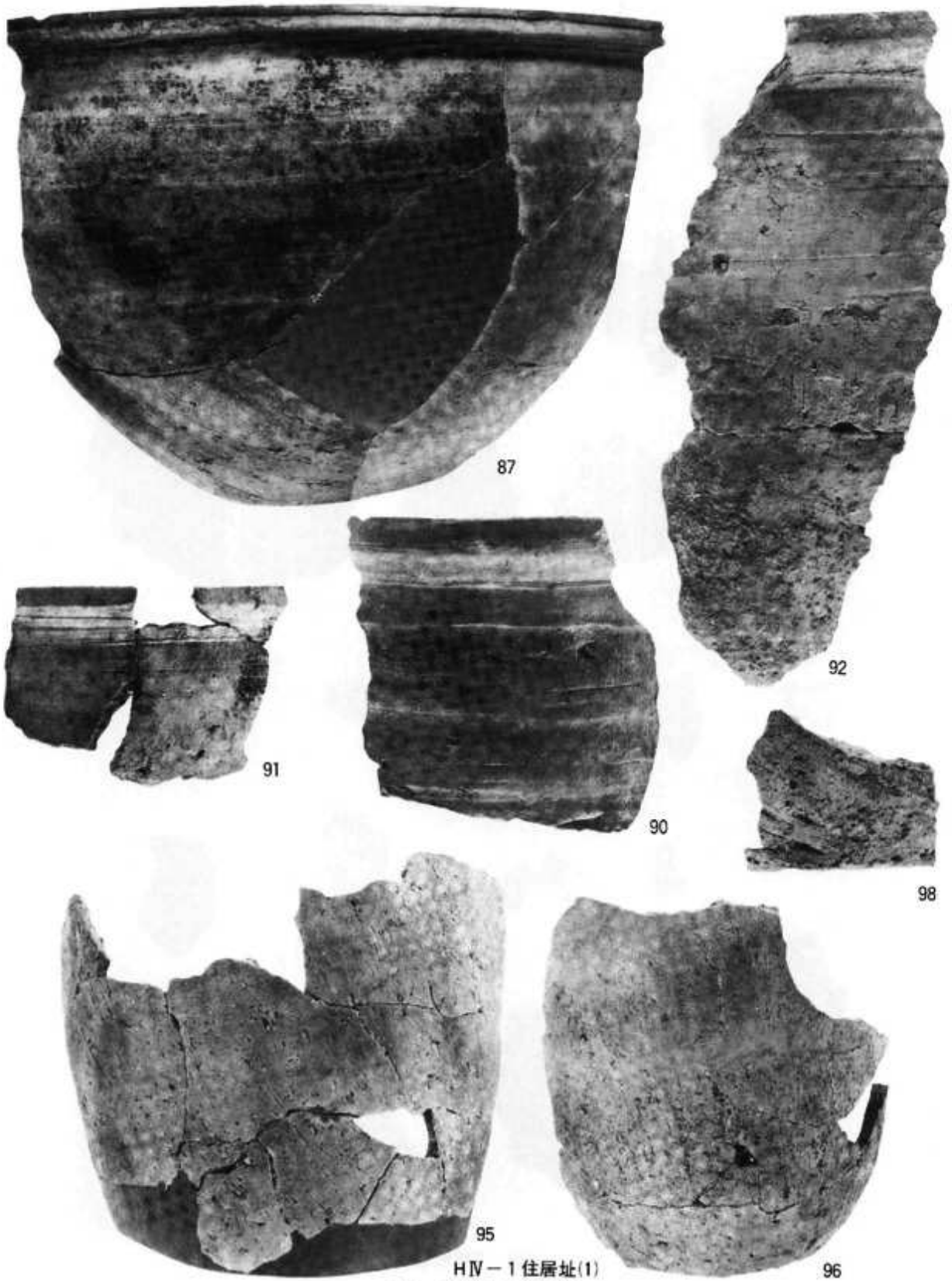




鉄滓

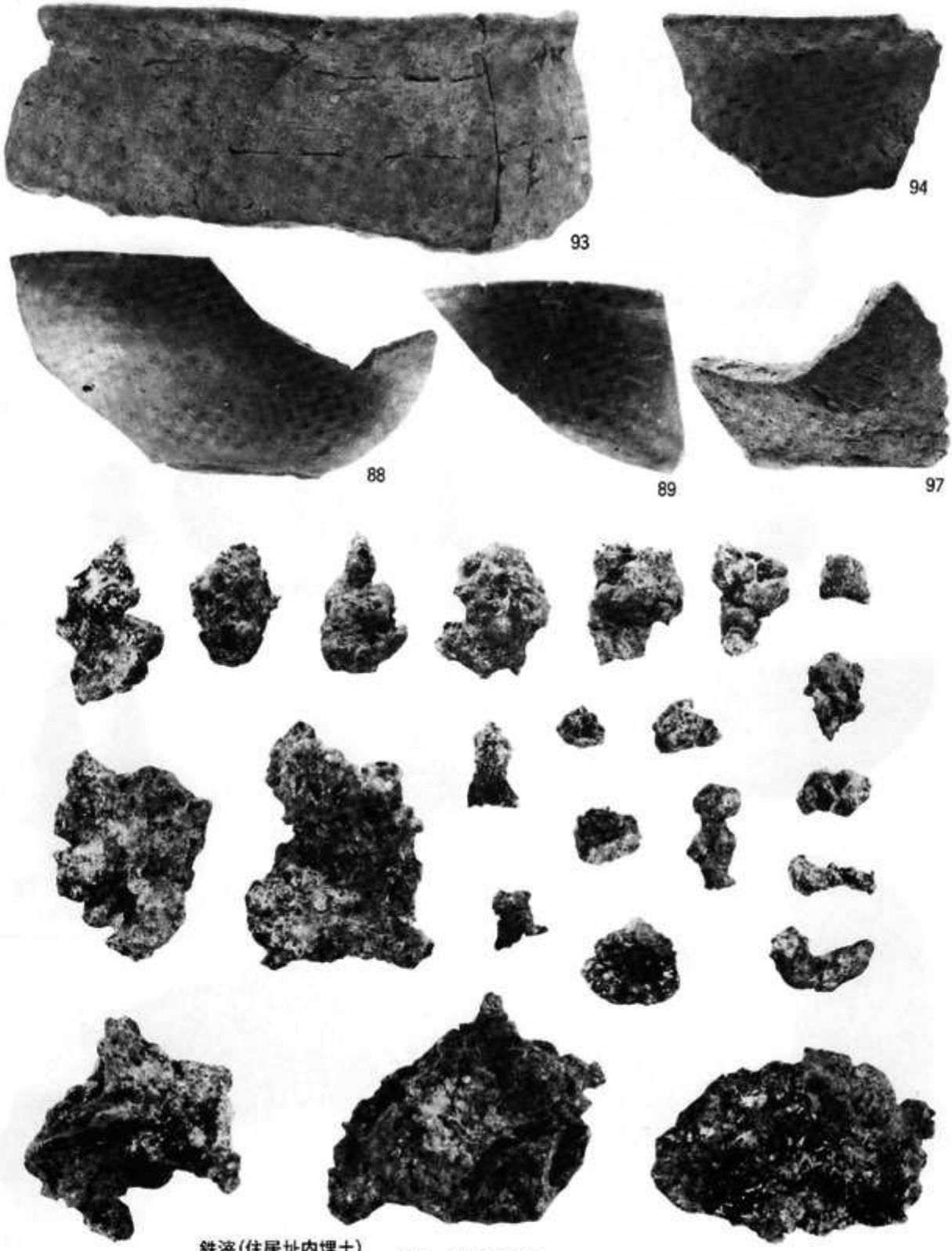
EⅣ－2住居址(2)

PL－35　遺構内の遺物(8)



HⅣ－1住居址(1)

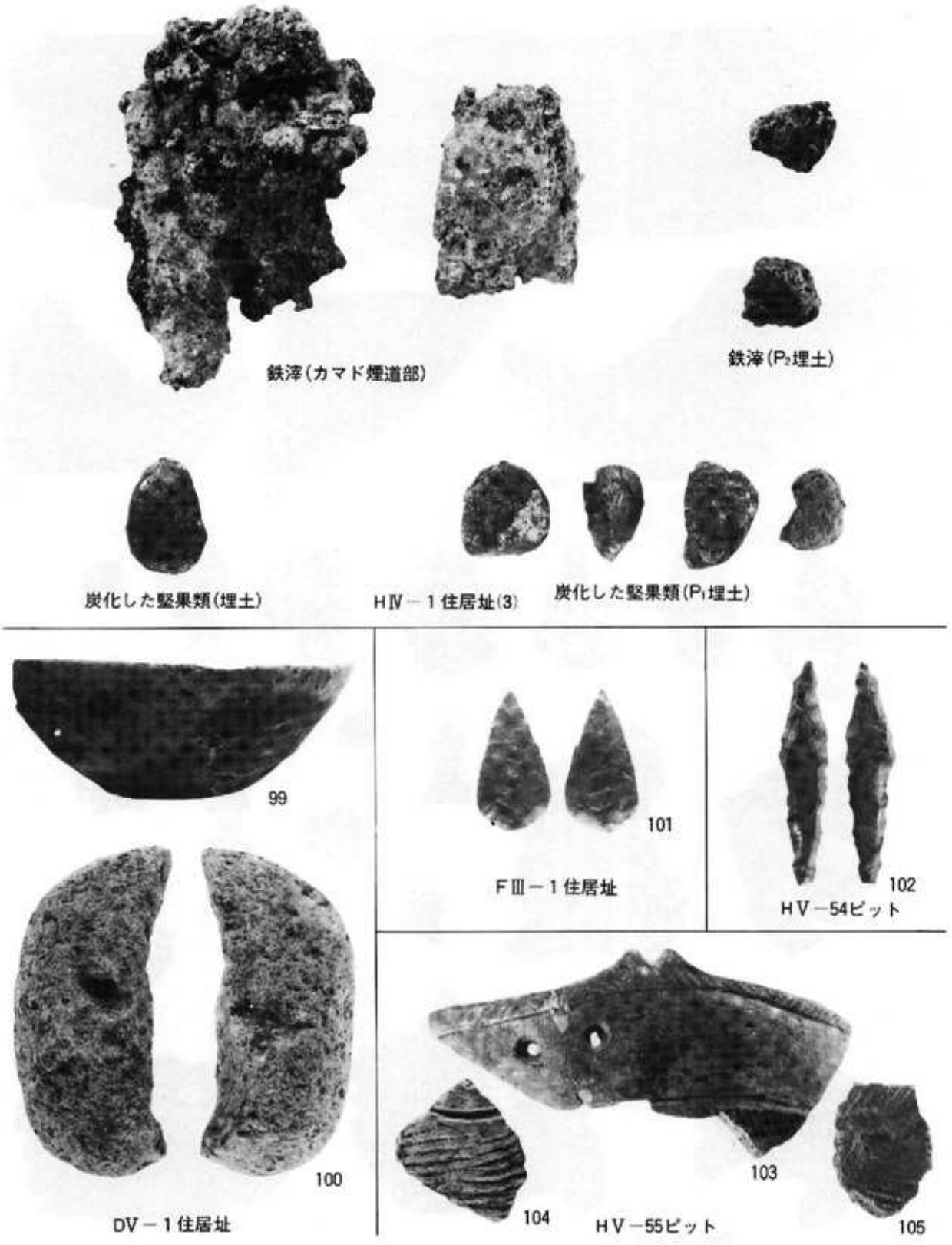
PL－36　遺構内の遺物(9)



鉄滓(住居址内埋土)

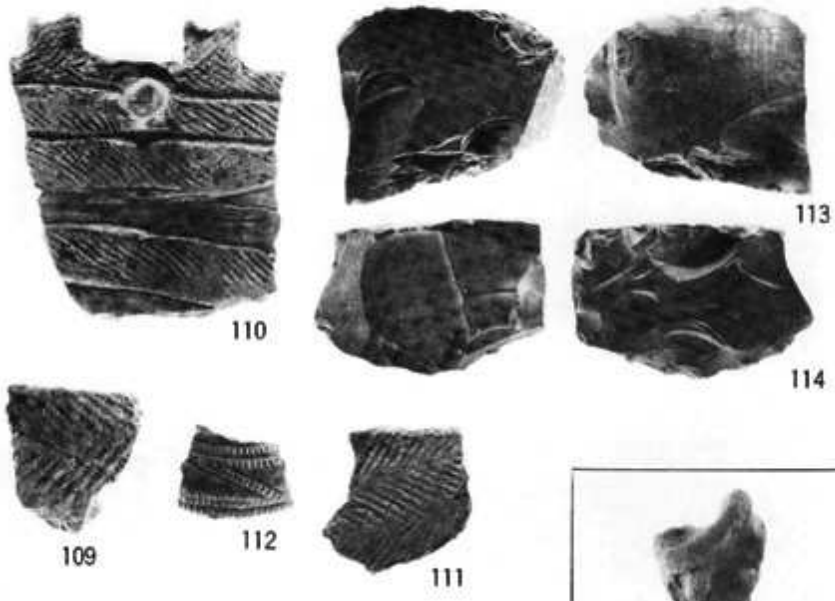
HⅣ－1住居址(2)

PL－37　遺構内の遺物(10)



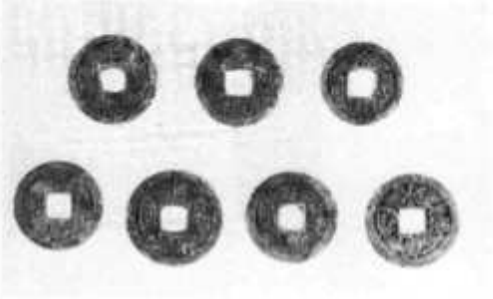
PL－38　遺構内の遺物(11)

IV－52ピット

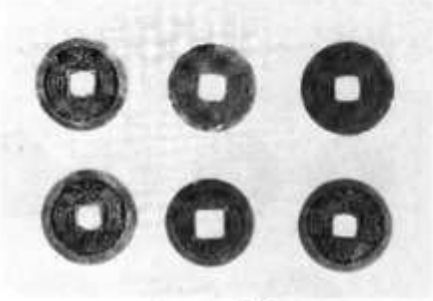


IV－53・54ピット

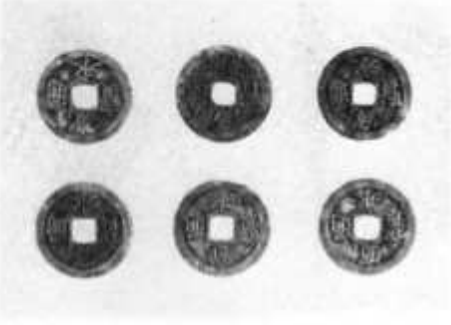
IV－60ピット



DV－201墓壙



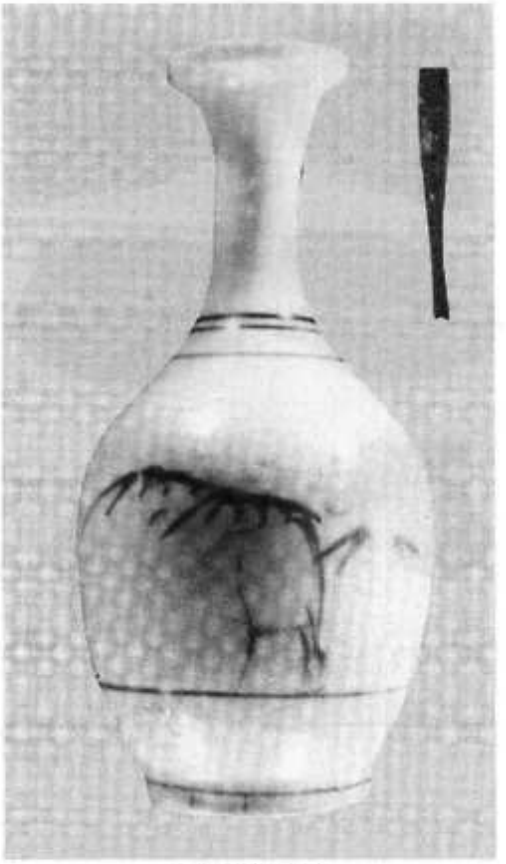
DV－202墓壙



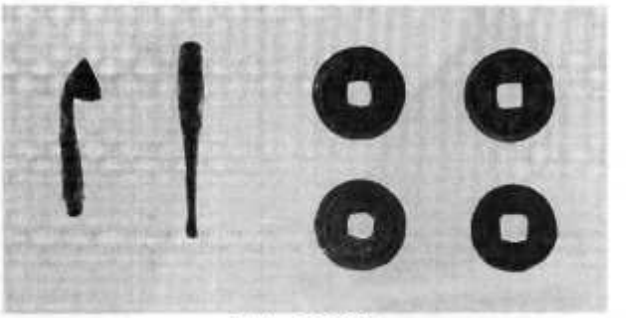
DV－203墓壙

DV－204墓壙

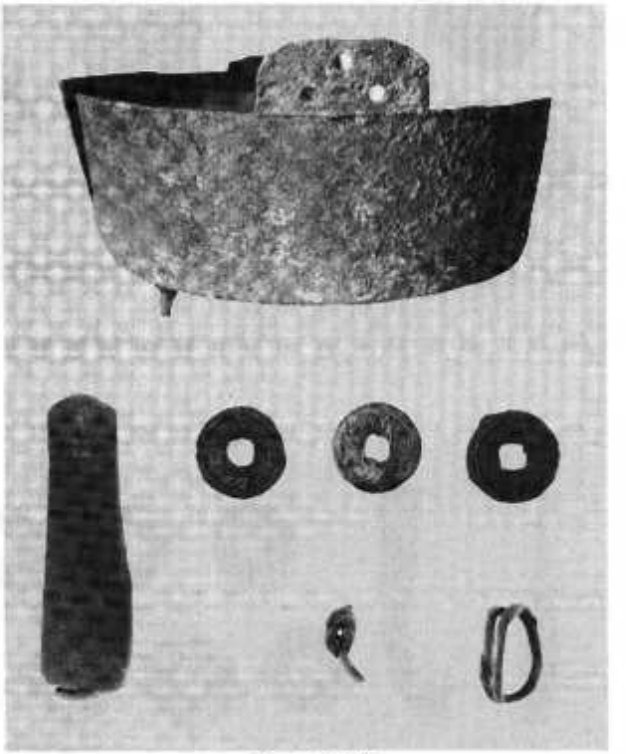
PL－39　遺構内の遺物(12)



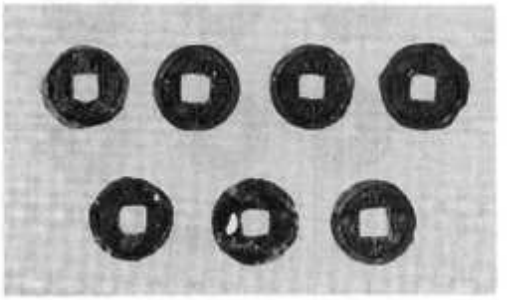
DⅣ－201墓壙



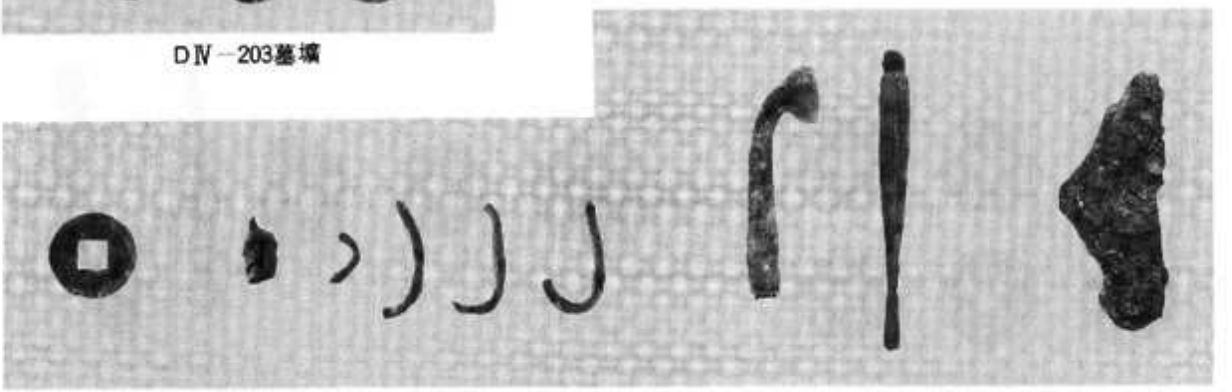
DⅣ－202墓壙



DⅣ－204墓壙

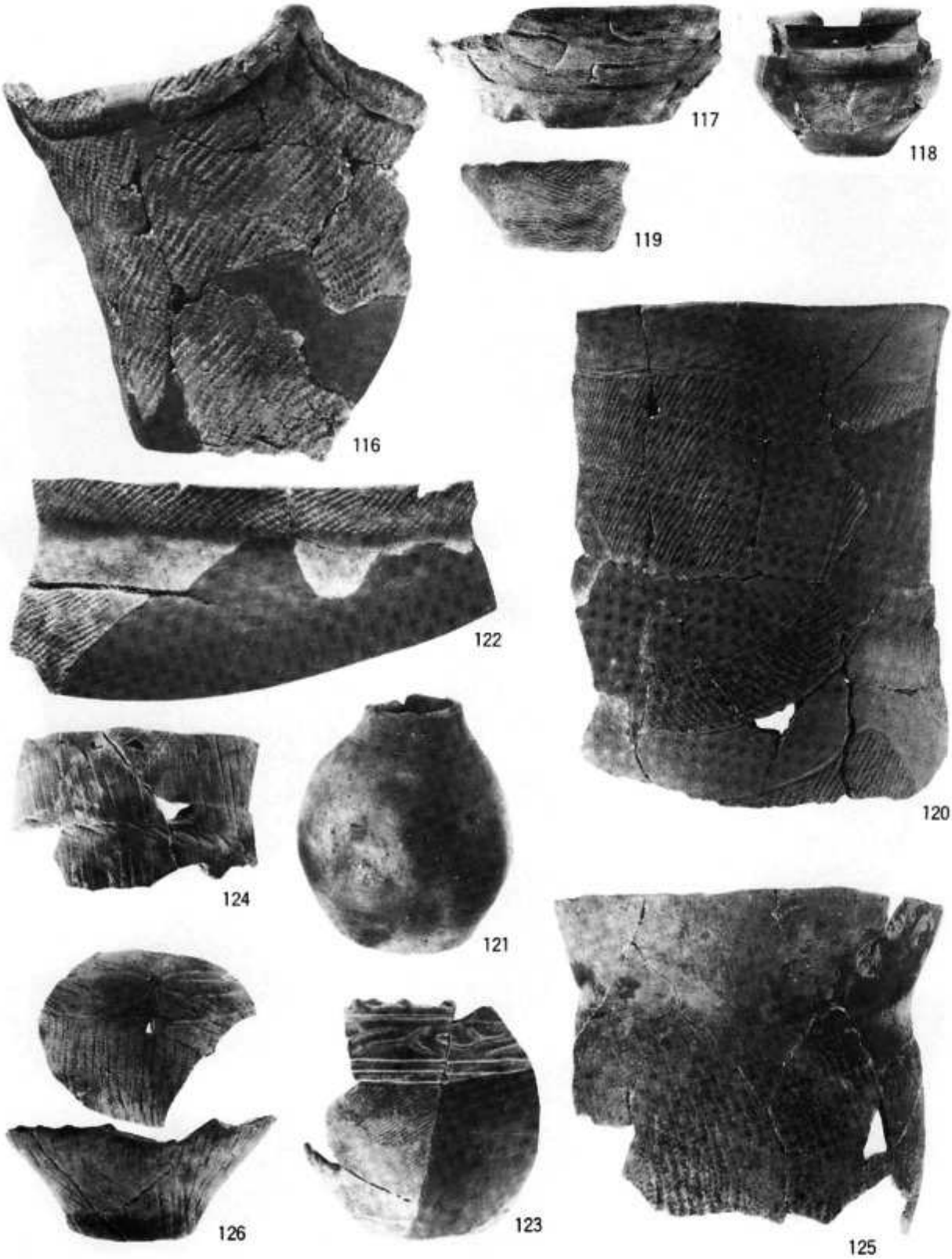


DⅣ－203墓壙

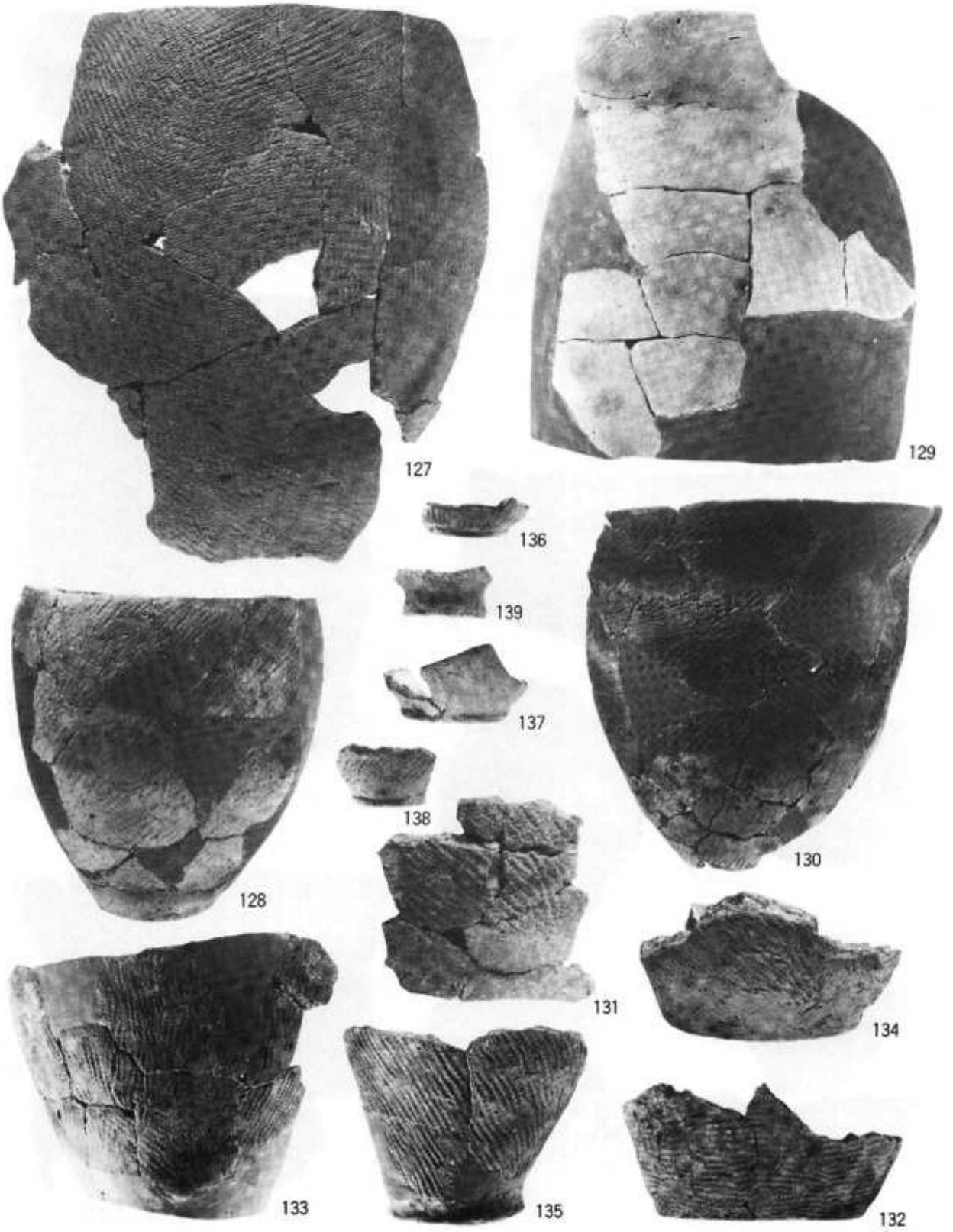


DⅣ－205墓壙

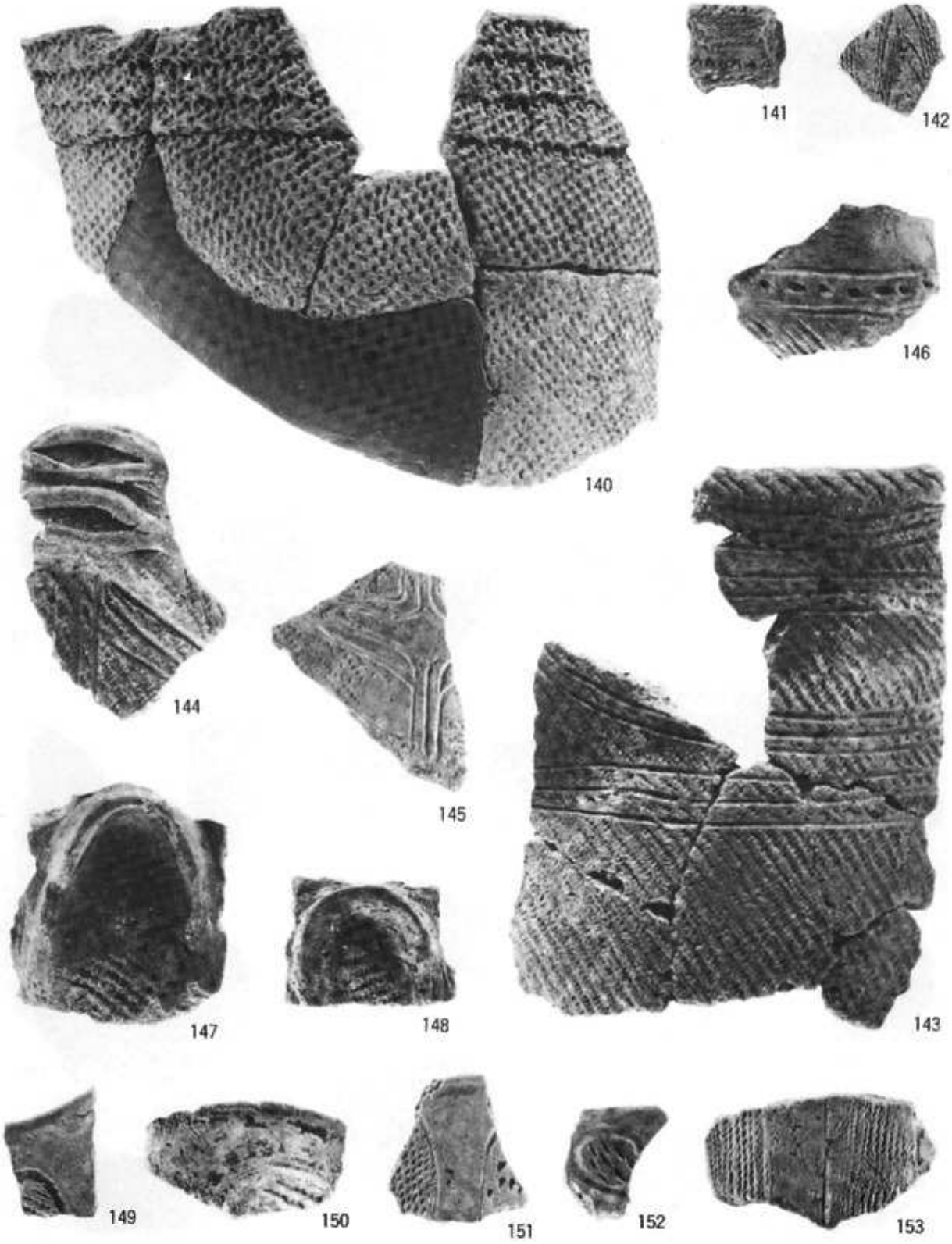
PL－40　遺構内の遺物(13)



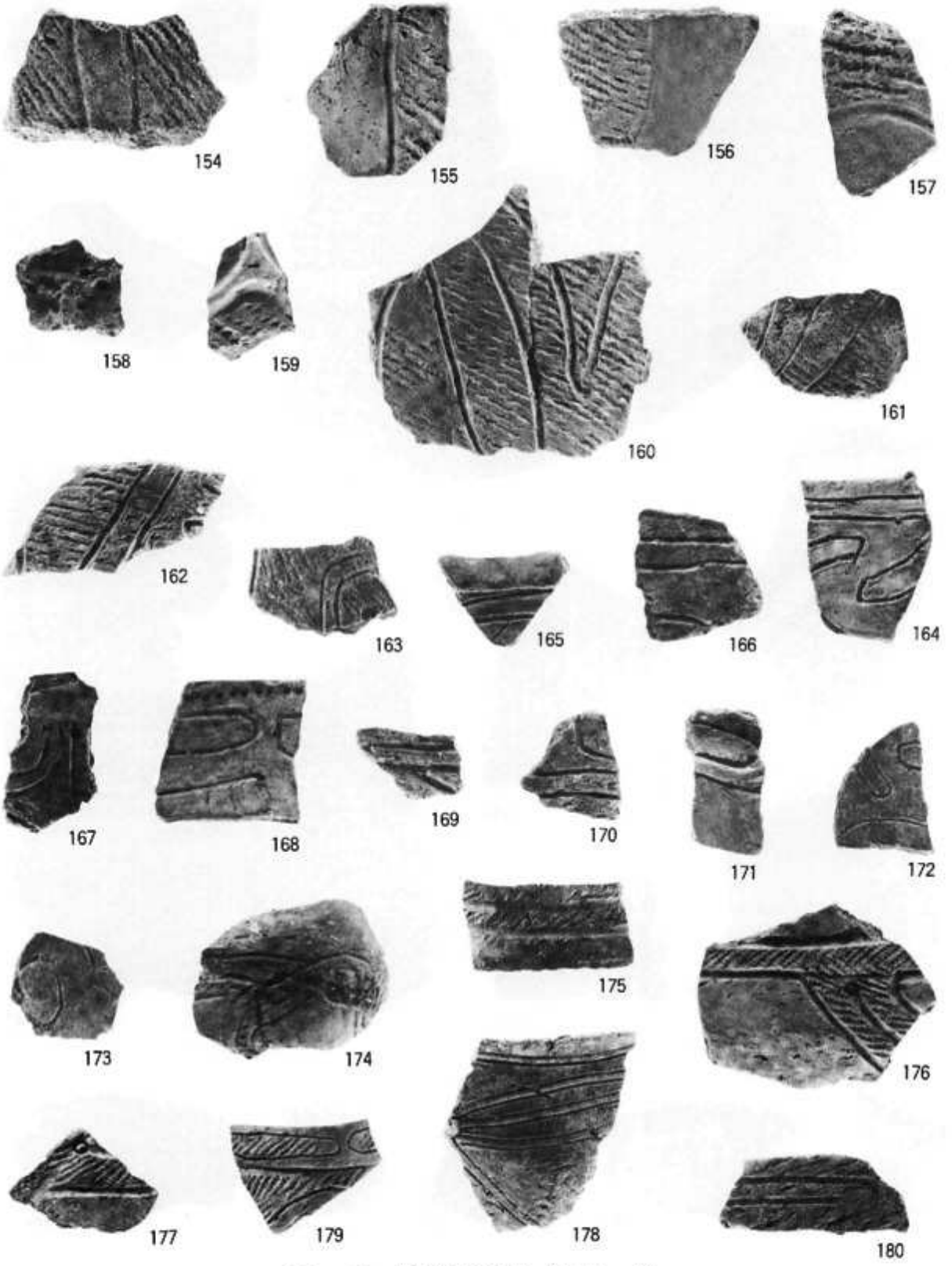
PL－41　遺構外の遺物（土器－1）



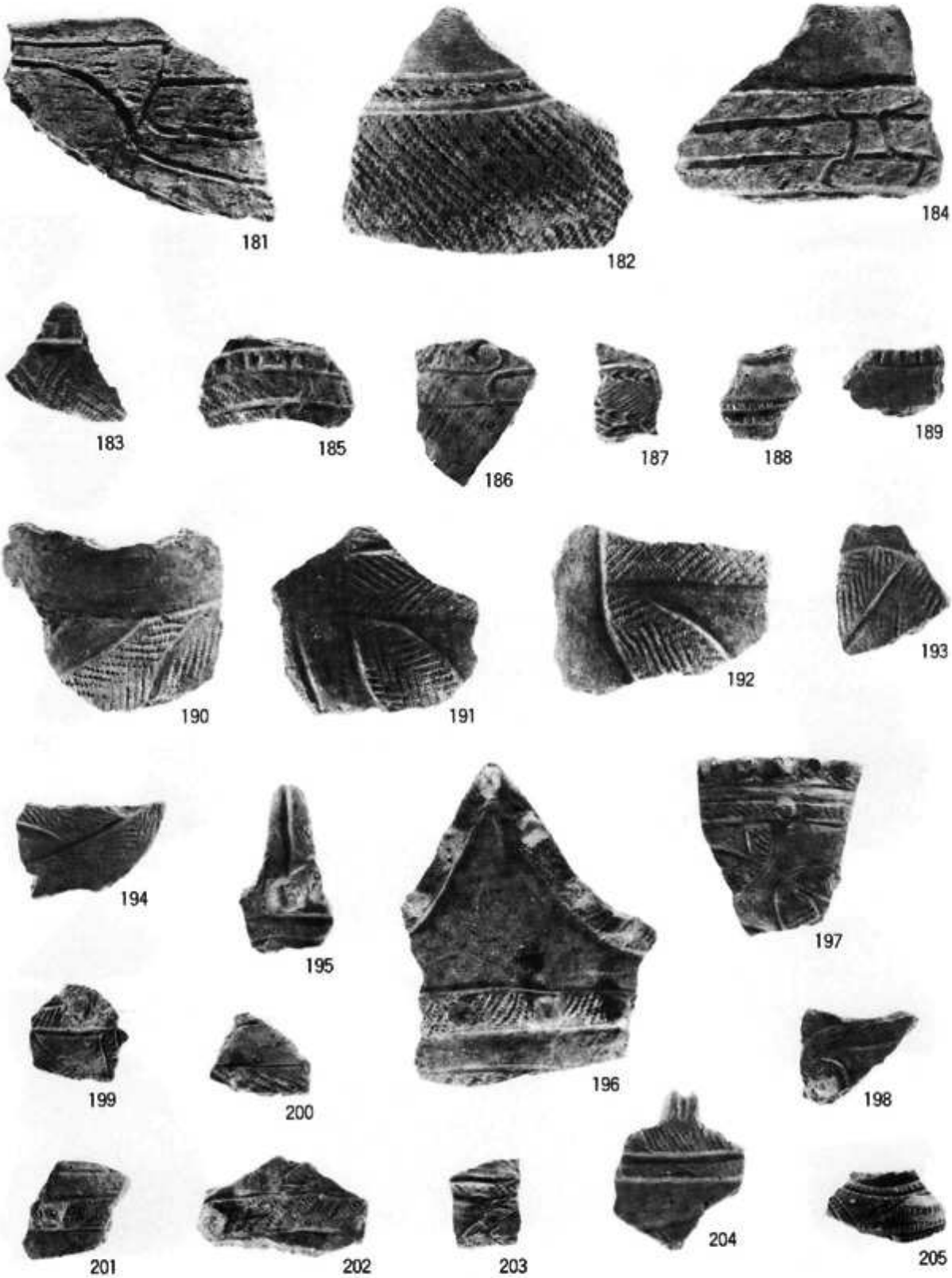
PL－42　遺構外の遺物（土器－２）



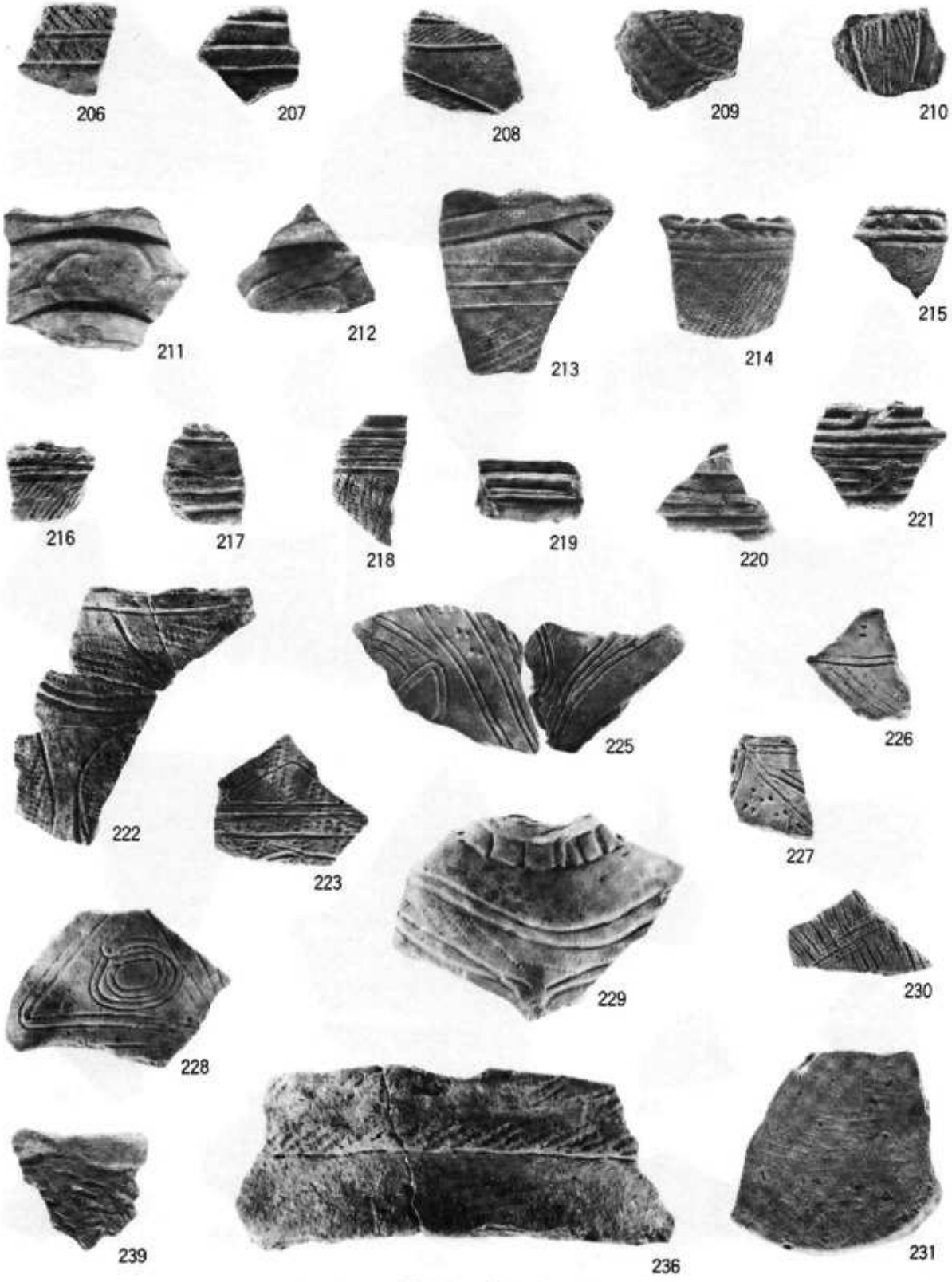
PL－43　遺構外の遺物（土器－３）



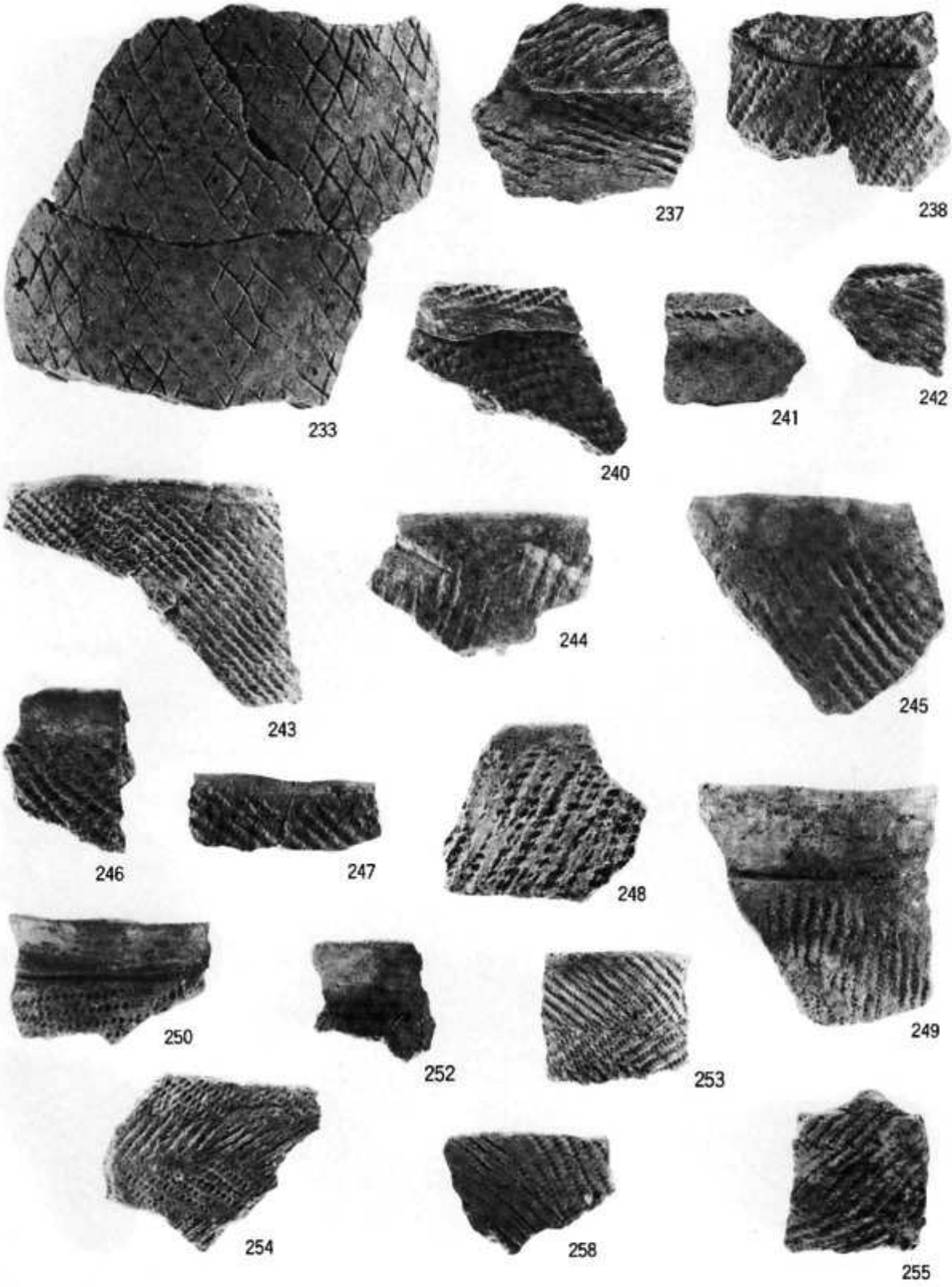
PL－44　遺構外の遺物（土器－４）



PL－45　遺構外の遺物（土器－５）

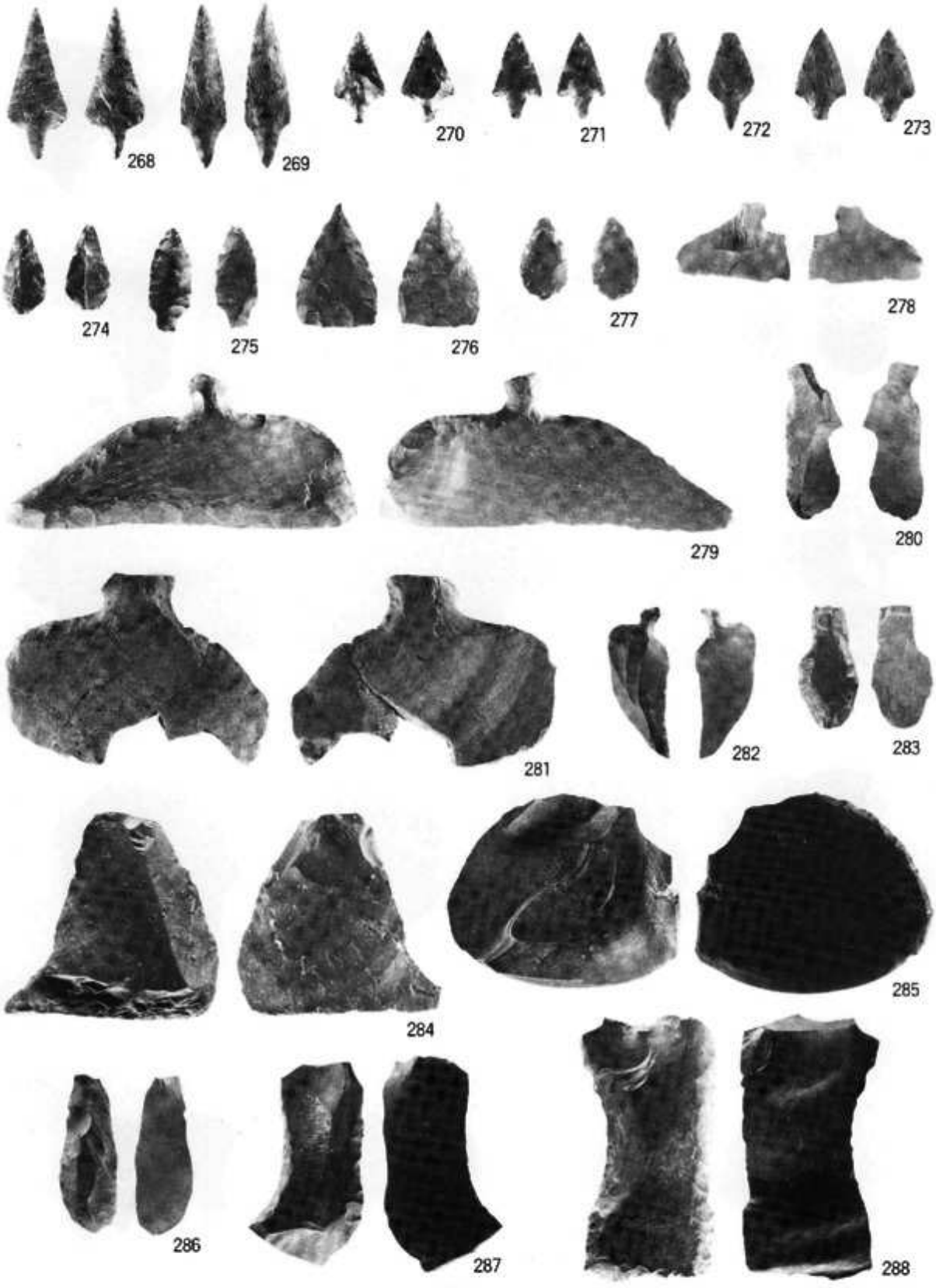


PL－46　遺構外の遺物（土器－６）

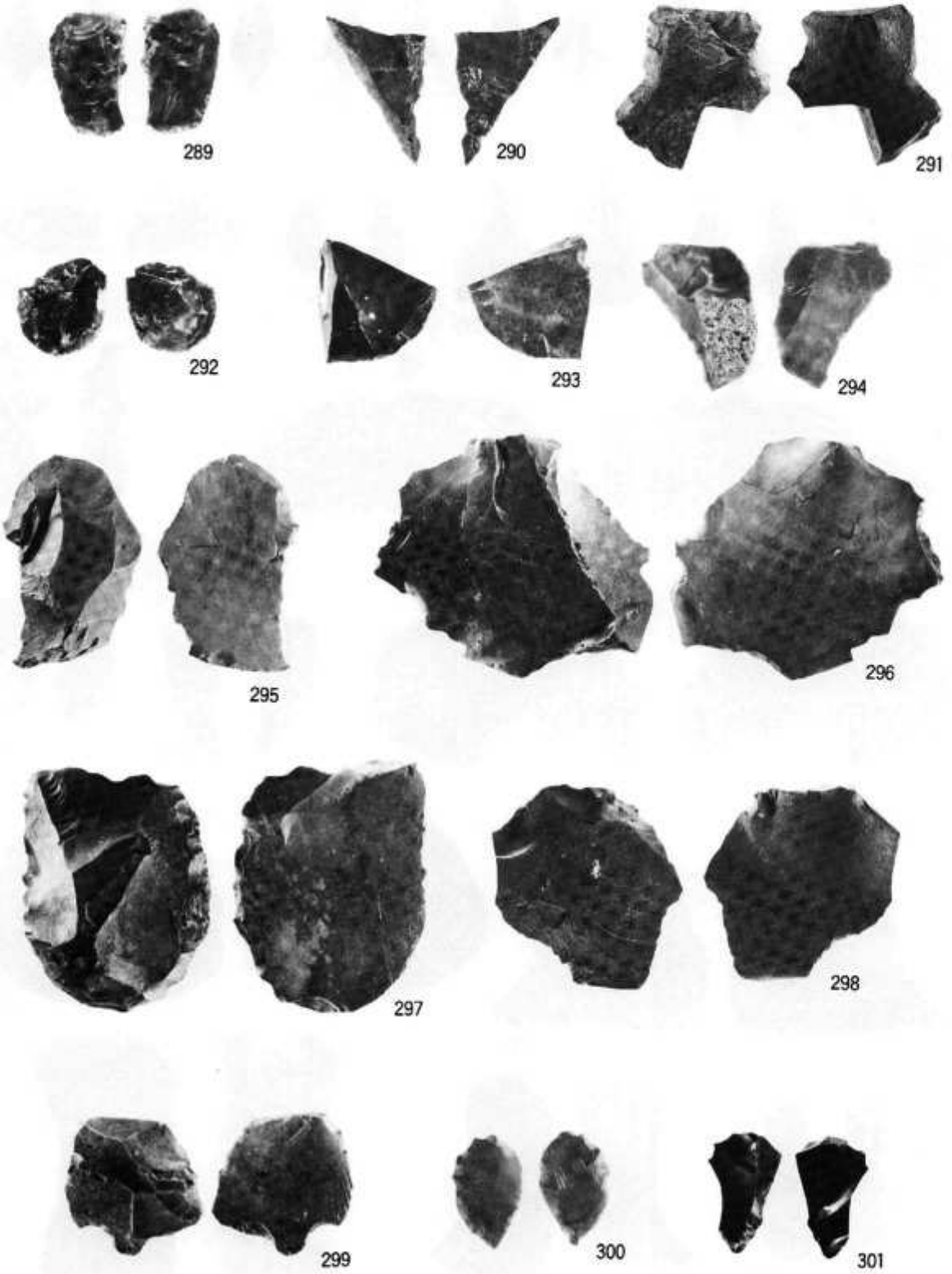


PL－47　遺構外の遺物（土器－７）

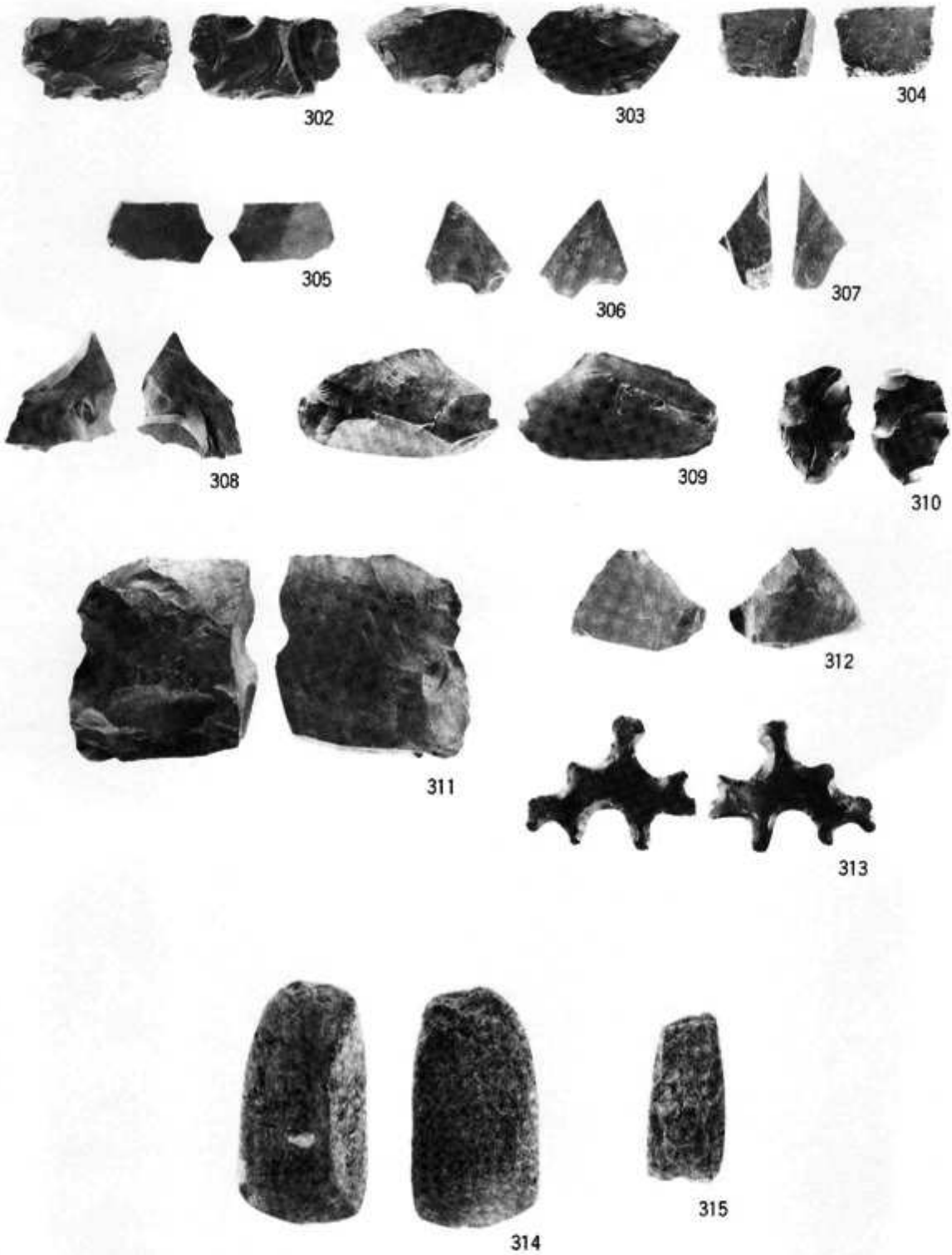
PL－48　遺構外の遺物（土器－８）



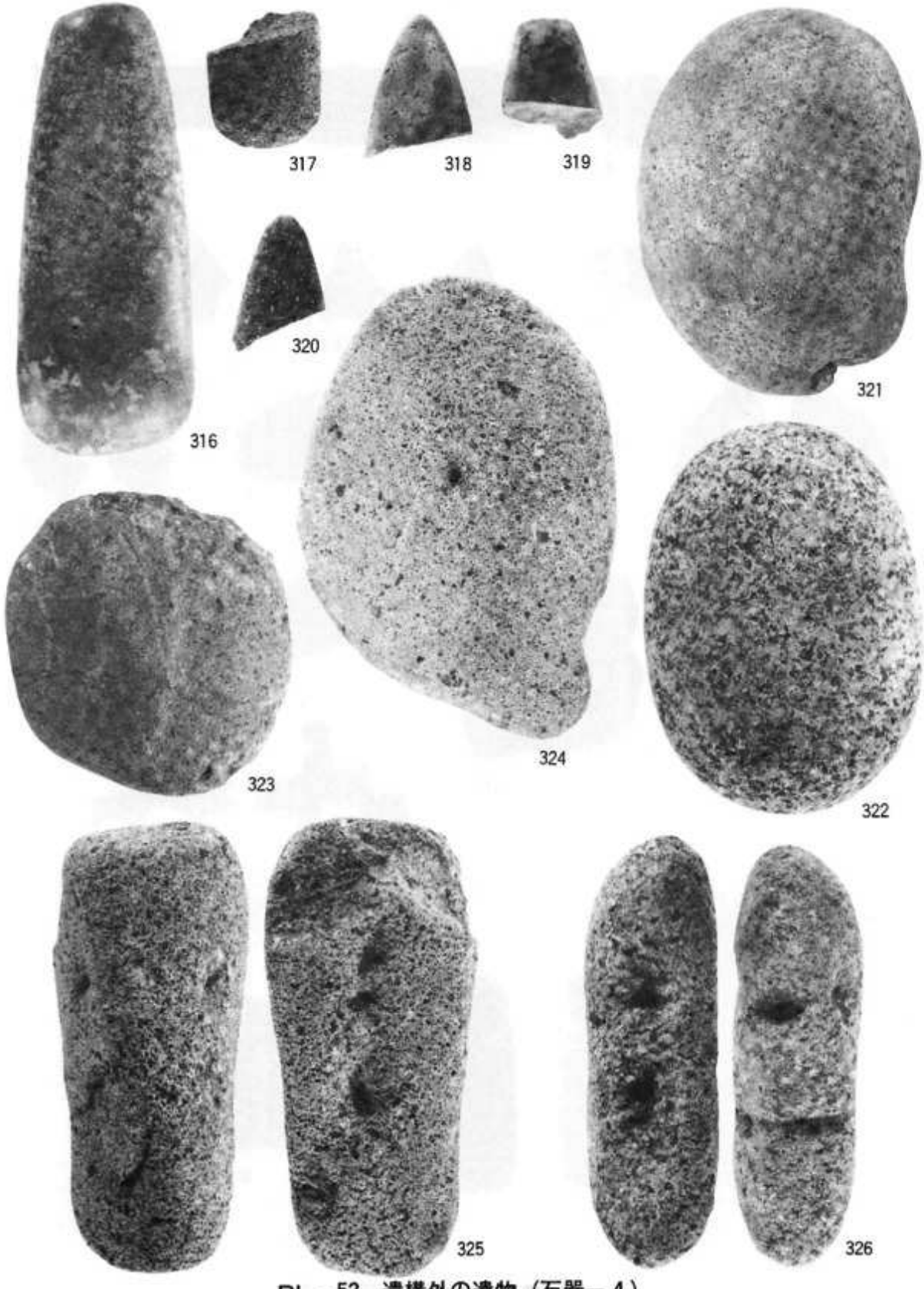
PL－49　遺構外の遺物（石器－１）



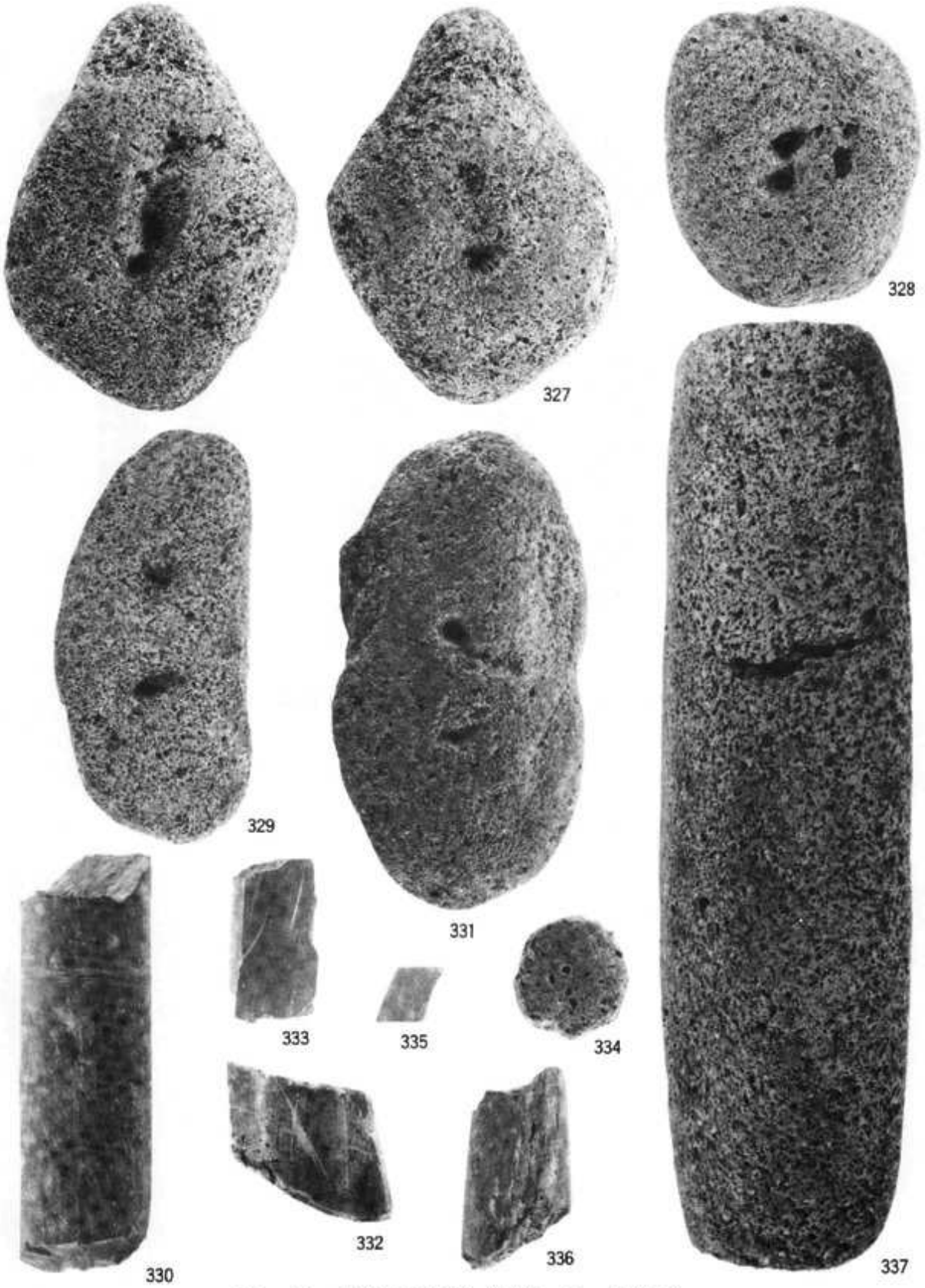
PL－50　遺構外の遺物（石器－２）



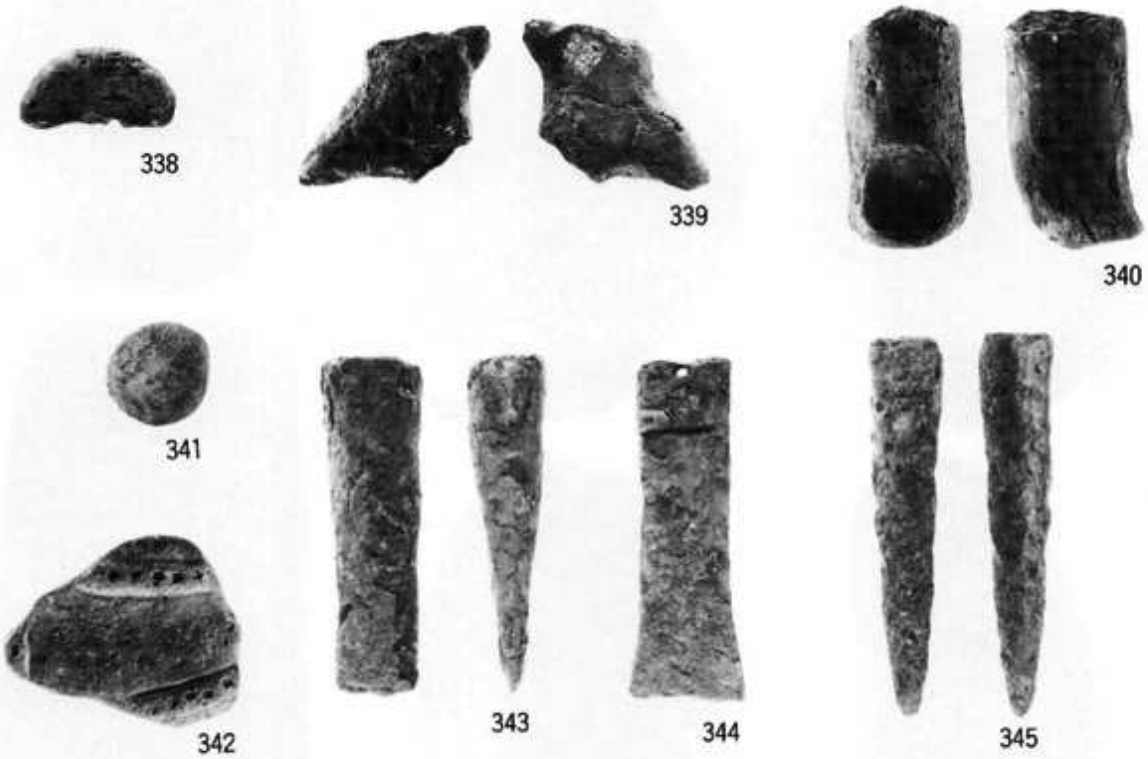
PL－51　遺構外の遺物（石器－３）



PL－52　遺構外の遺物（石器－４）



PL－53　遺構外の遺物（石器－5．石製品）



PL－54　遺構外の遺物（土製品・鉄器）

財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　長	及川昌二
副所長	宮　英一

〔管理課〕

課　長	千葉久夫
課長補佐	阿部詔夫
主　事	立花多加志
技能員	佐藤春男

〔調査課〕

課　長	近藤宗光		
主任文化財専門調査員	昆野　靖		
文化財専門調査員	片方宗明	文化財専門調査員	光井文行
〃	長沼　彬	〃	玉川英喜
〃	菊池利和	〃	石川長喜
〃	渡辺洋一	〃	三浦謙一
〃	佐々木嘉直	〃	工藤利幸
〃	平井　進	〃	中川重紀
〃	中村良一	〃	高橋与右エ門
〃	田村壮一	〃	高橋義介
〃	岩渕　久	〃	酒井宗孝

〔資料課〕

課　長	名須川溢男
文化財専門調査員	田鎖寿夫
〃	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第95集

関沢口遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印　刷　昭和61年3月20日

発　行　昭和61年3月25日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11—185

印　刷　河北印刷株式会社
盛岡市本町通2丁目8番7号

© 岩手県埋文センター　1985